

国際化時代を視野に入れた
説話と教科書に関する歴史的研究

研究代表者 石井正己

平成26年（2014）3月発行

目 次

巻頭寄稿 人形浄瑠璃作品に描かれた東アジア 黒石陽子 3

第1部 国際化時代の学術交流の中で

講 演 帝国日本と日本語教科書—ハワイ移民の『日本語読本』— 石井正己 8
講演要旨 帝国日本の文学と教育 石井正己 16
寄 稿 日本における昔話研究の現状と展望 石井正己 18

第2部 植民地日本語(国語)教科書の歴史的研究

趣 旨 なぜ植民地教科書を問うのか 石井正己 25
シンポジウム 植民地日本語(国語)教科書研究の現在
植民地下台湾の三族群の日本語(国語)教科書の比較分析 日下部龍太 28
—分割統治を企図した世界観形成—
朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』研究の成果と課題 金廣植 39
満洲国の国定「国語」教科書にみえる回鑾訓民詔書からの影響
船越亮佑 50

第3部 東アジアの昔話研究の歴史と未来

趣 旨 昔話研究の未来をどう考えるか—柳田国男『昔話覚書』から— 石井正己 58
講 演 父関敬吾のこと 関信夫 65
寄 稿 関敬吾先生の思い出 野村敬子 69
シンポジウム 東アジアの昔話研究の再検討
昔話と比較研究の問題点—文芸比較の方法論に向けて— 廣田収 81
『韓国口碑文学大系』の話型と昔話通観の話型の対応をめぐる 李市垞 87
—〈3 騙す騙される〉の例を中心に—
シンデレラ型の昔話の比較—中国を中心に— 立石展大 101

編集後記 112

凡例

- 一、現代では不適切な表現と考えられる言葉があるが、歴史的な文脈を考慮して残した。
- 一、論者は旧漢字を使っているが、データ処理の都合で新漢字に改めたところがある。
- 一、敬称は省略した場合が多い。

人形浄瑠璃作品に描かれた東アジア

黒石 陽子

1 はじめに

人形浄瑠璃は、『平家物語』を源流とする語り物である浄瑠璃と、人形操り、三味線の三者が結びついてできた芸能である。歌舞伎の発生とほぼ同時期、近世期のはじまりとともに発生した。人形浄瑠璃の作品は『浄瑠璃御前物語』『十二段草子』をその濫觴とするが、中世期までに成立していた芸能、とりわけ能や幸若舞の影響を大きく受け、多種多様な作品を生み出していった。

人形浄瑠璃作品について研究史の上では、18世紀に入り、竹本義太夫が近松門左衛門と提携し、大坂で竹本座を立ち上げた貞享2（1685）年に上演された『出世景清』を分水嶺として、それ以前の作品群を古浄瑠璃とし、それ以降を当流浄瑠璃として分けている。その理由として『出世景清』という作品が獲得した当代性の要素が、それ以前の浄瑠璃作品とは大きく異なることが挙げられる。また浄瑠璃を語る太夫には種々な人物がいたが、その中の一人であった竹本義太夫の語る「義太夫節」が次第に浄瑠璃の代表として認知されるようになり、後には音曲の司として義太夫節が圧倒的な地位を占めるようになったその契機であることも関係している。実際は貞享2年以降も古浄瑠璃の性格を持った作品は作られていた。しかし大まかにとらえれば、17世紀の人形浄瑠璃は古浄瑠璃の時代であり、18世紀に入ると当流浄瑠璃が発展した時代といえる。しかし18世紀末になると当流浄瑠璃にも新作が作られなくなり、当代芸能としてのエネルギーを失っていくこととなる。やがて19世紀に入ると古典芸能となっていく。

こうした流れを踏まえた上で人形浄瑠璃作品に描かれた東アジアを眺めてみると、17世紀の作品群と18世紀に入ってからのものである違いがあり、さらに19世紀に入ると作品自体が見られなくなる。本稿では17世紀と18世紀の作品群で東アジアがどのように取り上げられ、描かれていたのか、その概要を整理するとともに、特に18世紀の人形浄瑠璃作品に描かれた東アジアの実際とその意味について考察することとする。

2 17世紀の浄瑠璃作品に描かれた東アジア

まず17世紀の浄瑠璃作品で取り上げられた東アジアの実際について述べることにする。16世紀末の慶長から寛文年間まで（1596年～1673年）の作品と17世紀末から18世紀に入る延宝から享保年間まで（1673年～1736年）の作品を若月保治の『古浄瑠璃の研究』⁽¹⁾を元に概観すると、寛文年間までの作品では傾向として東アジアの扱いは本地物⁽²⁾、あるいはそうした性格の強い作品の中で描かれるものが圧倒的に多い。したがって舞台は天竺が多い。次に続くのは中国だが、秦、漢、唐、五代と時代は様々だが、始皇帝、王昭君、玄宗皇帝といった人物の逸話をより複雑化させた内容となっている。これらの作品は正本に挿絵も多く入っており、若月はそれらを参照して、これらの作品が糸操りやからくりを多用して、華やかな舞台を作り出していたであろうことを指摘している。この時期の浄瑠璃作品の中では、東アジアの異国は仏教の教えとその世界観の中に存在し、観客にとっては信じるべき対象ではあっても、自身とは離れた遠い存在として意識されていたと考えられる。

ところが延宝から享保年間の作品では本地物が姿を消す。その代わりに現れるのは次のような作品である。『国仙野手柄日記』（元禄14（1701）年）『百合若高麗責』『太閤軍記』（宝永7（1710）年）『太閤記』（宝永7年）『朝鮮太平記』『出世権握虎』『呉越軍談』。刊年未詳のものもあるが、元禄14（1701）年以降のものの年代が明らかであり、18世紀に入ってからこれらのものが書かれたことが窺われる。また、このうち『太閤軍記』『太閤記』『朝鮮太平記』『呉越軍談』は人形浄瑠璃作品として舞台上演されたものではなく、浄瑠璃形式の文章の作り方はしているが、読み物として享受され

た読本浄瑠璃と考えられている。

作品の題材は、『国仙野手柄日記』が中国が明王朝から清王朝に交代した事件を扱ったもの。『百合若高麗責』がむくり国が三韓を責めた後、日本を征服にやってくることを阻止するため、百合若がその討伐の役目を仰せつかるというもの。『呉越軍談』は元禄16（1703）年刊の翻訳本通俗軍談の『呉越軍談』を浄瑠璃化したもの。そして残りの『太閤軍記』『太閤記』『朝鮮太平記』『出世稚握虎』はいずれも豊臣秀吉を扱った内容であり、朝鮮出兵を取り上げているものもある。

これらの傾向は、慶長から寛文年間とは大きく異なっている。『百合若高麗責』は幸若舞の『百合若大臣』の系統を引き継いでいるとはいえ、その他の作品は観客の当代に非常に近い時代である国際的な話題が取り上げられているからである。国についても前の時期には天竺が多かったのに対し、隣国の中国、朝鮮国が対象となっている。また次第に盛んになる通俗軍談を浄瑠璃化しているのも、新しい動きである。

このように17世紀と18世紀では浄瑠璃作品で東アジアを扱う観点に変化が生じて来ている。この点に留意してさらに18世紀の当流浄瑠璃（義太夫節）に目を転じて行くこととする。

3 18世紀の大坂と人形浄瑠璃

元禄14（1701）年から始まり、寛政12（1800）年までの日本の18世紀は元禄時代の経済成長が終わり、経済の低迷と共に時代の変転の中で享保・寛政の2度の改革を必要とした時代であった。同時に100年近くの前時代の時代を経て、18世紀はとりわけ文化面において稔りの時代を迎えていたと評価されている⁽³⁾。この時期大坂は全国的な経済のネットワークの中心となり、全国規模での商品生産・流通の拠点となっていた。18世紀の人形浄瑠璃はそうした大坂の経済活動を担う町人を観客の中心として作られた作品群である。

この時期の人形浄瑠璃は竹本義太夫が師の宇治加賀掾から独立し、京都から大坂へ来て旗揚げした竹本座が次第に活況を呈し、やがてその竹本義太夫の弟子が独立して豊竹座を起こして二座が競合する。こうして人形浄瑠璃は大坂を拠点として18世紀半ばにかけて最盛期を迎える。だが1750年代をピークとして、その人気にも陰りが見え始め、1760年代には専門の上演劇場を手放す時代を迎える。ここでは上昇期から全盛期の時代の浄瑠璃作品における東アジアの扱いについて見渡していくこととする。

前章で宝永年間までの作品を挙げたので、正徳年間から安永年間まで（1711年～1780年）に大坂で上演された義太夫節の作品の中で東アジアを扱った作品を挙げてみる⁽⁴⁾。

正徳元（1711）年10月前後（推定）	竹本座	大職冠
正徳4（1714）年秋以前力	竹本座	釈迦如来誕生会
正徳5（1715）年11月15日	竹本座	国性爺合戦
享保2（1717）年春（推定）	豊竹座	傾城国性爺
2月15日	竹本座	国性爺後日合戦
享保3（1718）年12月	竹本座	善光寺御堂供養
享保4（1719）年2月14日	竹本座	本朝三国志
5月15日	豊竹座	神功皇后三韓責
享保5（1720）年正月2日	豊竹座	鎮西八郎唐土船
享保6（1721）年閏7月5日	豊竹座	呉越軍談
享保7（1722）年正月2日	竹本座	唐船嘶今国性爺
享保8（1723）年正月20日	豊竹座	玄宗皇帝蓬萊鶴
享保9（1724）年7月15日	竹本座	諸葛孔明鼎軍談
享保14（1727）年8月朔日	竹本座	眉間尺象賀
寛保2（1742）年3月3日	豊竹座	百合稚高麗軍記
延享4（1747）年3月22日	豊竹座	万戸將軍唐日記
宝暦2（1752）年5月18日	竹本座	世話言漢楚軍談
宝暦13（1763）年4月13日	竹本座	山城の国畜生塚 天竺徳兵衛郷鏡
明和5（1768）年9月11日	亀谷芝居 並木正吉座	容競唐土嘶
明和8（1771）年正月23日	豊竹座	九州与次兵衛灘

この間の上演作品の総数から考えれば、異国を扱った作品数は決して多いとはいえない。むしろ少ないといった方が正確であろう。それも熱心に作られているのは享保年間で、その後は必ずしも頻繁に作られているとはいえない。

正徳元年の朝鮮通信使来朝の時にそれを当て込んで作られた近松作『大職冠』があり、同じく近松作の『国性爺合戦』の大当たりの影響が大きく、足かけ3年のロングランとなる。その影響が競合する豊竹座に及び、さらに竹本座では続編も作って享保2年まで続く。その後享保4年、延享5年、宝暦14年に朝鮮通信使の来朝や、享保14年4月に交趾より象の貢があったこと等、それらを当て込んだ作品の制作が続いたと考えられる。しかし、その後は少なくなり、宝暦の朝鮮通信使来朝を当て込んだ『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』以降は直接的に東アジアを取り込んだ浄瑠璃は次第に影を潜めてしまう。一方『呉越軍談』『諸葛孔明鼎軍談』『世話言漢楚軍談』など近世に入って刊行された通俗軍談を元にした浄瑠璃作品も作られ、17世紀の能や幸若舞など先行作品を受けて作っていたのとは異なる傾向が顕著に見られる。また本地物の流れを継承しながらも新たな要素を加えて当代化した『釈迦如来誕生会』『善光寺御堂供養』もある。

この時期の人形浄瑠璃作品は、基本的には近世より前の時代の国内の歴史的事象を題材としている作品が多数を占めており、典拠となる作品世界は『平家物語』『義経記』を中心に『太平記』などが大きな割合を占める。その中で異国を取り上げる場合とは、来朝に伴って朝鮮通信使の行列を見たり、文人達がこぞって詩文の添削を通信使から受けたりする雰囲気の中で (5) 観客が実際に見聞したり、あるいは情報として接した異国についての興味を当て込んで、興行の成績を上げることが期待して上演していたことが窺える。

ところで、上記の年表には入れなかったが、この期間には豊臣秀吉を扱った作品群がある。原田真澄氏は「十八世紀の人形浄瑠璃界と太閤記物」(6) で貞享2年から寛政11年までの太閤記物の作品について検討しており、その年表も資料として示している。原田氏は「豊臣秀吉をモデルとする登場人物が登場する人形浄瑠璃作品」を太閤記物として定義している。これにつけばさらにいくつかの作品を加える必要があるが、それらは必ずしも全てが文禄・慶長の役の問題を取り上げているわけではない。

先に上げた年表のうち、『本朝三国志』と『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』は文禄・慶長の役を取り上げている。これがどちらも朝鮮通信使来朝時の当て込みとして作られていることは、朝鮮国についての当時の認識として、作り手と観客の間で文禄・慶長の役が意識されていたことを想定してよいだろう。それをどのように描くかが、観客の反応を意識しつつ作劇する作者の認識と判断であった。さらにこれらの作品は後年の作品にも影響を与えた。明和5年上演の『容鏡唐土嘶』は『山城の国畜生塚』の翻案であり (7)、明和8年上演の『九州与次兵衛灘』も『本朝三国志』の改作とされている (8)。『本朝三国志』『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』は18世紀の浄瑠璃作品における東アジア観を代表する作品として捉えることが可能であろう。

4 近松と異国

原道生氏は「近松の対「異国」意識」(9) において近松が異国を舞台とした作品を分析し、その異国意識について「彼の対「異国」意識そのものには、かなり大きな幅があり、その時々に応じて、その間を揺れ動いていたといった状態が想定されてよいのではないかとと思われる」と結論づけている。

その理由として原氏は、正徳元年に朝鮮通信使来朝を当て込んで作られた『大職冠』には、素朴な自国礼賛の優越感を基調として持ちながらも先方の卓越した知力・勇力に対しても敬意を持つという寛容性が見られるとする。しかし次の通信使来朝の折に作られた『本朝三国志』では文禄・慶長の役を下敷きとした好戦的な設定があり、久吉の武力制圧の事跡を賞賛する姿勢が見てとれるとする。しかし享保2年に上演された『国性爺後日合戦』では、自国本位に日本風を押しつけようとする国性爺に、義兄甘輝が各国の国風に対する寛容性を認めるよう忠告することをあげて、相対的な視点を国性爺が受け入れていくことを指摘している。

また金時徳氏は、近松の異国に対する武力行使の考え方について、『源義経将棋経』の中に、蝦夷を従えるための征服の正当化の論理が見えることを指摘している (10)。

ただし『国性爺合戦』の中に強い自国意識と礼賛の姿勢が見えることは明らかであるが、自国と

異国の関係を、人間同士の具体的なぶつかり合いの中で考えようとする姿勢は、17世紀の浄瑠璃作品の中には見られないものである。『国性爺合戦』の場合、第三は和藤内の母である日本人の老女が、異国の地で我が身を犠牲にして日本の「義」を貫こうとした自刃を描くが、それを親子・夫婦の愛情と、そして当代の人間として踏み行うべき道に殉じて生きる姿として描く。それはある種の自国礼賛を示すものであるが、異国人をおとしめ、蔑むものではなく、人間として互いに対等に自身の考えを主張し、行動するものとして描かれている。それを女性を通して描くという方法にさらに注目すべき問題があると思うが、今は置く。少なくとも「異国」が想像上の漠然としたものではなく、同じ人間がそれぞれ必死に生きる、実感のある空間として明確に意識されていることは注意されるべき点であろう。

5 近松半二の描いた異国

近松没後の浄瑠璃界で異国を描いたのは近松半二である。宝暦13年4月上演の『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』は宝暦14年の朝鮮通信使来朝を当て込んで作られたものである。その後、文化8年まで朝鮮通信使の来朝は途絶えるが、その間に作られた異国に関連する作品で朝鮮国との関係を扱った天明年間以降の作品は (11) 次の通りである。

天明7 (1787) 年10月 天明8 (1788) 年12月 寛政6 (1794) 年2月	大坂座摩社内 道頓堀東の芝居豊竹座 道頓堀若太夫芝居	大功艶書合 韓和聞書帖 唐錦艶書功
--	----------------------------------	-------------------------

『大功艶書合』『唐錦艶書功』ともに司馬芝叟の作品で、秀吉による朝鮮出兵を扱ったものである。また『韓和聞書帖』は若竹笛躬・丹青堂作で、『本朝三国志』『山城の国畜生塚』を脚色したもの (12) とされる。

寛政11 (1799) 年9月	北新地芝居	唐土織日本手利
-----------------	-------	---------

は並木千柳・中村魚眼の作品で、宝暦14年の朝鮮通信使来朝の折に起こった、対馬藩通詞鈴木伝蔵により通信使の都訓導崔天宗が殺害された事件を扱うものである。

前者三作は文禄・慶長の役を扱った作品で、歴史性を帯びているが、後者は30数年前に国内で実際に起きた異国人との事件であり、生々しさが残る。18世紀も終わりに近づくと、異国に対する感覚は確実に変化していた。

また最初に述べたように、19世紀に入って文化年間を過ぎ、文政年間以降になると、人形浄瑠璃の上演作品自体に新作が極めて少なくなり (13)、18世紀に作られたいわば古典的作品を繰り返し上演するようになっていき、異国を扱った作品は殆ど見られない。

ところでこうした状況にあつて『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』の両作品は、異国を捉える認識において、相対的な視点を持っていたことが挙げられる。また、人形浄瑠璃の作劇法の要素として重要な親子・夫婦の関係性の中で、文禄・慶長の役の悲惨を描こうとしている所に優れた点を見いだすことができる。

稿者は旧稿において (14) この二作品における朝鮮国側の人物の言葉に注目し、対日本意識がどのように描かれているかに指摘した。自国優位他国蔑視、他国の文化を尊重して友好的対応を求めるもの、そして自国との過去の歴史を踏まえて慎重な対応を考えるもの、三者三様の見方が示されていた。その中にあって、木曾官は次のように述べる

我国広しと云いながら。小国の日本に辱めを受ける事数多度。其水上は神功皇后。我唐土に押し渡り。新羅百濟高麗の荒き夷の国々迄。切り従へし太刀風も。尖き弓力石面に。三韓の王は日本の犬也と。彫付けられし国の悪名。夫より千年百年の雪霜を重ね今朝鮮と国名は変れ共。変らず剥げず石面に。猶も恥辱はあり／＼と。畜生国と余国をさみせらるゝ其恨。王孫に報はず共せめて日本の久次に。畜生の名を取らさば我国代々の陵へ。此上もなき手向けぞと。(15)

時を経ても決して消えることの無い、朝鮮国が受けた恥辱と日本に対する恨みを木曾官に語らせ

る。それはそのまま、文禄・慶長の役に対する見方に通じていくものであろう。

また半二は作中に「柳成竜」を登場させている。先に述べた友好的な対応を進めた「第一の臣下」としている人物である。柳成竜は文禄・慶長の役の時に朝廷の要職にあった人物で、戦争終結の後官職を追われて故郷で戦乱に関する文書の整理や執筆を行い、『懲毖録』を執筆した。この書は日本にももたらされ、元禄8年に貝原益軒の序のついた和刻本が京で刊行され、広く知識人の間で読まれるようになっていった⁽¹⁶⁾。その名を作中に登場させているのは、半二がこの書について見識を持っていたことによるものであろう。半二は近松の『本朝三國志』における朝鮮国観とは明らかに異なる姿勢を持っていたといえるだろう。

6 まとめ

東アジアを描いた人形浄瑠璃作品は決して多くはない。また作られた時期も17世紀から18世紀にかけてであるが、異国に対する実感を持って書かれた時期は18世紀中期の一時期であったように考えられる。とりわけ人形浄瑠璃が近世の現代芸能としての性格を持っていた時期にそれらは作られ、古典芸能化してからは新たな作品として東アジアを積極的に取り上げることはなかったといえる。同じ近世芸能でも歌舞伎はまた異なる方向性を持っていると考えられるが、本稿ではこれについては触れないこととする。

注

- (1) 『若月保治浄瑠璃著作集 4』クレス出版 1998年(櫻井書店 1943年初版)。
- (2) 『達磨の本地』『宇佐八幡の本地』『正八幡の御本地』『阿弥陀の本地』『誓願寺本地』。
- (3) 『一八世紀日本の文化状況と国際環境』笠谷和比古編 思文閣出版 2011年。
- (4) 『義太夫年表 近世編』、原道生氏「近松の対「異国」意識」(『近松浄瑠璃の作劇法』八木書店 2013年所収)を参照した。
- (5) 梅原 亮氏「世界のなかの近世文化 1「異国」を迎える人々」(『日本の対外関係6 近世的世界の成熟』吉川弘文館 2010年所収)。
- (6) 「楽劇学」第16号 2009年3月 楽劇学会。
- (7) 『近世邦楽年表』による。
- (8) 『近世邦楽年表』による。
- (9) 『近松浄瑠璃の作劇法』(八木書店 2013年所収)。
- (10) 「東アジア版「正しい」戦争の語り方 「異国征伐」という思想を読み解く」『秀吉の対外戦争 変容する語りとイメージ』笠間書院 2011年)。
- (11) 原田真澄氏注(6) 論考並びに、崔官氏『文禄・慶長の役 文学に刻まれた戦争』(講談社選書メチエ22 講談社 1994年)第四章5「江戸によみがえる朝鮮將軍の幻」による。
- (12) 『近世邦楽年表』による。
- (13) ただし『国性爺合戦』は上演回数が多いがその他の異国を扱った18世紀の作品が上演されることは殆ど無い。
- (14) 「近松半二の描いた「文禄・慶長の役」—『山城の国畜生塚』『天竺徳兵衛郷鏡』をめぐって—」(『近松以後の人形浄瑠璃』岩田書院 2007年)。
- (15) 叢書江戸文庫『近松半二浄瑠璃集』(国書刊行会 1987年)の本文を元とし、読みやすさを考慮して捨て仮名を適宜省略し、振り仮名に改めた。
- (16) 崔官氏『文禄・慶長の役 文学に刻まれた戦争』(講談社選書メチエ22 講談社 1994年)第三章2「第一次晋州城攻防戦」。

第1部 国際化時代の学術交流の中で

講演

帝国日本と日本語教科書 —ハワイ移民の『日本語読本』—

石井 正己

1 「植民」と「移民」に向けた帝国日本の構造

これまでのフォーラムは植民地時代の昔話研究の中から、次第に帝国日本の教科書編纂が浮かび上がってきて、これが独立してきました。そこで、今回は「帝国日本と教科書」という大きなテーマを掲げてみました。これは1回で対応できるようなテーマではなく、持続的に考えるべき課題であると思います。

もう何度も述べてきましたように、日本の植民地・占領地は、台湾・朝鮮・南洋群島・満州国というかたちで拡大し、やがて「大東亜共栄圏」の思想を生み出します。それぞれの地域が組み込まれたのは、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変という戦争の結果と深く関わっています。各地域の支配と統治に伴って、それぞれで教科書が編纂されたのです。

こうした帝国日本の教科書編纂について、さらに研究すべき課題が多いことは言うまでもありませんが、今日、私自身は視野を「植民」の対極にある「移民」に移し、そこでの教科書編纂についてお話ししてみます。帝国日本において、「移民」と「植民」は光と影のような関係にあり、構造的に把握する必要があると思うからです。

一般に使われている辞典『広辞苑』では、「移民」は「他郷に移り住むこと。特に労働に従事する目的で海外に移住すること。また、その人」とあり、「植民」は「ある国の国民または団体が、本国と政治的従属関係にある土地に永住の目的で移住して、経済的活動をすること。また、その移住民」とあります。両者の差異を考える場合、ここにある「政治的従属関係」という点が重要でしょう。ただし、これも単純ではなく、満州の場合は満州国との関係であるという大義名分がありますから、「植民」ではなく、「移民」になります。

教育という点で注意すべきは、植民の場合、その土地の人々に国語（日本語）を教えるために教科書を作りますが、移民の場合、そうではありません。移民先では、そこに移住した日本人の子孫に日本語を教えるために教科書を作るのです。そうした点でずれがあり、両者を比較してもあまり意味がないという批判があるかもしれません。実際、これまで植民地研究と移民史研究はつながるところがないままに進んできました。しかし、それでは帝国日本の実像も見えなければ、そこから展開した現代日本の姿も見えません。

そもそも、戦後、「植民」は戦争に関わるマイナスのイメージで語られましたが、「移民」は平和友好的なプラスのイメージで語られています。「植民」は、台湾・朝鮮・南洋群島・満州にしても、やがて「大東亜共栄圏」という言葉を生み出したように、アジアへ向かいました。その先にたぶん、インドもあったはずですが。それに対して、「移民」は、西ではなく東へ向かってゆき、ハワイ・ア

メリカ・カナダ・ブラジル・ペルーといった北米・南米に行きました。帝国日本の動きには、ベクトルが違う二つの力学が働いてきたと見なければなりません。

改めて述べれば、植民地の教科書は、植民地の人々に対して作られたわけですが、移民先の教科書は、実は、移民をしていった日本人、日系の2世や3世に対して作られました。日系1世は日本に生まれて日本語で育ちましたが、子孫が移民先で生まれると、彼らは日本の生活や文化を知りません。日本の言葉や風習をどう教えるのかということが急務の課題になります。そこで作られたのが日本語教科書だったということになります。そのように考えてみると、植民地の問題に偏るのではなく、移民先の問題に偏るのではなく、帝国日本が採った政策を合わせて認識する必要があるのではないかと考えているわけです。

2 宮本常一の故郷・周防大島は移民の島だった

なぜそんなことを考えるようになったのかというと、これにはあるきっかけがありました。堀雅昭さんに『ハワイに渡った海賊たち—周防大島の移民史—』という平成19年（2007）に出た本があります。周防大島と聞けばすぐに思い出されるのは、民俗学者の宮本常一の故郷ということです。宮本は柳田国男に目を開かれ、やがて渋沢敏三のアチックで居候をしながら日本中を歩きました。佐野真一さんたちによって掘り起しがなされ、「歩く民俗学者」として知られるようになりました。生まれは明治40年（1907）、亡くなったのは昭和56年（1981）ですから、もう30年が過ぎました。私は残念ながらお会いする機会がありませんでした。

宮本の出身地・周防大島は、山口県の先端にぶら下がる金魚の形をした島です。彼は日本中を調べに歩きながら、折々故郷へ帰って農業をしています。農業のできる学者であり、学問のできる農民であることを貫き通したわけです。柳田国男が『炭焼日記』で、戦争中に家の庭で炭を焼くのに失敗したのとは対照的です。この周防大島について、宮本は大工になったり漁師になったりする出稼ぎの島であることを述べ、出稼ぎ先に「枝村」を作ったことを述べました。なかでも対馬の梶田富五郎は、『忘れられた日本人』の中に出てくることで有名な人物です。

周防大島にはあまり土地がないので、人口が増えてくると外へ出ざるを得ませんでした。金魚のお腹には沖家室島がぶら下がっていますが、この島などは元々は海賊の島でした。『土佐日記』の中にも、土佐から都へ帰るときに、海賊が襲ってくるのを恐れている記述があります。すでに10世紀から、海賊は瀬戸内海を動き回っていたのです。

そうした歴史を持つ周防大島の人々は、移動に対してまったく抵抗感がありませんでした。宮本常一という学者を考えると、それが重要なファクターであることは間違いありません。宮本が日本中をくまなく歩いたのも、この島の人々の気質と深く関係するはずです。そのようにして移動した重要な場所にハワイがあったわけです。

昨年（2012）3月に、私は周防大島に行く機会があり、宮本資料の中から柳田国男の講演記録などを写してきました。今は橋が架かっていますが、本州から渡った小松辺りに日本ハワイ移民資料館がありますので、あまり意識することなくぶらりと行き、周防大島が大変なハワイ移民の島であることを知ったのです。宮本は著書の中で出稼ぎのことはしばしば書いていますけれど、ハワイのことにはあまり触れていません。

しかし、『ハワイに渡った海賊たち』に拠れば、明治元年（1868）、「出稼ぎ移民」153人がハワイに行き、サトウキビ農園で働いています。そして、明治18年（1885）には「官約移民」という形で、日本政府とハワイ政府が合同で移民を勧めます。第1回の官約移民は985人でしたが、その後3万人がハワイに行きます。そのうち広島県人が38%、山口県人が36%ですので、3分の1が広島県、3分の1が山口県から行っているわけです。

やがて、政府同士のやり取りが終わると、民間会社が契約移民を送る「私的移民」、さらに「自由移民」「呼寄移民」の時代が続きます。移民が増えた後、大正13年（1924）に「排日移民法」ができて、日本人移民の渡航が禁止されます。その間の昭和16年（1941）に真珠湾攻撃があって、太平洋戦争になったことはよくご存知ですね。そして、戦後復興を経て、現代に至ることになります。

資料館では、周防大島から移民に行った人々の歴史がいろいろと学べました。たとえば、戦後、日系2世に働きかけ、いち早く国鉄バスを走らせたとか、物資が集まらないときに、コーヒーや砂糖・テレビを送ってもらったとか、学校を建てるときに、資金の援助をしてもらったとか、ハワイ移民との関係が出てきます。2階に上がると、日本語教科書のコピーがたくさん並んでいて、愕然

としたわけです。それ以来、ハワイの日本語教科書のことが1年間気にかかっていたのです。

3 移民史を対象にしなかった町史や民俗学の限界

日本の移民史を見てゆくと、明治から敗戦まで、アメリカ合衆国に10万人、ハワイに23万人、カナダに3万人ほどが行っています。しかし、「排日移民法」ができると、今度は南米に行きます。ブラジルに18万人、ペルーに3万人、メキシコに1万人ほどです。アジア・オセアニアでは、マレー・シンガポールに1万人、フィリピン・グアムに5万人ほどが行きました。やがて昭和8年（1933）から満州へ行くようになります。昭和7年（1933）に満州国が建国されますから、体裁上は植民地ではありません。つまり、そういう形式で満州国にたくさんの移民を出したのです。青少年義勇軍もそうで、8万6千人の若者たちが出かけています。

こういった移民の歴史は、戦後60年以上が経っても、現在社会の中に深い影を落としています。ですから、植民地の問題が見えにくくなったのに比べれば、移民先の問題は見ようと思えば見やすい形で今につながっているところがあります。それでも戦後の経過の中で、いわゆる同化が急速に進み、日本的なものはずいぶん変質を遂げているようです。

前の宮本常一に戻りますと、『ハワイに渡った海賊たち』に拠れば、周防大島の人々は、西南戦争で熊本の町が焼けると、復興のために大挙して出かけました。ところが、明治15年（1882）頃になると仕事がなくなり、窮乏ははなはだしく、凶作で百姓の家では食う物さえ足らなくなります。盆正月に大工が旅から戻って、儲けてきたという噂がたつと、貧しい者は押しかけて借金の申し込みをしたそうです。しかし、明治16、7年（1883、4）には、旅先から金を持って戻る者はありませんでした。そこに明治18年の官約移民の募集があるわけですから、仕事がない島民たちが一挙にハワイに行った気持ちはよくわかります。

明治17年9月5日付の『防長新聞』に、「田畑の耕作のみにては生計立ち行き難きが故に、男子ハ大工、石工、日雇舟乗等となり、他の地方へ出稼ぎし、女子は専ら木綿を織て漸く其日を凌ぎ来りしが、近來大工、石工の日雇賃の下落せしのみならず、雇ふ人の少なきに已むを得ず追々帰郷するもの多くなり」とあるような状態だったのです。サツマイモが島の人口を支えたので、「イモ食い島」と呼ばれましたが、このときは不況でせっぱ詰まった状況だったのです。

周防大島の入口に久賀という集落がありますが、そこ出身の日野惣助という人が第1回官約移民の募集をします。故郷の人たちに移民を勧めるんですね。そこで、サトウキビの耕地労働に雇われに出かけてゆきます。その時には、食費と宿所代込みで男子が15ドル、女子が10ドルでしたから、夫婦共働きならば月25ドルになりました。日本円に換算すると、当時の値段で30円だったそうです。周防大島の収入の4・5倍、小学校教師の収入の6倍に当たり、高収入を得ることができたのです。この第1回官約移民で、男30名、女5名の35名がハワイに行きました。この移民は「棄民」ではないかと言われますが、堀さんは、「おそらく官約移民は新政府の頼みの綱とした官営ベンチャービジネスの一つであった」と強調しています。

この本には写真があって、宮本常一が父・善十郎に抱かれている場面が写っています。善十郎はハワイへの出稼ぎを志しましたがけれども、渡航年齢に足りず、広島染料物屋で働いて、各地を渡り歩きました。やがて友達に誘われて、サトウキビ栽培をするためにフィジーに出かけます。明治27年（1894）、21歳のときでした。善十郎はハワイに行けなくて、フィジーに出稼ぎに行ったのですが、宮本が生まれたのは明治40年ですから、ずいぶん前のことです。宮本が生まれる前に周防大島が置かれていた状況は、そんなところだったのです。

堀さんの本を見ると、昭和29年（1954）に『久賀町誌』を宮本が編纂したときに、「あのときにハワイ関係のものを宮本先生は集めなかった」と言います。周防大島を考えるとときにハワイ移民はどうしても触れなければいけない内容だったにもかかわらず、切り捨てたというのです。周防大島の人々の活動は、島の外にどんどん膨らんでいきましたが、行政の資料にまとめることはできませんでした。

しかし、「あとがき」には、「久賀町民及久賀町出身者の活動の社会は著しく拡大されている。この部分を本当に明らかにしなければ真に久賀町の発展の歴史を明かにしたとは言えない。併し之を明かにするには実に大きな手数と日時を要すると思う。たとえばハワイ移民の、現地に於ける活動状況の歴史、及その人々がハワイに於てどのような位置をしめているかという事の究明は、そのまゝ、母町の文化的地位を見る尺度にもなる」と書いています。

宮本はハワイ移民の重要性を認識していましたが、町史という枠組みの中には移民の問題を入れ込めなかったのでしょうか。これは、民俗学という枠組みの中に移民の問題を入れ込めなかったこととも関わっていると思います。故郷を描くときに、私たちはそこに暮らす人に限定して、狭い範囲で考えてしまいがちですが、それでは近代社会の中で故郷を超えてゆくような活動はすくい取ることができません。それでも、宮本常一を通して移民に出会い、植民地教科書の対極にこの移民用教科書の問題があることをつかんだのは、大きな収穫だったと思います。

4 『ハワイ日本語学校教科書集成』の復刻と日本語学校

動機の話が長くなりました。後半に入っていきます。

折しも、平成23年(2011)から昨年(2012)にかけて、船橋治編『ハワイ日本語学校教科書集成』全10巻が出ました。まだ大学図書館に開架されていなくて、昨日収書係に行き、貸し出ししてもらって全体を見ることができました。第6巻まではずいぶん見てきたのですが、そのあとの4巻はやっと昨日見ることができたという状態です。

これには高木真理子さんが「解説」を書いていて、『日本語読本』がどのように作られたのかが出てきます。第二次世界大戦前、ハワイには日本語学校が170校ありました。170の学校で、砂糖やパイナップルの農園で働いていた日本人の子供たちが学んだのです。20世紀の初め、ハワイの日系人口は4割に達していました。先ほど久賀から行った第1回官約移民でハワイに渡った者は、35名中男30名、女5名であったことに触れましたが、男女が不均衡です。まず男たちが出稼ぎに行き、成功したら家族を呼び寄せたり、結婚適齢期になると、写真花嫁たちを迎えたりしたのです。男の単身出稼ぎからやがて家族や子供を連れくるようになりますと、子孫は日本語を改めて勉強しなければわからなくなりました。

日本語教科書は、明治41年(1908)から昭和21年(1946)、呼寄移民の時代から渡航禁止の時代にかけて作られました。高木さんが「ハワイ日本語教科書(主に布哇教育会による)出版年表」で変遷を示しています。まず「国定教科書時代」があり、やがて布哇教育会が『日本語読本』を作った「教育会読本時代」になります。外国語学校の取り締まりが出たものの、結局、違憲だということになる「分裂時代」を経て、さらに版權を受け継いで布哇教育会が再生して日本語教科書を作る「新生教育会教科書時代」になります。

ただ一方で、ハワイはアメリカの準州になります。そうすると、そこで求められるのは「日本人」ではなく、「日系アメリカ人」ということになります。つまり、日本人であることはなかなか表に出せなくなるのです。そこで、反日感情を引き起こさないために、どういう日本語教科書を作るかが問題になります。どちらかというと友好的な教材が好まれるような教科書ができて、天皇に関する記述は非常に少なくなります。ただし、神話は人気があり、「因幡の白兔」などが入っています。

従って、日本語を教えながら、一方でアメリカの反日感情を煽らず、結局、「善良な日系アメリカ人」を育てることが主眼になってゆきます。そういうなかで、昭和7年あたりから出てくるのが「修身」です。今日は触れませんが、日本語教科書と合わせて求められたのは修身教科書でした。そこで説く「修身」は、「善良な日系アメリカ人」を作るためのものということになります。従って、天皇制教育ではなく、親孝行や友愛といったテーマが前面に出てきます。

具体的な教材について考えてみたいと思います。

布哇教育会が作った『日本語読本』の中から、特に手紙の教材を抜き出してみましょう。最初に、大正12年(1923)の尋常科用の巻5の第5課に出てくる「祖父母に」という教材です。

祖父様、祖母様、御きげんよくいらされますか。私も三郎も元気よく毎日学校へ通つて居りますから、御安心下さいませ。私どもは午前九時から午後二時まで、此の地の公立学校へあります。公立学校にはアメリカ人の子どもも居り、土人其の外各人の子どもも居りますが、みな中よくして、同じ教場で勉強し、同じ運動場で遊んでゐます。

午前から午後にかけてはハワイの「公立学校」へ行きます。「アメリカの子ども」「土人其の外各人の子ども」というのは、アメリカ人の子供、ハワイ先住民の子供、そして、日本だけでなく、中国や韓国から集まってきた子供のことです。そうした多様な子供が一つの教室、一つの運動場で仲良く学んでいるわけです。そこで学ぶ「歴史」「地理」は、当然、アメリカの「歴史」「地理」で

す。

末尾には、次のような一節が見えます。

公立学校がすむと、三時から五時までは日本語の学校へまゐります。こゝで日本語や書き方を習ひます。先生から日本のむかし話や地理の御話を聞くのが、何よりも楽しみです。

つまり、「公立学校」と「日本語の学校」という2つの学校に通っているのです。まず、午前から午後にかけて公立学校に行き、いろいろな子供たちと勉強します。はっきり書いていませんが、ここでの言葉は英語です。そして、放課後は日本語学校へ行きます。そこで日本語や書き方を習い、先生から「日本のむかし話」や「地理」の話を聞いたのです。ここに「日本のむかし話」があるのはたいへんうれしいことです。ハワイでも、教室で日本の昔話が話されていたのです。

ここに取り上げた『日本語学校教科書集成』の復刻は、公立学校ではなく、こうした日本語学校で使われた教科書です。「祖父母に」は、ハワイに住む日系の「次郎」という子供が、おそらく日本に住む祖父母にハワイにおける二重の学校生活を知らせる手紙を送ったという教材です。こうした手紙を書くことが望ましいものと考えられていることがわかります。

5 男の子のエリートコースと女の子のエリートコース

同じ『日本語読本』巻5の第60課に「布哇通信」という教材が出てきます。「一 布哇から日本へ」「二 布哇から米大陸へ」に分かれています。前者は3月1日、ハワイの「広次」が日本に行った友達「勝太郎」にあてた手紙、後者は9月23日にハワイの「銀次郎」がアメリカの大学に行った「久造」にあてた手紙です。

「布哇から日本へ」は、こんなふうに始まります。

御別れ致しましてから、もう一年にも近くになります。定めし此の頃ではりつばな日本の少年とおなりになつたでせうと、かげながらおうはさを致して居ります。

昨年御出での時には、もう桜も過ぎてゐたとかいふ御手紙でしたが、今年は十分御花見が出来ませう。日本はもう春になりましたか。父が何でも来月の初には桜がさくと申して居りました。御承知の通り、私共は桜々と申しますが、話で聞くか、絵で見るか、それでなければ、ワシントン祭の花行列で、造花の桜を見る位が関の山ですもの、本物の桜を御らんになるあなたを、何でおうらやましく思はずに居られませう。

「勝太郎」は日本で桜が散っていた頃にハワイから日本へ行き、翌春、「広次」が出した手紙です。ハワイの子供は、「話で聞く」「絵で見る」「造花の桜を見る」しか桜に接する機会がなかったのも、本物の桜を日本に帰って見ることが出来る友達をうらやましく思っているのです。それにしても、1年経って「りつばな日本の少年とおなりになつた」というのは、やはり重い意味を持つと思います。それはアメリカ人ではなく、まさに故郷に帰って、日本人になるという意味があったからです。

この手紙の末尾には、こんな一節があります。

私ももうちに公立学校を卒業して、中学校に入学するわけですが、はいれるかどうかはまだ分りません。父は中学校を卒業したならば、日本へやつてやると申して居ります。

学校の友人達も皆丈夫です。林さんが家事の都合で馬哇島へ行かれました。どうぞ御手紙を下さい。出来れば日本の絵はがきを少々。

「広次」は落第を心配していますが、中学校を出たら日本へ行くのが希望だったことがわかります。仕事で行くのか、大学へ行くのかわかりませんが、父は「やつてやる」と言うのです。「日本の絵はがき」を頼むのは、先の桜の風景と関連するかもしれませんが、行ったことのない「日本」を知るメディアとして、「絵はがき」が重要な役割を持っていたことがわかります。

後者の手紙、「布哇から米大陸へ」は、こう始まります。

御手紙によれば、無事ニューヨークに御着の上、目的の学校に御入学なさつたさうですが、ま

ことに喜ばしう存じます。私も出来れば御一処に願ひたいものだ、実はゆめにまで見た位で御座います。中学を卒業しますと、ぜひそちらの大学へ参るつもりですから、其の節は何分にもよろしく願ひ致します。

ハワイから日本へ行く子もいれば、このようにハワイからニューヨークへ行く子もいたのです。中学校を卒業して、ニューヨークの大学へ進学するのが一つのステータスだったのです。この後に「赤げつと」という当時の流行語が出てきますが、それは「不慣れな洋行者」を意味します。「銀次郎」は今は「赤げつと」ですが、「四五年の後、私が参ります時には」すっかりアメリカに慣れていて、私が「赤げつと」になるだろうと言います。

日本人にとっては、かつての「常磐ハワイアンセンター」ではありませんが、ハワイに対するあこがれのイメージが強くあります。ハワイの人々にとっては、ニューヨークがあこがれの場所であり、進学先でもあったのです。ですから、この2通の手紙はハワイで育つ日系の子供に、エリートになってゆく人生モデルを提示していることになります。単に手紙の書き方を教えるという以上に、大きな意味を持つと思います。

次は、昭和4年(1929)の『日本語読本』巻6の第30課の「南米から(父の通信)」です。父はブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市に行き、この手紙と一緒に「絵葉書」をたくさん送っています。その中には、「アマゾン河」「イグアス大瀑布」があり、その説明をしています。この手紙によれば、父はブラジルカフィー園の視察に行っていることがわかります。

さらにサンパウロ市が南米日本人が一番多いということも出てきます。サンパウロ市には日本人の小学校があつて、「お前たちぐらいの子どもが通学しています」というのですから、「(父の通信)」とあるように、これは父が小学生の子供に向けて書いた手紙です。ブラジルカフィーの農園で日本人がたくさん働いている様子を書いて、「もうブラジルのしさつも大体終ったから、近々の中帰る考でいます」と結びます。

この父はなぜブラジルへ視察に行ったのでしょうか。大正13年(1924)に「排日移民法」ができて、渡航が禁止されます。そこで日本人は、新しい移民の場所としてブラジルを開拓していったわけですから、この教材はまだ移民が始まってから5年くらいしか経っていないブラジル視察を取り上げているのです。その現況を手紙で知らせるというのは、リアルタイムで世界情勢を知らせることであります。ハワイに住む日系の子供たちが知らされたのは、まだ新しいブラジル移民の情報だったのです。

次に、第43課の「高等女学校に入学するについて問合せの手紙とその返事」です。これは、「西村はな」と「高山しげ」という女の子同士の手紙です。「西村はな」は今年第6学年を卒業することになっていて、卒業後は高等女学校の1学年に入学したいという希望を持っています。今年は入学考査があるかないかということが大問題だったのです。「高山しげ」はたぶん1年先に日本の高等女学校に入っていた人なので、そのことを尋ねたのです。

それに対して、「高山しげ」から返事が来ました。入学考査はあるだろうが、日頃からできるので、心配ないことを伝えます。最後に、「いずれこの月末には帰りますから、詳しいことはそのおりに申しあげましょう」と結びます。「高山しげ」は高等女学校の寄宿舎で生活し、故郷のハワイへ帰るのです。ここには、先に見たような男の子たちの人生モデルとは違う、女の子たちの人生モデルがあり、これもエリートコースだと思いますけれども、それを書いているのです。

そして、昭和5年(1930)の『日本語読本』巻8の第28課の「布哇通信」には侯文体の手紙が出てきます。これはハワイのホノルルにいる状況を述べていますけれども、ハワイの状況ということで言えば、「おとぎばなしの国」であるとか、「一別天地」「極楽世界」であるとか、ハワイを美辞麗句でほめたたえているところが目立ちます。これは「高等小学読本」ニ拠ル」と出典が記されています。

6 公立学校と日本語学校、新しい移民の場所・満州国

昭和12年(1937)の『日本語読本』巻9の第15「布哇から」を見ましょう。これはハワイの「春子」が日本に住む「おじい様」「おばあ様」に出した手紙です。父の話では11月頃からだんだん寒くなって、1月2月となると、寒いか冷たいとか言うよりも、痛いと言った方がよいくらいの寒さだと聞いて驚き、それを問うのです。ハワイの子供は寒さが実感できないからでしょう。「お父様

のお話では」ということから、この「春子」という子供は、桜を知らないように、日本の寒さを知らなかったのです。日本に行ったことのない子供たちが日本のことを勉強しているのだということがわかります。

その中に、次のような一節が見えます。

うちでは皆丈夫で、お父様とお兄様は毎日製糖場で働いて居られますし、お母様は家の中の仕事で朝から晩までお忙しいようです。私と弟は学校へ行くのが仕事で、公立学校も日本語学校も、私が五年生、弟が三年生です。

公立学校は、朝八時に始って、午後二時におわります。先生も生徒も、日本人・しな人・白人・布哇人などいろいろです。けれども、言葉は皆英語です。読むのも英語、書くのも英語、話すのも英語です。日本語学校は、午後二時半から一時間のおけいこです。修身、読方、綴方、書方だけで、英語は一切使わないことにしています。けれども、思わず英語を話して、先生に笑われることがあります。

公立学校は英語を使い、日本語学校は英語を一切使わないという違いが鮮やかです。『日本語読本』の中に、この教科書が使われた状況が見える仕組みになっているのです。先ほどの「祖父母に」という手紙と違うのは、公立学校は英語であることが明示された点にあります。そして、日本語学校には「修身」があることがはっきり出ています。「修身」は「祖父母に」の段階ではまだありませんでしたが、この時期には加わっていました。

さらに「日本語学校で、いろいろの事を勉強していますと、一度日本へ行ってみたい感じがして来ます。ハイスクールをそつぎようしたら、日本見物に行かせて上げると、お母様がおっしゃいますけれども、まだ、七年も八年も後のことですよ」とあります。教科書で学んだ結果、「日本見物」が楽しみになっていた様子が知られます。

最後に、昭和14年（1939）の『日本語読本』巻12の第13「満洲国から」を読みましょう。昭和7年に満洲国が建国され、昭和8年から移民が奨励されます。満洲国は日本にとって新しい移民先になりました。

「満洲国から」は、「ホノルルのさんぽしで、皆さんとお別れしてから、もう二ヶ月たちました。日本に着いて直ぐあちらこちらと旅行して、今は満洲国にきています」と始まり、ハワイを出発して日本を経由し、満洲国に行った人の手紙という体裁で作られた教材です。「いろいろお知らせしたい事が沢山ありますが、それは帰ってからゆっくりお話することとして」とありますので、たぶん日本から満洲を旅行した先生の手紙ではないかと思えます。

満洲の撫順には炭鉱があって、「新市街は、ホテルでも、病院でも、学校でも、住宅でも、実に立派なものばかりで、アメリカの町とくらべて少しもおとらないと思いました」とあり、写真入りで出てきます。「アメリカの町とくらべて少しもおとらない」という評価の仕方が重要でしょう。そして、「鉄道でも石炭掘でも、これらの大事業は、満鉄が一手にやっているのですから、すばらしいものです」とします。国営企業としての南満洲鉄道株式会社が多角経営をした事業の中に、鉱山開発、製鉄所、製油工場などがあったわけです。

一方で、奉天までは自動車で飛ばすとか、あるいは特急「あじあ」に乗ってハルビンに行くとか、ということも出てきます。ハワイの先生が日本や満洲を視察して送った手紙という体裁で作られた教材だと思えますけれども、新しい移民先の満洲の発展について、あこがれを抱くように書いた手紙になっています。

こうした手紙を見てわかるように、日本に行ったことのない日系の子供たちが『日本語読本』を日本語学校で勉強して、日本語や日本文化を学んでゆくシステムが作られています。それは、一方で、日本で国定教科書が第5期まで改訂され、また、植民地ではそれぞれの地域に合わせた教科書が作られている時代でもありました。日本の国定教科書で言うと、だいたい第3期以降に当たりますが、その時期に日本語学校で学ぶ教科書が作られたのです。

具体的な教材の中身としては、アメリカ的なものが好まれ、ハワイについても、土地に伝わる神話や伝説がたくさん採り入れられています。今日は時間がないので、また別の機会に触れたいと思いますけれども、日系の子供たちにハワイの神話や伝説などを教材に入れて、自分たちが暮らすハワイの歴史や文化を知らせようとしたのです。

今後、アメリカのシアトルやカリフォルニアの教科書も復刻されるそうです。北米でもやはり日本語教科書が作られていたのです。まだ私たちに見えていない帝国日本の日本語教科書がこれから徐々に明らかになってくるでしょう。これは国際化時代の未来を考える上できちんと認識しておくべき歴史であり、今はそうした時期に来ているのではないかと思います。お約束の時間を過ぎましたので、以上で終わります。どうもありがとうございました。

参考文献

- ・船橋治編『ハワイ日本語学校教科書集成』不二出版、2011～2012年
- ・堀雅昭『ハワイに渡った海賊たち一周防大島の移民史』弦書房、2007年。
- ・宮本常一『忘れられた日本人』未来社、1960年。
- ・宮脇弘幸研究代表者『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書』科研費報告書、2009年。

付記

この講演は2013年3月20日、東京学芸大学フォーラム「帝国日本と教科書」の入口で行ったものです。その際にお願いしたお二人の講演は、『帝国日本の昔話・教育・教科書』（東京学芸大学、2013年3月）に収録してあります。合わせてお読みくだされば幸いです。なお、私の講演のタイトルは「帝国日本と国語教科書」でしたが、当日いただいたご意見を踏まえて改めました。

帝国日本の文学と教育

石井 正己

日本の民俗学の歩みを回顧しつつ未来を展望しようとするとき、一国民俗学を提唱した柳田国男はもちろん、昔話の国際比較研究を進めた関敬吾にも、腑に落ちない点がいくつかあった。最も重要な疑問点としては、1945 年前の、民俗学と人類学が未分化だった時期の事績の中に、戦後の研究からは見えなくなってしまった点があるのではないかと感じられた。帝国日本が行った植民地(以下、委任統治領・占領地等を含めてこう呼ぶ)における活動がまったくなかったかのように、戦後の研究は進められてきたからである。しかし、国際化と情報化が進む時代だからこそ、なぜそうってしまったのかを検証することなく、今後の研究が展望できるとは考えられなくなってきた。

1990 年代後半、『柳田国男全集』『佐々木喜善全集』の編集作業を行う傍らで、そうした疑問を抱いて、台湾・朝鮮・南洋群島・満州の昔話資料を捜し求めてゆくと、次々と新たな資料が見つかった。1945 年以前を知る研究者はそうした資料が作られたことを知っていたはずなのに、学術的な価値がないという理由を付けて、その存在さえ無視しようとしたのだらうと推測することができた。そして、その前提には、植民地で行った調査や研究に対する罪悪感もあったのではないかと推測された。しかし、確かな証言を聞くことができないままに、先人たちはみな鬼籍に入ってしまった。

そうした中で、たまたま古書店から購入したのが『大正十二年 伝説集』2冊であった。これは今から 90 年前の 1923 年、新義州高等学校の生徒が夏休みに故郷に帰って聞き集めた昔話や伝説の作文集であった。わずかにハングルが交じるものの、すべて日本語で書かれていた。すぐに分析する余裕はなかったが、2007 年、『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究』で影印と翻刻を公開した。これが崔仁鶴氏の目に止まり、2010 年に韓国の民俗苑から韓国語訳が出版された。その際、この作文を書かせた「寺門先生」は寺門良隆ではないかという私の推定を、金廣植氏が職員名簿で実証してくれた。

そうした動きと相前後して、台湾・朝鮮・南洋群島・満州各地の昔話の採集と資料を検証するためのフォーラムを東京学芸大学で開催し、2009 年に『台湾昔話の研究と継承—植民地時代からグローバル社会へ』、2010 年に『韓国と日本をむすぶ昔話—国際化時代の研究と教育を考えるために』、2011 年に『南洋群島の昔話と教育—植民地時代から国際化社会へ』、2013 年に『帝国日本の昔話・教育・教科書』を発刊した。韓国からは崔仁鶴、全京秀、金容儀、張庚男の各氏が講演に来てくださり、日本で研究生活を続ける金廣植氏にサポートをお願いした。金廣植氏は、2012 年、博士論文として、『帝国日本における日本語朝鮮説話集の刊行とその推移に関する研究』をまとめ、近く研究書として公刊されると聞く。

一方、私が勤める東京学芸大学が教員養成大学であることから、植民地で編纂された教科書の状況についての研究が不可欠になってきた。日本では国定教科書を編纂・発行するのとともに、台湾・朝鮮・南洋群島・満州のそれぞれで教科書を発行したが、それらは戦後の国語科教育ではまったくなかったこととされてきた。それらに載った教材を総合的に検索できるデータベースの構築を進めた結果、それぞれの教材書間で、教材を流用したり、微妙な変化を加えたりすることが明らかになってきた。文部省が童話やり俚様の採集を行って、それを教育に活用しようとしたのと同様なシステムを、植民地でも実現しようと考えていたことが見えてきた。しかし、それぞれの地域の事情は異なり、必ずしも同じようには行われなかったことが考えられるようになった。

教科書の復刻が進んできたが、近年の大きな動きに、移民先で作った日本語教科書が取り上げあげられるようになった。帝国日本では、ハワイを皮切りに、北アメリカ・南アメリカ、そして満州国に移民を送りだしてきた(満州は傀儡国家としたので、移民の範疇に入る)。ハワイの日本語教

科書が復刻されたが、今後もアメリカで作った日本語教科書の復刻が計画されていると聞く。今まで帝国日本については植民地支配が取り上げられてきたが、移民地をも視野に入れなければならないということに気が付いた。帝国日本はアジアへの植民を進める一方で、アメリカへの移民を送り出すという構造で進められたのである。そうした視野での研究はまだ始まっていないが、これから必ず必要になってくることが確信される。

一方、2012 年から、もう一つの研究活動を始めている。帝国日本で大東亜共栄圏を声高に叫んだとき、その視線の先にあったのはインドではなかったかと思われる。1943 年ごろ、おびただし数のインドに関する出版物が出ている。そこで、2012 年に「インドの昔話、その歴史と現在」を開催した。これまでもイギリスの支配下でインドの昔話が発見されたことが言われてきたが、インドから日本に亡命して独立運動を進めたラス・ビハリ・ボース（中村屋ボース）は、インド人自身によって採集された昔話を独立の精神的支柱に据え、日本人に理解を求めるべく、日本語訳を発行したことが明らかになった。きわめて政治的な昔話の利用だが、そうした出版を支えたのも帝国日本の一面であった。

さらに今年の 11 月には、「植民地時代の東洋学 ネフスキーの業績と展開」を開催する計画である。ロシアから留学生として帝国日本にきたニコライ・ネフスキーの足跡は、日本のみならず、台湾や中国に及ぶ。今回は踏み込むことができないが、彼が研究対象にした西夏語の資料は、中国で発掘された後、多くがロシアに移された。そこには世界の文物を収集してやまないヨーロッパの動きがあり、オリエンタリズムの意識が見え隠れする。帝国日本の意識を掘り下げるには、グローバルな視野に立って、支配されることと支配することのはざまに分け入らねばならないように感じられる。

また、2013 年になって、『子守唄と民話』を発刊した。歴史研究ばかりでなく、日本と韓国交流の中で子守唄と民話の意義を見直したいと考え、コリアン・タウンと言える大久保のある新宿区を会場に行ったフォーラムの成果である。国際結婚で日本に住む金基英氏の子守唄と民話に加え、柳蓮淑氏の国境を越えた子育てをめぐる論考が載っている。私は「母の歌・オモニの力」と題して、柳田国男と姜尚中の思いがけない共通性を探ってみた。研究ばかりでなく、その成果を現代に生かすことが行わなければ学問をする意味はないと考えている。

2012 年秋、ソウル大学校で開催された川の文化フォーラムでは、「河童 (kappa) は川に棲めるか」という講演を行った。自然と人間の共生を図るための環境問題に民話が生かせるのではないかと考え、『遠野物語』や「公害を知らせた河童の話」を取り上げた。さらに 2013 年春、全南大学校で開催された日語日文学科の研究会で、「災害と日本文化」という講演を行った。先般の東日本大震災ばかりでなく、世界有数の災害大国・日本に暮らす人々の精神性についてお話しした。これらは、いずれ海外講演集の中に収録したいと考えている。

この大会でお話しする内容の要旨という以上に、今日に至り着くまでの経過を長々と述べてしまった。当日は、「帝国日本の文学と教育」というテーマを深めるために、再び『大正十二年 伝説集』を取り上げるつもりである。実は、作文を書かせる際の宿題に、「ふるさとの昔話や伝説を調べてごらんさい」というテーマを出すことは、日本で広く実施された採集のシステムだった。それをそのまま日本語教育に入れ込んで、植民地・朝鮮で実施した結果がこの作文集だったのである。寺門良隆という先生個人の関心を出るものではなかったと思われるが、そこには「帝国日本」の「文学と教育」をめぐる実践が鮮明に見出されるように思われる。

(2013 年 6 月 5 日)

(2013 年 6 月 15 日、韓国日語日文学会夏季国際学術大会、韓国・清州大学校。補足したところがある)

日本における昔話研究の現状と展望

石井 正己

【要旨】

20世紀における日本の昔話研究は、採集の記録とタイプ・インデックスの作成に費やされた。急速な文明化が進む中で、柳田国男は昔話が消滅する前に記録しなければならないことを説き、全国の同志が賛同した。やがて集まった記録をもとに、20世紀後半にはタイプ・インデックスが作成される。柳田国男監修の『日本昔話名彙』を嚆矢として、関敬吾の『日本昔話集成』全6巻が出たが、録音機の普及によって国内の昔話資料が増え、『日本昔話大成』全12巻に成長した。稲田浩二・小澤俊夫責任編集の『日本昔話通観』全29巻と研究編2巻が出て、『日本昔話通観 研究篇1 日本昔話とモンゴロイド』と『日本昔話通観 研究篇2 日本昔話と古典』は、共時的研究と通時的研究を国際的に進めるための基盤を用意した。

それらを踏まえて20世紀末から始まった昔話研究は、新たな歩みを始めている。柳田国男がじみじみと述べていたように、昔話の国際的な比較研究は一人ではできない事業ではなかった。例えば、日本民話の会の外国民話研究会はテーマ別の編集による資料集の編訳を進め、『世界の愚か村話』『世界の太陽と月と星の民話』『世界の妖怪たち』『世界の犬の民話』『世界の猫の民話』などを発行し、今では世界各地を網羅できるようになってきた。その傍らでさらに踏み込んだ比較研究を行い、「三つの質問をあずかる旅」「猿蟹合戦とプレーメンの音楽隊」の「話群研究」を押し進めている。従来のヨーロッパ中心の研究をグローバル研究のレベルに押し上げようとした意義は大きい。

一方、これまで柳田国男をはじめとする研究者は、昔話は消滅するものだと考えたが、それを語り伝える語り手の中から、未来に昔話を語り継ぎたいという動きが起こっている。家庭で語られなくなった昔話を観光や教育の場に引き出して活用しはじめている。そうした動向を見ながら石井正己は、昔話を現代社会が直面する諸課題に向き合うために生かせないものかと考えてフォーラムを実施してきた。これまでに『子どもに昔話を！』『昔話を語る女性たち』『昔話と絵本』『昔話にまなぶ環境』『震災と語り』『子守唄と民話』などを発行し、広く迎えられた。女性の作家や研究者・語り手の参加を促しつつ、昔話の研究や継承の状況を大きく変えつつある。

また、日本の昔話研究の歩みを回顧するとき、柳田国男や関敬吾は、帝国日本が台湾・朝鮮・南洋群島・満州などの植民地・占領地で行った採集や研究についてはほとんど言及することがなかった。しかし、石井正己は国際化と情報化が進む時代にあって、植民地時代を検証することなく、今後の研究が展望できるとは考えられなくなった。各地をテーマにしたフォーラムを実施し、『台湾昔話の研究と継承』『韓国と日本をむすぶ昔話』『南洋群島の昔話と教育』『帝国日本の昔話・教育・教科書』などを発行した。海外の研究者を積極的に招聘し、持続的な学術交流を進めている。

今、日本の昔話研究は大きな世代交替の時期を迎えている。東アジアで言えば、東京都立大学出身の研究者を母胎にした中国民話の会が解散したが、一方では天理大学と同志社大学の関係者で組織した日韓比較文学研究会が活動を始め、『韓国口碑文学大系』の翻訳を連載している。そうした個別の動きはあるものの、まとまった成果がなかなか出せない中で、例えば、日中韓子ども童話交流事業実行委員会企画の『日本・中国・韓国の昔話集』全3巻は注目すべき成果であろう。子ども向けの昔話絵本だが、研究者・作家・画家が行った共同研究のモデルであり、3カ国の昔話の相互理解に役立つ。

思えば、中国・韓国・日本の研究状況には微妙な違いがあるが、同時代を歩む事実は重く、その違いを乗り越えて東アジアの昔話を共同で考えてゆく体制作りが急務である。相互に講演やシンポジウム・研究発表に参加することはもちろん、各国の学会が大会や例会を他国で開催するようにし

て学術交流を図ることが求められる。昔話を専門家の独占にせず、民俗学・民族学・国文学・歴史学・教育学・心理学・児童学等の諸学問が交流する出会いの場にしてゆく必要もある。ナショナリズムとグローバリズムがせめぎ合う状況にあって、人類史的研究対象として最も意義を持つ昔話の再評価が望まれる。

1 はじめに——柳田国男・関敬吾以後のタイプ・インデックス

日本の伝統的な暮らしは、「桃太郎」の冒頭にあるように、お爺さんが山に柴刈りに行き、お婆さんは川に洗濯に行くというように続いてきた。やがて文明開化に伴って西洋の文物が入り、ガス・水道・電気が普及し、さらにテレビ・洗濯機・電気冷蔵庫も一般的になってくる。すると、それまでの囲炉裏を囲んで昔話を語り聞く機会はどんどんなくなっていった。文明化が進む中で、柳田国男は昔話が消滅する前に記録に残さなければならないことを説き、全国の同志がこれに賛同した。研究の前提となる採集の記録を残すことが急務であるという認識が生まれたのである。

その結果、20世紀における日本の昔話研究は、採集の記録とタイプ・インデックスの作成に費やされた。1948年、柳田国男は監修で『日本昔話名彙』を発行した。一国民俗学による昔話発生論に拠って、「完形昔話」「派生昔話」の2分類を採用し、初めて日本の昔話を体系化した。しかし、ほとんど間を置かず、1950～58年、関敬吾は『日本昔話集成』全6巻を発行した。ヨーロッパの理論を応用して国際的な比較研究を進めようと、「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の3分類を採用し、AT分類と対照させながら日本の昔話を国際化した。その後、録音機の普及によって国内の昔話資料の量がおびただしく増えたため、関敬吾は野村純一の協力を得て、1978～80年、『日本昔話大成』全12巻を発行することになる。

相前後して、柳田国男・関敬吾以後の昔話研究が動きはじめる。タイプ・インデックスとしては、1977～98年、稲田浩二・小澤俊夫は責任編集で『日本昔話通観』全29巻と研究編2巻を発行した。これは北海道から沖縄まで都道府県単位で構成し、各巻は「むかし語り」「笑い話」「動物昔話」の3分類を採用している。各地の稿本資料まで掘り起こして丁寧に概略を載せ、昔話の集大成が実現した。しかし、各巻の実質的な担当者が異なるための微妙な差異が生じ、タイプ・インデックスと総合索引で調整せざるを得なかったことも否めない。

『日本昔話通観』は各巻を都道府県単位で構成したので、地域ごとに調べるには便利だが、話型を見るには『日本昔話大成』が各巻を「動物昔話」「本格昔話」「笑話」で構成している方が使い勝手がいいところがある。また、『日本昔話大成』は「桃の子太郎」だけを立てたが、『日本昔話通観 3 岩手』（1985年）では「桃太郎」を「鬼退治型」「鬼の目玉型」「猿蟹合戦型」「村救い型」「地獄行き型」のようにサブタイプに下位分類した。より緻密な分類が可能になったといえることができるが、細分化された結果、話型を超えるような研究が生まれにくくなっているかもしれない。

研究篇は、『日本昔話通観 研究篇1 日本昔話とモンゴロイド昔話の比較記述一』（1993年）と『日本昔話通観 研究篇2 日本昔話と古典』（1998年）からなる。前者は世界に広がる共時的資料と対照し、後者は世界に広がる通時的資料と対照している。「編集趣旨」に拠れば、前者は「従来の大局的にみて欧米中心のタイプ・インデックスおよびモチーフ・インデックスに対して、アジア・モンゴロイドに視座をおくタイプ・インデックスとモチーフ・インデックスの作成を期待する一つの布石になればまことに幸せである」と述べ、後者は「日本の昔話の通時的研究に資する目的で、国書と外書にわたって、古典の内容で日本昔話のタイプおよびその重要モチーフと対応関係の認められる部分を摘出し、その対応の程度に応じて記述することにある」と述べた。例えば「桃太郎」ならば、前者は中国の9例を引き、後者は国書の類話5例、対応話2例、参考話5例、外書の参考話3例を引くといった具合である。

2 外国民話研究会が重ねてきた共同作業

柳田国男がじみじみと述べていたように、昔話の国際的な比較研究は一人でできる事業ではなかった。各国ごとの個別研究はともかく、国家を超えた共同研究はなかなか実現できなかったが、日本民話の会の外国民話研究会が毎月1度の例会を続け、20世紀末からテーマ別の編集による資料集の編訳を次のように発刊している。

・『世界の愚か村話』（1995年）

- ・『世界の太陽と月と星の民話』(1997年)
- ・『世界の妖怪たち』(1999年)
- ・『世界の魔女と幽霊』(1999年)
- ・『世界の運命と予言の民話』(2002年)
- ・『世界の鳥の民話』(2004年)
- ・『世界の花と草木の民話』(2006年)
- ・『世界の犬の民話』(2009年)
- ・『世界の猫の民話』(2010年)
- ・『[新装改訂版] 世界の太陽と月と星の民話』(2013年)

このシリーズの執筆者はほとんどが女性であり、当初の『世界の愚か村話』は13人による11カ国で始まったが、『[新装改訂版] 世界の太陽と月と星の民話』は28人で、アイヌ・アメリカ・アラスカ・アルゼンチン・アルメニア・インド・カナダ・イタリア・ウクライナ・オーストラリア・カザフスタン・韓国・キルギスタン・コーカサス・スイス・スーダン・スウェーデン・スリランカ・台湾・中国・ドイツ・フランス・ブラジル・ブルガリア・ベトナム・ポルトガル・リトアニア・ルーマニア・ロシアをカバーする。

発端となった『世界の愚か村話』の「あとがき」で、剣持弘子は次のように述べている。

日本の昔話を外国の昔話とくらべることは、昔話研究者だけでなく、一般の昔話愛好者にとっても興味深いことです。私たちは各自が抱え込んでいる膨大な世界の昔話資料を、どのような形で読者に供することができるか、いろいろ考えてきましたが、その一つの方法として、このグループの特色を生かして、テーマ別に各国の昔話を集めてみることにしました。同じテーマで各国の昔話を並べてみると、それぞれの特徴がいつそうはつきりするのではないかと思います。

このシリーズは、「愚か村話」に限らず、世界に広がる昔話を貫くテーマを決めて、それに沿った事例を各会員が専門とする地域資料から翻訳し、それらを集積してゆく作業を行った。確かに、「同じテーマで各国の昔話を並べてみると、それぞれの特徴がいつそうはつきりする」という結果を得ることができる。個別の話型で集めるのではなく、テーマという枠組みで集めることで比較研究への可能性を広げようとしたと言える。

一方、外国民話研究会ではさらに踏み込んだ比較研究を行い、『聴く 語る 創る』に、「三つの質問をあずかる旅—世界のAT460、461話群研究—」(第13号、2006年)、「猿蟹合戦とプレーメンの音楽隊—弱小連合、強きをくたく—」(第20号、2012年)として発表した。テーマ別の編集による資料集とは違って、ヨーロッパとアジアを中心にして可能な限りの昔話を集めて、「話群研究」を押し進めている。従来のヨーロッパ中心の研究をグローバル研究のレベルに押し上げようとした意義は大きい。必ずしも明確な結論が出たわけではなく、むしろ結論を急ぐのは困難であることを印象づけるが、現在の資料から言えることを明確にした点で信頼を置くことができる。

3 日中韓で作った翻訳昔話絵本の試み

アジアにおける昔話をめぐる学術交流がなかなか成果を出せない中で、例えば、2004年、日中韓子ども童話交流事業実行委員会企画で全3巻が発行されている。著者・画家として、日本の小澤俊夫・馬場英子・太田大八・大竹聖美、中国の劉守華・蔡皋・李穎・金東勲、韓国の金和経・金晟敏が協力した。その内容は次のとおりである。

- ・『日本・中国・韓国の昔話集 1 天人女房 ほか5話』
 - 1 天人女房 (日本)
 - 2 牽牛星と織女星 (中国)
 - 3 仙女と木こり (韓国)
 - 4 天道さん、かねのくさり (日本)
 - 5 熊ばあさん (中国)
 - 6 お日様とお月様になったきょうだい (韓国)
- ・『日本・中国・韓国の昔話集 2 一寸法師 ほか5話』
 - 1 一寸法師 (日本)
 - 2 木の鳥 (中国)
 - 3 ひきがえるの報恩 (韓国)
 - 4 やまなしとり (日本)
 - 5 高亮、水を取りもどす (中国)
 - 6 むすこを埋めようとした孝行者のはなし (韓国)

・『日本・中国・韓国の昔話集 3 さるとかえるのもちころがし ほかに10話』

1 さるとかえるのもちころがし (日本) 2 なつめ太郎 (中国) 3 トッケビのはなし (韓国)
4 ねずみのよめ入り (日本) 5 いちばん強いのはだれ (中国) 6 しかとうさぎとひきがえる
の年自慢 (韓国) 7 どっこいしょ (日本) 8 ねこはどこに行った (中国) 9 青がえるの親
不孝 (韓国) 10 にんじんとごぼうと大根 (日本) 11 鏡のはなし (韓国)

各巻の巻末には、この事業のまとめ役を務めた小澤俊夫の「かいせつ」、委員長・森喜朗と副委員長・扇千景の「ごあいさつ」が入る。小澤の「かいせつ」によれば、第1巻は日本・中国・韓国で共通して伝承されている昔話で、国際比較ができるもの、第2巻は日本・中国・韓国の代表的な昔話、第3巻は日本・中国・韓国で小学校の低学年から読める昔話を取り上げて構成したことがわかる。こうした昔話を通して、3カ国が「いわば兄弟であること」を知り、同時に「それぞれ異なった面をもっていること」も知ってもらいたいという意図を述べている。

「ごあいさつ」には「絵童話本」という耳慣れない言葉が見えるが、例えば、日本の「天人女房」は小澤俊夫・文、太田大八・絵で載せられ、それに中国語と韓国語の翻訳が付いている。中国の「牽牛星と織女生」は劉守華・選編、蔡舉・絵、馬場英子・訳で載せられ、中国語の原文と韓国語の翻訳が付いている。韓国の「仙女ときこり」は金和経・文、金晟敏・絵、大竹聖美・訳で載せられ、中国語の翻訳と韓国語の原文が付いている。全3巻は、同じようにして、3カ国の学者・画家・作家の連携によって作られている。

扇千景は、この事業が子どもゆめ基金に拠って実現されたことに触れている。そのため、学術的な指摘は「かいせつ」の中で分担して触れる程度に留め、子どもたちに読者に設定して編集している。第3巻は小学校の低学年を対象にしたことが明示されているが、同様に考えると、第2巻は中学年、第1巻は高学年にふさわしいと言えるかもしれない。だが、基金を使ったため非売品であり、日本はもとより、中国や韓国の小学校にどの程度配布され、どのように使用されたかを知ることができない。よい企画であるが、発行して終わってしまった点では、大きな不満が残る。

4 昔話の継承と現代的課題に向き合う実践

柳田国男をはじめとする研究者は、昔話は消滅するものだと考えたが、それを語り伝える語り手の中から、未来に昔話を語り継ぎたいという動きが起こっている。研究者の多くが男性だったのに対し、そうした活動を進めた語り手の多くは女性だった。昔話が消滅する危機感は、それだけに留まらず、少子高齢化といった厳しい現実と連動してゆく。そうした中で、家庭の中で語られなくなった昔話を観光の場に引き出し、観光資源として活用しはじめる。

しかし、語り手自身の高齢化が顕著になり、地域の過疎化が顕著になると、次代を担う子どもたちのふるさと意識を喚起しようとして、昔話は教育の場に持ち込まれる。折しも学校では、「学習指導要領」の改定に伴って、「総合的学習」の時間が設けられ、特殊な技能を持つ地域の人材を学校教育に活用しはじめていた。そうした中で、定期・不定期に語り手が学校を訪れるようになった。

そうした動向を前にして、石井正己は、昔話を未来に継承し、さらにはいじめ・環境・災害など現代社会が直面する諸課題に向き合うために生かせないものかと考えた。そして、1世紀をかけて集めた昔話を研究室や図書館に眠らせたままにするのではなく、大切な遺産として活用したいと思った。それは、昔話にはノスタルジーを喚起する世界があるとするような見方とはまったく異なる。しかも、実施したフォーラムを記録として残し、エッセイや論考を加えて、テーマを明確化する編集を行い、次のように発刊してきた。

- ・『子どもに昔話を！』(2007年)
- ・『昔話を語る女性たち』(2008年)
- ・『昔話と絵本』(2009年)
- ・『昔話を愛する人々へ』(2011年)
- ・『昔話にまなぶ環境』(2011年)
- ・『児童文学と昔話』(2012年)
- ・『震災と語り』(2012年)
- ・『子守唄と民話』(2013年)

・『震災と民話』(2013年発行予定)

このシリーズは全国の公共図書館や大学図書館に置かれ、研究者のみならず、幅広い読者に読まれている。従来の研究と啓蒙という二分法をやめ、第一線の研究がそのまま昔話の普及につながるように意識して編集している。そのために、講演やシンポジウムをそのまま実況中継するように載せて第1部を構成し、関連するエッセイや論考を集めた第2部もデス・マス体で統一した。それによって、平易な言葉で語りかけるような文体で統一し、読みやすい本を作ることができた。

このシリーズの特色の第一には、意識的に女性の協力を得たことがある。岩崎京子・松谷みよ子・あまんきみこ・宮川ひろ・小山内富子・しまなぎさといった児童文学作家が巻頭言を書いている。また、櫻井美紀・野村敬子・荻原真子・馬場英子・西館好子・小野和子といった研究者が講演やシンポジウムを行っている。第2部のエッセイや論考にも女性の執筆者は多く、男性中心に行われてきた研究を根本的に改めたいと考えた。

特色の第二は、日本各地で活動する昔話の語り手を招いて語りを聞いたことである。青森県の成田キヌヨ・対馬てみ、岩手県の高橋貞子、宮城県伊藤正子、山形県の渡部豊子、福島県の横山幸子・五十嵐七重、国際結婚で日本に暮らす韓国の金基英など多くの語り手がフォーラムで語っているほか、東京学芸大学の授業でも語ってもらい、それらを「語りのライブ」として収録した。それによって、従来は余興のような扱いでしかなかった昔話の語りを実践的な研究の中に置くことができた。昔話は研究者のみならず、昔話の継承に力を注ぐ語り手にとっても大事であることが共有されるようになった。

また、2011年3月11日に東日本大震災が起こって、被災地ではこの震災を未来に語り継がねばならないという活動が生まれた。宮城県のやまもと民話の会の『小さな町を呑みこんだ巨大津波』全3巻(2011～12年。2013年に1巻にまとめて復刊)は、自らの体験を書き残しただけでなく、周囲の人々の話を聞いて、自立的な復興への歩みを促した点で貴重である。他にも記録集は生まれているが、それだけではやがて忘却されてしまうので、長く語り継ぐためのシステムを構築する必要がある。『震災と民話』ではその提言を述べている。

こうした語り継ぐことへのこだわりは、被災地に限らず日本各地で生まれている。語り手たちが会を組織して活動を進めているが、会員は女性である場合が多い。その背景には、少子高齢化が進み、各地で過疎化が著しくなる中で、地域を存続しなければならないという危機感がある。観光の場でボランティアで語る場合が多いが、それでは次世代に継承できないこともあり、近年は教育の場で語る場合が増えている。共通語一辺倒ではなく、土地の言葉(方言)を大切にしようという気運と相まって、昔話をめぐる価値観は大きく変わりつつある。

5 国際化時代のための植民地時代研究

日本の昔話研究の歩みを回顧するとき、一国民俗学を提唱した柳田国男はもちろん、昔話の国際的な比較研究を進めた関敬吾にも、腑に落ちない点がいくつかあった。最も重要な疑問点としては、1945年以前の、民俗学と民族学が未分化だった時期の足跡の中に、戦後の研究からは見えなくなってしまった点があった。帝国日本が行った植民地(以下、委任統治領・占領地等を含めてこう呼ぶ)における活動がまったくなかったかのように、戦後の研究は進められてきた。しかし、国際化と情報化が進む時代にあって、植民地時代を検証することなく、今後の研究が展望できるとは考えられない。

1990年代後半から、そうした疑問を抱いて、台湾・朝鮮・南洋群島・満州の昔話資料を捜し求めてゆくと、次々と新たな資料が見つかった。1945年以前を知る研究者はそうした資料が作られたことを知っていたはずなのに、学術的な価値がないという理由を付けて、その存在さえ無視しようとした。その前提には、植民地で行った調査や研究に対する罪悪感もあったのではないかと推測される。しかし、確かな証言を聞くことができないままに、先人たちはみな鬼籍に入ってしまった。

そうした中で、古書店から購入したのが『大正十二年 伝説集』2冊であった。これは今から90年前の1923年、新義州高等普通学校の生徒が夏休みに故郷に帰って聞き集めた昔話や伝説の作文集であった。わずかにハングルが交じるものの、すべて日本語で書かれている。2007年、石井正己は『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究』で影印と翻刻を公開した。これが崔仁鶴の目に止まり、2010年、韓国の民俗苑から石井正己編・崔仁鶴訳『1923年朝鮮説話集』が出版された。そ

の際、この作文を書かせた「寺門先生」は寺門良隆ではないかという推定を、金廣植が職員名簿で実証した。

そうした動きと相前後して、台湾・朝鮮・南洋群島・満州各地の昔話の採集と資料を検証するためのフォーラムを東京学芸大学で開催し、次のような成果を報告書として残してきた。

- ・『台湾昔話の研究と継承—植民地時代からグローバル社会へ—』（2009年）
- ・『韓国と日本をむすぶ昔話—国際化時代の研究と教育を考えるために—』（2010年）
- ・『南洋群島の昔話と教育—植民地時代から国際化社会へ—』（2011年）
- ・『帝国日本の昔話・教育・教科書』（2013年）
- ・『インドの昔話、その歴史と現在』（2014年）

このフォーラムでは、海外の研究者の招聘を地道に進めることを考えた。韓国からは崔仁鶴・全京秀・金容儀・張庚男、インドからはマンジュシュリー・チョーハンの各氏が講演に来てくださり、日本で研究を続ける金廣植がサポートしてくれた。金廣植は2012年に『帝国日本における日本語朝鮮説話集の刊行とその推移に関する研究』で博士号を取得し、近く研究書として公刊されると聞く。

一方、帝国日本はアジア地域への植民（満州は傀儡国家としたので移民と呼ぶ）を進める一方で、アメリカ大陸への移民を送り出すという構造で進めた。国定教科書を編纂しつつ、台湾・朝鮮・南洋群島・満州の各地域でその土地の人々に対する日本語教科書を発行した。一方、ハワイ・北アメリカ・南アメリカのそれぞれでも日系の子弟に向けた日本語教科書を発行した。しかし、それらの教科書は、戦後の国語科教育史ではまったくなかったこととされた。しかし、これらの教科書には、日本の昔話のみならず、各地域の昔話や伝説・神話が教材にされていて、無視することができない。国民国家の精神の涵養に昔話などが大きな役割を果たしてきたことが明らかにされねばならない。

6 おわりに——「アジアから発信する資料と研究」の可能性

これまで柳田国男にしても、一国民俗学は閉鎖的な印象を持って受け止められ、一国民俗学を超えたところに比較民俗学への道が開けるかのように言われてきた。しかし、柳田国男に内在化する海外への持続的な視線は、丁寧に読めばいくらかでも見つけることができる。むしろ、一国民俗学を自ら裏切るかのような論考がいくつもあり、最後の著書とされる『海上の道』（1961年）にしても、そうした視点で考えねば読み解くことができない。そのためには、紋切り型のステレオ・タイプ化した物言いから自由に解放される必要がある。

私自身はあまり賛成していないが、柳田国男以後ということを使うならば、昔話研究の分野でも、次のような比較研究が重ねられてきた。

- ・白田甚五郎・崔仁鶴編『東北アジア民族説話の比較研究』（1980年）
- ・大林太良編者代表『民間説話の研究—日本と世界—』（1987年）
- ・君島久子編『日本民間伝承の源流—日本基層文化の探究—』（1989年）
- ・野村純一・劉守華編『日中昔話伝承の現在』（1996年）

しかし、こうした学術交流は次の世代に継承されず、アジアや世界からの視点が重要であることを意識しつつも、次第に内向きになってしまった。また、この間に日本の出版事情が悪化して、かつてのような論文集は発行しにくくなり、共同研究の発表が難しくなったこともある。個別の論文や著書を見れば、各地域の研究は着実に継続されてきたが、その情報や成果が交流するような状況が作れなくなっている。

今、これまでの研究状況が変わりつつあることは確かである。東アジアで言えば、東京都立大学出身の研究者を母胎にして、大学の枠を超えて会員を広げ、長い間活動を続けてきた中国民話の会が解散した。『中国民話の会通信』第100号（2011年）は、1967～2011年の中国民話の会の足跡をまとめ、『中国民間文学月報』『中国民間文学報』（1971～73年）、『中国民話の会会報』（1974～85年）、『中国民間文学月報』（1986～2011年）の総目次を載せている。この会の解散は、日本における東アジアの昔話研究が大きな曲がり角に来たことを象徴するように感じられる。

その一方で、天理大学と同志社大学の関係者で組織した日韓比較文学研究会が活動を始め、『日

『韓比較文学研究』は第3号（2013年）まで発行されている。まだ活動が広がりを見せているわけではなく、「比較文学」を名乗るとおり、昔話というより説話をはじめとする古典を対象とした研究が中心である。しかし、翻訳資料として『韓国口碑文学大系』の翻訳を継続して掲載しているのは、特筆すべき成果であると言える。第1号（2011年）には1)111-1「解慕漱」～26)211-4「木神の恩返し」、第2号（2011年）には27)212-1「三つ子の丞相」～47)215-9「神勒寺の伝説」、第3号には48)221「龍沈川伝説」～67)232「新郎に化けた白狐」が載っている。『韓国口碑文学大系』は、文献を含めて、昔話や伝説を広く収録しており、調査の状況まで再現していることが広く知られるようになってきたのは貴重である。

思えば、中国・韓国・日本の研究状況には微妙な違いがあるが、同時代を歩んでいる事実は重く、その違いを乗り越えて東アジアの昔話を共同で考えてゆくことは、政治や経済を優先しがちな社会状況にあって、学問の果たすべき役割ではないかと思われる。各国の言語の違いは対話を進める上で壁になることは確かであるが、心ある研究者の交流を進めるためには、通訳や翻訳を仲立ちにすることを恐れてはならない。相互に講演やシンポジウム・研究発表に参加することはもちろんのこと、各国の学会が大会や例会を他国で開催するようにして学術交流の基盤を整備してゆくことが求められる。また、昔話を専門家の独占にせず、民俗学・民族学・国文学・歴史学・教育学・心理学・児童学等の諸学問が交流できる出会いの場にしてゆく必要もある。

ヨーロッパから起こった昔話研究は、確かに先進的であるが、昔話を今もなお大切に継承しつつあるアジアから発信すべきことは少なくない。『日本昔話通観 研究篇』2巻には、「編集趣旨」に言うように、「アジア側からの資料と研究」が意図されていた。ナショナリズムとグローバリズムがせめぎ合う状況にあって、人類史的な研究対象として最も意義を持つと考えられる昔話の再評価が望まれる。海外に向けた研究は英文でなければ評価が得られにくいことも確かであるが、東アジアから世界に向けた発信まで視野に入れた共同研究の体制づくりが急務になっている。

（敬称略。2013年10月11日）

（2013年10月18日、アジア説話学会国際学術大会、韓国・全南大学校）

第2部 植民地日本語(国語)教科書の歴史的研究

趣旨

なぜ植民地教科書を問うのか

石井 正己

植民地研究のフォーラムは、もう5年くらい毎年続けてまいりましたが、だんだんと昔話と教科書が分離してくる形になりました。今日の午前中は「植民地日本語(国語)教科書の歴史的研究」について考えてみたいと思います。

この関心が生まれた発端は、戦後、日本の国語科教育の研究の中で、「国語」と言われている対象の範囲が変わっていることに気がついた点にありました。植民地時代の「国語」は、台湾・樺太・朝鮮を含めた「日本」の「国語」です。しかし、「国語」ではなく、「日本語」であっても、それは南洋群島・満州国、さらにアジアへ広がっていく「大東亜共栄圏」までをも含めた範囲で考えられていました。

けれども、このことは戦後の国語科教育の中からはすっぱり抜け落ちてしまいます。もちろん、過去の傷に触れなくなかったとは思いますが、なかったことにするのはまずいでしょう。戦前の植民地教科書の編纂者の中には、戦後の国語科教育や国語教科書の編纂に関わった者も確かにいるのです。しかし、そうしたことは問題にされないままに、あわただしく戦後の教育は始まりました。

過去の問題には触れずに、そっとしておいた方がいいという認識は、日本の中だけではありません。しかし、これは単なる過去の問題に留まらず、現代の国際化時代を考える上で、私たちがよく認識しておかねばならないことだと考えられます。ささやかであっても、認識を深めながら歩むことは、必ずや未来に向かって意味を持つのではないかという願いを持っています。

昨年(2012)は「インドの昔話、その歴史と現在」、そして、今春(2013)は「帝国日本の教科書」というフォーラムを開きました。今日はお手元に「国語の世界的進出」という資料を印刷しましたので、これに沿って、このフォーラムの趣旨をお話ししてみたいと思います。

これは、国語教育学者の石黒修という人が昭和14年(1939)5月に出した『教育・国語』という雑誌の「別冊附録」です。「国語の世界的進出／海外外地日本語読本の紹介」とある表紙には、重要な意味を持つ世界地図が載っています(次頁参照)。実は赤で塗られているのですが、日本から放射状に線が広がっています。これが「国語の世界的進出」のイメージです。赤で塗られている地域は台湾・樺太・朝鮮半島であり、昭和14年当時の「日本」になります。

南洋群島や満州国が斜線になっているのは、委任統治や傀儡国家という関わりだからで、「日本」の範囲には入りません。しかし、さらにアジアへ広がる線が何本かあります。こうして、「日本」を中心にして、「国語」が海外に進出してゆくことを説いたのです。「日本語」と言わずに「国語」と言うのは、ナショナリズムの思想がそのまま流出していることを示しています。

そして、私自身がこのところ関心を持っていて、今年はハワイに行ってきたのですが、移民の問題があります。植民地ではその土地に住む外国人に日本語を教えたが、移民の場合にはそうで



はありません。日本人が移民で出かけ、そこで日系の2世や3世が生まれ育つと、日本を知らない子供たちになるので、改めて日本語を教えたのです。しかし、こうした日本語教育はアメリカ国民になるということの間に矛盾を生むことになります。

先の世界地図にある「国語の世界的進出」は、そうした移民先にも広がります。従って、もう一つの範囲は、ハワイ、シアトル、ポートランド、そして南アメリカです。日本の移民たちの移動とともに、「国語」も広がっていったのです。

そして、第三の進出とすれば、ヨーロッパに広がってゆく「国語」の世界があって、今日午後に取り上げますニコライ・ネフスキーという人は、ロシアのレニングラード、今のサンクトペテルブルグから日本に留学してきた優秀な学生でした。ですから、単純化すれば、アジア、アメリカ、ヨーロッパというような三層構造で、「国語」は進出していったのです。

実は、「国語の世界的進出」というタイトルは実に微妙で、「日本語の世界的進出」ではありません。つまり、世界の言語の一つである日本語が広がるのではなく、日本という国が国家の言葉と規定した「国語」を世界に輸出するということを意味します。「日本語の世界的進出」であれば、穏やかに受け入れられるかもしれませんが、そうではありません。そこには、国家言語としての日本語を世界に広げてゆくという強烈なイデオロギーがあるのです。

昭和14年というのは、翌年（1940）が皇紀2600年です。神武天皇が即位してから2600年に当たる年ということで、さまざまな行事を計画していました。幻になった東京オリンピック、あるいは、幻になった万国博覧会は、日本が世界にピーアールする機会でしたが、どちらもうまくいきませんでした。やがて昭和39年（1964）に東京オリンピック、昭和45年（1970）に大阪万博が行われて、「幻」が本物になったわけです。

「まへがき」は、「日本語は日本と共に伸びる、日本の日本語は今やアジアの、世界の日本語にならうとしてゐる」と始まります。日本語の世界言語化ということですが、やがて「アジア」は「大東亜共栄圏」に変わってゆきます。そして、「内における国語国字問題を外国語問題として客観的にその立場から再吟味し、国内・国外における日本語諸問題を同時に解決すべき必要があると思ふ」と説きます。この文章では「日本語」と「国語」が微妙に使い分けられていますが、「国語」は国

内の問題だけではなく、海外の問題でもあるとするのです。この時期、2万人くらい日本語を学ぶ人たちが海外に生まれていると言っています。

ちょうど柳田国男が『国語の将来』を著したのが昭和14年であり、金田一京助が『国語の変遷』を出したのは昭和16年（1941）です。さまざまな人たちが「国語」をどうするかということに関心を持っていました。私たちは今の「日本」で「国語」を考えてしまいましたが、一方では、そうではない「日本」における「国語」が間違いなく歴史的には存在したのです。

それにしても、この附録がおもしろいのは、海外の日本語教科書を紹介した点にあります。「海外外地における日本語教科書」には、南洋、ハワイ、ブラジル、関東州、満洲、北支那、満洲北支那、南支那で作られた教科書を解説しています。今、次々と復刻版が出て、こういった植民地や移民地の教科書がずいぶん見られるようになりました。珍しい冊子ですから、その目次を挙げておきましょう。

第一 海外における日本語の発展

第二 日本語海外普及に関する諸問題

日本語の尊重

日本語の問題

日本語の教授

基礎日本語の制定

第三 海外外地における日本語教科書

公学校本科国語読本（南洋庁）

南洋

公学校補習科国語読本（南洋庁）

南洋

日本語読本（布哇教育会）

ハワイ

日本語読本（ブラジル日本人教育会）

ブラジル

初等日本語読本（在満日本教育会教科書編集部）

関東州

国民学校日語国民読本（満洲帝国政府）

満洲

国民学舎国民義塾日語国民読本（満洲帝国政府）

満洲

正則日本語読本（初等教育研究会）

北支那

初級日文模範教科書（北京近代科学図書館編集部）

北支那

高級日文模範教科書（北京近代科学図書館編集部）

北支那

日文補充読本（北京近代科学図書館編集部）

北支那

速成日本語読本（在満洲日本教育会編集部）

北支那

効果的速成の標準日本語読本（満洲文化普及会）

満洲北支那

日語捷徑（台湾総督府文教局学務課）

南支那

日本語読本（台湾総督府文教局学務課）

南支那

こうした教科書は消耗品ですから、多くが捨てられて残りません。この時期ならば集めやすいということもあったと思いますが、これだけの教科書を集めて、海外の日本語教科書を紹介したことは、さまざまな問題を抱えているにしても、改めて考えてみたい事柄です。私がまだほとんど把握できていないのは、北支那・南支那に進出したときの教科書、そしてブラジルの移民の教科書です。

なお、石黒修は、昭和15年8月に『日本語の問題—国語問題と国語政策—』、昭和16年12月に『日本語の世界化—国語の発展と国語政策—』といった本を出しています。日本語の海外進出に関心が深く、それを熱心に進めようとしたことが察せられます。まだ調べることができていませんが、戦後も国語教育政策の中心で活躍しています。こうした国語教育者の戦前から戦後への動きは他にもあり、注意すべき研究課題のように思われます。

私自身はこうした全体的な見取り図を描いていますが、今日は植民地に特化して、若い研究者の3人に、日本が領土を拡大していった台湾、そして朝鮮、さらに満州というアジア地域で、国語・日本語教科書がどのように編纂されたのかを発表していただくことにしました。今、それぞれが熱心にこの問題を研究されていますので、その成果をご報告くださると思います。討論の際には忌憚のないご意見をくださり、将来の研究が進むように助けていただけたら幸いです。

植民地下台湾の三族群の日本語(国語)教科書の比較分析 —分割統治を企図した世界観形成—

日下部 龍太

I はじめに

植民地下台湾の教科書を語る上で注意しなければならないことの一つとして朝鮮総督府や「満州」、さらには南洋庁の事例などとは異なり、台湾総督府は一定の族群ごとに複数の教科書を同時代に使用させていたことが挙げられる。結論から先に述べると、日本は台湾において台湾総督を頂点とした支配階層の「日本人(内地人)」に加えて、三種類の族群の教科書を用意していた。その三種類の族群とは大陸から台湾西部の平地に移住した漢族系住民である「漢人」、居住地域が漢人と近く生活習慣も漢民族に近い(漢化された)原住民である「平埔族」、そして独自の言語や生活習慣を保持した主として東部や山地に住む原住民である「高砂族」である。表1はその族群構成と児童が通う学校の概要である。なお、本論文においては表1に示すように、「日本人(内地人)」、「漢人」、「平埔族」及び「高砂族」を「日本人」と総称、「漢人」、「平埔族」及び「高砂族」を「台湾人」と総称、「平埔族」と「高砂族」を「原住民」と総称している。

表 1. 1922-41 年当時の台湾の族群別学校

総称			族群	学校名	修業年限
日 本 人	台 湾 人	原 住 民	①日本人(内地人)	小学校	6年
			②漢人	公学校	6年
			③平埔族	公学校(旧蕃人公学校)	4年と6年
			④高砂族	蕃童教育所(後に教育所)	4年

(筆者作成)

- ①「日本人(内地人)」(1)…「内地」の尋常小学校と同じ法体系下に置かれた修業年限6年の小学校に通う。
- ②「漢人」(2)…台湾独自の法体系下に置かれた概ね修業年限6年である公学校に通う。
- ③「平埔族(≒平地原住民)」(3)…台湾独自の法体系下に置かれた概ね修業年限4年と6年がある公学校(旧蕃人公学校)に通う。同校は「漢人」の学校と同じ文教局系(日本の文部省に相当)の管轄にある。
- ④「高砂族(≒山地原住民)」(4)…台湾独自の法体系下に置かれた概ね修業年限4年である蕃童教育所(後に教育所)に通う。同校は「漢人」、「平埔族」の学校と異なり警務局系(警察担当の役所)の管轄にある。

支配階層である「日本人(内地人)」の教科書は、国語・修身・地理・歴史などをはじめとして基本的には文部省が同時期に日本本土の児童用に出版した教科書がそのまま台湾でも使用されていた(5)。一方、「台湾人」の教科書は、基本的には台湾総督府が発行した教科書が使用されていた(6)。朝鮮や「満州」においても「日本人(内地人)」の学校は整備され、台湾同様に文部省が発行した教科書を使用していた。すなわち、これは台湾独自の政策ではなく、日本の「植民地」全体における政策である。そのため、本論文においては「漢人」、「平埔族」及び「高砂族」の三族群の「台湾人」教科書の記述差異を比較分析することで、日本が描かせようとした三者の世界観をそれぞれ解

明したい。

II 先行研究と分析対象

1 先行研究

前述の通り、本論文においては「台湾人」を三者として捉え、それを構成する族群である「漢人」、「平埔族」及び「高砂族」の教科書のそれぞれに対して日本が描かせようとした世界観を分析する。しかし、これまでの先行研究において「台湾人」を三者として捉えようとした試みはほとんど確認できず、唯一陳淑瑩（ちんしゅくえい）の研究⁽⁷⁾を確認できるのみである。だが、陳淑瑩の研究は三者の教科書における難易度や語尾などの日本語表現の差異を分析対象とした日本語研究であり、三者に日本が描かせようとした世界観を比較分析したものではない。すなわち、これまでの研究においては「なぜ日本が台湾で三者の教科書を作成したのか」という分析が日本語研究以外の視点からはまったくなされてこなかったのである。事実、これまでの研究は「台湾人＝漢人」または「台湾人＝漢人＋高砂族」と捉える傾向が強かった。例えば、陳培豊は自著において「本論文では（漢人に関連する言及のみを行い）高砂族に関連する言及は割愛した。研究上、不完全であることは自明のことである」と指摘している⁽⁸⁾。つまり、陳培豊は「台湾人＝漢人＋高砂族」が本来の台湾研究のあるべき姿であるという立場に立っているが、実際は「台湾人＝漢人」の視点から研究を行ったわけである。一方、本論文は「平埔族」の位置付け、すなわち「台湾人＝漢人＋平埔族＋高砂族」を主張するものであり、日本が描かせようとした三者の「台湾人」の世界観を解明することを目的とする。なお、本論文においては「世界観」を社会の理解や物事の善悪など児童の世界の捉え方を総称した表現として使用する。

これはすべての教科書研究に該当するが、教科書研究は分析者の教材分類が研究に大きな影響力を持つため、その教材分類の妥当性は常に批判的に再検討できるように提示されるべきである。しかし、教材分類を同じ論文に示すことは紙幅制限で困難であるのも事実である。例えば、陳虹炆による台湾の教科書研究は、これまで分析されてこなかった教科書編修官の加藤春城分析など非常に示唆に富んだものであるが、教材分類の詳細が示されていないため反証が極めて困難であるという課題が存在している⁽⁹⁾。事前にすべての教材分類が明確に示された教科書研究は、管見の限り、少なくとも台湾の教科書研究では確認できない。例外としては、わずかに朝鮮の教科書研究に関して李淑子の研究を確認できるのみである⁽¹⁰⁾。そのため、筆者日下部龍太と渡部竜也は紙幅制限が比較的緩やかな『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』にすべての教材分類を事前に示すこととした。その結果、「筆者が都合の良い教材ばかりを取り上げて恣意的に分析しているのではないか」という批判に対して、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』で教材分類の詳細を確認できる」という反証可能性を確保させた⁽¹¹⁾。本論文は、先行研究が克服できなかった反証可能性の欠如という課題の克服を試みた初めての台湾教科書研究でもある。

2 分析対象

「国語（日本語）」は、日本語を教えることだけを目的に指導されたものではない。本論文においては、1922年の台湾公立公学校規則の第25条において「知徳ヲ啓発シ特ニ国民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」、「其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科、家事ノ他生活上必須ナル事項ニ取り」と定められ、児童の世界観形成の総合教科としての役割を果たした「国語」を対象として行う。その中でも、児童に直接的に強い影響を与えたことが予想される台湾総督府出版の初等「国語」教科書を分析対象とする。本論文における分析対象の教科書を以下に表2として示す。

表2. 本論文における分析対象の「国語」教科書

対象	台湾総督府版教科書名	本論文の略称	出版年	使用年
漢人	『公学校用国語読本』	『漢人国語』	1923-26年	1923-42年
平埔族	『公学校用国語読本第二種』	『平埔国語』	1930-32年	1930-44年
高砂族	『教育所用国語読本』	『高砂国語』	1928年	1928-43年

註）「漢人」と「平埔族」は台湾総督府文教局、「高砂族」の教科書は台湾総督府警務局の出版。（筆者作成）

本論文における分析対象の教科書は、台湾総督府の改訂によって全五期⁽¹²⁾に区分される「漢

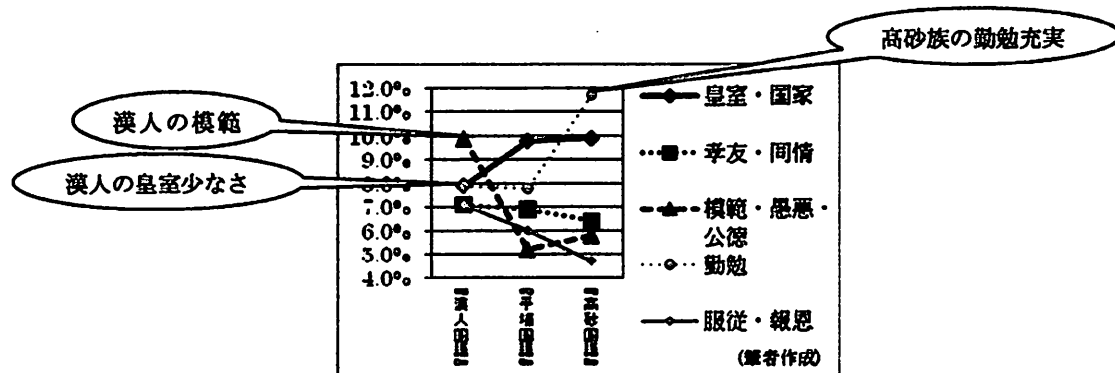
人」の「国語」教科書の第三期（使用1923-42年）を選択している。その理由は、全五期に区分される「漢人」と異なり、「高砂族」専用の「国語」教科書は一度しか出版されなかったため、三者の比較を行うには第三期を選択することが最も妥当と考えられるからである⁽¹³⁾。また、一部において修身・地理・歴史教科書の分析も含めることとするが、「高砂族」に対してはこれらの教科の独自教科書が用意されることは一度もなかった。

Ⅲ 「国語」教科書に描かれた世界観形成の論理

1 「国語」教科書における「道徳教材」

本論文の分析対象である「国語」教科書を台湾総督府の分類⁽¹⁴⁾に従い、一部調整の上で「道徳教材」に焦点を当てて統計化したのが表3である。表3の吹き出しで示したように、表3からは「漢人」の「模範・愚悪・公德」教材及び「高砂族」の「勤勉」教材の充実、さらには「漢人」の「皇室・国家」教材の少なさを読み取ることができる。これらの点に注目した上で、三者各々の教科書研究を以下で行っていきたい。

表3. 三教科書の「道徳教材」の比率表



2 漢人用「国語」教科書に描かれた世界観形成の論理

(1) 漢人用「国語」教科書の概要

漢人用「国語」教科書とは、前述の通り『公学校用国語読本』（全12巻、出版1923-26年、使用1923-42年、以下『漢人国語』）のことである。以下では、表3の特徴に基づいて、「模範・愚悪・公德」に含まれる漢人優越の記載を確認できる教材（以下、漢人優越教材）の分析を行うこととする。

(2) 漢人用「国語」教科書における漢人優越教材

一 「吳鳳」(『漢人国語』巻8第25課)の分析

本教材は、「漢人」の官吏である吳鳳が、自らが原住民の首狩りの犠牲となる道を選ぶことで、それを戒めとして以後の首狩りの「悪習」をやめさせたという逸話に基づく教材である。この「吳鳳」は、『漢人国語』のみに確認できる「漢人」専用の教材であり、児童の人気教材でもある⁽¹⁵⁾。

二 二宮尊徳教材の分析

その他、修身教科書における二宮尊徳が主人公である教材からも漢人の優越を確認できる。「漢人」用の二宮尊徳教材は、村人を指導する尊徳の立場から叙述された教材であり、「尊徳が根気よく親切に導いたから、桜町は盛えた」(「しせい」『公学校修身書』台湾総督府、1929年、巻4第13課)とされている。また、「しせい」に続く同教科書の巻4第14課は、吳鳳を主人公とした原住民指導の教材である「人のためにつくせ」である。一方、「平埔族」用の二宮尊徳教材は、指導される村人の立場から叙述された教材であり、「村人は悪習を改めて一生懸命働いたので暮らしが良くなった」(「わるいしきたりをあらためよ」『公学校修身書第二種』台湾総督府、1931年、巻4第13課)とされている。また、「わるいしきたりをあらためよ」に続く同教科書の巻4第14課は、「近所の人」と

いう親切を奨励する教材である。なお、教材の前後を問わず、「平埔族」用の修身教科書全体においても呉鳳の教材は「国語」教科書同様にまったく確認できない。

三 表3の「勤勉」内における人物教材と出世教材

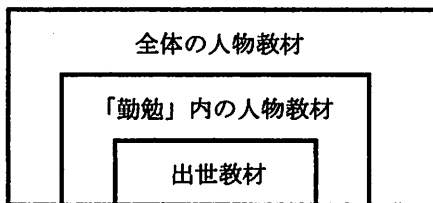
三者の「国語」教科書には、表4に示されていない固有人物を主人公とした教材（以下、人物教材、例、「能久親王」など）が多数存在するが、表3に示された「勤勉」内の人物教材に着目すると、『漢人国語』のみに出世の記載を含んだ人物教材（以下、出世教材）が確認できる。

表 4. 「勤勉」内における人物教材と出世教材 (16)

	『漢人国語』	『平埔国語』	『高砂国語』
「勤勉」内の人物教材 (出世教材)	「新井白石」等 計9(8)課	「井上でん」 計1(0)課	なし 計0(0)課

註) 括弧外の数字は人物教材、括弧内は出世教材の総数である。(筆者作成)

図 1. 人物教材のモデル図



「勤勉」内に登場する人物は、基本的にすべて出世するが、これらの中で唯一の女性主人公である「井上でん」という例外がある。「井上でん」(『漢人国語』巻8第9課及び『平埔国語』巻12第10課)は、井上でんが出世する物語ではなく、地方産業を発展させた物語である。なお、「勤勉」に関する記載以外の人物教材は、軍人や皇族が中心であり、結論が名誉の死やそもそも出世と無関係な人物が主人公である。

四 教科書全体における「漢人」が主人公である教材

人物教材の次に、「漢人」をそのまま主人公としている教材（以下、漢人教材）を分析したい。漢人教材は、表5が示すように『漢人国語』のみに確認できる教材である。なお、これら漢人教材の主人公は前述の呉鳳などのようにすべて優れた人物として描かれている。1936年当時の台湾の人口比は、「漢人」が約89.85%、「平埔族」が約1.07%、「高砂族」が約2.79%と圧倒的に「漢人」が高い(17)。しかし、「平埔族」や「高砂族」には「漢人」を主人公とした優れた「漢人」像が教えられなかったのである。

表 5. 「国語」教科書における漢人教材 (18)

	『漢人国語』	『平埔国語』	『高砂国語』
漢人教材	「呉鳳」、「孔子」等 計6課	なし 計0課	なし 計0課

(筆者作成)

(3) 小括

呉鳳と二宮尊徳の事例からは、「漢人」による野蛮指導、さらには学問を通じた出世の可能を確認できる。総じて、「漢人」は自身が「日本人」同様に優れた存在であると学ぶことで優越感を感じるように教材選択がなされていた。また、「漢人」もこれと同様な考えを持っていたようである。例えば、「漢人」の中でも知識階級に位置付けられる鄭松筠(ていしょういん)弁護士は漢人擁護・原住民蔑視論を雑誌『台湾青年』で述べている。

資料 1. 鄭松筠の漢人擁護・原住民蔑視論

思ふに我が臺灣人は固より、低能のものでは無い、我らの先は已に四千年の前から東洋獨特の文明を形成して、史上燦然として文化の花を開かしめ、寰球上の諸國より文字の國又は禮儀の國として敬服せられて

来たのである。其文字の國の國民たる民族の子孫の一部は我々臺灣人である。故に臺灣人の能力は固より彼の蒙昧野蠻なる生蕃又は歴史史の無い民族とは同日の論では無い。臺灣では内地人が臺灣人を土人と呼び、臺灣人を南洋のニウギニア土人の如く低能野蠻な者と為して居るが、其觀察の非常に皮想である事は敢へて多く辯ずるの價值が無い。我々は前述の如く先の遺傳に由つて優秀な能力を具有する者であるが、教育の普及を缺いたため其能力を發揮せしむる機會が殆ど無かつた。それで折角の偉才も何等の為す處無く平々凡々牛馬と俱に朽ち果てなければならぬ様になつて居る。(原文を一部抜粋)

出典) 鄭松筠「台湾と義務教育」『台湾青年』第2巻第3号、1921年3月、30-31頁。

要約すれば、「我々台湾人(漢人)は生蕃(原住民)と違って歴史も文化も能力も元々持っているが、今までは教育の機会がなかったから能力を發揮できなかっただけなのである」となる。すなわち、日本は「漢人」の意向(原住民より優れていると主張したい)にも沿った上で、台湾総督府の容認のもとに、「漢人」の原住民蔑視を利用することで日本への反発を起こりにくくするという世界観の形成を試みたのである。

3 平埔族用「国語」教科書に描かれた世界観形成の論理

(1) 平埔族用「国語」教科書の概要

平埔族用「国語」教科書とは、『公学校用国語読本第二種』(全12巻、出版1930-32年、使用1930-44年、以下『平埔国語』)のことである。平埔族用「国語」教科書の最大の特徴は、「台湾人」の三教科書の中間的役割であるが、本主張は「高砂族」の教科書に言及した後に再度言及することとする。平埔族用「国語」教科書の考察においては、日本による「高砂族」の世界観形成との対比が可能な根性論を強調している教材(以下、根性強調教材)、及び個人特定が可能な唯一の原住民が主人公である教材(以下、原住民教材)の分析を行うこととする。

(2) 平埔族用「国語」教科書における根性強調教材

最初に、根性強調教材の具体事例を資料2として示したい。

資料2.「何事も精神」(『平埔国語』巻12第13課)

一 軒より落つる雨だれの絶えず休まず打つ時は、石にも穴をうがつなり。我等も人と生れ来て、一たん心定めては、事に動かずさそはれず、勵み進むに何事のなど成らざらん、鐵石の固きもつひにとほすべし。
二 小さき蟻もいそしめば塔をも築き、燕さへ千里の波を渡るなり。ましてや人と生れ来て、一たん目當定めては、わき目もふらず怠らず、ふるひ進むに何事かなど成らざらん、磐石の重きもつひに移すべし。
(全文抜粋)

端的に述べれば、根性強調教材とはすべて「為せば成る」の世界観形成を主張している教材である。そして、その根性強調教材の分布は表6が示すように『平埔国語』に突出している。

表6.「勤勉」内における根性強調教材(19)

	『漢人国語』	『平埔国語』	『高砂国語』
根性強調教材	「ウザギトカメ」 計1課	「何事も精神」等 計6課	「ウザギトカメ」 計1課

(筆者作成)

(3) 平埔族用「国語」教科書における原住民教材

次に、三者の「台湾人」の教科書の中で唯一の原住民教材である「勇敢な通送人」(『平埔国語』巻8第4課)に関して分析を行いたい。本教材は他教材が4頁前後の中で8頁を占めている長編教材であると同時に、関連地図や主人公の墓まで描かれた一大教材であり、その内容は郵便配達の仕事为期日通りに完遂しようとして亡くなった原住民のアイワタンが死後に祀られると要約できる。主人公のアイワタンは、正確には「平埔族」ではなく、「高砂族」であるが、「高砂族」用教科書には同様な顕彰教材を確認できない。これは、「平埔族」に対しては、熱心に仕事に取り組むという根性強調教材に限りなく近い世界観形成の目標があったからであると考えられる。

(4) 小括

「平埔族」の世界観形成の目標は、責任感を持って物事に取り組む熱心な人物であり、忠実な労働力である。

4 高砂族用「国語」教科書に描かれた世界観形成の論理

(1) 高砂族用「国語」教科書の概要

高砂族用「国語」教科書とは、『教育所用国語読本』（全8巻、出版1928年、使用1928-43年、以下『高砂国語』）のことである。高砂族用「国語」教科書は、教科書の難易度が最も低く設定されており、内容面においても最低限の知識に絞った教材が多い。以下では、表3において高砂族用「国語」教科書が高い比率を示した「勤勉」に該当する生活指導の記載を確認できる教材（以下、生活指導教材）、及び平埔族用「国語」教科書との対比で明らかとなる現状の否定に関する記載を確認できる教材（以下、現状否定教材）の分析を行うこととする。

(2) 高砂族用「国語」教科書における生活指導教材

『高砂国語』の生活指導教材は、『高砂国語』のみに確認できる独自の教材ではなく、『漢人国語』（漢人の第三期「国語」教科書）や『平埔国語』（平埔族の第二期「国語」教科書）が教科書改訂されて課数または比率が減少した過程においても残り続けた教材であり、最低限度の教育と考えられる教材である。なお、生活指導教材の具体事例としては、「ヨイ生徒」（巻4第18課）や「田ウエ」（巻4第15課）などの「勤勉」の教材が挙げられる。その他、『高砂国語』は表3の「道徳教材」に含まれない「えい生」（巻6第15課）や「医者」（巻7第4課）などの「身体・衛生」の比率も高い。他人に悪影響を及ぼさない最低限の人物を育成することが高砂族の学習目標であった。

(3) 高砂族用「国語」教科書における現状否定教材

題名・難易度がほとんど同じであるが、族群別の教科書に応じて物語展開が異なる「二匹の山羊」（二匹の山羊、二匹の羊を含む）を資料3-5として提示する。

資料3.『平埔国語』	資料4.『高砂国語』	資料5.『沖縄県用尋常小学読本』
「二匹の山羊」 (巻6第20課、1931年)	「二匹の山羊」 (巻7第13課、1928年)	「二匹の羊」 (巻3第15課、文部省、1898年)
二匹の山羊がある山道で出あひました。道がせまくてどちらへもよけることができません。それに片がは高いがけで、片がは深い谷です。二匹の山羊はしばらく顔を見合せてみましたが、一方の山羊が「仕方がありません。僕がねますから、あなたはしづかにまたいでお通りなさい。」といつて、そこへねました。一方の山羊は「それはどうもすみません。」といひながら、そつとまたぎました。するとねてみた山羊も起き上つて、両方ともぶじに通ることができました。(全文抜粋)	ある時、二匹の山羊がせまい橋の上で出合ひました。一匹の山羊が「わたしの通るじゃまになる、早くのかないか。」といひますと、もう一匹の山羊は、「いや、わたしの方が先にわたりかけたのだ。お前こそそのけ。」といひ返しました。そして両方ともあとへひきません。とうとう角でつきあひましたが、二匹とも川の中へ落ちてしまひました。 (全文抜粋) (20)	或時、二匹の羊がせまい橋の上で出合ひました。そこで、一匹の羊が「おれの行くじやまになる、早くのけ」と、云ひますと、ほかの羊は、「いや、おれの方がさきへわたりかけたのである、おまへこそそのけと云ひまして、りやう方とも、なかなかあとへ、ひきませぬ。とうとう、せまい橋の上で、けんくわを始めまして、たがひに、つので、つきあひましたが、二匹とも、谷川の中へ、ざんぷとおちました。其時ちやうど、羊かひが、とほりかかつて、りやう方とも、すくひあげてやりましたが、若し、この人が、こなかったなら、羊は、二匹とも、おぼれてしまつたのでありませう。(全文抜粋)

『平埔国語』（1931年）の「二匹の山羊」は、一匹の山羊が道を譲ることで、二匹がともに山道を無事通ることができたという「共存」の物語である。『高砂国語』（1928年）の「二匹の山羊」は、二匹の山羊が橋の上で対立し、二匹がともに川に落ちてしまうという「共倒れ」の物語である。また、『沖縄県用尋常小学読本』（1898年）の「二匹の羊」は、二匹の羊が橋の上で対立し、二匹がと

もに川に落ちてしまうが、羊飼いにによって二匹は救われるという「共倒れと救済」の物語である。沖縄の救済は、日本という羊飼いにによる救済を意味しているのであろう。

資料3と資料4は、出版がそれぞれ1931年と1928年であり、ほとんど同時期の出版である。事実上の同一題名の教材が、難易度も異ならず、ほとんど同時期に出版されたにもかかわらず、両者の物語展開は明白に異なっている。また、両教科書の中間の1930年には約140名の「日本人（内地人）」が殺される植民地下台湾における原住民の最大の抗日事件である霧社事件が発生している。このことから、教科書に記載された山羊像が各民族に一定程度投影されたことが予想できる。すなわち、現状肯定の「平埔族」と現状否定の「高砂族」である。その他にも、「蜜蜂」という「二匹の山羊」と同様な改編過程を確認できる教材を確認できる⁽²¹⁾。

(4) 小括

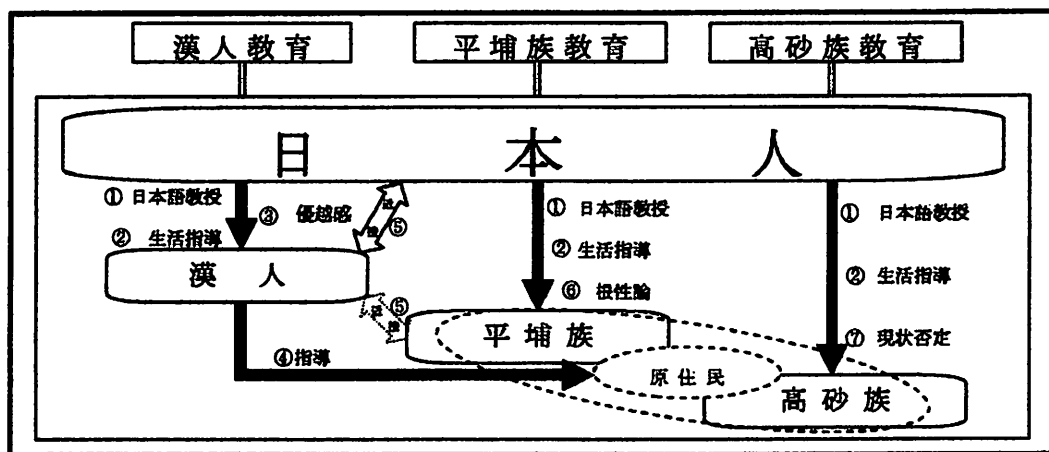
『高砂国語』の中心は生活指導であり、「平埔族」は現状否定される「高砂族」より上位の位置付けがなされている。

Ⅳ 日本統治下台湾の初等教科書に見られる世界観形成の論理

1 「国語」教科書比較のまとめ

三者の「台湾人」の「国語」教科書比較をまとめると、図2のような序列や関係を確認できる。

図2. 日本統治下台湾の初等教科書に見られる世界観形成の論理（筆者作成）



【図2の解説および「国語」教科書比較のまとめ】

- ①本論文で言及はしていないが、「国語」教科書や日本教育の最大目標は「日本語教授」である。なお、「日本語教授」は、日本語の教科書を用いて日本語によって行われる「国語」以外の地理や歴史、さらには授業外活動もその役割を担っている。
- ②本論文で言及はしていないが、「日本語教授」と同様に「生活指導」は日本教育の最大の目標の一つとしてすべての児童を対象に行われる。その中でも『高砂国語』の「勤勉」や「身体・衛生」の分析（本論文33頁の(2)参照）からは、「高砂族」の「生活指導」が最も重視されていたことを指摘できる。
- ③『漢人国語』の「呉鳳」や出世教材や漢人教材の分析（30頁の(2)）からは、「漢人」の「優越感」の育成を指摘できる。また、これは漢人擁護・原住民蔑視という「漢人」内部（31頁の(3)）の論調も反映していた。
- ④『漢人国語』の「呉鳳」や修身教科書の二宮尊徳の分析（30頁の(2)）からは、「漢人」による原住民の「指導」を指摘できる。
- ⑤「漢人」から「日本人」と「平埔族」の両者に伸びる「近接」は、後述の地理・歴史教科書の分析から述べられる。また、「漢人」と「平埔族」の「近接」が点線である理由は、「平埔族」の一

部のみにしか教授されない地理や歴史を表している。なお、「平埔族」と「日本人」を直接結ぶ「近接」が存在しない理由は、「平埔族」として「近接」ではなく、「漢人」経由によってのみ平埔族は日本人と「近接」が可能であることを示すためである(22)。

⑥「何事も精神」やアウイワタンの分析(32頁の(2)と(3))からは、「平埔族」の「根性論」を指摘できる。

⑦「二匹の山羊」の改編過程(33頁の(3))からは、「高砂族」の「現状否定」を指摘できる。

図2からは、「漢人」・「平埔族」・「高砂族」の全三者が第二位の地位を日本から保証されていたことが指摘できる。「漢人」には下位(第三位)に原住民が位置づけられるが、「平埔族」や「高砂族」に対しては「呉鳳」や漢人教材などを学ばせず、「漢人」以下(第三位)であるとの世界観形成は行われなかった。

2 地理教科書の「漢人」分析及び「平埔族」との世界観形成比較

地理は五・六年生の用科目であり、表1に示したように4年制を基本とする「高砂族」が学ぶことはない。「漢人」用の『公学校地理書』(台湾総督府、全2巻、出版1931年、使用1931-41年、以下『漢人地理』)は、台湾に関する記載が若干充実しているという点を除けば、「日本人(内地人)」用の『尋常小学地理書児童用』(文部省、全2巻、出版1925年、使用1925-29年)や『尋常小学地理書』(文部省、全2巻、出版1929-30年、使用1929-38年)と同様に「日本人(内地人)」との知識共有が目指されている。なお、「漢人」用と「日本人(内地人)」用に大きな差は確認できない。

『漢人地理』を「平埔族」用の『公学校地理書第二種』(台湾総督府、全2巻、出版1933年、使用1933-43年、以下『平埔地理』)と比較すると、台湾地理の項目設定に差異が確認できる。『漢人地理』は「台北州」、「新竹州」、「台中州」、「台南州」など地名によって台湾地理の項目が分類されるが、『平埔地理』においては「区域」、「地勢」、「産業」、「交通」など産業構造によって台湾地理の項目が分類される。すなわち、『漢人地理』では「地誌学習」が採用されているのに対して、『平埔地理』では産業構造学習を基幹とした「系統地理学習」が採用されている。このことから、台湾の地理学習が「平埔族」よりも「漢人」で重視されていたことが指摘できる。日本は「漢人」に対して台湾や「台湾人」を学ばせたが、「平埔族」に対しては台湾学習に一步引いた形をとることで日本や日本人をより多く学ばせようとしたのである。これは、図2の論理とも完全に合致する。

3 歴史教科書の漢人分析及び平埔族との世界観形成比較

歴史は五・六年生用の科目であり、表1に示したように4年制を基本とする「高砂族」が学ぶことはない。「漢人」用の『公学校用日本歴史』(台湾総督府、全2巻、出版1923年、使用1923-38年、以下『漢人歴史』)は、「日本人(内地人)」用の『尋常小学国史』(文部省、全2巻、出版1920-21年、使用1920-34年)や『尋常小学国史』(文部省、全2巻、出版1934-35年、使用1934-40年)とほとんど同じ内容であるが、『漢人歴史』では台湾史の記載が二つだけ独自の教材として確認できる。以下では、その二つの教材である「徳川家光」の章の「台湾の歴史」という項目及び「征台の役と西南の役」に関して分析を行いたい。

資料6.「台湾の歴史」(『漢人歴史』下巻、31-32頁)

我が國人が海外へ出かけ始めたのは、鎌倉時代の末から室町時代にかけての頃で、臺灣の歴史がかすかに分るのも、同じ頃からです。もと臺灣に住つてゐたのは蕃人ばかりでしたが、此の時代から我が國人がだんだん来るやうになり、同時に明の方からも来るものがありました。けれども秀吉が使を出した頃は、この島のことはまだよく世に知られてゐませんでした。將軍秀忠の時代になつて、オランダ人は安平・臺南地方を占領し、つづいてイスパニヤ人は基隆・淡水地方を占領しました。山田長政が暹羅へ行つて巧名を立てたり、濱田彌兵衛が臺灣へ来てオランダ人を懲らしたりしたのは、此の頃のことです。間もなくオランダ人はイスパニヤ人を追い拂つて、前後約四十年の間此の島を治めてゐましたが、後に鄭成功に追はれてしまひました。鄭氏は三代二十餘年で清に亡されそれから二百餘年間、清が此の島を支配してゐました。(全文抜粋)

資料6の下線の「かすかに分る」や「世に知られてゐませんでした」は、日本側から見た判断で

あり、日本側の解釈を教えている。また、資料6の二重線部において日本人である浜田弥兵衛の行動に「オランダ人を懲らした」という価値付けがなされている。なお、点線を記した山田長政と浜田弥兵衛及び鄭成功は「国語」教科書における頻出人物であり、このことは歴史と国語の関連の強さを示している。

資料7.「征台の役と西南の役」(『漢人歴史』下巻、85-87頁)

明治四年我が國人六十九名が暴風に吹き流されて、臺灣の恒春半島に上陸しましたが、其の中の五十四名は牡丹蕃人に殺されました。ところが其の頃臺灣は、清國の領地であつたにも拘らず、蕃人は化外の民であるからといつて、清國は我が被害に對して、少しも責任を負ひませんでした。そこで明治七年陸軍中將西郷従道は、我が征臺軍を引きつれて、車城附近に上陸し、石門の險を破つて、牡丹をはじめあまたの蕃を征服しました。清國は之を聞いて俄に異議を申し立て、種々談判の末、清國から償金五十萬兩を出すといふ條件で局を結びました。(一部抜粋)

資料7においては、「征台の役」が「蕃人(原住民)」にその事件の原因があること、および清の対応が台湾軽視であったことの二点を強調している。「漢人」を責めることはせず、一方で清を断罪している。

『漢人歴史』を「平埔族」用の『公学校日本歴史第二種』(台湾総督府、全2巻、出版1933-34年、使用1933-43年、以下『平埔歴史』)と比較すると、①『漢人歴史』に比して記載が簡略化されていること、②歴史の「知識」よりも歴史を学ぶ「意義」が重視されていること⁽²³⁾、③伊藤博文暗殺⁽²⁴⁾など紛争の記載を隠す傾向があること、④鄭成功(漢人教材)や征台の役(原住民侮辱)など原住民用の国語教科書で確認できない記載が確認できること、の4点が特徴として挙げられる。「漢人」と「平埔族」の地理教科書比較からは、「平埔族」の台湾の地理学習の重要性が相対的に低く設定されることを述べた。しかし、歴史教科書比較においては難易度の問題(上記の①)及び歴史授業の価値の明確化(上記の②と③)など図2に矛盾しない比較的想像が容易な差異以外に、「漢人」教材や原住民侮辱といった図2の「平埔族」に悪影響を及ぼしかねない教材(上記の④)まで確認できる。しかし、歴史授業の対象は、図2の「平埔族」の中でも「漢人」に「近接」している層(6年制学校の児童、6年制学校は概ね4年制学校より開発・漢化・日本化された場所に多い)に限定されていた。また、漢人教材である鄭成功も「国語」教科書とは異なり、優れた理想的人物として描かれているわけではなく、台湾史における重要人物の一人として紹介されているに過ぎない。さらには、『漢人歴史』では征台の役が「牡丹をはじめあまたの蕃を征服しました」(『漢人歴史』下巻、86頁)とのみ表現されているのに対して、『平埔歴史』では上記と同様の記載に加えて「わるい蕃人をおうたせになりました」(『平埔歴史』下巻、60頁)との一文が追加される配慮を確認できる。これは、琉球民を殺したのは「わるい蕃人(=高砂族)」であって、「平埔族」のあなたたちではないということを強調しているとの理解ができる。すなわち、「漢人」と「平埔族」の歴史教科書比較においても、概ね図2には反しない結果を得ることができる。

地理と歴史の分析からは、両科目が『「漢人」>「平埔族」>「高砂族」』という日本人の知識に近付ける特権科目としての位置付けであったこと、及び地理・歴史認識共有に基づく図2の「近接」を目指していたことが指摘できる。なお、図2に示す二つの「近接」は、「漢人」は「日本人」、「平埔族」は「漢人」に対して一方的に相互が「近接」しているのだという親近感を抱くのであって、その反対は成立しない。

V おわりに

教科書編纂の権限を掌握する日本は、表立って「台湾人」の善悪を論じることはせず、子どもや教師が察知できない状況下で、三族群それぞれの世界観形成を試みていた。日本統治下台湾の初等教科書に見られる世界観形成の最大の特徴は、日本による情報の独占であり、支配に与える悪影響を懸念して表立った優劣の言及は避けたと考えられる。日本統治下台湾の世界観形成の論理とは、誰からも反発が起きないように日本が意図的に作り上げた論理であり、「国語」を中心とした教科書に具現していた。

【註】

- (1) 台湾に居住する「内地（日本本土）」出身の人々。
- (2) 本論文における「漢人」とは、公学校入学資格に第一義的に該当する福建系・客家などの日本国籍の台湾居住漢人のことである。
- (3) 1935年12月25日の訓令第34号「台湾総督府報告例」改正をもって、従来の呼称である「熟蕃」が「平埔族」に変更された。史実に忠実に従えば、同改正以前は「熟蕃」と記載すべきであるが、「蕃」の差別性の問題から「平埔族」を統一呼称として使用した。なお、「平埔族」は正確には平地に住む原住民ではなく、一般行政地域（漢人居住地域）に住む原住民のことである。ただし、本論文においては民族学的には「高砂族」に含まれても、その族群が漢化されているなど「平埔族」に近いと判断される場合は「平埔族」に含めている。実質的には、公学校に通学するか（平埔族）、教育所に通学するか（高砂族）で区分している。
- (4) 註2と同じ理由で、同改正以前の「生蕃」ではなく、「高砂族」を使用した。なお、「高砂族」は正確には山地に住む原住民ではなく、「蕃地」（非漢人居住地域）に住む原住民のことである。
- (5) 『台湾教育沿革誌』（台湾教育会、1939年、429頁）。ただし、理科や商業・農業などは台湾総督府が発行した教科書をそのまま「日本人（内地人）」に使用した時期もある。
- (6) 『同書』（386頁）。ただし、1927年度以降は算術など文部省が発行した教科書をそのまま「台湾人」に対して使用した時期もある。
- (7) 陳淑瑩『高砂族児童用国語読本の研究—『蕃人読本』、『教育所用国語読本』、『公学校用国語読本第二種』を中心に—』『久留米大学大学院比較文化研究論集』13号（2003年2月、105-123頁）など。
- (8) 『同化の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社、2001年、311頁。
- (9) 陳虹彪「日本統治下台湾における初等学校国語教科書の考察—1937年以降台湾人生徒用国語教科書に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集第1号、2005年12月、69頁。
- (10) 李淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本—朝鮮における初等教科書の推移（1895-1979）—』ほるぷ出版、1985年。
- (11) 日下部龍太・渡部竜也「台湾総督府初等教育年間国語教科書の内容分類データ（一）—漢人及び原住民教科書の場合—」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』第62集、2011年1月。
- (12) 第一期（1901-14年使用）、第二期（1913-27年使用）、第三期（1923-42年）、第四期（1937-44年使用）、及び第五期（1942-45年使用）に区分される。なお、最後の第五期は三者の教科書が統一されており、嚴格には「漢人」専用教科書ではない。
- (13) なお、「平埔族」専用の教科書としては、第一期（1915-22年使用）と本論文で分析した第二期（1930-44年使用）がある。
- (14) 『蕃人読本編纂趣意書』（台湾総督府、1916年、26-27頁）に記載された分類であり、教材を全17に分類している。その中でも、「皇室・国家」、「孝友・同情」、「信義・廉恥」、「勤勉」、「服従・報恩」、「公德・其ノ他」の6つは、「道徳」に分類されている。本論文では、これら6つの分類を再構成した上で、世界観形成の論理解明の視点から「道徳教材」を中心に考察した。分類の詳細に関しては、参考文献の日下部・渡部（2011）を参照。
- (15) 吳鳳の考察は、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年、166-189頁）に詳しい。
- (16) 出世教材に該当する『漢人国語』全8教材を示せば、「ヲノノタウフウ」（巻3第9課）、「カシコイ子ドモ」（巻4第5課）、「新井白石」（巻8第9課）、「塙保己一」（巻8第18課）、「石田梅巖」（巻9第11課）、「円山応挙（一）」（巻11第16課）、「円山応挙（二）」（巻11第17課）、「チャールズ、ダーウィン」（巻12第3課）である。
- (17) 『台湾省五十一年来統計提要』（台湾省行政長官公署統計室、1946年、90-93頁）を参考として、筆者が比率を算出した。なお、日本人（内地人）は約5.17%であり、中国国籍の漢人、朝鮮人、欧米人が次ぐ。
- (18) 漢人教材に該当する『漢人国語』の全6教材を示せば、「カシコイ子ドモ」（巻4第5課）、「吳鳳」（巻8第25課）、「鄭成功」（巻9第23課）、「四知の訓」（巻11第13課）、「孔子」（巻11第26課）、「諸葛孔明」（巻12第19課）である。なお、「阿仁ノシンセツ」（巻6第4課）など個人の特定が不可能な漢人教材は除外した。
- (19) 根性強調教材に該当する『平埔国語』の全6教材を示せば、「ウサギトカメ」（巻2第22課）、「ヨクハタラク人」（巻4第19課）、「錆びない鍬」（巻8第14課）、「ひよどりごえ」（巻10第3課）、「坂に車」（巻11第22課）、「何事も精神」（巻12第13課）である。また、「勤勉」内における根性強調教材と記載しているが、『平埔国語』においては「勤勉」以外でも根性強調教材を確認できる。『平埔国語』以外では、『漢人国語』（漢人用国語教科書全五期の第三期）の後継である戦時期の第五期に「三勇士」（爆弾三勇士の逸話）など戦争関連の根性強調教材が登場する。しかし、戦争と勉強や仕事に対する根性強調は意味合いが異なろう。

- (20) 正確には「たとへ話（一）二匹の山羊」である。
- (21) 日本人用の「蜜蜂」（『尋常小学読本』巻11第2課、文部省、1910年）、漢人用の「みつばち」（『台湾適用国語読本初歩』上巻第9-10課、台湾總督府民政局学務部、1896年）、平埔族用の「私は蜜蜂です」（『平埔国語』巻11第11課）、沖縄県民用の「蜜蜂」（『沖縄国語』巻7第6課）を比較しても同様な改編過程を確認できる。これらの「蜜蜂」教材の分析結果は、日本人が「共同生活のため労働を尊重し、武器を備えて敵に当たり、団体のために身命を尽くす」であり、漢人は「働かなければ追い出されるが、皆が勤勉なのは感心である」である。さらに、平埔族は「一生懸命働くから私どもに目をかけて下さい」であり、沖縄県民は「よく働くが、働かなければ追い出されたり、殺されたりする」である。
- (22) その他としては、日本人（内地人）と漢人（台湾人）の「内台共学」（1922年）によって小学校への漢人の入学及び公学校への日本人の入学が制度上可能になったという「近接」も述べられる。また、同様に漢人と平埔族の間でも、蕃人公学校の公学校への統一（1922年）やそれに伴う両学校制度の統一が行われた。しかし、漢人児童の小学校入学や平埔族児童の旧漢人主体の公学校への入学の事例はほとんど確認できない。
- (23) 具体事例を示せば、例えば豊臣秀吉の朝鮮侵略における明使来訪を、『漢人歴史』では「日本國王にするといふ文句がありましたので、秀吉は大層おこって」（『漢人歴史』下巻、16頁）と表現しているが、『平埔歴史』では「日本の國には天皇のいらつしやることを知らないか。ぶれいなことをいふな」（『平埔歴史』上巻、103頁）とより理解しやすい表現に改めている。
- (24) 「韓国併合」（『漢人歴史』下巻、113-116頁）を参照。

本論文は、日下部龍太「日本統治下台湾の初等教科書に見られる社会観形成の論理一分割支配を企図した民族別教科書の記述差異に着目して―」（『社会科研究』第74号、2011年3月、全国社会科教育学会）を参考としながら、本フォーラムのために改編を経た上で作成したものである。

朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』研究の成果と課題

金 廣植

はじめに

朝鮮総督府学務局編輯課は、朝鮮統治期間中に数多くの教科書刊行に直接・間接的に関わった。教科書編纂の主体によって、朝鮮総督府（以下、総督府と略記）が自ら編纂、または検定・認可した教科書が次々と出されたが、従来の研究は、学務局が自ら編纂した教科書（特に初等教育機関に該当する普通学校用教科書）の内容とその性格に関するものが中心となっている。今後は総督府が刊行した6年制⁽¹⁾普通学校用教科書のみならず、2年制・4年制、中等教育、実業学校・師範学校用の教科書への研究範囲の拡大と共に、総督府編纂教科書のみならず、検定・認可教科書の刊行過程を含めた総体的な研究が求められる。本稿では、先行研究の成果と課題を扱うということもあり、先行研究における主な分析対象である、6年制の総督府編纂教科書の研究を主たる分析対象とする。また、最近の研究動向を紹介することで、日韓の比較および共同研究における参照資料になれば幸いである。

朝鮮総督府編纂教科書といっても、著作者を基準として四つの編纂方式に分けられる。張信は次のようにまとめている。

一つ目は、総督府編修官と編修書記が直接執筆したものである。文部省教科書を参照できない『普通学校朝鮮語読本』が代表的なものである。また芦田恵之助が主導した第2期の『普通学校国語読本』（巻1～巻8）なども編輯課が編纂した。

二つ目は、文部省の著作を朝鮮総督府編纂として発行したものである。第2期『普通学校国語読本』（巻9～巻12）をはじめ、主に第3次教育令に伴う第4期以降の教科書がそれに当たる。算術のような朝鮮の特殊性を反映しなくてもいい教科が含まれた。

三つ目は、文部省の教科書を底本にして、植民地状況を考慮し、一部朝鮮的特徴を加えた教科書である。第2期の『普通学校国史』、地理、農業などの教科書などである。

四つ目は、はじめから外部学者に執筆を依頼するケース、個人または団体が執筆した教科書を総督府の名義で発行した教科書である。第3期の総督府の地理は地誌学者の田中啓爾、歴史は中村孝也が執筆した⁽²⁾。

このように、総督府編纂教科書といっても多様な方式が存在しており、その異同を考慮した分析が求められる。なお、本稿では植民地期朝鮮における日本語教科書『普通学校国語読本』（以下、『国語』と略記）を主たる分析対象としているが、『国語』は、特に『普通学校朝鮮語読本』（以下、『朝鮮語』と略記）、『普通学校国史』（以下、『国史』と略記）などと深く関わって編纂され、相互補完的な役割を果たしたことに留意して分析したい。「韓国併合」後、日本語教科書は『日語読本』から『国語読本』へと支配の道具となったことにも留意しなければならない。その反面、「韓国併合」により『国語読本』から『朝鮮語読本』に換えさせられた朝鮮語の地位と比重は、日本語授業の半分以上に縮小され、第3次教育令以降は随意科目となり、第5期は編纂されていない。総督府が編纂した初等教育用「国語」・朝鮮語・歴史教科書の編纂とその担当者をまとめたのが、表1である。

表1. 朝鮮人児童用教科書編修担当者⁽³⁾

時期	1期 (1912-21) 4年制	2期 (1922-24) 6年制	3期 (1928-35) 6・4年制	4期 (1935-41) 6・4・2年制	5期 (1942-44) 6年制
国語	全8巻 (1912-15) 1918訂正再版 <u>立柄教俊編修官</u> (1911-22) 山口喜一郎 (1911-13) 大内猪之介 (1913-25)	全8巻 (1923-24) <u>芦田憲之助編修官</u> (1921-24) <u>近藤時司編修官</u> (1923-24) 水山祐定 (1922-23) 麻生磯次 (1920-24) 山口喜一郎 (1921-25) 磯部百三 (1918-23)	六年制全12巻 (1930-35) 四年制巻5-8 (1933-34) <u>稲垣茂一編修官</u> (1928-35) 森田梧郎 (1931-45) 石橋一郎 (1930-36)	二年制全4巻 (1935-36) 二年制改正版巻3-4 (1940) 六年制・四年制改訂 (1937) 六年制全6巻 (1939-41) <u>森田梧郎編修官</u> (1931-45) 廣瀬統 (1935-45) 石橋一郎 (1930-36)	六年制全12巻 (1942-44) <u>森田梧郎編修官</u> (1931-45) 富山民藏編修官 (1942-44) 廣瀬統編修官 (1935-45) 大槻芳廣 (1941-45) 鈴木隆盛 (1942-?)
朝鮮語	全6巻 (1915-21) <u>小倉進平</u> (1911-25) 金公植 (1911-21)	全6巻 (1923-24) <u>小倉進平編修官</u> (1911-26) 李能和編修官 (1922-31) 玄 編修官 (1921-31) 田島泰秀 (1921-34) 李源圭 (1923-29)	六年制全6巻 (1930-35) 四年制巻3-4 (1933-34) 李能和編修官 (1921-31) 玄 編修官 (1921-31) 朴永斌編修官 (1932-36) 田島泰秀 (1921-34) 李源圭 (1923-29) 安龍伯 (1930-39)	二年制全2巻 (1935-36) 二年制改訂版 (1936、38) 六年制・四年制改訂 (1937) 六年制全2巻 (1939-40) 李能和編修官 (1936-39) 朴永斌編修官 (1932-36) 安龍伯 (1930-39)	編纂なし
国史	編纂なし 小田省吾 (1910-24) 上田駿一郎 (1910-21) 高木善人 (1910-13) 中村一衛 (1911-18)	全2巻 (1922-24、1927改訂) <u>小田省吾編輯課長</u> (1910-24) 江頭六郎編修官 (1922-24)	全2巻 (1932-33) 木藤重徳編修官 (1932-33) 金昌鈞 (1930-42) <u>中村孝也</u>	全2巻 (1937-38、1939年改訂) 四年制全2巻 (1938、1939改訂) 六年制全2巻 (1940-41) <u>中村栄孝編修官</u> (1935-45) 金昌鈞編修官 (1937-42)	改訂版 (1942) 全2巻 (1944) <u>中村栄孝編修官</u> (1937-45) 金子昌鈞編修官 (1937-42)

1 植民地期「朝鮮読本」研究の現状

以下では、主に朝鮮語と日本語教科書を含む「朝鮮読本」の近年の研究動向を取り上げ、日本に比べて、盛んに研究されている韓国の研究状況とその課題を具体的に検討し、今後の展望を提示したい。近年、韓国では「朝鮮読本」のみならず、唱歌をはじめ各教科の研究が進められている。その中で修身、歴史地理などに関する研究も盛んであるが、個別の教科に限定した専門領域での研究が量産されている。筆者はこれらの研究成果を踏まえた総督府教科書の関わり（教科、領域、テ-

マなど)、文部省教科書をふくめた他の「外地」教科書との比較が必要であると考えている。本稿では紙面の都合もあり、数多くの研究が存在する修身、歴史地理を除外し、「朝鮮読本」を中心として取り上げ、『国語』研究の現況を考察したい(4)。

まず、資料1と資料2は、日韓における朝鮮近代教科書に関する2012年以降の論文と、近年の単行本の目録である。

※資料1. 韓国で発表された近年の朝鮮教科書研究(修身、歴史地理、理科は除外)※

【論文】

- 金廣植「朝鮮総督府編纂日本語教科書『国語読本』における朝鮮説話収録過程の考察」『淵民学志』第18輯、淵民学会、2012年8月。
- 金廣植「日本文部省と朝鮮総督府学務局の口碑文学調査とその活用：1910年代、1920年代編輯課関係者の経歴を中心に」『淵民学志』第20輯、2013年8月。
- 金廣植・李市垞「中村亮平と『朝鮮童話集』考察：先行説話集の影響を中心に」『日本語文学』第57輯、韓国日本語文学会、2013年6月。
- 金廣植・李市垞「在朝日本人児童用『尋常小学校補充教本』の内容とその性格」『日本言語文化』第24輯、韓国日本言語文化学会、2013年4月。
- 金瑞恩・金順楨「『普通学校国語読本』を通してみた時期別実業教育様相」『日語日文学』53、2012年。
- 金瑞恩・金順楨「日帝の植民支配の為の大衆芸術と唱歌教育」『日本語文学』59、2013年。
- 金주연「日帝強占期 初等学校唱歌に投影された植民地教育」『日本研究』18、2012. 8。
- 金찬기「近代初期国語教科書と啓蒙の言語」『民族文化研究』58、2013年。
- 金혜련「国定国語教科書の政治学：『普通学校学徒用 国語読本』(学部編纂、1907)を中心に」『洋語文研究』35、2013年。
- 朴京洙「朝鮮総督府の初等学校音楽と軍歌の影響関係考察」『日本語文学』58、2012年。
- 朴京洙「日帝強占期 初等学校唱歌と儀式の相関性」『日本語文学』56、2013年。
- 朴京洙・金順楨「帝国の膨張欲求と防御の弁証法：強占初期<日本語教科書>の戦争叙事を中心に」『日本研究』53、2012年。
- 朴명선・許在寧「習字・書法教育の通時的研究：国語科と美術科の関連性を中心に」『書芸学研究』23、2013年。
- 朴승배「甲午改革期学部編纂教科書編纂者が活用した文献考証2：国民小学読本と新訂尋常小学を中心に」『教育課程研究』31-3、2013年。(「甲午改革期 教科書に現れた教育課程学的理念研究：『小学』教科書を中心に」『教育課程研究』29-3、2011年)
- 朴英淑「朝鮮総督府編纂『訂正普通学校学徒用国語読本』の分析：『日語読本』との漢字比較を中心に」『日本文化研究』46、2013年。
- 朴英淑「統監府時代における教育政策と『日語読本』の分析」『日本文化研究』41、2012年。(日本語)
- 朴치범「学部発刊『普通学校用国語読本』(1907)研究：『教科書の位相』による特徴を中心に」『国際語文』58、2013. 8。
- 史希英「1940年代初等教科書の植民地教育 連係性考察：朝鮮総督府編纂<国語>・<修身>・<音楽>を中心に」『日本語教育』62、2012. 12。
- 史希英「複合的教育メディア資料『地理教育 鉄道唱歌』」『日本語文学』57、2013年。
- 史希英・金順楨「国語としての近代日本語教育考察：朝鮮総督府第I期『普通学校 国語読本』を中心に」『日本語文学』52、2012. 3。
- 史希英・金順楨「戦意鼓吹の為の植民地末期音楽教育」『日本語文学』56、2013年。
- 宋명진「開化期読本と近代叙事の形成」『国語国文学』160、2012年。
- 尹錦仙「初等国語教科書の劇文学關聯題材 研究」『語文研究』41-2、2013年。
- 柳徹・金順楨「日帝強占期『国語読本』に投影された軍事教育」『日本語文学』56、2012年。
- 柳徹「日帝強占期日本語教科書に現れた天皇像：朝鮮総督府編纂『国語読本』を中心に」『日本語文学』54、2012年。
- 柳徹「日帝末期軍国主義教化に利用された読本唱歌」『日本語文学』59、2013年。

- 李동배 「1913-1938年 国語教科書に現れた日帝理念の批評的分析」『漢語文教育』27、2012年。
- 李상혁 「『普通学校朝鮮語及漢文読本』(1915)巻1と<諺文綴字法>(1912)：朝鮮語学習方針と規範統制を中心に」『우리語文研究』46、2013年。
- 任순영 「『中等教育朝鮮語及漢文読本』を通してみた植民地教科書の裏面探索」『国語教育』143、2013年。
- 張味京 「韓・日・臺灣の日本語教科書<読本>の‘童話’に表象された児童像 比較」『日本研究』53、2012年。
- 張味京 「日帝強占期 初等‘修身書’と‘唱歌書’に叙事された性像」『日語日文学』59、2013年。
- 張味京・金順楨 「日帝強占期<唱歌書>に表象された朝鮮と日本」『日本語文学』58、2013年。
- 張味京・金順楨 「日帝強占期‘日本語教科書’Ⅰ期・Ⅳ期に現れた童話の変容」『日本語文学』52、2012年。
- 張味京・金順楨 「3・1運動以後 日帝の文化政策：『普通学校唱歌書』と『普通学校補充唱歌集』を中心に」『日本語文学』57、2013年。
- 張庚男 「日帝強占期 朝鮮語科教科書に収録された古典文学」『우리文学研究』39、2013年。

【単行本及び覆刻・翻訳本】

- ①金順楨・朴濟洪・張味京・朴京洙・史希英・金瑞恩・柳徹『（日帝強占期 日本語教科書『国語読本』を通してみた）植民地朝鮮づくり』J&C、2012年。
- ②林慶花「歌で習う‘国語’：植民地期朝鮮における唱歌と言語教育」(高영진他『植民地時期前後の言語問題』召命出版、2012年)。
- ③徐기재「文化政治期 教科書唱歌考察：近代児童の歌と詩」(朴중명他『文学 民族 国家 在日 文学と帝国の間』只今여기、2012年)。
- ④許在寧『近代啓蒙期の教育学研究と教科書』知識斗教養、2012年。
- ⑤許在寧『国語科教材理解と教科書の歴史』경진、2013年。
- ⑥유용태 「『朝鮮語読本』文学テキストのイデオロギーと美意識研究」(檀国大学校東洋学研究院編『開化期から日帝強占期まで近代制度と日常生活』채륜、2012年)。
- ⑦任상석 「朝鮮総督府中等教育用 朝鮮語及漢文読本の朝鮮語認識：『新編高等朝鮮語及漢文読本』の翻訳と文体を中心に」(釜山大学校人文韓国古典翻訳比較文学 研究団『文化疎通と翻訳』宝庫社、2013年)。
- ⑧金順楨他『初等学校<唱歌>教科書 対照翻訳』上中下、J&C、2013年。
- ⑨金順楨・朴濟洪・張味京・朴京洙・史希英編『（朝鮮総督府編纂）初等国語読本 原文』上中下、J&C、2013年。
- ⑩金順楨他編『普通学校国語読本 原文 朝鮮総督府第1期』上下、J&C、2011年。
- ⑪金예린 『（普通学校学徒用）国語読本』上下、경진、2012年。
- ⑫李市垞・張庚男・金廣植編『朝鮮総督府学務局調査報告書 伝説童話調査事項』J&C、1913年復刻版、2012年。
- ⑬閔丙燦『日本人の国語認識と神代文字』J&C、2012年。
- ⑭李중국 『韓国の教科書評説』일진사、2013年。
- ⑮金예린 『日帝強占期 朝鮮語科教科書と朝鮮人』亦樂、2011年。
- ⑯姜珍浩他『‘朝鮮語読本’と国語文化』J&C、2011年。
- ⑰金容儀『흑부리 영감과 내선일체（瘡つき老人と内鮮一体）』全南大学校出版部、2011年。
- ⑱姜珍浩・許在寧編『朝鮮語読本』全5巻、J&C、2010年。

※資料2. 日本で発表された近年の朝鮮教科書研究（修身、歴史地理、理科は除外）※

【論文】

- ①酒井恵美子「台湾・朝鮮植民地国語教科書の比較：大正・昭和初期教科書の現地採集の教材について」(『社会科学研究』32(2)(通号61)、中京大学社会科学研究部、2012年3月)。
- ②李美善「大出正篤の朝鮮における日本語教育：『新撰高等国語読本 全』を中心に」(『目白大学高等教育研究』18、2012年3月)。
- ③金曉美「帝国日本の‘国語’教科書における対外認識：宗主国日本と植民地朝鮮の欧米地理教材

の比較を通して」(『比較文学研究』97、東大比較文学會、2012年10月)。

- ④佐野三枝子『『普通学校朝鮮語読本』の表記について』(『関西大学外国語教育フォーラム』2013年3月)。
- ⑤成玟炯「朝鮮総督府編纂『普通学校国語読本』と日本語教育」(『近代語研究』第16集、近代語学会、2012年3月)。
- ⑥日本植民地教育史研究会『植民地教育史研究年報』14、植民地・こども・「新教育」(皓星社、2012年)。
- ⑦金廣植「朝鮮総督府学務局編纂教科書と民間説話調査に関する考察」(石井正己他『グローバリズムの中の民俗学』、東京学芸大学報告書、2012年3月)。
- ⑧金廣植「朝鮮総督府編纂教科書に収録された新羅説話考察：植民地期における古代史の解釈と歴史教育の位相」(『学芸社会』第28号、東京学芸大学、2012年5月)。
- ⑨金廣植「朝鮮総督府編纂教科書における朝鮮説話収録過程の考察：1913、1916年「普通学校調査・報告書」を中心に」(『朝鮮史研究会会報』第189号、2012年9月)。
- ⑩金廣植「グリム研究家田中梅吉と朝鮮民間伝承調査：朝鮮総督府編『朝鮮童話集』及び『児童絵本 小児画篇』を中心に」(『昔話伝説研究』第32号、2013年4月)。
- ⑪金廣植「『韓国併合』前後に帝国日本と植民地朝鮮で実施された民間伝承調査」(『国際常民文化研究機構年報』4、神奈川大学、2013年10月)。

【報告書及び目録、単行本】

- ①玉川大学教育博物館編『玉川大学教育博物館外地教科書目録』(玉川大学教育博物館、2007年)。
- ②宮脇弘幸他『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書 目次目録』(科学研究費補助金研究成果報告書、2009年3月)。
- ③宮脇弘幸他『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究』(科学研究費補助金研究成果報告書、2009年3月)。
- ④西尾達雄他『日本植民地・占領地教科書と「新教育」に関する総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書、2013年3月)。
- ⑤石井正己編『帝国日本の昔話・教育・教科書』(平成24年度広域科学教科教育学研究経費報告書、東京学芸大学、2013年3月)。
- ⑥朴貞蘭『『国語』を再生産する戦後空間：建国期韓国における国語科教科書研究』(三元社、2013年)。
- ⑦金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究：帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学』(勉誠出版、2014年)。

著者に下線の引いた論文は、主に『国語』を扱ったものである。韓国人において「国語」は「韓国語」であるため、韓国人研究者の論文の中の「国語」は韓国語を意味している。上記の資料に提示したように、日本に比べて近年韓国では、植民地教科書に関する数多くの研究がなされているが、その主な対象は、『朝鮮語』、『国語』、『唱歌』であることが分かる。

『朝鮮語』に関する研究が盛んに行われる契機を提供したのは、資料1.の⑩姜珍浩・許在寧編『朝鮮語読本』全5巻(J&C、2010年)であろう。植民地教科書研究を進めるにおいて最初のハードルは、研究対象である教科書を全て集めることである。従来『朝鮮語』を全て入手することは決して容易いものではなく、⑩姜珍浩・許在寧の資料集は大きな役割を果たしてきたといえよう。問題は、一つの資料集が出来上がり、その後の研究者は、それに限っての研究に集中しているという点である。今後は、⑩姜珍浩・許在寧の資料集から漏れた2年制簡易学校教科書および『趣意書』に関する本格的な分析を進めなければならない。また、総督府は特に「朝鮮読本」である『朝鮮語』と『国語』を相互補完的に刊行しており、その関わりに関する研究が求められる。例えば、新羅の始祖朴赫居世神話は『朝鮮語』で教え、植民地期に日本人として根拠なく拡大解釈された新羅4代王・脱解説話は『国語』に配置され、『朝鮮語』と『国語』における教材の使い分けが行われており、その関わりに関する研究が求められる⑥。

一方、『国語』と『唱歌』は、その多くが全南大学校の共同研究チーム(金順楨・朴濟洪・張味京・朴京洙・史希英・金瑞恩・柳徹など)によって行われていることが確認できる。資料1にも示

したように、全南大学校の共同研究は、論文を量産しており、『国語』と『唱歌』の「原文」と韓国語訳を次々と刊行し、『修身』と『国語』を「一段落」し、近年は『唱歌』を中心に研究を拡大させている。

第1期の修身教科書は総督府初の編修官・立柄教俊によって編纂されたものであるが、管見の限り、『修身』の先行研究において立柄に関する言及は見当たらない⁽⁷⁾。『修身』研究は、注4にも指摘したように、今後は仲林の議論も含めた新たな研究が求められる。

2 『国語読本』研究の問題—史料と先行研究の重要性

以下では、全南大学校の共同研究分野の中、『国語』の成果をまとめた金順楨・朴済洪・張味京・朴京洙・史希英・金瑞恩・柳徹著『(日帝強占期 日本語教科書『国語読本』を通してみた)植民地朝鮮づくり』(J&C、2012年、韓国語)を取り上げ、その問題点を検討したい。

この本は、本文480頁に及んでおり、19の既発表論文を収録している。目次は以下の通りである。

序文 (金順楨)

第1章 朝鮮人の民族的トラウマ

- I. 『国語読本』書簡文に投影された朝鮮人教化様相 (朴京洙・金順楨、初出『日本語文学』50、2011年)
- II. 童話に表象された植民地政策 (張味京・金順楨、初出『日本語文学』52、2012年)
- III. 近代鉄道、‘文明’と‘同化’の時空間 (朴京洙、初出『日本語文学』53、2012年)
- IV. 日帝占領期日本語教科書に現れた天皇像 (柳徹、初出『日本語文学』54、2012年)

第2章 日鮮同祖論と内鮮一体

- I. <国語読本>の神話に応用された<日鮮同祖論> (朴京洙・金順楨、初出『日本語文学』42、2008年)⁽⁸⁾
- II. 動物例話に導入された天皇制家族国家観 (朴京洙・金順楨、初出『日本語文学』47、2009年)
- III. 日帝の植民地初等教育と<暦> (朴京洙、初出『日本語文学』51、2009年)
- IV. 『日語読本』と『訂正国語読本』の空間表現の変化 (張味京・金順楨、初出『日本研究』14、2010年)

第3章 植民地の教育的アポリア

- I. 国語としての近代日本語教育考察 (史希英・金順楨、初出『日語日文学』52、2012年)
- II. 日帝末期『国語読本』の教化に変容された‘子供’ (朴京洙、初出『日本語文学』55、2011年)
- III. 『国語読本』に含まれた身体教育 (柳徹、初出『日語日文学』50、2010年)
- IV. 植民地経済型の人間育成 (金瑞恩・金順楨、初出『日語日文学』53、2012年)

第4章 国家倫理と戦争

- I. 帝国拡大のための‘皇軍’養成 (史希英・金順楨、初出『日本研究』16、2011年)
- II. 『国語読本』に投影された軍事教育 (柳徹・金順楨、初出『日本語文学』56、2012年)
- III. 教科書に叙事された戦争と映画 (金瑞恩・金順楨、初出『日語日文学』48、2010年)
- IV. 帝国の膨張欲求と防御の弁証法 (朴京洙・金順楨、初出『日本研究』52、2012年)

第5章 ‘同化’と‘差別’の教育フレーム

- I. <国語>に創出された帝国民の様相 (史希英、初出『日語日文学』52、2011年)
- II. 日帝の差別教育による植民地児童の育成 (朴済洪、初出『日本語教育』58、2011年)
- III. 朝鮮『国語読本』と台湾『国民読本』に現れた植民地教育 (張味京、初出『日本語文学』48、2011年)

参考文献

索引

上記のように、初出は韓国日本語文学会と日本語文学会の二つの雑誌『日本語文学』などに2008年以降に既発表したものである。近年、新自由主義の波の中で韓国では単行本より、韓国研究財団が認めた掲載誌に掲載した論文だけを業績として評価する傾向が強まり、論文中心の研究が進められている。筆者の分析結果、単行本に当たり、19の論文の修正は最小限に留まっており、10頁に序

文をつけただけである。

序文には植民地教科書を分析して「歪曲された韓国近代教育の実体と朝鮮植民地教育過程を検証することで、それに対する対応論理を構築したい」(3頁)と前提にし、先行研究が少なかったことに対して「関連資料の発掘の困難や日本語解説の難解やアプローチの難しさなども原因として働いた」と指摘している。それに対して本書は、大韓帝国学部編纂『日語読本』から第5期までの「延べ72冊の日本語教科書を中心に進められたこれまでの研究結果物を一冊にし」、「最近日本での国家主義を愛国心として還元し、賛美しようとする動きに対して、感情的な対応よりは、実証的な対応の必要性を切に願い」、「体系的かつ実証的な土台をつくりたい」(5頁)と述べている。

「感情的な対応よりは、実証的な対応」こそ、学問の大前提であるが、その中身は「実証」とは掛け離れており、筆者は非常に危惧している。そもそも著者たちは大韓帝国学部編纂『日語読本』から第5期までの延べ72冊の日本語教科書を確認したのか、疑わしい。問題は、本書の中には繰り返して(5, 8, 40, 81, 133, 238, 254, 275, 305, 335, 382, 409, 481, 488頁など)72冊の教科書を全て確認したかのように書かれている点である。掲載論文の多くが、第1期から第5期までの教科書に収録された関連単元を提示し、その内容を分析している。テーマによっては関連単元の「関連」をどこまで含めるか議論が分かれるところであるので、その恣意性はさておきたい。問題は、その列挙した単元に明らかな抜け落ちが多く存在する点である。それは第5期の教科書に際立っている。

序文をはじめ、本文では繰り返し、第5期には『ヨミカタ』(2巻)、『よみかた』(2巻、1942年)、『初等国語』(8巻、1942～1944年)となっているが、正しくは『ヨミカタ』(3巻)、『よみかた』(1巻、1942年)、『初等国語』(8巻、1943～1944年)である。

著者たちは、2年生用前期の教科書『ヨミカタ』を確認していないことが分かる。また、少なくとも3年生用後期の『初等国語』なども確認していない。総督府編纂教科書の多くは韓国国立中央図書館に所蔵されており、その多くはオンライン上で閲覧できる⁽⁹⁾。しかし、『国語』に限っていえば、第1期と第5期の教科書の漏れが多く、入手困難な資料となっている。幸い、『普通学校国語読本』(福岡教育大学附属図書館蔵本、1912年-1915年、朴英淑解題、粒粒舎、2000年)が日本で覆刻され、容易く入手できるようになったが、依然として第5期は入手困難である。近年、玉川大学教育博物館に膨大な『玉川大学教育博物館外地教科書目録』が公開し、研究者に史料を公開しており、全ての『国語』が確認できるようになっている⁽¹⁰⁾。玉川大学教育博物館の外地教科書関連史料の所蔵本は世界一の規模であり、関連研究者においては奇跡に近い史料の質と量を担保している。

しかし、著者たちは少なくとも第5期の教科書を全て確認していないようである。例えば、比較的に新しい論文が掲載された第1章のみを確認しても、それは明らかである。

「I.『国語読本』書簡文に投影された朝鮮人教化様相」では、第1期から第5期までの書簡文を網羅しているが、第5期の部分(35頁)には6巻16課「兵隊さんへ」と10巻4課「戦地の兄から」が抜けている。

「II. 童話に表象された植民地政策」では、なぜか第1期と第4期だけを分析しており、その基準が明確ではない。童話収録を論じるなら、第2期の芦田恵之助の関わりを分析するのが、先行研究の常識であるが、本論文には芦田の「あ」の文字すら出てこない⁽¹¹⁾。

「IV. 日帝占領期日本語教科書に現れた天皇像」では、天皇関連単元の目録を第1期から第5期まで提示しているが、抜け落ちが多く、日本語表記及び出処の間違いが散見される。その中で、第5期だけを取り上げてそれを正したのが表2である。

表2のように、5-20「ににぎのみこと」以外の全ての単元の記述に間違いと抜けが存在する。つまり、これらの研究は、そもそも基礎的なテキストも録に読まず、共同研究を進めたという致命的な問題を抱えている。

そうした問題は、著者たちが刊行した翻訳書と「原文」にも如実に現れている。著者たちが刊行した『国語』の「原文」と翻訳もまた一部に留まっている。さらに驚くことに、その「原文」は、影印本ではなく、タイピングしたものである。教科書はテキストではなく、分かち書き、図版、挿絵などの配置などが工夫された生き物である。それを無視して文字だけをタイピングして「原文」という名で公刊するのは重大な問題である。そもそも「原文」という名でタイピング本を出したのは、実物を持っていないことに因る苦肉の策であろう。

表2. 第5期『国語』の収録された天皇関連単元の目録

出处	単元名	筆者の修正
3-1	天の岩屋	5-1 天の岩屋
3-2	八岐のおろち	5-5 八岐のをろち
3-11	少彦のみこと	5-11 少彦名神
4-5	清国神社	7-5 靖国神社
5-20	ににぎのみこと	5-20 ににぎのみこと
5-24	つりばりの行方	5-24 つりばりの行へ
		6-1 神の剣
		6-5 田道間守
		7-3 日本武尊
		7-6 光明皇后
9-2	弟橘姫	9-2 弟橘媛
		10-1 明治神宮
10-19	古事記	11-19 古事記

重大な問題を抱えているにもかかわらず、著者たちが『修身』『国語』研究に続き、精力的に『唱歌』に研究領域を広げ、植民地教科書研究の必要性を周知させたこと自体は、歓迎すべきことである。今後は基本史料に基づいた、序文に相応しい「実証的な対応」かつ実証的な研究を期待したい。

著者たちの問題は、基本史料の欠落に留まらず、誤字、事実誤認、史料引用の間違いが多く存在している。また、先行研究に関する検討にも露呈されている。主な先行研究としては、李淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本—朝鮮における初等教科書の推移〔1895-1979〕—』（ほるぷ出版、1985年）がある。李淑子は、覆刻本もなかった時代に、「内地」の尋常小学校と比較して、植民地朝鮮の普通学校用『国語』『朝鮮語』『修身』を総体的に分析している。非常に膨大かつ実証的な研究成果であるが、個別な事項においては間違いも存在する。それを踏まえた近年の成果としては、朴英淑「朝鮮植民地時代『普通学校国語読本』の研究—初等教育における漢字教育を中心に—」（久留米大学大学院博士論文、2002年）、上田崇仁「植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究」（広島大学大学院博士論文、1999年）、宮脇弘幸他『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究』（科学研究費補助金研究成果報告書、2009年）などがある。また、資料集として欠かせないものとしては、渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策史料集成』（朝鮮篇、全69巻74冊、龍溪書舎、1986-1991年）が公刊されているが、著者たちの本文や参考論文には近年の成果（先行研究）が参照・反映されていない。

3 植民地期「朝鮮読本」研究の課題

前章では、基本史料と先行研究を踏まえた地道な研究の必要性を説いた。寺崎昌男のご指摘とおり、教科書研究には少なくとも次の三つが基本要件ではないかと筆者は考えている。

「まず考えるべきは、教科書が—国定教科書といえども—一定の製作者を持つ、という点である。（中略）これらの諸関係を実証的に分析することは確かに容易ではないが、（中略）たんに「国定教科書の第何期本から何期本への変化」を指摘するだけで、その変化を促すメカニズムといった視点では取り扱われていない。

第二に、上記の研究や調査が、申し合わせたように教科書の題材（課の名称、人物、地域など）及びその記述の仕方を主たる対象にして取り扱い、論じていることである。（中略）題材だけではなく、当時の挿絵、図版のあり方、学年のなかにおける特定の教材の位置（主として学年における位置）やその移動（時には学年を超えて移動する場合もある）等の要素が、教材の設定意図を見る場合に不可欠の観点となる。（中略）

第三に、教科書は授業におけるその展開、それに先立つ教師の教科書研究（および関連教材）を必要とし、それらを予想して解釈されなければならない。ということは、解説書、授業書、あるいは教師からの教科書教材への批判や意見等々を視野に入れて研究のなかにすえなければならないということになる」（12）

筆者は、上記の三つの要素は植民地教科書を研究する上において必須条件だと考え、それを実践してきた。まず、総督府編纂教科書における『国語』『朝鮮語』『国語』教科書の執筆者を復元し、具体的に新羅関連の教材を中心に教材の位置関係、挿絵を分析し、植民地と「内地」で刊行された刊行物を広く集め、教科書への意見・受容・反発を分析し出した⁽¹³⁾。今後の研究は、教科書執筆者を考慮して編纂過程を踏まえて、テキスト中心の研究を乗り越える必要がある。また、挿絵、図版のあり方、教材の位置関係を考慮しなければならない。そして、解説書（趣意書、教師用教科書）、授業書、教師などの意見、授業案などを広く取り入れて、製作者の意図、その受容・反発などを明らかにしなければならない。

寺崎の指摘する上記の三つの要件に加え、筆者は少なくとも以下に述べる要件が必要であると考える。

すなわち、四つ目として、近年の研究は『国語』『日本語』『国史』などのそれぞれの専門領域に限定され、個別教科に限っての研究が進められているように思われるが、今後は教科の領域を乗り越えて、関連単元の関わりを究明することで、制作意図を明らかにしなければならない⁽¹⁴⁾。関連教材（或は挿絵）・教科・叙述内容を比較検討し、時代的推移を明らかにすることで、製作者の意図がより鮮明になると思われる。それを踏まえて、今後は多角的・横断的比較研究を進め、「帝国」と「植民地」教科書の比較研究を本格的にスタートさせる必要性が求められる。

また、五つ目には、従来の文部省教科書と朝鮮人児童向けの総督府教科書という二分法から、総督府が編纂した在朝日本人児童向けの教科書を具体的に分析することで、三者の異同と関わりを明らかに捉えることができるのではなかろうか。先行研究は在朝日本人児童に関する研究への関心が少なかった。「日本内地とも微妙に異なる体制で展開された教育は等閑に付されたままとと言っても過言ではない」⁽¹⁵⁾。今後は、文部省教科書・植民地朝鮮人児童用、在朝日本人児童用の関わりを解明していかなければならない⁽¹⁶⁾。

六つ目には、「一国主義教科書研究史」を乗り越えて、関連国の研究成果を踏まえた研究が求められる。ICT環境の普及に伴う研究のデータベース化の進展により、海外での研究動向を素早く把握できるようになったが、歴史学の交流や関心に比べて、教科書研究は日韓において交流が少なく、相手国の論文を引用・参照せずに、それぞれ異なる方向で研究が進められているという問題を抱えている⁽¹⁷⁾。日韓の関連研究者の交流、重要な研究の目録、重要論文の翻訳・紹介が求められる。日韓の共同研究による比較教育史の展開を期待したい⁽¹⁸⁾。

七つ目には、基本史料及び統計データに関する基礎研究の充実化が必要である。まずは、入手困難な教科書の覆刻が求められる。それとともに基礎資料として『趣意書』に関する覆刻も進めなければならない。製作者の意図を汲み取る上で『趣意書』は最も基礎的な史料の一つである。それと共に、間違いのない基礎研究を明確にしておく作業が求められる。正確な教科書編纂リスト、目次目録が作成されているので⁽¹⁹⁾、今後は6年制用と共に、4年制・2年制用、中等教育用との比較や関わり、販売部数、就学率とその推移などの関わりと共にその意味を総体的に究明しなければならない⁽²⁰⁾。また、これらの資料集を刊行し、ネット公開を進め、共同研究による植民地教育の実体を解明し、その教育を通じた交流と和解に向けて働きかけなければならない。

製作者の意図と、受容者の影響あるいは反発に関する研究と共に、近年、教科書の出版・販売・流通に関する実証的な研究が進められていることは、非常に鼓舞的な出来事である⁽²¹⁾。

おわりに

これまで、近年の研究成果を踏まえた上で、今後の課題を検討してみた。近年、領土問題と歴史教育をめぐる日中韓の溝が深まっている。政治家の国内向けの言動が相手国のメディアによって増幅され報道されており、より一層歴史教育、教科書問題の重要性が高まっている⁽²²⁾。

ドイツとフランスでは共通の歴史教科書が作成され教育現場で実践されており、韓国でも『韓国史』と『世界史』を相対化かつ補完できる教科として『東アジア史』が高等学校の社会科で実践されている。日韓の民間においても多様な共通の歴史教材が作成されている。これらの実践は、これまで歴史教育の方面で試みられているが、今後は「国語」教育などにおいても共通の題材を多く含めることを考慮してよいのではなかろうか。日韓を含めた東アジアは、共通の問題を数多く抱えており、その多くが相互協力なしには解決できない問題でもある。ナショナル・ストーリーやナショ

ナル・ヒストリーを強いる「国語」「国史」教育ではなく、隣国との「平和」「対話」「和解」に役立つ教材づくりに関する教育関係者の叡智の集結が、かつてないほど求められるこの頃である。

注

- (1) 普通学校は1910年代まで4年制であったが、第2次教育令以降の1920年代には「内地」と同じく、6年制となったが、30年代半ばには再び4年制、2年制学校が急増した。
- (2) *張信「朝鮮統治の特殊性と教科書編纂」(『第3回2013年度崇実大学校東アジア言語文化研究所学術シンポジウム—1910年前後に出版された日本語朝鮮説話集に関する研究と課題—』予稿集、2013年2月18日、36-7頁)。以下、注における韓国語文献には、*印を付けて日本語文献との混同を避けることにする。
- (3) 詳細は、金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究—帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学—』(勉誠出版、2014年)の第1編第5章をご参照頂きたい。
- (4) 韓国における歴史と修身などに関する研究成果は、次の論文を参照して頂きたい。次の張信編『朝鮮總督府歴史教科書叢書』(歴史史篇)全7巻、青雲、2006年；*張信「朝鮮總督府学務局編輯課と教科書編纂」『歴史問題研究』16号、2006年；拙稿『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』(勉誠出版、2014年)の第1編第5章。特に、修身については仲林の研究が注目される。仲林は總督府と文部省の修身教科書を比較分析し、文部省も總督府も「忠孝一致」を強調しているが、文部省が非主流的の見解として君民同祖論は登場するものの、總督府修身書には登場しないと、君民同祖論は「日本民族」という範囲を超えて植民地朝鮮の異民族には適用できなかったと指摘している。少なくとも1910年代において總督府が天皇への忠誠を朝鮮人に求めた論理は君民同祖論に基づいていない。また、君民同祖論による民族的(エスニック)アイデンティティの日本化も進めなかったと指摘している(*仲林裕員「1910年代 朝鮮總督府の統治論理と教育政策—「同化」の意味と「帝国臣民」化の戦略—」『韓国史研究』161、2013年、227-229頁)。
- (5) 林慶花「歌で習う『国語』—植民地期朝鮮における唱歌と言語教育—」『日本研究』41、2010年。
- (6) 金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版、2014年、193頁。
- (7) 金廣植「朝鮮總督府学務局編修官立柄教俊と朝鮮説話：普通学校用教科書と在朝日本人用尋常小学校補充教本との関わりを中心に」(石井正己編『帝国日本の昔話・教育・教科書』東京学芸大学報告書、2013年)。
- (8) 本論文に関する具体的な検討は、金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版、2014年、108-109頁、194-195頁を参照。
- (9) <http://www.nl.go.kr/nl/index.jsp>で日本語でも検索、閲覧できる。検索の際、漢字は可能ならば、旧漢字を用いた方が精度が高くなる。
- (10) 玉川大学教育博物館編『玉川大学教育博物館外地教科書目録』2007年。第5期『国語』をはじめ、多くの資料閲覧を許可してくださった玉川大学教育博物館の関係の方々に厚くお礼申し上げます。貴館の白柳弘幸先生からは資料閲覧における手続きはもちろん、研究における貴重なアドバイスを頂いた。この紙面を借りて重ねてお礼申し上げます。
- (11) 總督府編纂教科書に収録された日韓の童話の目録とその意味、芦田恵之助については、金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』(勉誠出版、2014年)の第1編第5章をご参照頂きたい。
- (12) 寺崎昌男「はじめに」(『共同研究 国定教科書における海外認識の研究』研究報告No41、中央教育研究所、1992年、6-7頁)。
- (13) 従来の研究をまとめた次の拙稿をご参照頂きたい。『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』(勉誠出版、2014年)の第1編第5章「植民地教科書と新羅神話・伝説」。
- (14) 同上、180-181頁をご参照頂きたい。
- (15) 稲葉継雄「旧韓国～朝鮮の「内地人」教育」(東北大学高等教育開発推進センター編『植民地時代の文化と教育—朝鮮・台湾と日本—』東北大学出版会、2013年、34頁)。
- (16) *金廣植・李市垞「在朝日本人児童用『尋常小学校補充教本』の内容とその性格」(『日本言語文化』第24輯、韓国日本言語文化学会、2013年4月)；金廣植「グリム研究家田中梅吉と朝鮮民間伝承調査—朝鮮總督府編『朝鮮童話集』及び『児童絵本 小児画篇』を中心に—」(『昔話伝説研究』第32号、2013年4月)をご参照頂きたい。
- (17) 金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版、2014年、179頁。
- (18) 宮脇弘幸他『日本植民地・占領地の教科書に関する総合的比較研究』科学研究費補助金研究成果報告書、2009年3月。
- (19) 總督府編纂教科書目録及び目次は次を参照。「朝鮮總督府編纂教科用図書刊行目録稿」(『植民地教育史

研究年報』3号、2000年)。宮脇弘幸他『別冊 日本植民地・占領地・国定教科書 目次目録』科学研究費補助金研究成果報告書、2009年。

(20) 金廣植『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』勉誠出版、2014年。

(21) 和田敦彦編『国定教科書はいかに売られたか—近代出版流通の形成—』ひつじ書房、2011年。

(22) 金廣植「植民地支配の記憶をめぐる歴史リスクと和解」(坂井俊樹他編『現代リスク社会にどう向きあうか』梨の木舎、2013年)をご参照頂きたい。

参考文献

資料1及び資料2、注を参照。

小倉進平

1913a「済州嶋の俚謡と伝説」、『わか竹』6巻1号～3号：大日本歌道奨励会。

小田省吾

1917「朝鮮総督府に於ける教科書編纂事業の概要(一)」、『朝鮮教育研究会雑誌』21号：1-21。

1923「古代に於ける内鮮交通伝説について」、『朝鮮』102号：33-41、朝鮮総督府。

1934「小田省吾略歴自記」、『辛未洪景来乱の研究』小田先生頌寿記念会：1-10。

1935「併合前後の教科書編纂に就て」、『朝鮮及満洲』335号：38-41、朝鮮及満洲社。

金廣植

2012「朝鮮総督府学務局編纂教科書と民間説話調査に関する考察」、『グローバリズムの中の民俗学』岩田重則編：65-79、東京学芸大学報告書。

2013「朝鮮総督府学務局編修官立柄教俊と朝鮮説話：普通学校用教科書と在朝日本人用尋常小学校補充教本との関わりを中心に」(石井正己編『帝国日本の昔話・教育・教科書』東京学芸大学報告書)。

2013「『韓国併合』前後に帝国日本と植民地朝鮮で実施された民間伝承調査」、『国際常民文化研究機構年報』4、神奈川大学、2013年10月。

2014『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究：帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学』勉誠出版。

朝鮮総督府

1913『普通学校教科書編纂趣意書』第一編、朝鮮総督府。

朝鮮総督府学務局

1921『現行教科書編纂の方針』丸秘文書、朝鮮総督府。

1926『朝鮮教育要覧』朝鮮総督府。

文部省

1910『修正国定教科書編纂趣意書』第一篇、文部省(『復刻版国定教科書編纂趣意書』第二巻、国書刊行会、2008)。

満洲国の国定「国語」教科書にみえる 回鑾訓民詔書からの影響

船越 亮佑

はじめに

1932年3月1日、中国東北部に一つの国家が誕生した。それは、当時台湾や朝鮮といった植民地また委任統治領の南洋群島や南方の占領地などを支配下におくまでに膨張していた帝国日本の主導のもとに建国されたもので、事実上はその傀儡国家であった。だが、わずか13年後の1945年8月18日、君主であった皇帝の退位宣言により、その国家は突如として消えた。同年8月15日の帝国日本の敗戦から3日後のことであった。これが「満洲国」である⁽¹⁾。

建国の経緯は次の通りである。1931年9月18日、「満洲」つまり中国東北部の奉天近郊で帝国日本の所有する南満洲鉄道（以下、満鉄）が爆破された。当時、中華民国からの租借地であった関東州と、満鉄附属地の警備を担当していた関東軍は、これを中華民国の軍隊による犯行と発表したのだが、実際は関東軍の自作自演だった。そして、これを口実として関東軍は中国東北部の侵略を一気に進めた。一般的にこの事件を、日本では柳条湖事件と、中国では九・一八事変と呼ぶ。また、その後の展開も含めて満洲事変といわれるのがこれである。

この9月18日は、中国においては今日でも「国恥の日」とされ、毎年のように反日運動が起こっている。両国は、半世紀以上も前の出来事を、いまだ清算できずにいるのである。東アジアの良好な国際関係が全世界から求められるなか、とりわけ日中間をめぐる近代史の清算は喫緊の課題である。今回取り上げる領域の研究は、その解決に対し小さいながらも確かな一助となるものと思われる。すなわち、その領域とは、戦前・戦中に帝国日本の支配下にあった「大東亜」で実施された教育に関する研究である。

1 満洲国の教育

「教育は即ち国民教育なり」我国の教育はこの根本原則に立脚する。即ち教育上の所謂人格の陶冶、知能の啓発、身体の鍛錬等は、結局国民として為されねばならぬのであつて、「教育は国家がその理想を達成するために必要な人的資財を要請するものなり」といふ一句にその全意を尽してゐる。従つて満洲国教育は凡てこの点から出発し、普通の常識人を作るのでもなく、世間の智識者を作るのでもなく、又善良なる世界人を育てるに在るのでもない。一に満洲国に於て役立つべき人材の養成を根本の目的としてゐる。

これは、満洲国文教部の総務司長およびその後継機関である満洲国民生部の教育司長を務めた皆川豊治の言葉である⁽²⁾。満洲国の教育は、「善良なる世界人」を育てるのではなく、満洲国において役立つ人材を養成するための国民教育を目指していたようである⁽³⁾。

満洲国では、1932年の建国後すぐさま教育制度改革が図られ、1937年に新学制が公布された。それは帝国日本初の国民学校制度で、1941年に内地で発令される国民学校令の試金石であったといえる。また磯田一雄は、1942年に打ち出された「大東亜教育」の構想を満洲国の成立に始まるものであったと考える⁽⁴⁾。

先の皆川の言葉は、新学制について著した書物のなかで述べられているものであるが、はたしてそれは、あくまでも満洲国の国民教育であったのか、それとも帝国日本の「大東亜教育」の一環で

あったのか。

これについて考えるため、今回は満洲国の国定「国語」教科書を扱う。なぜ、「国語」を取り上げるのか。それは、一つの言語がある国家において「国語」となると、それが国家意識を発揚する作用をもたらすからである。ベネディクト・アンダーソンの言葉を借りれば、言語は、国民を構成する表象としてではなく、「想像の共同体」を生み出し、特定の連帯を構築する能力をもつのである⁽⁵⁾。

ところで満洲国の「国語」とは、いったい何だったのか。実は、満洲国において「国語」は一つではなかった。建国のスローガンの一つに「五族協和」が掲げられていたことからわかるように、満洲国は多民族国家であった。その五族とは、満洲民族・漢民族・蒙古民族・日本民族・朝鮮民族である。満洲国では、前の三族が満洲人、後の二族が日本人と呼ばれていた。そして公用語としては、中国語（満語と呼ばれた）や蒙古語や日本語、さらにロシア語が話されていた⁽⁶⁾。

日本語は、建国直後の学校教育においては公用語の一つという扱いであったが、教育制度改革により「国語」の一つとなった。新学制において満洲国の「国語」は、中国語・日本語（地域によっては、蒙古語・日本語）と複数あったのである。それゆえ、「国語」教科書というのも複数あった。そのうち、ここでは日本語の「国語」教科書を考察対象とする。なぜなら、論点の一つに据えたのが国民教育と「大東亜教育」であるため、満洲国と帝国日本に共通する「国語」である日本語の教育を取り上げる必要があるからである。

さて、ひとくちに満洲国の国定「国語」教科書を扱うといっても、その実態は複雑である。日本内地の国定教科書と同様、満洲国においても教科書の改訂がおこなわれており、また科目によっても編纂の時期が異なるため、各期においてその特徴が少なからず異なっている。したがって、ここでは簡単に、1938年に新学制が施行されるまでの満洲国における国定教科書の編纂過程を示す⁽⁷⁾。

満洲国の建国以前から関東州や満鉄附属地においては日本語教育が盛んにおこなわれていた。関東州では関東庁教科書編纂委員会、満鉄附属地では奉天外国語学校、そして合同編纂するため両者が発足させた南満洲教育会教科書編輯部の教科書などが使用されていたが、これらは建国により改訂を迫られた⁽⁸⁾。また、満洲の地域で使用されていた中国国民党の「党義に関する教科書」は全廃され、新教科書が製作されるまでは間に合わせとして四書孝経が用いられた⁽⁹⁾。

それから数ヶ月後、南満洲教育会と奉天省教育庁が暫定教科書を発行し、その翌々年には、満洲国文教部編纂の教科書が刊行された（第一期編纂）。この1934年は、それまで執政であった溥儀が皇帝の座についたことによって満洲国が満洲帝国になった年でもある。

翌年の1935年5月2日、第1回目の訪日を終えた溥儀の名で回鑾訓民詔書が公布され、教科書の編纂作業はこれに基づくこととなった⁽¹⁰⁾。同年には、文教部の国定教科書編纂が完了し（第二期編纂）、続く1936年から1937年にかけては、教授書などが刊行された（第三期編纂）。

そして、1937年の5月2日に新学制が公布され、民生部による教科書の改訂作業がおこなわれる。

以上の編纂過程は、四書孝経が用いられていた時期を除いて、5月2日を境として三つの時期に分割できよう。すなわち、1935年5月2日の回鑾訓民詔書公布以前、詔書公布日から1937年5月2日の新学制公布まで、そしてその公布および施行以後である。

これらの時期を回鑾訓民詔書という観点からみた場合、一つ目の時期は公布以前であるため詔書からの影響はない。また二つ目の時期は先に述べた通り、教科書の編纂作業において影響を受けた。そして三つ目の時期はといえば、民生部の出した「国民学校規定」のなかに詔書の趣旨に則るよう示されていることなどから、二つ目の時期に比してより大きくその影響を受けたようである。

では、その回鑾訓民詔書とは、どのようなものだったのか。さらに、それが満洲国の国民教育にどのような影響を与えたのか。満洲国の国定「国語」教科書を用いながら、これより考えていきたい⁽¹¹⁾。

2 溥儀の回鑾訓民詔書

1935年4月6日、皇帝溥儀は、東京駅のホームで昭和天皇自らの出迎えにより、国賓として迎えられた。二人は固い握手を交わし、ここに日満親善が示された。溥儀は、宴会や祝賀会はもちろんのこと、明治神宮に参拝したり、陸軍病院に慰問したりした。そして訪日最終日、昭和天皇の弟である秩父宮が兄の代理で駅まで見送りに来て、「どうか皇帝陛下は日満親善はかならずなしとげられるという確信を持ってお帰りいただきたい」と述べたという⁽¹²⁾。後年この第一回訪日について溥

儀は次のように振り返っている。

日本皇室のこのもてなしによって私はますます熱にうかされ、皇帝になってからは空気さえ変わったように感じた。私の頭には一つの論理が出現した。天皇と私とは平等だ、天皇の日本における地位は、私の満洲国における地位と同じだ、日本人は私にたいして、天皇にたいするのと同じようにすべきだ、というのである。(13)

そして、このように日本国で厚い歓待を受けた溥儀は、満洲国に帰って詔書を発布する。

朕登極ヨリ以来亟ニ躬カラ日本皇室ヲ訪ヒ（中略）其政本ノ立ツトコロ仁愛ニ在リ教本ノ重ンスルトコロ忠孝ニ在リ民心ノ君ヲ尊ヒ上ニ親ム天ノ如ク地ノ如ク忠勇公ニ奉シ誠意国ノ為メニセサルハナシ故ニ能ク内ヲ安シ外ヲ攘ヒ信ヲ講シ隣ヲ恤レミ以テ萬世一系ノ皇統ヲ維持スルコトヲ知レリ朕今躬カラ其上下ニ接シ咸ナ至誠ヲ以テ相結ヒ氣同シク道合シ依頼渝ラス（中略）友邦ト一徳一心以テ両国永久ノ基礎ヲ奠定シ東方道徳ノ真義ヲ発揚スヘシ（後略）

これは1936（康德3）年に発行された『満洲国学事要覧』(14)の目次の前に掲げられたものである。同書総説の冒頭には、「回鑾訓民詔書」ハ本邦教育ノ根本ヲ示ストコロデアル」と書かれており、この詔書の教育に対する影響の大きさが窺い知れる。「萬世一系ノ皇統ヲ維持」する日本国との「一徳一心」による両国の連帯が教育上重視されたのである。

また、これは1935年12月23日に発行された文教部の『初級中学校 日本語教科書』下冊の冒頭などにも掲げられている。そして、この教科書には「大詔を拝す」という教材が載り、そこでは詔書の一部が引用されている。さらに、溥儀の訪日そのものについても教材化されており、「御訪日」という題で、『初級中学校 日本語教科書』下冊や、これと同日に発行された文教部の『高級小学校 日本語教科書』下冊、および1938年10月10日に発行された民生部の『国民優級学校 日語国民読本』巻二にも採録されている(15)。

なぜ、このように満洲国の国民教育は、溥儀の訪日とそれとともにない発布された回鑾訓民詔書を重視したのであろうか。

それは、この詔書が満洲国建国のスローガンの一つであった「王道楽土」の主義を変質させたことと深い関わりがある。そもそも「王道」とは孟子の政治思想から出たものであるが、それを換骨奪胎し満洲国の政治に当てはめたものが「王道楽土」である。アジアの理想国家を、西洋の武による「霸道」統治ではなく、東洋の徳による「王道」統治で建設するというものである。ところが、この主義が回鑾訓民詔書を一つの契機として変容を余儀なくされたのである。駒込武はこれについて、その変質過程に重層化のプロセスがあったとして二つの段階で説明する(16)。

第一段階は、「礼教国家」として王道主義と儒教の連関を明確化したことである。それは具体的に、建国後それまで使用していた教科書を全廃したとき、間に合わせとして四書孝経が用いられていたことにあらわれている。第二段階は、天皇制イデオロギーの導入である。先の回鑾訓民詔書によって皇統を維持する日本国との「一徳一心」が標榜され、さらに1940年の第2回訪日後には、国本を惟神の道に求める国本奠定詔書が公布されたのである。そして満洲国を庇護する神としてアマテラスを祀る建国神廟が、首都であった新京に創建されることとなった。

かくして満洲国の王道主義には、儒教との連関であった当初のものから次第にそのなかに神道を胚胎してゆくという変質が起こったのである。それはまた、回鑾訓民詔書公布以後の満洲国における国民教育の方向性にも変化を与えることとなった。満洲国が溥儀の訪日とこの詔書を教育上重視していたのは、それによって満洲国における国民教育の方向性が変化したからなのであった。

それでは、その方向性の変化が教科書にどのような変容を生じさせたのかをみていこう。焦点をあてるのは、満洲国の王道主義が拠りどころとした儒教と神道に関する教材である。

3 儒教に関する教材

満洲国の国定「国語」教科書における儒教に関する教材には、以下のようなものが挙げられる。

「ことわざ」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻一)

「養老の瀧」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻一)
「岳飛」(『高級小学校 日本語教科書』下冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
「忠義」(『高級小学校 日本語教科書』下冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
「楠公父子」(『初級中学校 日本語教科書』中冊)
「近江聖人」(『初級中学校 日本語教科書』中冊)
「貝原益軒」(『初級中学校 日本語教科書』下冊)
「孔子」(『初級中学校 日本語教科書』下冊)

ここでいう儒教に関する教材とは、「孔子」のように、儒教の始祖であることから直接的に儒教に関係するものだけでなく、「忠義」のように、儒教の教えに由来する「忠」や「孝」といった言説があることから間接的に儒教に関係するものも含んでいる。

まず、文教部『高級小学校 日本語教科書』および民生部『国民優級学校 日語国民読本』に採録された四つの教材について考える。

「ことわざ」は、「正直わ一生のたから」や「千里の道も一歩から」などの諺が八つ列挙された教材である。そのなかに、「孝行おしたい時にわ親わなし」というものがある。教授書⁽¹⁷⁾に、「教訓的な諺のみを掲出したから修身的教材である」と記されていることから、本課は修身道德の教授を目的としていたことがわかる。親孝行の実践者を「孝子」と呼ぶことがあるように、「孝」において親への孝行は高く評価されるものである。

残る三つの教材についても教授書を見ると、各々の教授要旨には以下のように記されている。

「養老の瀧」

日本に古くから伝えられる有名な孝子の伝説を紹介して、日本に関する常識ともし、修身的教材として教へるのが目的である。

「岳飛」

岳飛の忠誠に関する話を中心に、簡単な伝記を掲げて忠君愛国の念を喚起せしめるのが目的である。(後略)

「忠義」

日本の戦国時代の武将豊臣秀吉が天皇及主人に忠節を尽した事を述べ、学生に忠義の観念を与へる修身的教材である。

「養老の瀧」は年老いた酒好きの父を樵がその父に酒の味のする養老の瀧の水を飲ませて喜ばせる話で、前の「ことわざ」と同様、親孝行の実践者に関する教材である。「岳飛」は南宋の皇帝に忠義を尽くした岳飛という武将を描いたもので、「忠義」は天皇と織田信長に忠義を尽くしたとして豊臣秀吉を描いたものである。この二つの教材は、君主や主君に尽くす「忠」の教授が目的となっている。

次に、『初級中学校 日本語教科書』に採録された四つの教材についてであるが、このうち「近江聖人」「貝原益軒」「孔子」は儒教の始祖および儒学者という点で直接的に儒教に関係する人物を描いた教材である。よって、これらが儒教に関する教材であることはいうまでもない。ここで注意を要するのは、「楠公父子」である。

周知の通り、楠木正成とその子正行は、日本の南北朝時代の武将で、後醍醐天皇に忠義を尽くした人物である。「楠公父子」では、父正成が正行に向かって「お前は必ず父に代つて天子様に忠義をつくさねばならぬ」と言って聞かせる場面がある。さらには、続けて「これがお前の第一の孝行である」とも述べており、ここからはこの教材が「忠」と「孝」の双方を説くものであったことがわかる。

ところで、このように楠木親子を題材とする教材は、満洲国の国定「国語」教科書だけでなく、内地の国語教科書や、ほかの外地の「国語」および日本語教科書においても採録されている。たとえば、第二期国定国語教科書『尋常小学読本』巻七の「楠木正行」や、第五期国定国語教科書『初等科国語』巻三の「千早城」、また台湾総督府編纂の「国語」教科書では全五期のうち第一期を除くすべての「国語」教科書に採られている。楠木親子を扱う教材は、戦前・戦中における帝国日本の「国語」教科書のなかで、いわば定番教材となっていたのである。

この楠木親子の教材が教科書において果たした役割については、すでに中村格が内地の天皇制教育をめぐり言及している⁽¹⁸⁾。中村は、学制以降まずこの親子を取り上げ且つ全国的に普及させた教科書として『幼学要綱』を挙げ、そこに収まる「忠節」の項などを分析した。そして本文の記述について、『日本外史』を下敷きとするも、一貫して「尽忠至誠」の観点から親子を造型しており、それが『太平記』の原像を大幅に歪めたものであることを指摘。さらに、忠孝一体の思想が「孝」を教義の中核とする本来の儒教から逸脱しており、これが「尊皇愛国ノ志気」(小学校教則綱領)の養成を図る明治政府にとって極めて有効なイデオロギーとなり得ていたという。

ここから、満洲国の国定「国語」教科書に載る「楠公父子」という教材は、「忠」や「孝」といった言説を用いて間接的に儒教に関係するものでありながらも、「尊皇愛国」の精神を教授するものでもあったといえる。そして、この「楠公父子」および楠木親子を題材とする教材は、建国以前に使用されていた満洲の公的日本語教科書⁽¹⁹⁾においては管見の限り採録されていない。「養老の瀧」や「岳飛」などが満洲の公的日本語教科書においても採録されていることに鑑みれば、この教材が国定「国語」教科書において採られたわけを推し量ることができる。

すなわち、1935年の第二期編纂によって発行された『初級中学校 日本語教科書』の中冊に、天皇に忠義を尽くす人物を描いた「楠公父子」が採録されたのは、回鑾訓民詔書による天皇制イデオロギーの導入と、無縁ではなかったかもしれないのである。

4 神道に関する教材

さて、前の儒教に関する教材では、回鑾訓民詔書からの影響について、一部その可能性を見出すにとどまったが、次にみる神道に関する教材では、その明らかな影響関係を指摘することができる。満洲国の国定「国語」教科書における神道に関する教材には、以下のようなものが挙げられる。

- 「ミカン」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
- 「天の岩屋」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
- 「おろち退治」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
- 「日本のはじまり」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
- 「皇大神宮」(『高級小学校 日本語教科書』上冊・『国民優級学校 日語国民読本』巻二)
- 「メイジセツ」(『国民学校 日語国民読本』巻二)
- 「天長節」(『国民学校 日語国民読本』巻三)

ここでいう神道に関する教材とは、「天の岩屋」のように、神道の拠りどころである記紀神話に取材したものであることから直接的に神道に関係するものだけでなく、「天長節」のように、神道と不可分の関係にある(当代の)皇室にまつわる言説があることから間接的に神道に関係するものも含んでいる。

まず、文教部『高級小学校 日本語教科書』および民生部『国民優級学校 日語国民読本』に採録された五つの教材について考える。

「ミカン」は、記紀神話に登場するタヂマモリの物語教材で、垂仁天皇のためにミカン科のタチバナを常世の国から持ち帰る話である。教授書には、タヂマモリの「忠節を説くのが目的」と記されており、神話に関する教材でありながら「忠君」の精神を教授するものでもあったようである。

残る四つの教材は、『高級小学校 日本語教科書』上冊および『国民優級学校 日語国民読本』巻二の末尾に連続して載る教材である。各々の教授要旨には以下のように記されている。

「天の岩屋」

日本古代に於ける日本皇室の御先祖に因む神話を材料とした趣味的教材であり、且つ日本的教材である。

「おろち退治」

前課を承けて(引用者注:建)速須佐之男命の武勇に関する神話である。八岐大蛇を退治して、娘を救ひ、天叢雲剣を得た話の一節である。本課の出典及び目的等は前課と同じである。

「日本のはじまり」

前二課を承けた神話で天孫降臨として知られた一節である。(中略)天照大神の詔は神勅と

言つて、日本の皇室中心の国体はこれに始まってゐる。本課ではそれを平易な口語に訳したものである。(中略)これによつて日本の祖先崇拜、祭政一致の事実を知らしむべきである。

「皇大神宮」

前三課を承けてまとまりをつけるべき課であつて、皇大神宮を皇室との関係又皇大神宮と臣民の関係を説き、日本国体について知らしめたいのが本課の目的である。

ここで各教材についてその内容を詳述することはしないが、教材の配列についていえば、「天の岩屋」で皇祖神であるアマテラスと三種神器である八咫鏡および八咫瓊勾玉を教授し、続いて「おろち退治」でスサノオと天叢雲剣を、さらに「日本のはじまり」でその三種神器をアマテラスから譲り受けたニニギが高天原から地上へ降りたという神話世界を教授して、これが(当代の)「皇室中心の国体」の始原であると説くのである。そして、最後の「皇大神宮」で伊勢神宮内宮という現実世界の神社を教授することによって、両世界の接続を図るのである(20)。

次に、1938年5月2日発行の『国民学校 日語国民読本』に採録された二つの教材についてであるが、「メイジセツ」が明治天皇の誕生日、「天長節」が(当代の)昭和天皇の誕生日を教授するものである。なお、この『国民学校 日語国民読本』には、巻三に「万寿節」と「建国節」が載る。前者が皇帝溥儀の誕生日で、後者が満洲国の建国記念日である。日本国にとっての四大節だけでなく、満洲国にとってのそれに代わるような日も教材として採録されていたことは注意しておきたい。

では、ここで取り上げた神道に関する七つの教材が建国以前に使用されていた満洲の公的日本語教科書において採録されていたかどうかであるが、結論からいってしまえば一切ない。

だが、神道に関する他の教材は採られており、たとえば、満鉄附屬地で使用された奉天外国語学校『日本語読本』巻五(1922年9版)には、「日本武尊」「応神天皇」「仁徳天皇」という三つの神道に関する教材が載る(21)。しかし、これらはいずれも満鉄との関係が深かった朝鮮総督府の「国語」教科書から流用したものであって、その採録意図に日満親善を説くくらいがあったかは疑わしい。なぜなら、「日本武尊」と「仁徳天皇」をつなぐ「応神天皇」において教授されたのが、「朝鮮ノ人ガ日本ヘ移ツタコト」だからである。

ともあれ、この採録事情をめぐっては質と量どちらからかといっても、満洲国の国定「国語」教科書は建国以前の公的日本語教科書に比して神道に関する教材を重視していたといえる。満洲国の文教部および民生部の「国語」教科書は、天皇制イデオロギー導入の契機となった溥儀の回鑾訓民詔書から大きく影響を受けており、そのことは、「大詔を拝す」や「御訪日」だけでなく、他の教材の採録事情にも色濃くあらわれていたのである。

おわりに

満洲国の教育は、あくまでも国民教育であったのか、それとも帝国日本の「大東亜教育」の一環であったのか。ここまで考察を進め、浮き彫りとなってきたのは、それが二者択一の〈あれかこれか〉の関係ではなく、二者併存の〈あれもこれも〉の関係にあることである。

満洲国の王道主義には、溥儀の回鑾訓民詔書の一つの契機として、儒教との連関であった当初のものから次第にそのなかに神道を胚胎してゆくという変質が起こった。これにより、満洲国における国民教育の方向性に変化が生じ、国定「国語」教科書は、儒教に関する教材はもちろん、神道に関する教材を多く採録することとなった。

儒教に関する教材の「養老の瀧」や「岳飛」は、建国以前に使用されていた満洲の公的日本語教科書においても採られていたが、そこに天皇制イデオロギーは認められない。ところが、建国以前のものに採られておらず、国定「国語」教科書に載る「楠公父子」は、「尊皇愛国」の精神を教授するものであるという点からいえば、そのイデオロギーと無縁ではない。

また、神道に関する七つの教材は、いずれも建国以前の公的日本語教科書には採られておらず、その採録事情からいえば、国定「国語」教科書は、「萬世一系ノ皇統ヲ維持」する日本国との「一徳一心」を謳う回鑾訓民詔書からの影響を明らかに受けたものといえる。

ところで、そのうちの「メイジセツ」と「天長節」を載せる『国民学校 日語国民読本』には、「万寿節」と「建国節」という教材が載せられていた。これはつまり、満洲国を操縦する日本国の君主である天皇を仰ぐよう教授する一方で、満洲国の君主である皇帝を仰ぐよう教授していたことを意味している。いうならば、そこには君主のダブルスタンダードが存在していたのである。

皆川の言葉によれば、満洲国の教育は、満洲国において役立つ人材を養成するための国民教育を目指していたようであるが、その言説の裏に、満洲国において役立つ人材のみならず、帝国日本の支配下にある「大東亜」において役立つ人材となることが含められていたことは想像に難くない。有り体にいえば、満洲国の教育とは、国民教育であり、かつ「大東亜教育」でもあったのではないだろうか。

このように、満洲国の教育には様々なダブルスタンダードがあった。いま触れた国民教育と「大東亜教育」という教育の有り様、また先の天皇と皇帝という君主の有り方、そして先に述べた中国語と日本語（あるいは蒙古語と日本語）という「国語」の扱い方などである。

二者併存の〈あれもこれも〉というかたちで複数のダブルスタンダードを抱える満洲国。その教育に関する研究は、まずその実態を明らかにし、仔細に検討するなかで浮かび上がる問題を、一つひとつ解きほぐしてゆくことが求められるのであろう。

注

- (1) 中国では、国家としての正当性を認めず、「偽満」もしくは「偽満洲国」と表記される。なお本来ならすべてに「」を付すべきだが、以後は煩雑を避けるため「」を外している。後で用いる「満洲」の語についても同様で初出のみ「」を付してある。
- (2) 皆川豊治『満洲国の教育』（『建国読本』第六編／満洲帝国教育会、1939年）1頁、「満洲国」教育史研究会監修『満洲・満洲国』教育資料集成』第14巻（エムティ出版、1993年）所収。
- (3) ここで言及されているのは文部省や民生部の管轄にあった現地民に対する教育であり、日本内地人に対する教育は別の機関がおこなった。
- (4) 磯田一雄「『大東亜教育』と旧『満州』の教科書」『複製 満州官製教科書＝解説』（ほるぷ出版、1989年）14頁。
- (5) ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』（白石隆・白石さや訳／書籍工房早山、2007年）。
- (6) ここでいう中国語とは北京方言のことである。満洲国では満語と呼ばれていたが、満洲民族の言語である満洲語は別にある。
- (7) 皆川前掲書や満洲帝国政府『満洲建国十年史』（『明治百年史叢書』第91巻／原書房、1969年）を参考にした。
- (8) この南満洲教育会教科書編集部は、後に在満日本教育会教科書編輯部に改組される。
- (9) しかし、なかには三民主義の教育を継続し排日教材を使用する学校もあったという（植民地文化学会『「満洲国」とは何だったのか』（小学館、2008年）184頁）。
- (10) 前掲『満洲建国十年史』、783頁。同書によれば、回鑾訓民詔書の公布によって教科書の編纂方針については次のような追加事項があったようである。「一、建国宣言並に執政宣言の趣旨の徹底を期すること」「一、即位詔書並に回鑾訓民詔書の聖旨の徹底を期すること」「一、日本に関する認識を深め、日満不可分の関係を確立せしむること」「一、忠君愛国の志操を鞏固ならしむること」。
- (11) 主に使用した教科書は、竹中憲一編『「満州」植民地日本語教科書集成』七（緑蔭書房、2002年）所収の『初級小学校 日本語教科書』上下・『高級小学校 日本語教科書』上下・『初級中学校 日本語教科書』上中下・『国民学校 日語国民読本』巻二～四と、東京外国語大学附属図書館所蔵『国民学校 日語国民読本』巻一と、東京学芸大学附属図書館所蔵『国民優級学校 日語国民読本』巻一～二である。うち、『国民学校 日語国民読本』は全八巻の教科書であるが、巻五～八は資料が手元になく今回考察の対象とすることができなかった。なお、引用の際に本文の分ち書きは反映していない。
- (12) 愛新覚羅溥儀『わが半生』下（小野忍・野原四朗・新島淳良・丸山昇訳／筑摩書房、1977年）35頁。
- (13) 同前書、36頁。
- (14) 「満洲国」教育史研究会『「満洲・満洲国」教育資料集成』第5巻（「満洲国」教育資料集成Ⅲ期／エムティ出版、1993年）所収。
- (15) 『高級小学校 日本語教科書』と『国民優級学校 日語国民読本』は、前者が文部省著作で後者が民生部著作という違いのあるだけで、教科書の内容は同じである。
- (16) 駒込武「『満洲国』における儒教の位相」『思想』841（1994年7月）71頁。
- (17) 竹中前掲書所収の教授書を用いた。以下同様。
- (18) 中村格「天皇制教育と正成像—『幼学要綱』を中心に—」『日本文学』39-1（1990年1月）。

- (19) 竹中前掲書所収の教科書を用いた。以下同様。
- (20) ちなみに、「天の岩屋」の前課は「お正月」という教材であり、そのなかで初日の出を拝む風習について、「これわ日本の皇室の御先祖が、あまてらす大み神と言つて、太陽の神様とせられているからです」と書かれている。教材配列に工夫の凝らされていることがよくわかる。
- (21) また、南満洲教育会教科書編輯部『中等日本語読本』巻二（1933年5版）には、因幡の白兔を題材とする「白兔」という教材が載るが、これは自習教材であるため教授実践があったかどうか不明である。

第3部 東アジアの昔話研究の歴史と未来

講演

昔話研究の未来をどう考えるか —柳田国男『昔話覚書』から—

石井 正己

1 野村純一・敬子夫妻と関敬吾の関係

今日はプログラムにありますように「東アジアの昔話研究の歴史と未来」ですが、これまでを振り返りながら、どちらかというと「歴史」より「未来」に重点を置くことを考えて、半日を計画してみました。実は、今日講演を予定しておりました野村敬子さんがしばらく前に体調を崩されて、「心配ない」と言うお話ですが、今日こちらに来られません。早く、「関三兄弟」というプリントを用意していただきましたのに残念ですが、「皆様にお詫びかたがた気持ちを伝えてほしい」と承っております。

私が野村敬子さんの仮面を着けて、着物を着て出てくるというパフォーマンスも考えたのですが（笑い）、なかなかあの血気盛んな野村さんには叶わないと思って、今日は諦めました（笑い）。そこで、なぜ野村敬子さんに「関敬吾先生の思い出」というテーマでお話しいただくことを考えたかをご説明して、今日の入口にしたいと思います。

野村敬子さんのご主人は野村純一さんで、先年お亡くなりになりましたけれども、戦後日本の昔話研究をリードしてきたお一人です。昨年（2013）『野村純一著作集』全9巻が完結して、私も最終巻の「解説」を書いたり、『週刊読書人』に「書評」を書いたりしました。野村敬子さんは野村純一さんをすぐそばで見ながら、一緒に昔話研究を進めてきたところがあります。

しかし、二人のあり方は対照的で、野村敬子さんは大学のネットワークには所属せず、女性たちとの強いつながりの中で昔話を研究してきました。ご出身は山形県最上郡の真室川であり、最上地方に生きる「産室の語り」から「外国人花嫁の民話」まで研究しましたが、常にふるさとから目を離さず、定点観測の場所としてきたのです。

振り返れば、野村純一さんの昔話研究が大きく広がっていくきっかけに、関敬吾さんとの出会いがあったことは間違いないと思います。関さんとの出会いがなければ、私が言うのも変ですが、野村純一さんの仕事があそこまで大きく広がったかと言えば、いささか否定的にならざるをえません。師弟関係ではありませんから、人間の出会いというのはおもしろいものです。

一つめは、『日本昔話集成』を『日本昔話大成』に改訂増補してゆく際の協力です。『日本昔話集成』は使いにくいところがありましたが、『日本昔話大成』はずいぶん使いやすくなりました。二つめは、『関敬吾著作集』がそれと一緒に全9巻で同朋舎から出ています。主だった関さんの文章は、それによって目の前に見える形になりました。三つめは御夫婦の仕事ですが、『昔話伝説研究』第8号と第9号の2冊にまとめた「柳田国男『昔話名彙資料』（草稿）」の翻刻があります。これは関さんが大事に保存してきた柳田国男のカードを紹介し、研究の基盤を明らかにするものです。そして、四つめに、『柳田国男未採択昔話聚稿』があります。これは柳田国男が「要らん」と言っ

て×を付けた資料を関さんが大事に保管して、やがて野村さんがその価値を再評価したものです。柳田国男の手で切り捨てられた世界に重要な意味があることを具体的に明らかにした意義は大きいと思います。

この四つを取り上げてみるだけでも、特に1970年代後半、関敬吾さんはもうお年を召した時期だったと思いますが、お二人の関係が実り多いものであったことを思わずにられません。そうした関係を傍らで見てきた野村敬子さんが、「関先生のことならぜひ話したいわ」とおっしゃったので、今日のこの企画になったわけです。

お手元にはプリントだけありますけれども、関敬吾さん、野村純一さんの写真があって、これについてのお話もなさったかと思うのです。報告書の文章は書いてくださるということですが、皆様の前で直接お話ししたいことがあると思いますので、「関敬吾先生の思い出」は来年度に取っておくことにしましょう。お元気になったときに快気祝いを兼ねた会を持ちますので、しばらくお待ちいただきたいと思います。後で今日の様子をお電話を差し上げてお伝えしますので、なにとぞ野村敬子さんのお気持ちを汲んでいただければ幸いです。高い席からですが、お願い申し上げます。

初めに私が趣旨をお話ししますが、実は、野村敬子さんが間をつないでくださって、関敬吾さんのご次男である信夫さんが来てくださっています。今日は、私どもがなかなか知り得ない家族が見た先生の人となりをお話ししてくださるということです。野村さんがご欠席のぶん、関さんには「たっぷりお話ししてください」とお願いいたしましたので、私の前座の後、「父関敬吾のこと」というタイトルで講演をしてくださいますので、楽しみにしてください。

2 柳田国男と関敬吾の豊かな協働と対立

21世紀に入って、私どもはナショナリズムとグローバリズムの挟間で引き裂かれて、政治や経済はもちろん、学問でも苦勞しています。グローバリズムが進むと、一方でナショナリズムが台頭してくるというような関係があるからです。そうした狭間にあって、昔話研究の未来をどう考えるかということについて、ご提案ができればと考えています。

柳田国男の用語の中に、「一国民俗学」という言葉があります。昭和の初年代に提唱した概念で、まず自分の国の民俗を研究しなければいけないと唱えて、日本の民間伝承の採集・整理・分類を促し、そこから新しい学問を作ろうとしました。それに対して、例えば、柳田国男の足元から育っていった石田英一郎は「比較民族学」という言葉を使います。

よく柳田国男と石田英一郎の対立ということが言われますが、この二人はとても良い緊張関係だったのではないかと。石田英一郎ほど柳田国男の学問の成果を受け止めて、それを世界に押し広げて普遍化しようとした人は、他にいないのではないかと思います。最近、「二つのミンゾク学」のように言いますが、「一国民俗学」と「比較民族学」は本当に対立なのでしょうか。

昔話研究で言えば、見事な関係を切り結んだのが柳田国男と関敬吾であることは、誰もが認めるでしょう。低級な対立ならいくらもありますが、お互いの業績に尊敬のまなざしを持ちながら、それでいて対立を辞さない、というようなことができる研究者は稀でしょう。理論が対立すると人間関係まで悪くなってしまうことは、いくらでも見られます（笑）。私は、この二人に豊かな協働と対立を見ています。

二人が一緒にした仕事はいくつかありますけれども、例えば雑誌の『昔話研究』は昭和10年（1935）から12年（1937）に出ています。実質的な編集は関敬吾さんだったと思いますけれども、柳田国男は毎号寄稿し、それはやがて昭和13年（1938）の『昔話と文学』や昭和22年（1947）の『口承文芸史考』に収録されます。

しかし、戦後になると、二人の違いがより明確になってきます。柳田国男は昭和23年（1948）に『日本昔話名彙』を出し、「完形昔話」と「派生昔話」に分類し、国内で昔話がどのように発達してきたのかを明らかにしようとした。まさに「一国民俗学」の指標による昔話の体系化だったと思います。

それに対して関敬吾は、昭和25年（1950）から昭和33年（1958）にかけて、『日本昔話集成』全6巻を次々に出してゆきます。さらに、先ほど申し上げましたように、昭和53年（1978）から昭和55年（1980）にかけて、『日本昔話大成』全12巻が出ます。これに野村純一さんが協力したわけです。全6巻から全12巻ですから、単純に言えば倍になったのです。その間の昭和30年代から50年代にかけて、日本の昔話資料は膨大な量になっていったことがあります。

それまでは録音技術がなく、速記の使用も限られていた昔話採集・調査でしたが、特殊な技能を持たなくても、誰でも参加できるようになります。録音機を持って聞き、正確な昔話を記録できるようになったのです。出版社の後押しもあって、たくさんの昔話集が発刊されると、集成では物足りなくなって増補改訂の必要が生じ、より使いやすい大成に動いていったのだらうと思います。

その後、柳田国男の『日本昔話名彙』と関敬吾の『日本昔話大成』で言えば、私たちは、「一国民俗学」による柳田国男の名彙ではなく、グローバルスタンダードに押し上げた関敬吾の大成を選んだわけです。それは「一国民俗学」と「比較昔話学」の対立でしたが、研究は明らかに世界的な比較研究へ進もうとしていたのです。AT分類に則った「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の3分類を採用して、世界に通用する昔話研究を目指すということ言えば、それは確かな選択だったと思います。

ただし、私たちは、国内の発達はどう進んだのかという問いかけをもって柳田国男が作った名彙も非常に魅力的で、なかなか見捨てがたいものがあります。話型を超えてゆくような昔話のダイナミックな動態は、AT分類ではなかなか見えてこないからです。これからは二者択一で考えるのではなく、この二人の対立をこれからの時代に生かしてゆくことを模索する必要があるのではないかと思います。

3 国際的な比較研究を目指した『昔話覚書』

柳田国男の没50年（2012）に成城大学でシンポジウムがあって、「柳田国男とグローバル研究」というお話をしましたが、これは『現代思想』の10月臨時増刊号に載っています。今日はその話の続きのお話をするようになります。

ここに取り上げる柳田国男の『昔話覚書』は、民俗学や昔話研究ではあまり評価されていないように思います。昭和8年（1933）『桃太郎の誕生』や先の『昔話と文学』からすると、毛嫌いされてきたのではないかと感じます。しかし、私は『昔話覚書』はとても良い本だとかねてから思っているのです。そのことをご説明したいと思います。

今日は便利な『柳田国男全集』を使いますが、昭和18年（1943）4月に『昔話覚書』の初版が出て、そのあと昭和21年（1946）、そして、昭和32年（1957）に改版が出ていますから、1冊の本が戦争をまたいで成長したことになります。

この本は最初に「昔話の発端と結び」という書き下ろしがあります。「昔話」というのは「むかしむかし」と始まって、最後は「どんどはれ」「とーびんと」のように地域によって違いがありますが、これで終わりということを示す言葉で終わります。「昔話」は始まりと終わりに一定の形式を踏んだ話であると定義して使っているのです。

その後には、「猿と蟹」に始まり、「続かちかち山」「天の南瓜」「俵薬師」「鯖大師」などを経て、「味噌買橋」まで並びます。初出を見ると、昭和14年（1939）から昭和17年（1942）にかけての論考を収録していることがわかります。その後に昔話集の序文があり、最後に「昔話解説」という昭和3年（1928）の文章が置いてあります。

全集でこの「解題」を書いているときにも、奇妙な感じがしたのですが、最初の「昔話の発端と結び」と最後の「昔話解説」を挟むようにして、「猿と蟹」から「味噌買橋」に至る国際的な昔話の比較研究が並びます。私の理解では、この本は、「昔話」という日本の言葉を使って、国際的な比較研究ができるということを提案したかったのではないかと考えています。

柳田国男は佐々木喜善と一緒に、大正11年（1920）の『江刺郡昔話』で「昔話」という言葉を採用します。採集に行くと「昔話」を頼めば聞くことができるし、書斎の研究でも「昔話」という言葉を使うことができると考えました。つまり、屋外の採集と室内の研究が「昔話」という言葉で結びつけられるとしたのです。大それたことだと思いますが、日本の言葉を使って国際的な研究をしたいというのが、柳田の野望だったと思います。『昔話覚書』には、日本から輸出できる昔話研究とは何かというような高い志が秘められているのではないのでしょうか。

「自序」を見ますと、「全国昔話記録の、次々に世に出るやうになつた欲びを記念すべく、あれこれ書き散らしてあつた小文を取りまとめて、又一冊の本をこしらへて置くことにした。前集は主として国内の発達、いはゆる説話文学との交渉を説かうとしたものが多いに反して、この方は比隣の諸民族がもつて居るものと、どういふ関係に在るのかを考へるのに力を入れて居るが、是は私のやうな時間の不足な者には、容易に進めさうにもない遠い険しい路である」と始まります。

柳田国男編「全国昔話記録」は、昭和17年から昭和19年（1944）にかけて次々と13冊が次のように出ています。

昭和17年7月	磐城昔話集、佐渡島昔話集、島原半島昔話集
昭和17年12月	紫波郡昔話集
昭和18年1月	阿波祖谷山昔話集、喜界島昔話集
昭和18年12月	直入郡昔話集、上閉伊郡昔話集、南蒲原郡昔話集、老岐島昔話集、御津郡昔話集
昭和19年3月	讃岐佐柳志々島昔話集、甕島昔話集

これは、昔話集を「全国」規模で組織した初めてのシリーズだったと思います。その中には、既刊の昔話集を編み直したものと新しく編んだものが寄せ集められています。例えば、『島原半島昔話集』は関敬吾が書いたものです。もとは昭和10年の『島原半島民話集』です。これが「全国昔話記録」で再編されて、『島原半島昔話集』になったのです。

柳田国男は、今申し上げましたように、「昔話」という言葉を探り、「民話」という言葉を嫌いました。当初の書名を変えても、「昔話」に全部統一しながらシリーズ化していったのです。ですから、関さんは「民話」を使いましたが、柳田国男によって強引に「昔話」に置き換えられ、シリーズとして均一化されたと考えられます。

そうした作業を経たシリーズ化によって、一部の研究者だけではなく、一般の人々が昔話を知る機会が提供されたはずですが。北は岩手県上閉伊郡から南は鹿児島県喜界島までの13冊ですが、「全国」を見渡すことができるシリーズができた意義は大きかったと思います。この「全国昔話記録」が出はじめたことが、『昔話覚書』発刊の機縁になりました。

その前に出した「国内の発達、いはゆる説話文学との交渉」を説いたというのが、昭和13年の『昔話と文学』です。それは、日本昔話の歴史研究であり、「一国民俗学」を体現したものです。それに対して、『昔話覚書』は、「比隣諸民族がもつて居るものと、どういふ関係に在るのかを考へるのに力を入れて居る」と説明しました。これは日本昔話の比較研究と言っていいでしょう。

柳田国男は「一国民俗学」から将来、「世界民俗学」を目指していたという考え方があります。「一国民俗学」が窮屈になって、柳田批判の標的のようになっていますが、「世界民俗学」は未来の課題だったのでしょうか。私はたぶんそうではなくて、もっと両者の並行関係を考えるべきではないかと思っています。一方で採集整理を提唱しておきながら、自分ではぬけぬけと比較研究をやっていくというところが、柳田国男には見られると思います。

例えば、昭和36年（1961）の『海上の道』にしても、「一国民俗学」と言えるような本でないことは明らかです。けれども、この50年間の柳田国男研究では、柳田国男を「一国民俗学」の学者に固定化して考えたがる癖が染み付いています。柳田国男の中にあった世界的な比較研究へのまなざしを認めたくなかったのではないかと感じられます。そういう考え方からすれば、『昔話覚書』は人気がなかったのだと思います。しかし、私にとって、この本は幾重にも魅力的です。

4 柳田国男の比較昔話学と櫻井美紀の反論

また、「自序」には、「西洋の学者の今までの研究は、多くは印度以西の古い交通路上の資料で、近頃やつと少しづつ、世界の他の隅々の調査が始まったのだが、それも偶然の機縁といふほどのもので、たとへば大東亜圏内の諸民族などでは、たゞ昔話が必ず有るといふことを知るだけで、採集はまだ少なくともあまり公表せられて居ない」とします。ここでは、「大東亜圏内」という言葉を使って、近隣地域の調査を刺激しようとしています。

そして、「問題は大きく、人の一生はあまりにも短い。すつかり集めて置いてから、さて愈々研究に取りかゝるといふ様な順序では行かぬのである」と述べます。柳田は研究が出ることによって、採集や調査が刺激されると考えていたはずですが。従って、資料が「すつかり集め」られたわけではありませんでした。やや無理を承知で一步を踏み出すことで、新たな問題提起をしようとしたように思います。

おもしろいのは、この「大東亜圏内」というのが戦後の昭和21年版になると「東方アジア」という言葉に置き換えられることです。全集の「解題」にも書いておきましたけれども、この後ろには

「大東亜圏」という言葉が出てきますが、これも「東大陸」という言葉に置き換えられます。同じ本ですが、戦後になるとふさわしい言葉に置き換えられて生き延びてきたのです。

また、「今から百何十年も前にグリム兄弟が、独逸の片田舎で聴き集めたもの」の中にも、日本で我々の祖先たちが、楽しみ語つて居たのと先づ一つといつてよい話が、五十は安々と拾ひ上げられると謂つて居る人もある」と述べます。グリム童話と一致する話が50くらいあるというのは、田中梅吉や関敏吾などの意見を取り入れての见解でしょう。それだけグリム童話と日本の昔話は共通性が高いのは、「全く我々の知らない原因があるのだ」と考えなければならないと言うのです。

これは、非常に難しい問いを私たちに残しています。例えば、グリム童話と日本の昔話を比べ、「どのように似ていて、どのように違うか」ということを考えます。しかし、柳田国男が考えているのは、そうではなくて、「なぜ似ていて、なぜ違うか」というもう一步踏み込んだ問いかけです。これに答えようとする、たぶんこうだったのではないかと無理して言わなければなりません。

例えば、「味噌買橋」で言うと、柳田国男が出した問いかけに対して、亡くなった櫻井美紀さんが「大工と鬼六」に次いで取り上げ、大正期の翻案によって日本にもたらされたのだということを明快に言ったわけです。なぜ「大工と鬼六」が西洋の話と似ているのかということは翻案を介すれば見事に説明できるし、「味噌買橋」もそうだとしたのです。櫻井さんは、柳田国男の問いかけに対して、「いや、そうではありません」と反論して、動かない解答を出したのです。

そのようにもう動かない答えが明快に出ればいいのですが、それはなかなか難しいところがあります。けれども、「どのように似たり、違ったりしているのか」ではなくて、「なぜ似たり、違ったりしているのか」という本質的な問いは、なかなか手が届かないかもしれませんが、「比較昔話学」の目指すべき究極の目標でしょう。

そもそも国が違う、民族が違う、言語が違うのに、奇妙な一致がなぜ起こったのか。「果してどういふ手順を重ね、又はどれ程の年月をかけたか、斯ういふ不思議が実現し得るものか。我々にはまだ之を明かにする方法は立つて居ない」と述べます。柳田自身、とてももどかしい思いの中で『昔話覚書』を出したことがわかります。しかし、批判を恐れずに問題提起を述べる本はすばらしいと思いますし、私自身が書いてみたいのはこうした本です。

この『昔話覚書』には、どうやって世界的な比較研究に踏み出そうかというときの、柳田国男の心構えがよく出ています。「自序」の結びは次のようになっています。

全国昔話記録の個々の事業なども、今まで無いも同然であつた国民生活の一面を、知り且つ検査し得る状況に置いたといふだけで、もう一つの功労だつたとは言へるであらうが、それよりも更に大切なことは無意識の間に、この人類の過去にとつて最も興味の深い事績を、国の学者の創意によって、判別し又解説するといふ事業の最初の推進となつて居るのである。勿論昔話の国内に於ける発達を、細かに見て行くといふこともよい学問であらうが、是と併行して日本と四囲の諸民族との心の繋がり、もしくは精神生活の帰趨ともいふべきものが、下に隠れてどれだけの一致を具へて居たかといふことを、見つけ出さうとする努力も軽んじてはならぬ。

「昔話の国内に於ける発達を、細かに見て行くといふこと」というのは、「一国民俗学」にもとづく昔話研究のことであり、「日本と四囲の諸民族との心の繋がり、もしくは精神生活の帰趨ともいふべきものが、下に隠れてどれだけの一致を具へて居たかといふこと」は、「比較民俗学」にもとづく昔話研究のことです。その際に、両者の関係を「併行して」と言っているのが大事だと思います。昔話の国内の発達と「併行して」、周辺諸民族との関係を考えるべきだということです。これは、「一国民俗学」から「世界民俗学」へという段階を踏むような発想ではありません。従つて、柳田国男を「一国民俗学」に限定するのは誤りだということになります。

しかも、重要なのは、「心の繋がり」や「精神生活の帰趨」を見つけ出そうとする点です。柳田にとっての昔話というのはそれ自体に魅力があるというより、日本人の「心」や「精神生活」を知るための素材であると考えていたように思います。柳田が昔話にあれほどの情熱を注いだのは、自分の方法を鍛え上げるための最も重要な場所だったからにちがいありません。

5 柳田国男が唱えた共同研究の必要性

先ほども申し上げましたように、『昔話覚書』は戦後、昭和21年版が出ます。「再版の序」は、「三

省堂の全国昔話記録が、戦時中にも拘らず飛ぶやうに売れてしまひ、その一部は確かに外地に滞留する同胞の手に渡つて居ることを知つて、私はやゝ美し過ぎるといつてもよい夢を、胸のうちに描いて居た」と始まります。「全国昔話記録」が飛ぶやうに売れた需要には、外地で暮らす日本人に昔話を送るということがあったのです。

昭和32年版の「改版序」には、さらに細かく書いています。「国の隅々に行渡つて、あの頃最も盛んであつたのは、いはゆる慰問袋の蒐集と輸送で、これには専ら女性が参与して居り、その心を籠めた数々の物品の中には、大抵一冊か二冊の本がまじつて居た。私たちの昔話集も戦地で読んでみたという通信は受けたことがないが、少なくともある部数、海を渡つて行つたことは確かであつて、それは結局焼いたり破つたり、無いも同然に帰したのであらうけれども、さうは思へないでなほ当分の間、極めて稀有なる幾つの場合を空想して、その終局の効果を待つやうな気持が抑へられなかつたのである」と述べます。野村敬子さんはこのことにすごくこだわっていて、また改めてお話ししてくださると思いますけれども、「全国昔話記録」の需要の中に慰問袋の中に入れて送るということがあったのです。戦地にいる兵士にふるさとの昔話を届けたのです。

実際、戦地で語られた昔話のことは、例えば、山形県の新田小太郎さんのことを渡部豊子さんが書いています。戦場で男たちが次々とふるさとの昔話を語って心を慰めたというようなことが、新田小太郎さんの証言に出てきます。戦争中の昔話の働きに関する極めて重要な問題に、柳田国男も突き当たっていたのだらうと思います。

一方、戦後になってこの改版を出したきっかけには、「水沢君等の活躍が始まつた」とあり、新潟県の水沢謙一の活躍があつたと思います。末尾には「近頃は又田畑英勝君などが若干の例を附加して居る」として、奄美の田畑英勝の名前も挙げています。そういった人たちの活躍で、戦後も「まだまだ昔話の元あつた姿が、見つけ得られるといふ希望」を抱いたのです。

そして、このように述べます。

『昔話覚書』は、前の『昔話と文学』に対立して、彼は一国の文学の文字になる以前といふものを考へてみようとした代りに、こちらは主として二つ以上の懸け離れた民族の間に、どうしてこの様な一致又は類似があるのかを、考へてみようとした試みのつもりであつた。これは勿論もつと多くの本を集めて、もつと綿密に読み比べてみなければならぬのに、大きな戦が始まつて外国書の輸入がとまり、自分も生活が煩はしくなつて、読書が意の如く進まなかつたので、それを口実にして中止してしまつたのだが、実は始めから、これは一人では覚束ない大事業であつた。

初版の「自序」を繰り返しながら、戦中の挫折を述べています。大事なのは、「実は始めから、これは一人では覚束ない大事業であつた」という点です。つまり、二つ以上の民族の間にどうして昔話の一致や類似があるのかを考えてみるには、共同研究が必要だと言っているのです。南方熊楠は一人でたくさんの言葉が使えたと言いますが、そうした天才を除けば、国家・民族・言語の違いを乗り越える国際的な比較研究は、一人ではできません。

例えば、日本民話の会の外国民話研究会は、まさに一人では覚束ない事業を共同で進めてきました。三弥井書店からテーマ別に資料集が刊行されていますし、話型研究は雑誌の特集号にまとめています。外国民話研究会の方々がどの程度意識しているかは聞いたことがありませんが、この共同研究は柳田国男が言っていたことを引き受けているように見えます。

6 柳田国男の警戒感と関敬吾の影響力

もうそろそろ区切りにしなければいけません、その後には、「民話」という言葉への批判が出てきます。木下順二・宮本常一・吉沢和夫、いろいろな人たちが関わった雑誌『民話』が出るのは、『昔話覚書』の昭和32年版よりはやや後れて、昭和33年です。しかし、すでにその雰囲気は十分あつたのでしょう、柳田には「民話」という言葉に対する警戒感がすごくあつたと思います。

なぜ「民話」がだめかと言うと、それでは「成るだけ元の形で聴いて置かう」とするのに不適切だったからです。そして、「民話」に対する批判のとどめをさすように、「民話などといふ新語を平気で使つて、これでももとの姿が説明し得られるなどと思つて居る人たちに、成るべく遠くの方から見て居てもらはぬと、久しく東海に孤存して居た日本島群の、固有の文化史的使命といふものが

果せないかもしれない」と締め括りました。「もとの姿」を知ることによって、「固有の文化史的使命」を明らかにするには、「民話」という言葉はふさわしくなかったのです。

この「改版序」は、柳田は昭和37年（1962）に亡くなりますから、亡くなる5年前の遺言のようにして残した言葉の一つだったと思います。「民話」という言葉にしても、関敬吾さんが使った場合、今使っている場合、それぞれ意味にずれがあるように思います。『昔話覚書』は、柳田国男がそうした批判を含めて、未熟ながらも積極的に踏み出した成果を未来につなげようと思って改版したことは間違いありません。

冒頭に申し上げましたように、「東アジア」という地域を考えると、日本に限らず、韓国・中国それぞれのナショナリズムが台頭し、また一方ではグローバリズムの大きな力がかかっていることは無視できません。政治や経済だけでなく、学問も例外にはなりません。そうした引き裂かれた構造を克服してゆくには、「中間領域」が必要なのではないかと思っています。

ヨーロッパではEUが経済的にそうした役割を持っていますが、経済だけでなく、学問の問題として考える必要があります。東アジア、特に日韓中の共同研究は各方面で盛んに行われていますが、もっと活力のある活動にしてゆけば、ナショナリズムとグローバリズムに引き裂かれた構造を克服してゆくための「中間領域」になるのではないかと思っているわけです。

そのときにまず第一に大きな障害になるのが言語の差です。日本語・韓国語・中国語の違いをどのように超えてゆくのかという課題があります。それを壁と見て後ずさりするのか、むしろ、乗り越えるべき目標と考えるのかは大きな違いでしょう。単なる共同研究ではなく、それぞれが違いを調整してゆくような創造的な能力が問われている時代だろうと思っています。

関敬吾の『日本昔話集成』『日本昔話大成』が東アジアのグローバルスタンダードになったのは、簡単に言えばAT分類を採用したからです。アールネ・トンプソンの分類から見てゆくと、日本の昔話がこう見えるということを示した意義は絶大でした。東アジアの外側には、グローバリズムに支えられた英語圏の研究があり、もう一つ大きな言葉の壁があることを考えずにはいられません。昔話研究を世界に発信するには、英語で資料を作り、論文を発表しなければならないという現実があります。

柳田国男は、「昔話」という言葉を使って、この国の学問が輸出できるのではないかと考えていたと思います。しかし、実際には、韓国や中国の昔話研究、特に昔話の分類方法で影響を与えたのは関敬吾です。韓国では崔仁鶴さんが影響を受け、中国では関敬吾の『日本民間故事選』というアンソロジーも出ています。アジアに輸出されてきた日本の昔話研究ということで言えば、柳田国男より、むしろ関敬吾だったのではないかと思っています。私たちはそのあたりを視野に入れながら、東アジアの昔話研究を考えてみる必要があります。

初めから取り留めもないお話になりましたけれども、野村敬子さんの補いになったかどうかわかりません。今この辺で、「あなた、足りない」みたいな声が聞こえてきそうですけれども（笑い）、野村さんの席はまた別の機会に用意しますので、そこにつながる私の前座はこのくらいにしておきたいと思っています。

参考文献

- ・石井正己「解題 昔話覚書」『柳田国男全集 第13巻』筑摩書房、1998年
- ・石井正己「柳田国男とグローバル研究」『現代思想』第40巻第12号、2012年。
- ・櫻井美紀『昔話と語りの現在』久山社、1998年。
- ・野村純一監修、井上幸弘・野村敬子編『やまがた絆語り』星の環会、2006年。
- ・渡部豊子編『大地に刻みたい五人の証言』私家版、2010年。

父関敬吾のこと

関 信夫

1 「信夫」は師事した折口信夫から戴いた名前

ただ今ご紹介に預かりました関信夫（せきしのぶ）と申します。本日このような東京学芸大学フォーラムにお招きいただき、誠にありがとうございます。私、このような高いところから大勢の皆様の前でお話をしたことが無いので、お聞き苦しい点があると思いますが、どうぞご容赦ください。

今、先生から「しのぶ」とのご紹介がありましたが、父が若いころ折口信夫に師事しまして、そのとき戴いた名前だと聞いております。私には位が高いような名前かと思いますが大変ありがたい、すごく良い名前だと感謝しています。

私の兄弟は五人おりますが、父の跡を継いだものは誰もおりません。父は誰かに学問の道に進んでほしかったと思いますが、兄弟違う道に進み父の意志を継がなかったことが残念だったと思います。

また、今日2月1日は、偶然ですが、私の母（関政衛）の106歳の誕生日にあたります。父はもう15、6年前に90歳で亡くなりましたが、これも何かのご縁だと思います。多分天国で、今日、私が父のことを語るということで喜んでいてのではないかと思います。

前置きはこのくらいにして、父の育った環境、民俗学に進んだ動機だとか、家庭の父の一端を喋らせて頂きます。

その前に父の家族関係について少し話させていただきます。今、石井先生からご案内がありました、小浜文化館（長崎県雲仙市）で作った資料がございますので、それをご覧下さい。

2 父母と10人兄弟姉妹

関敬吾の父、慘治（さんじ）と申しますが、安政2年（1855）7月に長崎県で生まれました。大正7年（1918）12月、63歳で亡くなりました。小浜町の収入役や村会議員を経て漁業の道に入ったように聞いております。母、タダシも安政4年（1857）11月に生まれ、75歳で亡くなりました。母は高等教育を受けたせいか、教育熱心だったように聞いております。

兄弟姉妹は、男5人、女5人の10人兄弟でした。兄弟は多かったですが、私は四男の寛之叔父さんにしか会ったことはありません。その他の叔父・叔母はそれ以前に皆亡くなっていました。

長男、一男（かずお）は帝国大学医学部を卒業しまして、海軍の軍医になり満州事変で軍艦の医長でしたが、結核に罹り33歳の若さで亡くなりました。ドイツ語に長けていたそうです。

次男、二翁（つぎおう）は長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）を卒業して、やはり軍医になりましたが、やはり結核に罹り29歳の若さで亡くなりました。

三男、衛（まもる）は長崎師範（現長崎大学教育学部）を卒業し、児童教育に大変熱心であり、学校のなかった地域に分教場を作り子供教育に力を注ぎました。後に長崎活水短期大学で美術を教えました。また帝国美術院展覧会（帝展）にも何回か入選した絵描きでもありました。49歳で亡くなりましたが、「普通教育に於ける芸術的淘汰」の著書で児童を主体とした図画教育の方向性を提案いたしました。

四男、寛之（かんし）は東洋大学を卒業し、児童心理学を専攻し、東洋大学教授を経て、昭和21年（1946）長崎県小浜に戻りました。その後長崎大学などいろいろな大学の教壇に立ち、また地域では農地委員や公安委員を歴任し、地域に貢献したようです。若いころ帝国大学学士院から研究費を交付されるなど児童心理学の研究に励み、日本児童心理の研究で東京大学から文学博士の学位を受けました。昭和37年（1962）に73歳で亡くなりました。

五男が私の父、敬吾（けいご）です。90歳で亡くなりました。東洋大学でインド哲学を専攻し、卒業後東京大学図書館司書になり、そこで民俗学に大変興味を持ち、これがライフワークとなりました。折口信夫の研究会に入りましたが、後に柳田國男に師事したように聞いております。職業も東京大学の司書を始めGHQ、国立音楽大学教授、東京学芸大学教授、ドイツゲッティンゲン大学客員教授、東洋大学教授などを歴任しました。また民族学協会理事、文部省文化財審議員、日本口承文芸学会会長等の職にも就きました。

3 思い悩んだ挙句の家出

関敬吾の父親、慘治は小浜町の収入役、村会議員を経て網元になりました。近海漁業でありましたが、大型漁船を2艘持ち、網子50人ほど使っておりました。漁業は大変好調であったように聞いております。小浜では「西の関」と言われ一、二を争う網元でした。時の流れと経済恐慌や子供の高等教育、そして長男・次男の療養などもあり経済的にも苦しくなり、多くの借金をしました。その後近海漁業だけでは多くの網子を抱えていくには限界があったようです。

私の祖父・祖母のことは詳しく知りませんが、両親とも大変教育熱心だったように思います。なぜなら、小浜町は小さい町です。わずか数百世帯のしかない集落から、明治・大正の時代にかけて5人の男たちが大学に行きました。また長男・次男は医者になり早死にした為、親から「もう医者にはだけはならないでほしい」と言われて三男以降は教育の道に進んだように聞いております。

両親は家業を継ぎたがる者が誰もおらず悩んでいたそうです。父は両親から関家の跡を継ぐように言われ長崎の水産学校に通いました。当時から父は物を書くこと（作文）が大好きだったように聞いております。

ある時父に、「なぜ文学の道を選んだのか」と聞きましたら、「近海漁業が大漁のときと不漁のときの波が大きすぎる。またやがて大資本の漁業の時代になってくる。大資本の漁業には今の関家の経済状態や力では難しいので漁業の道を避けた」と言っていました。心から漁業の跡取りにはなりたくなかったように思います。したがって東京に行って勉強がしたいと言いましたが、親と何度話し合っても結論は出ませんでした。また周囲の方々に相談しても家業を捨てても良いと言う人は誰もおりませんでした。仕方なく意を決し、東京にいる四男の兄を頼って家出をしたと聞きました。

それで、「家出するまで勉強がしたいなら仕方ない」と言うことで、半ば親も諦めたように聞きました。ただ「お前は関家を潰すのか、自分の進む道をよく考えなさい」と言われ、父も大変悩んだように聞きました。

4 長崎と往復しながら勉強

兄を頼って東洋大学に進みました。そのとき父親の慘治は既に他界しておりました。郷里では母親のタダシが家業全体を見ていました。漁は信頼のおける人を責任者にして続けました。しかし金銭は別で魚が捕れると電報が来て、金銭処理の為急いで長崎へ帰りました。したがって東京と長崎の間を何回往復したか覚えていないくらい行き来したそうです。

当時長崎まで陸続きではございません。関門海峡を船で渡り長崎に行きましたので、特急で28時間あまりかかりました。更に長崎から小浜までは、当時だったら半日以上かかったと思います。今でも長崎～小浜までバスで1時間以上かかります。したがって東京を出てから家に着くまで1日半か2日も掛かったことと思います。1年のうち何日学校に通ったか良く分かりませんでした（笑）。

友達にノートを借りて勉強したようですが、あるとき、友達が「関、卒業できるのか、卒業できるか賭けようか」と言われたので、「父は5番以内で卒業する」と言ったそうです。友達には本気と思われなかったようでしたが、奮起して勉強して定かではございませんが、5番以内で卒業したように聞きました。

またなぜドイツ語を選択したのかと聞きました。当時水産学校でしたので英語の勉強はあまり習わなかった為、大学に入って一から英語を勉強しても皆さんに追いつけない。ドイツ語なら勉強している人が少ないので、何とか追いつけると思いドイツ語を選んだそうです。また医者であった長男の影響もあったようです。当時東京外国語学校には夜間部があり、そこで学んだように聞きました。体が丈夫で頑張れたのは水産学校時代に精神的にも肉体的にも鍛えられたのではないのでしょうか。

5 博士論文の清書を手伝う

父は大変子煩悩でした。現在と当時では大きく異なりますが、私は夏休みや春休みに、一般家庭のように海や山に連れて行ってもらった記憶は殆どありません。なぜかと言いますと、夏休みや春休みのまとまった時間は父の調査や、昔話の採集などで殆ど家にいませんでした。小さい頃に友達から海や山に行った話を聞くと羨ましく思いましたが、今考えると自分の研究の為寸暇を惜しんでいたの、仕方が無いことと思います。たまに学会があると母や姉・妹がついていったことがありました。これが父の家族サービスだったのかなと思いました（笑い）。

また、父は口では言いませんでしたが、我々兄弟の誰かが父の跡をついで教員になってほしいと考えていたようでした。この中で父の生の原稿を読んだ方は殆どいらっしやらないと思いますごく悪筆でした。普通、原稿用紙は縦書きですが、升目に関係なく、横書きにして、しかも独特な字で書くので多くの方は読めませんでした。ある程度の理解は出来ませんが、文字を捉えると分からない字が多い原稿でした。

出版社の方は大変苦労されたことと思います。最初の校正係りは兄の仕事でした。兄が卒業したら次は私の仕事になりました。従って父の文章には多く接しました。このことは我々に、少しは興味を持って跡をついで欲しいと思って手伝わせたのかもしれませんが。昭和36年（1961）頃博士の取得制度の変更があり、父の博士論文を手伝わせられました。博士論文は確か3冊必要でした。当時のコピー機は湿式でしたので厚い原稿用紙のコピーは無理でした。したがって3部とも手書きで清書をしました。何百枚あったか記憶にありませんが、父も苦労して書いたと思いますが、私の大学卒業の時期に重なり遊ぶ暇もなく、私も随分苦労させられました（笑い）。

また父は机に何時間向かっていても、あまり苦労にならなかったようです。長いときは朝起きると夜寝るまで食事の時間を除き、14、5時間も机に向かっていることも多くありました。足が痺れると座椅子に座って「今日は原稿を何枚かいたよ」と自慢していることも度々ありました。

6 父の趣味

父の趣味、あまり多くはありませんでしたが、絵を描くことが好きだったようです。それに意外だったのは編み物が出来、若い時には自分でセーターを編んだそうです。その後は時間が惜しかったのか、勉強の時間がもったいないとあまりやりませんでした。

その他はプロレスと相撲が大好きでした。最初の頃はラジオでしたが、その後はテレビになりましたが、いつも机に向かっているのに、相撲の時間になるとテレビの前にかじりついていました。たまにその時間に来客があると「気の利かない奴だな、人の楽しみを邪魔して」などと言っていました。母に、「それだったら、相撲とプロレスの時には、お客さんに来ないでくださいと言ったら如何ですか。そうすれば多分お見えになりませんよ」と言われたこともありましたが、父らしいことだなと思います。

7 昔話の思い出・ドイツの生活・カード作り

私が小学校の頃、父は気が向くと子供たちを集めて昔話をしてくれました。「昔、お母さんがよくきかせてくれたよ」と言いながらいろいろな昔話を聞かせてくれました。また「近所の子供も皆集めておいで」などと言われたこともあります。そのときはお菓子が出るので皆、喜んで集まってきました。どんな話だったか、詳しくは覚えていませんが、吉四六さんの話が印象に残っています。

東京学芸大学退官後は、是非グリム兄弟の研究がしたいのでドイツへ行きたいと言っていました。そのこともありドイツのゲティンゲン大学に客員教授として1年半余り行きました。慣れない土地で言葉、講義やグリム兄弟の調査等で体調を崩し、1年余り入院しましたが、70代で一番脂がのっている時期に時間を無駄にしたと大変悔やんでいました。

入院中は医者や看護婦の目を盗んで、消灯後ロビーで原稿書きをして、注意されたことも度々ありました。

昔話の分類にカードを使いました。昔話を1話ずつカードに書き込み分類していました。何万枚カードがあったか分かりませんが、現在のようにコンピューターがあれば、記録・分類など簡単に、しかも効率よく研究が出来たと思います。父独自の方法で分類していましたが、これらの資料も散逸してしまいました。

先程石井先生からもお話がありましたが、昔話を採集に行った際の苦労話を私も聞いております。

当時は録音機材も限られていていましたが、採集の際の苦労話なども多く聞きました。

8 頑固な父

父は大変頑固でした。一度言うとなかなか曲げません。日本口承文芸学会の会長だったとき、任期終了で会長を辞任するとき、名誉会長に推薦したいとの話があり、「そんな不名誉会長など要らん、君たちそんなことを考える暇があったら、論文の一つでも書いたらどうだ」と言ったそうですが、真偽の程は分かりませんが、父ならありうることもかもしれません。昔話の分類方法で柳田國男と考え方が相違してから、柳田邸に出入りがなくなったとか、定かではございませんがいろいろなことがありました。

9 残された資料の利用を！

我家には父が集めた資料が多くありました。我々家族にとっては宝の持ち腐れと言うか、殆ど役に立たないものでした（笑い）。貴重な資料で、例えば雑誌では『民族学研究』『昔話研究』、更にドイツの昔話に関する雑誌など比較的バックナンバーが揃っているものがありました。昔、父が生きているときに「パパが死んだ後我家の書物をどのようにしてほしいか」と聞きましたら、父は大変怒って「ふざけるな。俺の生きている内にそんなことを言う奴がいるか」と一喝されました（笑い）。父にとって本は唯一の宝であり、自分の命の次に大事なものだだったと思います。

父の亡くなった後残った資料や書籍は大学の図書館などから寄付の依頼もありました。遠野市が「関敬吾記念文庫」を作って下さるとのことで、約3万2千部の書物や資料を寄贈いたしました。日通のトラックで何回は運んだか分かりませんが、整理運搬にかなりの日数を要しました。今日講演をして下さる予定だった野村敬子さんのご主人である野村純一先生にご尽力を頂きました。現在私たちが望んだ形にはなっていませんが、これから昔話・民話を研究される方々のお役に立てれば幸いです。

父は晩年、散歩がてら本屋さんに行くことが唯一の楽しみでした。88歳のとき紀伊国屋の帰り荻窪駅で転倒し骨折したのが原因で、平成2年（1990）1月に90歳で人生の幕を下ろしました。

10 父（関三兄弟）の残したもの

長崎県の小さな村から3人の学者が誕生し、その内2人は文学博士になりました。小浜の生家の跡に関三兄弟の功績をたたえた案内看板が立ちました。また文化会館には3人のコーナーが出ました。

また遠野市の図書館に関敬吾の文庫も出来ました。大変嬉しい名誉なことと思っております。

私達にとって関敬吾は大変厳しい親でもあり、また同時に優しい最高な父でした。

今日お集まりの方々に父の学問や資料が少しでもお役に立って戴ければ幸いに存じます。いろいろ取り留めのない話を申し上げ、大変失礼致しました。ご清聴有難うございました。

関敬吾先生の思い出

野村 敬子

1 幻の昔話集

人は時代を選んで生まれることは出来ませんからね。

それは深い溜息のような言葉であった。関敬吾先生に初めておめもじした日に聞いた言葉である。関先生は病院のベッドを机のように使われて原稿を書いておられた。

ドイツで身体を壊しました。食べ物が堅い。部屋で密かにパン粥を煮て食べました。野村さんに頼みたいことがありますね。昔話採集の時に、聞いてきて貰いたいことがありますね。満州のことですよ。

私は満州という言葉を知っていたが、如何にも唐突でたじろいものであった。それほど当時の私には中国の東北への関心というものは不足し認識も不十分で、関先生の頼みもすぐには呑み込めなかった。太平洋戦争から22年以上過ぎて、安穏な子育て中の家庭婦人であった私は間違いなく平和ボケで、先生の頼みの意味も判じられない有様であった。

それは柳田国男経由の依頼による「満蒙開拓少年義勇軍に送る慰問袋に入れるための昔話集」に関わるものであった。

柳田先生の後ろには〈満蒙開拓義勇軍建白書〉を書いて閣議に出した石黒忠篤農村更生協会理事長がいる。その後ろには大本営がひかえていますからね。東北や信州、広島の話を入れるようにという命令でした。

地方を限定した昔話への指示は義勇軍の少年たちが、それらの土地から出征している様子と知られた。当時第八次募集まで総計88474名の少年たちが満州に渡っていたということ、後々知るところとなった。関先生は命令の意を汲み、早速『旅と伝説』『昔話研究』『全国昔話記録』などの資料から昔話を選び、1冊に纏めて提出した。しかし、その後に昔話の行方については何も連絡はなかった。無いまま終戦を迎え、時代が変わり続けて、人生の忘れ物をしたように思っ過ぎて居られたらしい。病院で『日本昔話大成』の仕事を始められて、「幻の昔話集」が改めて病院暮らしの鬱屈となった様子が知られた。頼みごとの意味は実に重いものであった。以来、私の探訪は大きな宿題を背負ったのであった。

あなたが山形県最上郡を昔話探訪地に定めた定位置観察を行っているので、満州から帰国した人に聴き取りを頼みたい。

最上郡真室川の資料も入れました。その資料を投稿した方は俳句をたしなむ女の人ではないかと、なるべく女の人のもを入れました。もし慰問袋に入っていた昔話集を記憶している人が居たらと願っているのです。

聞けば私の故郷の山形県最上郡真室川から投稿してきた鮭延瑞鳳の資料も入っているという。女性の昔話を入れたのは、満州でお母さんを思い出すかという心遣いだと知られた。関先生の昔話が

抱く本源的な優しさにふれた思いであった。それは魂を揺さぶる深い感動であった。

その初対面から関先生との距離を縮める出会いが始まった。

大変に偉い方とは承知しては居ながら、先生のお心の裡にわだかまる混沌とした時代の闇をかかえて病床においでのお様子を見る私には、人間としての使命のようなものに駆り立てられているように見えたのであった。採訪のたびに報告に寄せていただいた。かなりつらい訪問が続いていた。採訪で何う先には仏壇に幼さを宿す顔写真ばかり、生きて帰られた方は皆無であった。

「満蒙開拓少年義勇軍」には慰問袋作戦があった。送り出した家族には学校から慰問袋に入れる品や手紙を集めにきた。都会でもそれが賑やかに行われ、新橋の芸者さんが慰問袋を送る写真が新聞に掲載されたりした。当時は紙の配給も不自由であったが、柳田国男の発案で軍隊の慰問袋に『全国昔話記録』が入れられることになって6000部の発行がなされていた。満州もこの発想に基くものであろう。

山形県の満州熱はたいへんなものであった。そこは石原莞爾関東軍参謀、その傘下で満蒙調査をした拓務大臣・首相の小磯国昭、東亜経済研究所の大川周明、『満蒙開拓少年・少女義勇軍教本』を制作した小磯の秘書・関司安正らを輩出し、「東亜連盟協会」本部を置いた土地柄であった。とりわけ新庄市は拠点として重要であった。その地には「雪害研究所」があり、満州への実習地とした「昭和開拓村」も残っている。[詳しくは石井正己編『帝国日本の昔話・教育・教科書』（東京学芸大学、2013年）所収の、野村敬子「満蒙開拓青少年義勇軍」参照]。

関先生は初対面で、私に向けた一つの質問をされた。

銚延瑞鳳という人は俳句をつくる女性ではないか。昭和十二年頃の投稿者であるが。綺麗な字を書いてあった。

それは『昔話研究』の編集時代に強く印象に残った投稿者であったという。その銚延原稿は和紙に香をたきこめた、水茎の跡も麗しい文面であったという。その稿は山形県最上郡真室川の昔話資料であったが、先生の期待に反して銚延瑞鳳は曹洞宗正源寺住職であった。「僧衣の口演童話家である」と申し上げると、関先生は暫く考える風であったが、

そうでしたか。満蒙開拓少年義勇軍の資料にはなるべく女性の投稿、能田多代子、本間キテ、長谷川玉江、瀬川清子、小山いと子、丸山久子などの昔話を入れるようにしました。お母さんを思い出すと、女手かと思つて銚延瑞鳳資料もそうして入れました。

と、遠い日の記憶をたどってくださった。病院に来るように私を呼ばれたのも、『昔話研究』（第2巻第4号 昭和11年〔1936〕8月）の真室川資料にあったことと察知したが、関先生の優しさに深く感じ入った。国策の慰問袋で、故郷の昔話をと考へた柳田国男は前線の将兵のもとに送る配給の紙を調達し、6000部の集を作ったという。この満蒙開拓少年義勇軍の昔話集にもかなりの紙の配給をうけたようである。軍国の昔話の運命も「時代を選んで生まれることが出来なかった」が、そこに関わった先人たちの心情、苦衷についても、忘れがたい記憶となっている。

2 島原の顕彰碑

「人は時代を選んで生まれることは出来ません」とおっしゃった関敬吾先生は明治32年（1899）7月15日、長崎県南高来郡小浜村（現雲仙市小浜町）富津にお生れになられた。

その生家跡地近くに、「関三兄弟を顕彰する説明看板」が設けられた。関家の三男、四男、五男が揃って研究者、教育者として功績を遺した事績を顕彰したものである。

「小浜文化館」の敬吾の顕彰文言は次のようである。

敬吾は、明治32（1899）年に五男として誕生しました。大正13年（1924）年、東洋大学を卒業ご、東京大学司書、文部省民族研究所の嘱託、国立音楽大学教授、東京学芸大学教授、ドイツのゲッティンゲン大学客員教授、東洋大学教授をつとめました。また一方で日本民俗学会理事、

文部省文化財審議会委員などの役職もつとめました。

昭和37年（1962）年に文学博士の学位を受けました。そのほかにも、昭和17年勳八等瑞宝章、同46（1971）年勳四等旭日小綬章、同52（1977）年柳田国男賞を受賞するなど多くの賞も受けています。平成元（1989）年90歳で死去しました。

敬吾は日本の民俗学の第一人者であった柳田国男に師事して昔話研究をすすめました。柳田がはじめた昔話の採集とその目的意識を敬吾が継承したともされますが、ヨーロッパの民俗学理論を積極的に摂取しながら、昔話を国際的な比較研究のなかで分類した敬吾の研究は、師の柳田とも違った研究の到達点を示したと高く評価されています。次のようなエピソードが残っています。昭和48（1973）年に入院闘病中であった敬吾のもとを他の研究者が訪ねたところ、敬吾は病床にありながら数百枚におよぶ自身の原稿を校正したり、執筆したりしていたそうです。敬吾の研究への厳しい姿勢がうかがわれます。（関信夫氏提供）

関家は小浜で網元をつとめていた。五男敬吾は稼業を継ぐべく大正3年（1914）から2年間、長崎水産講習所に通う。作文の成績は抜群、高山樗牛の『文は人なり』に傾倒した文学少年であった。樗牛のような哲学者をめざしたいと願っていた。

ある日、敬吾少年は家出をする。9歳違いの兄を頼って上京。母親を説得して大正10年（1921）東洋大学進学をはたす。しかしイワシ漁の季節になると3か月ほど網元の仕事をしに長崎に戻った。母親の気持ちに配慮するためであったという。学友たちが「関君は進級できるだろうか」と心配するほど休みが多かったという。大学ではドイツ文学を専攻した。外国語研修のため東京外国語専門学校にも通う。

卒業後関は東京帝国大学図書館司書を拝命。その就職を選じた理由はたくさん洋書が読めるからというが、意気込みが伝わってくる。その研鑽は新潮社『世界文学講座』『独逸文学編』にドイツの劇詩人を扱った「ホフマン・スタールの人物研究」として記録される。

人生とは不思議なものである。関敬吾先生は大きな希望をもって家出という形まで選んでドイツの哲学や文学を研究しようとした筈であった。しかも丸善に行っても洋書は高価で買えないと、図書館に就職して書庫に入ってから読書をもくろんだ筈なのに、気が付けば関係図書の無い日本民俗研究に進んでいた。本の読み手から日本初の書き手へと変わっていた。土俗学などとも呼ばれた民俗研究の最先端で、未生の学問構築の旗手になっていた。

その不思議は島原半島小浜に生まれていたことに芽生えがあると言えよう。東京帝国大学図書館司書時代に最初に書いた昔話資料が「高陽民話」（『旅と伝説』）、すなわち小浜で母から聴いた民話の報告であった。『旅と伝説』には「船幽霊」など海に関わる民俗も小浜で漁師たちに聞いた話も報告していた。『島原半島民話集』『島原半島昔話集』と続く、関敬吾の発信は故郷小浜の昔話である。その昔話は母親タダシから聴き覚えたもの（関自身が語り手）、漁師の田中良三老からの聴き取りが主であった。そこには網元の家内伝承の血縁をめぐる「むかし」と、船乗りであり各地の港に風待ちをして世間を知る「はなし」が収められる。伝承、伝播の資料集、そこには語り手の明確な存在感が刻まれる。本格的な昔話研究の記念すべき書と言えよう。

その意味で小浜の顕彰看板は、昔話を昔話として研究が始められた記念の地、現代語りの継承実践のルーツも辿り得るものと知られる。

そこにあるのは何を措いても、関敬吾の母親に対する慕わしさ、愛情に違いない。

晩年関先生は骨折されて代々木の病院に入院されたことがあった。

見舞いに参じたところ眠っておられた。目覚めの時、先生は「島原の小浜にいる夢を見ていました。波の音がきこえました」と暫時耳をこらすようであった。病院の外から聞こえる車の往来が潮の満ち干の音に感じられたのかと思う。お母様の夢であったという。潮鳴りの高い夜は恐ろしくて母の胸にかじりついたというのが、決まって昔話をして寝かしつけてくれた。

その病室で私は関先生の「天道金の鎖」を聴かせて頂いた。

山姥に食われた両親が鼠になって、攫われた子どもを助けにくる話。子どもたちに太鼓を叩かせて逃げたのを知ろうとする山姥に、親たちは「あらおどんばちち食た山姥ばい。こるからすぐ逃げろ。太鼓はおどんがたたてちよるけん。こるかるすぐ逃げろ。太鼓はおどんがたたて

ちよるけん。この太鼓たたけば七里も聞こゆる。アリヤリヤンリヤアン」と、叩いていた。

関先生のお声が甦る。故郷を離れて久しい、老境におられる先生の枕辺に届いたという橘湾の波の音を思い出しながら、先生の母上の語りの継承をなされた。そしてそれが「鬼の妹」(AT315A R315 H1023/2 AT1180 F51)などの合体したものだと分類して居られた。

橘湾の港を持つ富津の特徴は古来、風待ちなどの寄港者が居たでしょう。アジアなど世界各地の人々と協和して生きてきた歴史が「むかし」には記憶されるかも知れませんよ。母は家付き娘でしたから。まるで「むかし」の袋を持っているように語ってくれました。もうその地も変わっているでしょう。私たちの小学校ではよく雨の日など「むかし」を代わり番に語ることがありましたが、私は一番前に座っているの、頭に手をのせて「君はよく知っている」と先生が褒めてくれました。嬉しくてね。海が動いて雨が降りそう日は「明日何を語ろうか」と母親に相談しました。家の前に六角井戸がありましてね。そこではいつも人がいましたね。大人の社交場、子どもは遊び場でしたね。私にとっては『島原半島民話集』のなかの昔話が心のなかに残された唯一つの「私の郷里」ですよ。

関先生が抱く故郷小浜の富津は、即ち母上の「むかし」に凝縮し結晶して、研究者の最晩年を輝かせていた。その忘れがたい「六角井戸」の側に顕彰看板が建てられているという。その地は日本昔話研究の発祥の地ということにもなる。

3 柳田国男との出会い

関敬吾という研究者は柳田国男との出会いによって誕生した。

そのめぐり逢いについては既に伝説的な言説がある。関先生が昭和58年(1983)、私の長男・典彦にお話くださったのは凡そ次のようなものと記憶している。

偉い方が高級官僚を辞めて、地蔵研究をされると新聞に出ていた。理由がわからないと言うと兄の寛之が「日本に、そういう人物が必要なのだ」と説明してくれた。昭和に入ってから『旅と伝説』の編集の方(友達兄さん)から紹介された。一度、顔を拝んで来ようと思っ掛けた。ミーハーな気持ちですよ。その時、私が書いた原稿を読まれていて「誇張が無い報告でよい」と褒めてくださった。その時、「桃太郎のことを話す会があるからお出でなさい」と言われ、出掛けて行った。柳田先生の「桃太郎の話の起源と発達」を聞いたが、何も面白くなかった。昭和5年頃でしたか。『旅と伝説』には柳田先生の論文がたくさん載っていたが、一つも読んでいなかった。私もそれにペンネーム・榊木敏で書いていたけれども、ドイツ文学をやったかったので、そんな投稿には恥ずかしいので本名を書かなかった。「桃太郎の話」は面白くなかったが、柳田国男という人物には魅力がありました。先生のお話を聞きに、成城の書齋に通いました。帝国大学図書館は4時に終わります。それから1時間近くかけて、成城のお宅に行くわけです。その時間の嬉しさは格別のものでした。1時間が2時間、そのうち時間が過ぎて、8時ごろに。先生の8時は真夜中を知らないで、失礼なこともありました。カードをとらせていただきました。

その頃、昭和3年3月15日、日本共産党に対する大検挙事件3・15事件。昭和4年4月16日の4・16事件がありました。私もマルクスボーイでした。無産政党的本を読みました。日本では買っても売っても警察につかまります。ですから、ドイツから買う。若者の間に読書熱がありました。最後は風呂の焚きつけです。『共産党宣言』など買いました。名文でした。そんな時、何をしたらいいかですよ。「思想と学問は両立しますか」と聞ききましたら「本物であればできるでしょう」と。その「本物」を考えるのが学問することでした。先生の処に行くと、島原の話は何回も聞かれました。網元がうまくいかなかった身の上話も、相談のようなこともしました。私は歳をとってからの勉強ですから、軌道修正には遅かった。時間がかかりましたよ。

関先生は生涯の師となる人物・柳田との出会いを、18歳になり親たちと同じ大学に進んだ私の息子に、たんたんとお話し下さった。その後は、如何にも関先生らしい言葉もあった。

君ね。良い資料を見つけたら親にも見せてはいけないよ。自分だけの資料を大事にすることです。発表するまで、大事な原稿は自分にわかればいように書く。人が読んでも値がないように。人文科学の学問は個人の強い意識にささえられて発展してきた。実験はできません。理論闘争です。理論がない人とは話が通じない。そんな人達とはつきあわないことですよ。

そのあたりから関敬吾先生特有の厳しい世界が展開する。たぶんその話は「民話」を巡る伝説的な民俗学者間の軋轢を意味する事柄であったかもしれないが、国文学の新入生に解る筈もない。

病院で「幻の昔話集」を捜す約束をした初対面以来、私は退院後の関先生をお訪ねすることが多くなった。書斎にお邪魔して口述筆記や、「柳田国男『昔話名彙資料』(草稿)」の翻刻(『昔話伝説研究』第8号、第9号)や、「シベリアの語り手」の原稿の清書、カード書き、原稿整理を手伝うことになった。その折々、関先生の成城通いの話もお聞きした。

当時は思想問題で、友人たちが官憲の手に捕えられて、悪い時代でした。私にも迷いがありまして、先生に相談したりお話を聴いたりした。こうした世紀に一人しか居ないという柳田先生に逢った幸せですよ。思想的な問題で、どう展開すればいいか。悩むわけですよ。転向が雪崩のように行われていました。そんな時代の若い人に、包容力のある方でした。検挙問題で連れて行かれた人にロシア語の資料を読んでもらっていました。ある日、その人物が目の前から消えた。満鉄の東亜経済研究所に送られた。ロシア文献資料の翻訳分析などの仕事をする。小西ゆきさんという人も同じ読書会の人でしたが、掴まってしまった。ある日の会に電信柱の処で見張りをしていた。反対から特高がきた。警察に捕えられたが、見張りですから許された。彼女は父親と柳田先生を訪ねました。博多市長の父親は緒方竹虎と親友で、先生を紹介したそうです。ある日、成城の柳田先生の書斎に小西さんが居るのでびっくりしました。『郷土生活の研究法』を読んでいました。彼女は『児やらひ』を出版してます。人類学の石田英一郎君、早川孝太郎さん、共産思想をもって絵を描く橋浦泰雄さんもいました。マルクス思想も受け入れた、抱擁力の問題です。

君は「転向」を知っていますか。

私は関先生の問いに、獄死した胆沢の織田秀雄のこと、高校時代に親の反対を押し切って『葦』という雑誌を読んでいたこと、和辻哲郎の『転向』を読んだことを答えた記憶がある。そのとたん関先生は破顔一笑、転向の話はそこで終わった。

和辻先生に東洋大学で海の文化史の講義を聞きました。日本古代文化の海のルートの話はおもしろかったですよ。朝鮮の舟もアジア諸国の舟も、みんな一つ港で風をやり過ごす。文化の交渉史でした。まるで、島原のここのようにで楽しみな講義でした。

4 遠野と関先生

今回「関敬吾先生の思い出」を語ることになり、私が耳にしメモした関先生の言葉を検証する、客観を遠野に求めることにした。あまり知る人も無いかもしれないが、遠野には関先生の書籍や研究資料類が譲渡されている。

昭和60年(1985)11月29日に関先生は小原遠野市長と「関文庫」開設の約束をされた。野村純一の角川賞受賞式当日の東京会館一室で野村が立ち会い、市役所職員が事務手続きをして、その約束は成立したようであった(次頁の写真)。

関先生は太平洋戦争中に調査先に学術資料を疎開させていた。研究資料を東京から分離することが学史を守ることになるというお考えと知られる。賛同し、その意向を受けたのが遠野市であった。今回の私どもは遠野市立博物館に、前もって資料を請求してから出掛けた。

久方ぶりの遠野市はすっかり変わっていた。菊池輝雄氏と野村純一が関わった学際的昔話発信地の面影は全く失われていた。「関文庫」の開設も顕在化されていなかった。ただ関先生の書斎、応



(左・関敬吾 中央・野村純一)

接間にあった書籍とは再会出来た。「遠野文化研究所」の一角に、書架が設けられ懐かしい背表紙が並んでいた。

現代の遠野市は佐々木喜善を日本のグリムとして、新たな顕彰を始めている。「それを言い出した金田一京助、日本のグリム研究者・関敬吾、語り手の辻石媼、グリムの語り手」を並べて催し物のパンフレットに紹介（ドイツ語訳を付し）している。聞けばドイツのグリムゆかりの地と姉妹都市になるのだという。昔話施設フロアーにも関先生のパネル紹介が掲示してあった。昔話の世界的な研究者として、その情熱の位置付けがより明確であることを希望したい。

観光昔話の行方としては致し方の無い形なのかも知れないが、関先生については、佐々木喜善の添え物的な処遇に甚だ心が弾まなかった。昭和の日本昔話研究に世界見地を以て当たった先駆者の関敬吾を顕彰する「関文庫」開設を希求して止まない。遠野市との相談中、関先生はドイツのヘルマン・ヴィルト教授の話を読まれた。ナチスの後援を受けた教授の誤った理論を例に、「政治的になるのは駄目です」と、如何にも関先生らしいもの言いであった。〔河野眞『ドイツ民俗学とナチズム』創土社を参照〕。

この度、山の保管庫にある関先生の資料を拝見するに際しては、遠野市立博物館・図書館の方々に大変お世話をおかけした。細々とした資料には関先生の一身上の証明になる履歴書や学位論文に関わる文書、辞令、後年の対談の思い出語りのテープ抜きの元原稿などがあった。「一つしかないことは、無いと同じです」と、佐々木喜善の1話しかない昔話をグリム意識と評価しなかった、関先生の言葉を思い出しての遠野行きであった。私の話にも客観を呼び込もうという訳であったが、「聴き耳の会」の小松千枝子さん、國學院大學院生・原田遼君の協力を得た。

資料の中に何よりも満州に送った「幻の昔話集」の手掛かりを捜してみた。その昔話集の歴史を孕む関先生の人生譜に思いを馳せたかった。予測していなかった訳ではないが、そこでは意外なほど師・柳田国男との濃密な関わりを見ることになった。それは思った以上に、師なる人物が弟子・関敬吾に深入りし、両者抜き差しならない関わりにあったということになるだろうか。

5 柳田国男に見出された関敬吾

柳田との出会いについて、関先生はミーハーな気持ちだと説明している。が、現実とは幾分違うらしい。『図書館の窓』(vol16no4/5、1977年4/5月)に岡野他家夫が「東大図書館に在職の頃」を書いている。

その当時、洋書係には山田司書官の下に平山信一、小山栄三、水野亮、関敬吾、小島武男、

会田由君らがいた。なお、当時の私たちは関野新吉、岡本良知、関敬吾、小島武雄らの同僚語り合い図書館内に書物同好会を結成して機関紙「書誌」を発刊した。私は萩原厚生君の発議に賛成して、関、中里らを誘って、柳田国男先生に相談して、「旅と伝説」という雑誌を出すことになった。発行所は萩原の令兄正徳氏の経営する美術印刷の三元社であった。

その後、岡野他家夫は角川書店『日本近代文学大系』の月報50にも柳田邸に相談に行った時のことを詳しく記している。関先生に出会い、そのお声を耳朶に納めた息子は自著『鉄道と旅する身体近代』(青弓社)で、その経緯を追い、岡野の記憶に比して柳田が『旅と伝説』について距離をおいた表現をしていると指摘している。

柳田はその『旅と伝説』第2巻「木思石語」以来、第21巻まで34の寄稿を続けている。昭和3年(1928)第1巻第4号から関敬吾・榊木敏の寄稿が見られる。同時掲載の柳田の文章を一度も読まなかったと関先生は述懐されているが、柳田は読んでいた様子である。萩原編集長は関原稿を読み、柳田に知らせていたが、或る日、偶然柳田が執筆中のテーマと同じものが寄せられたという。柳田は「内緒で見せて欲しい」と編集長に頼みそれを読んだ。そして昭和5年(1930)6月号に小浜の榊木資料を紹介している。それが柳田の「田螺婿入譚」(現岩崎美術社版 5巻516頁)である。榊木の「高陽民話二」はその前頁にみえる。

柳田は萩原編集長に「この青年に会いたい」と頼み、或る日、関は萩原編集長が何か書いた名刺を持って、柳田邸訪問という次第となる。柳田を知った頃については『全国昔話資料集成21 島原半島昔話集』「編者ノート『島原半島民話集』の思い出を中心に」に記されている。初対面についても、「当時、わたしは思想的な動揺もあり、その捌け口も探し出そうと模索しているときでもあったので、民俗学か昔話研究のなかにその緒を掴もうとしていたのかも知れない」と記している。

『旅伝』に寄稿した村の伝説を民俗学の研究に役立てようというような殊勝な考えは毛頭なかった。それでも、柳田先生を最初に訪れたとき、「君の報告は誇張がなくってよい」とほめられ、「そうかなあ」と思った記憶もある。

『旅と伝説』の関報告については読者からの反応があった。「海の驚異」「だらしにつけられる話」に対する手紙を読ませて頂いたことがあった。その頃の榊木・関原稿は文芸性に満ちていた。美文であった。長崎水産講習所時代は先生に褒められる作文の名手であったというが、高山樗牛が好きな文学青年であったことが知られる。樗牛の『文は人なり』に深く傾倒していた。榊木・関の投稿は読者を惹きつけて、その面目躍如という感じである。同じ雑誌には柳田の外に折口信夫、金田一京助、中山太郎、平山葦江、中道等、東条操、早川孝太郎、佐々木喜善、宮本常一、胡桃沢勘内、長谷川伸などの名前が連なる。時代を画す雑誌と言うべきであろう。

『関敬吾著作集 6』には大島広志製作の「著作年譜」が収められている。昭和8年(1933)を境にした榊木敏から関敬吾への移行は関敬吾における「民俗学覚醒」への道程である。「民俗学」形成の中心的存在として自覚的な研究者となるが、その後に「民族学」研究者として二つのミンゾク学を生きられる象徴的な方となった。最晩年は「口承文芸学」構築のため尽力された。人生が研究で埋め尽くされた生涯が見透されよう。その原点には柳田に直接初対面で褒められ、原稿も認められて柳田の手で採択された心のときめきが内蔵される。幾分関先生の記憶には揺らぎはあるものの、褒められた記憶は明確であった。柳田は『旅と伝説』に2年で12本書く関の島原原稿を見ていた。初対面ではタイラー『原始文化論』を勧められている。その軌跡からは柳田が誌上の関・榊木の筆力と伝承心意を見抜いていたと思われる。すなわちそこでは「柳田国男に見出された関敬吾」を知るところとなる。

6 昭和の大転身

関敬吾先生は家出をして上京、学問の道に入られた。イワシ漁の季節には島原に帰って、網元の仕事をするなど厳しい学生時代を過ごし、ドイツ文学を学ぶために良質な洋書の集まる図書館に就職した。昭和5年、本名でドイツ文学の論文を書き、順調な学問の滑り出しと見られた。が、やが

て不思議な運命に呑みこまれていく。

関先生は読むべき書籍の極端に少ない民俗学という未生の学問に分け入っていく。それは高木敏雄をもじった榊木敏のペンネームを手放した時に発する、師・柳田と共に歩む民俗学確立への旅立ちであり得た。カーレル・クロン『民俗学方法論』を3年がかりで翻訳したが、柳田は「1年で訳す修業をしなければ」と、厳しい指導をしたという。集まって来た才能をより精度の高いものへと指向したことが知られる。そこに刻まれる、「柳田を師としてからの関敬吾・昭和の歩き方」には、はかり知れないものを感じるばかりである。私はこれを「関敬吾・昭和の大転身」と呼んでみたが、関先生は柳田の壮大な夢の中を歩かされていたのだと思うばかりである。関先生先は「そうですね。しかし夢を見ている時は、それがわかりませんよ」と笑われた。

大正十三年九月	任東京帝国大学司書
昭和十七年九月	叙勲八等綬瑞宝章
昭和十八年七月	任東京帝国大学司書高等官
昭和十八年七月	三級俸下賜
昭和十八年七月	叙正七位
昭和十八年七月	依願免本官
昭和十六年五月	日本放送協会嘱託
昭和十八年三月	右依願解職
昭和十八年八月	文部省民族研究所嘱託
昭和二十年六月	右依願解職
昭和二十年五月	財団法人日本文化中央聯盟研究所嘱託
昭和二十一年三月	右解散ニヨリ退職
昭和二十一年五月	大正大学講師嘱託
昭和二十一年五月	社団法人郷土研究会嘱託
昭和二十一年八月	連合軍民間情報教育局輿論及社会調査部学術顧問
昭和二十五年十二月	国立音楽大学教授

昭和16年（1941）5月、関先生は①「日本放送協会嘱託」、②昭和18年（1943）8月「文部省所管民族研究所嘱託」（研究、資料、整備並びに研究）、③昭和20年（1945）5月「財団法人日本文化中央聯盟研究所嘱託研究員」（主として日本農林社会生活に関する調査研究）と、仕事先を変えている。

しかもそれは全て柳田の大いなる夢みる道の上の関先生と見るべきであろう。①放送における柳田については石井正己著「柳田国男の放送」（『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』第50集、1999年2月）によって、かなり多くの放送事例を挙げ、それが柳田にとり大きな意味をもっていたと指摘されている。②での研究は満鉄の東亜経済研究所経由のヨーロッパ文献翻訳、インドネシアを扱ったオランダ資料の解明など、南島資料の整理、翻訳に当たった。関先生は学生時代第二外国語としてインドネシア語を選んでいった。

「日本の昔話」の仕事も継続していた。当時「日本の昔話」は少国民教育の本であった。その「日本」の内意は植民地教育も見込んでのものであった。昭和18年、大日本雄弁会講談社から出版された関敬吾著『日本昔話集 笠地蔵さま』は「少国民の日本文庫」の1冊として日本各地の昔話が纏められている。そこで注目したいのは「日本の昔話—語って聞かせる人々のために—」という文章がついていることである。その昔話は「現在語ってみると不変部分の根幹がしっかりとて無駄が無い。語りやすい」と、関先生の「大歳の客」を読んで、語り継ぐ「聴き耳の会」飯泉佳子さんは実践の場面で感想を述べている。このシリーズは関先生の昔話理論を知る格好の資料である。

太平洋戦争中の大東亜共栄圏思想は柳田の身边にも及んでいた。しかし柳田の内なる沃野には軍人と無縁の日本文化の拠点作りに夢を見たと、考えることもできる。終戦近くに移られた③の「日本文化中央聯盟」への転職などは、柳田と出会わなければありえなかったにちがいない。その聯盟について、次のように説明がある。

設立の目的は肇国の理想に則り我国文化の総合発展を図り、其の神髄を發揮し之を中外に宣

揚し以て国運の伸長並に世界文化の興隆にこうけんすることを目的とし、次の事業をする。

日本文化史、日本文化百科辞典、其の他の著作、編纂翻訳、出版を為すこと
国史記念館、日本文化図書館、日本民族博物館、其の他の文化施設を為すこと

会長 貴族院議員 公爵 島津忠重
常務理事 文部省総務局長 廣野恵
理事 日本放送協会会長 下村宏
日独文化協会理事 高楠順次郎
日満文化協会理事長 水野梅暁

関先生から「日本文化中央聯盟」が貴族院議員、国維会松本学が顧問で中心となったことを教えて頂いた。柳田と松本は日本の神社を巡る接点を持つ間柄であったという。松本は明治神宮造営局長をつとめた人物と知る。上層部陣営の出身母体をうかがった時、私はそこに配置されるべく転職を続けた関先生と転職を薦めた柳田の師弟関係が、今日的にはとても尋常でないことを悟るべきであろうと思った。関先生のあふれるような才能を「場」を移して磨き、来るべき事業に向かわせていたと思われたからであった。そしてそれを聞いた私は無礼なことを口にした。「関先生を懐刀にして、柳田先生が何か聯盟の事業に当たられる筈でしたか」。それに対して、関先生は実にあっさりとして居られる。

一世紀に一人という人物です。何かあったでしょう。柳田先生は駄目になった網元稼業の家のことで、福岡のお宅のお話もされて、私に同情していただきましたから。行く先ざきで研究が出来ましたから、何処でも同じでした。戦後にああそうだったかと、思う程度ですよ。当時は東亜熱もありました。先生は「東亜文化研究会」の仕事も入れていただきました。調査費用が出ました。

その頃、柳田は「東亜文化研究会」の顧問をしていた。大きな存在感であった。折口信夫、澤田瑞穂、直江広治、大藤時彦、早川孝太郎、赤松啓介、宮本常一らも会員であった。関先生も民俗学から入会している。終戦によって解体した組織ではあるが、研究には必要経費を惜しまない組織、会の要請によつての調査も受け入れることが会則にうたつてある。この事実と連動するのであろうか、柳田は昭和19年（1944）の『民間伝承』で大東亜共栄圏の民俗学会設立を呼び掛けている。

関先生における昭和の大転身については、満州に絡む知識としていろいろと伺った。そこから覚えてきたのは、師が日本を見通すその時のぎりぎりの判断、その尖鋭的な配置としての人事、師弟の息の合うプレーを見る思いがする。

7 師との決別 学会の民話伝説

昭和20年の関先生は柳田邸に通い詰めた。柳田における戦後処理を知る数少ない弟子に丸山久子、池田弘子がいる。戦中から折々訪問者については『炭焼日記』に知るところである。関の記録は例外らしく特別見えない。ある日、丸山がたき火をしていた。見れば関が友人に依頼した満鉄経済研究所経由のオランダ語からの翻訳原稿であった。側にあったバケツの水を掛けて火を消し、残りを持ち帰った。資料に罪は無い。大切な資料と保管しておられた。劣化したその原稿が僅か現在、私の手元に残っている。インドネシアのハルモニア島の民話原稿というのが判然としないままである。

戦後の柳田、関師弟は一心同体の東亜精神から醒めて、また激しい時代の先端を走りだす。

昭和20年から21年8月にかけて、関先生は「民間伝承の會」を柳田の意に添うような形で再建するために腐心する。会員の質に不安を見せる柳田に対して、①会員を会長の承認した者とする、②顧問、常任委員、評議員は全て会長の委嘱による、③会長については初代会長を柳田国男に定め、その任期を定めず、という会則を作った。柳田は、新村出、石黒忠篤、渋澤敬三を顧問に依頼した。橋浦泰雄、関敬吾、大藤時彦、桜田勝徳、倉田一郎、戸川安章を常任委員に選んだ。加えて評議員34人を選び、満足感を示したという。昭和21年8月5日に『民間伝承』を復刊。戦後に強力な柳田イズムが構築されたことが知られる。橋浦の反対を押し切って会則の文言を関先生が作文した意味を問いたい。

郷土研究会の関先生に、昭和21年（1946）6月連合軍司令部から呼び出しがあった。H・PASSINという人が社会調査をしたいのという相談であった。柳田に相談して鈴木栄太郎、竹内利美、小山隆、喜多野清一、桜田勝徳、大藤時彦、石田英一郎、馬淵東一を推薦した。昭和21年8月から26年6月まで、関先生は「聯合軍民間情報教育局輿論及社会調査部学術顧問」（千代田区）を務めるが、仕事の内容は「輿論及社会調査、主として農、漁、山林に於ける社会経済的調査並びに研究に従事」と知られる。

その後沖縄の調査の学術顧問に就く。昭和26年（1951）7月から10月まで、NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES WASHINGTON。勤務先は琉球沖縄（琉球民政部内）社会輿論調査。「沖縄に於ける社会、輿論調査並びに社会、輿論調査員、技術的、理論的指導教育」。この身上書には戦後も一貫して研究調査指導の任務にあった、数少ない特異な日本人の姿を見ることになる。

いわゆる戦後解放を行う基礎調査であったが「世論調査、社会調査も含めて、隣組制度、祭礼、若者組を民俗誌などから、日本社会の基礎的高層、日本文化領域」の海村調査をする。関先生にはこの経験が、再生の一步であった。ジープに乗って村に入り、通訳を指導して村役場でアンケートをとる。村人は「アメリカにも小さいのが居るものだ」と、関先生を指さしていた。戦中に拘束の多い海村調査をしたので、戦いを終わってからの落差は変な、本当に不思議な体験であった。

おおざっぱな選択制、アンケート方法、ち密で精神的な柳田先生の調査に対して、専門家が行うサンプル的な方法は珍しかった。しかし敵ながら学ぶことも多いと、皆で語り合った。J・CPELZELという研究者が加わりサンプル方法など、聞き取りだけの日本の調査とは違う、新しい方法をつかった。A・REPAがやってきて、農地改革に伴う日本農村の調査、JOHN、BENETT、THOMSONなどの人口問題、家族問題それぞれ調査の専門家が来ていた。その事情については『民族学研究』第17巻第17号（1952年）に知ることができるが、関先生は伊豆八幡野に籠り、「文化地図作成」をしていた。「日本文化領域の項目の決定」の海村調査には刺激を受けていた。1年間伊豆にいて外国の専門的な調査法を学んだ。

その頃のエピソードがある。関先生にGHQ教育局のバーコフという人物から、「キング改め富士」誌について問い合わせがあった。当時100万部雑誌であったが、中止するか否かの諮問であった。関先生は都会に読者が多いが、農業や食料の記事が食糧難で扱われていたので、「日本人の農業を考える雑誌だ」と答えた。「米を作る人と食べる人が同じように米を大事にする。拌んで作り拌んで食べるのが日本の米である」と書いて出したそうである。相手は「解った」と言った。

昭和23年、柳田国男・川端康成監修、関敬吾・石田英一郎編「世界昔ばなし文庫」が彰考書院から出版。禁欲的な戦時中の昔話から解放されている。関先生は世界タイプの解説を付し民族学の石田との濃い関係性を顕在化している。その高揚した関先生の学問探求の直線的な姿勢は、日本の形を宗教的な伝承心意的な調査に求めた師・柳田にはどのように映っていたものだろうか。関先生が繰り返して話題にされた「粛清された」思い出については壮絶としか言いようがない。

昭和24年学会理事に推挙されました。翌年25年9月30日に日本大学で行われる「日本民俗学会第二回年会」の講演を引き受けました。「日本民俗学の根本問題」と題して考えを述べた。その内容には「民族学の中の一国民族学としての民俗学」を想定し、満鉄東亜経済研究所が集めたアジア資料の活用、蔵書20300点は福島市に疎開させて、戦後国会図書館に譲渡されていた。それらは英、仏、米、蘭などの植民地支配も如実にわかるものである。加えて戦後調査のアメリカが統計やアンケートを駆使してする調査方法、民俗社会の問題なども調査研究に取り入れたら良いのでは。単に調査資料を並べるだけでは……。石田英一郎君が扱っている「民俗社会」と「民族・種族」の見地を取り込もうではないか。と、言った時です。柳田先生が「そんなことを外で言ってもらっては困る。君。言うことにもほどがある。止め給え」と、その先を遮りました。先生は方法論については言わない。東洋人の考え方と、ヨーロッパ人の考え方の違いを知って居られた。東洋人の直観による考え方。理論的に詰めて行くのではなく、直観力で帰納的に論じていくのです。僕がそれに碍ることを言ったんです。

この次第を関先生は「先生の逆鱗にふれてしまった」という言葉で振り返っておられた。その日、

壇上の関先生は若手の厳しい質問攻めに遭う。関先生の言葉で「肅清」である。質問の内容は幼稚で答えることも出来たが、四面楚歌の心情であったという。その講演についての記録はあえて残さなかったそうである。しかし、関先生はその年会後も「木曜会」の柳田邸に出掛けていた。その会でも「肅清劇」があった様子である。それが師・柳田との戦後処理であった。日本文化中央聯盟の夢は、戦地に行かない2人の戦中記憶中での修羅として残ったのであろうか。関先生「昭和の大転身」は師弟の蜜月を証明して憚らないが、その決別こそ師・柳田には必要であったのかもしれない。

「逆鱗劇」が柳田の戦後と関先生の伸びやかな民族学と民俗学への道を開いたようである。関先生は欧米民俗学の理論と実践を踏まえ、「地域民族学としての民俗学」を一国民俗学への警鐘とした。柳田の元には戦地から帰った大藤時彦が影のように寄り添う形が見られるようになった。大藤、関は図書館司書の仲間としても生涯親しい間柄であった。「話題はいつも柳田先生」であったと大藤夫人、かつての小西ゆきさんに聴いた。

遠野で段ボール箱から出て来た幾種類かの履歴書添付身上書には「柳田国男、岡正雄、牧野巽」の名前があった。民俗学と民族学と人類学の泰斗の名であった。そこからは関先生の矜持が伝わって来る。外国理論を駆使されて個性的に二つのミンゾクを学問された関先生らしい、その思い出話を甦らせる何よりのよすがに思われた。

その後の「民話」伝説は関先生が民俗学会と別れた理由としてよく取沙汰されている。飽く迄も話の域を出ない。が、しかし柳田、関師弟にとって、東亜問題を手放し、戦後を生きる日本人としての新生をこの伝説に依存したとも思われる。

遠野の資料「後藤総一郎との対話テープ抜き原稿」があり、確認をしてきた。

後藤 昭和三十年の『民話』ですが、柳田先生は民話という言葉を使うことを怒ったのでしょうか。あれはどういうことなんでしょうか。

関 もともと先生から直接そういう言葉を聴いたわけじゃないんです。虎の威を借りる民俗学者の二、三のエピゴーネンEPGONENが学会の機関誌で批判したんですね。おそらく木曜会あたりで柳田先生のそういう意味の批評があったんでしょう。ある男は『民話』が出た時はえらくほめていたんですが、あとで彼らは逆のことを言っていました。

(著作集8に清書原稿所収)

井之口章次が『日本民俗学』第3巻第1号に書いた「『民話』書誌紹介」などが関先生を昂ぶらせたもので、激しい反論を書いている。『全国昔話資料集成21 島原半島昔話集』「編者ノート」には民話をめぐる状況について、当事者として十分に記されている。それら『民話』をめぐる柳田との確執については重信幸彦「民話の時代を問うために・・覚書」(日本口承文芸学会、第63回研究例会レジュメ、2012年11月18日)に「柳田国男の『民話』嫌悪伝説」として鋭い照射がある。

関先生の齒に衣着せぬ筆は、「民俗学と唯物論」などで夙に有名である。民俗学会への反論でも如何なく発揮され「東のライオン」の綽名を冠せられた。私とそのライオンの怒りを体感したのは昭和52年(1977)、弘文堂『日本昔話事典』出版の日だったと思う。関先生は、次のように言われた。

あの人たちは入院した私を死ぬと思ったに違いない。病院で私は世界に通じる昔話辞典をと、原稿を書いていました。アジアの昔話を世界に通じるものにと。アジアはアジアの概念でやらないと。この事典には内容の情報が古い原稿もありますよ。ヨーロッパにランケの『メルヘン百科事典』があります。「口承文芸の歴史と比較研究の手引」です。『日本昔話事典』は10年もかかっているでしょう。その間、それなのに誰一人話してくれなかった。

青い怒りの焰が関先生を包んでいた。学問のための透明な憤りをあらわにする老境のライオンに、私はすっかり感動してしまった。そして高木史人さんにその感動を伝え、以来2人で話を聴くようになった。高木さんは「関敬吾博士と民間説話研究―「原郷」との係わりから」(『民間説話の研究 日本と世界』同朋舎)を書かれている。

8 最後の仕事

関先生の最後のテーマは『日本昔話大成』の新話型に関わる分類の問題であった。新話型に分類した「運命譚」など全て、外国種と見立てた。その一つに現代語りに人気の「月の夜ざらし」があった。集成の時には『昔話研究』投稿1例のみで採用しなかった。しかし、関先生はこの昔話に将来を予測していた。過去、インド、欧米などからの受容を続けた昔話の動態を重ね、新話型に加えた。

FFCにポイケルトの「レノーレ」を確認。しかしそれは日本の伝承例とは真逆である。そこには昔話の生成、増幅、昔話を動かしていく語り手の問題があった。昔話生物論を紹介しつつも、「昔話テキストが境界のない大海と言われる世界観を持つ」として、関先生は可動する新たな時代の風と戦っていた。最晩年のこだわりは「日本の昔話は最後が幸せになる。それ以外は他国のもの。「月の夜ざらし」を集めて下さい。中国の学会で聞いてみてください」と、私たちが中国民間故事大会に出向く折にアンケートを預かった。異界からくる者との出会いに中国怪異小説の匂いを感じたものらしい。

「月の夜ざらし」にもし大陸の匂いがするとすれば、近代文学で満鉄調査部経済研究所で翻訳をした、満州渡り長谷川四郎が「阿久正の話」を書いていることに関わるのだろうか。長谷川四郎は『佐渡昔話集』が転載した『昔話研究』の投稿者長谷川の弟である。魯迅の『阿Q正伝』のもじりと知られるが、そこに「月の夜ざらし」が母の昔話として出ている。そこでは「爺、婆。魔法つかい」の話になっているが、死者の言葉「月の夜ざらし 知らで着て〜」のフレーズは同じであった。明らかに外国ものであるが、母の昔話の記憶とある。

当時の編集者・竹西寛子とその昔話を強い印象としていっていると、『長谷川四郎全集』第3巻の月報3に書いている。また長谷川四郎の作品を踏まえた「月の夜ざらしとボチ」が小沢信男によって作品化されている。昔話が繰り返し扱われる。この昔話は戦後文学として読まれた文学の磁場があって、現代語りに新たな伝承心意を萌芽させ、心理描写にうごめく、読む昔話の近代発信となり得たのだろうか。関先生はこれらを如何様に分類されただろうか。

懐かしい関先生の残された課題である。

関先生の「幻の昔話集」は平成23年（2011）、一つの結着をもたらした。それらしい慰問袋の昔話集を見たという「満蒙開拓少年義勇軍」の生き残り伊藤晴光さんと、高橋保さんにお会いした。伊藤晴光さんが探し出してくださったのは、東京の老人施設に暮らす山形県天童市出身の高橋保さんであった。満州で凍傷になり、片足切断で帰国され、病院の中で山形弁の「笠地藏」などの昔話を読まれたという鮮烈な記憶であった。関先生がお聞きになられたら、どんなにか心安じられたであろう。涙があふれた。

遠野の資料には関先生の心の軌跡が辿られる。『越後タイムス』の切り抜きスクラップ帳が残されている。そこには戦地で読んだ兵士が方言語りに感動したという投書も届いている。山田貢の『あったとさ』の基礎資料であるが、戦地からの感激に励まされていたのは、「満蒙開拓義勇軍」を背負った関先生の想いの切なさであったと思われる。伊藤さん、高橋さんに感謝申し上げる。関先生が逝かれて25年が過ぎていた。合掌。

昔話と比較研究の問題点 一文芸比較の方法論に向けて

廣田 収

1 はじめに

この企画を立てられた石井正己先生は、柳田国男の『遠野物語』や日本昔話の研究者として著名であるが、一方では『源氏物語』の研究者としても知られている。偶然かもしれないが、私は若い頃から『源氏物語』を読むとともに、先学の驥尾(きび)に付して「見よう見まね」で昔話の再訪、採録や分析を齎ったこともあり、日ごろから畏敬してやまない石井先生の存在を、失礼ながらも早くから身近に感じてきた。

誠に僭越ながら、石井先生との間にもし違いがあるとすれば、私は、『源氏物語』の研究と昔話の研究とをどこかで繋いで捉えたいと考えてきたことである⁽¹⁾。私は、日本古典文学を専門とする地味な国文学徒であり、文献としての古典である『源氏物語』や説話文学などを勉強するとともに、同時に、素人同然であるけれども、フィールドの昔話を国文学の立場から考察したいと考えてきた。そして最近では、雲をつかむような話で恐縮であるが、昔話の研究を媒介として、ジャンルの違い、昔話の地域上の違い、口承・書承の違いなどを越えて、比較研究の端緒を探し求めたいと考えている。

一方、昔話研究は、周知のように民俗学の一領野としてだけでなく、独自に歴史的な伝統をもっていることは改めて言うまでもない。ただ、国文学徒の私にとっては、昔話をどのようにして国文学研究の対象として設定できるのか、という積年の課題がある。

いずれにしても、今回のシンポジウムに掲げられたテーマ「昔話研究の再検討」を議論する上で、昔話研究の専門家ではない私は必ずしも適当でないことを、まず御断りしておきたい。

2 発題の概要

さて、文献を中心とする現在の伝統的な国文学研究の中にあって、私が最も違和感を覚えることは、今もって国文学研究は、昔話を代表とする伝承文芸の研究（もしくは口承文芸の研究）を受け入れていない（拒否している）、という事実である。

そのような中で、新たな国文学研究の可能性を拓(ひら)くひとつの手がかりとして、昔話をもって文芸批評に比較という視点を意識すること、さらに、昔話との比較という問題を方法として意識して行くにはどのようにすればよいか、という問題を考えたい。

文芸批評において、比較ということは軽重・大小を問わず避けがたい。特に物語や説話、昔話などストーリー性をもつテキストは、分析において比較が有効である。にもかかわらず、比較というものが方法の問題として議論されることは殆どなかった(ように思う)。すなわち、比較に一定の客観性を与えるにはどのようにすればよいのか。分析・考察に客観性を与えるには、根拠がなくてはならない。そのために、比較ということを方法の問題として鍛えて行く必要がある。

しかも、最近では「東アジア」という地域的な広がりやを標榜するテーマでもって文芸批評のなされることが多い。ところが、国文学研究においては伝統的に、中国古典・漢文学と日本古典文学との比較という、手慣れた手法が、なお無批判的に用いられているという印象が強い。

だが、よく考えてみれば、文芸というときにも、文字言語の世界と、音声言語の世界とが存在する。民俗学では、特に柳田国男氏以後、音声言語による文芸がひとつの領域を占めるということは、すでに社会的に認知されている。ところが、国文学研究においては、東アジアという地域を設定し

たときに、文字言語による文芸と音声言語による文芸との関係については、意識的か無意識的かを問わず、比較という視点から排除されてきたことは間違いない。文字という権力、文字を専有していた階層の文芸を相対化するために、音声言語による文芸の意義をどのように捉えるかという問題意識が必要である。

もうひとつ、昔話にとって（もしくは昔話研究にとって）どこに未来があるのか、という問いがある。これは国文学研究にとっては、なかなかの難問である。確かに、地域社会の変容と語り手の減少という現実に伴い、昔話研究（もしくは、昔話をめぐる活動）は、従来の採訪採録や調査研究よりも、児童文学、絵本の読み聞かせやストーリー・テリング、文庫活動、その他様々な市民活動などへと、大きく展開しているという現実がある。そのような背景のもとに、国文学研究として正面から、まじめに昔話研究の行く方を検討する必要がある。

そのような理解のもとで、このシンポジウムに向けて、国文学研究の立場から、昔話を研究する上で何が問題であるのかを考えてみたい。

3 論点とは何か

今回の報告における論点を挙げると、およそ三点に集約できる。

まず第一に、どのようにしたら口承文芸と書承文芸とを統一的に論じることができるかである。また昔話、説話、物語というジャンルgenreをどのようにして越えられるか。また地域や文化も言語の違いをどのようにして越えられるか、である。そのひとつの試みが、今回提案しようとする事項という概念である。

第二に、昔話の一回一回の語りnarrativeを、そのまま記録した採録をひとつの本文textと捉えるとともに、本文を「重層的に構築されたもの」と捉えたい。そのためには、昔話、説話、物語の本文を根底から支えている枠組みschemeを、私（わたくし）に話型と呼びたい。従来、昔話研究では、アールネ・トムプソンのタイプ・インデックスに拠ってtypeという意味で用いられてきたが、ジャンルを越えて比較を試みるには、ひとつひとつの本文を支える枠組み、もしくは、構成において並行parallelする本文同士の間で共有される枠組みを話型と規定したい。

すでに、柳田国男氏は『口承文芸史考』の序で、「神話学は日本でならば可能である」と説いている。というのも、宗教や政治によって旧い文化が破壊、排斥されなかった日本において、伝承は古いものの上に新しいものが堆積する、という性質が認められる。それゆえ、かつて柳田氏は昔話研究を始めるにあたって、神話の復元には勝算があったに違いない。柳田氏は、口承文芸の存在を確立させることを第一義に考え、文献研究を排除して厳しく研究を自己限定したことは知られている。ただ、民俗学が体系的な学問として歴史的に認知された今、国文学の側から必要なことは、逆に柳田氏の排除した文献文芸を口承文芸と同じ土俵の上に置くことだと思う。

第三に、比較を考える上で何を手がかりとするかである。

今私の考えているテキストは、奈良時代の『風土記』と、鎌倉初期の『宇治拾遺物語』の二冊である。それではなぜこの二冊なのかというと、古代天皇制のもとで神話を複雑に組み立てた『古事記』や、歴史書『日本書紀』ではなくて、地方の神話を記した『風土記』の中に、いわゆる隣翁型、蛇婿、天人女房など、日本昔話と共有する古い話型が認められるからである。もちろん在地の神話を取り出す手続きは必要だが、『風土記』に収載されている神話は、古代天皇制の影響が希薄であるから、神話や物語、説話や昔話など、他との比較には適している。

一方、『宇治拾遺物語』は、癩取爺、腰折雀、博徒婿入、藁しべ長者など、昔話と同じ話型をもつ説話を含み持っている。特に、この説話集は仏教思想の影響が希薄であり、平安京から中東京都へ転換しつつあった都市における、いわゆる世俗説話集であるから、昔話との比較を考えやすいのである。

問題点1 昔話の採録と話型をめぐる問題—昔話「烏吞爺」を対象として—

昔話の魅力は、何といても語りの場と語りそのものの中にある。

言うまでもなく昔話は、村落の爐辺（ろへん）において爺婆が孫に（もしくは、親が子に）語って聞かせたものである。何よりも、語りの場における、一回的な音声言語による語りであることを本質とする。ところが、昔話は翻字・採録によって文字化されることにおいてでしか対象化できない、という矛盾を孕（はら）んでいる。

もちろん歴史的にみても、昔話の採録集・記録集の編み方そのものに、様々な問題のあったことはすでに知られているところである。今そのことは措こう。

私は国文学研究の立場から、昔話を対象化するにあたって、同じ語り手による同じ話柄の一回的な語りを、何年かの間を置いて記録し、これを同時に並べてみると、常に共通する部分と、語られる度に異同の生じる部分とが識別できる。それは、柳田国男の説く、(神話の復元を企図するために提起された)完形昔話の不変部分と可変部分という考え方とどう対応するのかが問われる。

そこで私は、語りの表現から「主語＋述語」(もしくは、動作主と行動)という単位をもって事項を抽出することを提案したい(2)。この事項群を支えている「見えない」原理が話型である。そこにいう話型は、従来のタイプ・インデックスtype-indexに登録されている話型typeとは異なる、別箇の概念である。

かくて、共通する部分から語りの基層をなす話型(構成的な枠組み)を探り、異同の生じる部分をもって語りの表層をなす説明的なものとして捉えることができる。そして、その重層的な総体を表現と呼ぶことにしたい。

さらに、昔話「鳥呑(とりのみ)爺」は、唱え言を不可欠とする(3)。この唱え言は、語りに繰り返し組み込まれることによって、話型における記憶の鍵、語りの鍵となっている。全国の「鳥呑爺」の事例を集めると、

御代(ごよ)の御宝(おんたから) + 綾チュウチュウ 錦ザラザラ

という表現が一番多く、これが代表的な唱え言だということができる。この唱え言は基本的に讃詞、壽詞である(4)。分類すると、これには幾つかの系統が存在することが分かる。また、基本形から派生形までを段階的に整理することができる。唱え言のような伝承的表現を組み込んで、昔話の語りは重層的に構成されているといえる。

問題点2 昔話の比較に客観性を与えるために一昔話「継子虐め」の日韓比較をめぐって一

従来、昔話研究は伝統的に、アールネ・トムプソンのタイプ・インデックスを踏まえ、柳田国男氏から関敬吾氏へ、さらに三原幸久氏へと、日本における話型研究は大きな達成を見る。同時に、motifとtypeとを考察の手がかりとして、採録された話柄の分類や地理的偏差、担い手と伝播などが考察されてきたといえる。

しかしながら、その後の昔話研究において、話型の基礎をなすモチーフの抽出そのものが、先見的なものとして実体化、絶対化されかねないだけでなく、恣意的なものに墮する危険性なしとしない。また、確定された「普遍的」な話型の基準でもって日本昔話を裁断する懼(おそ)れなしとしなかった。

それでは、国文学研究の立場から、昔話研究はどのように可能であるのか。私は、昔話研究の考察の対象と方法とは、昔話の本文そのもののうちにある、と考える。さらに、考察に客観性を与えるにはどのような方法が必要であるのか、ということが問われなくてはならない。

そのような視点から、昔話「継子虐(いじ)め」を事項において比較すると、韓国・中国の昔話「継子虐め」は、日本昔話のように、「めでたし」で完結することが少なく、継母に対する殺害や報復で完結している。そこでは対立・葛藤が特徴的であるといえる。

問題点3 日本昔話の特質はどこにあるのか一昔話「尻鳴篋」における唱え言一

昔話「尻鳴篋(べら)」の語りは、唱え言を核として構成されている。語りを層として見ると、唱え言は昔話の基層をなして構成されているといえる。

桜井小菊さんの語りでは、この唱え言は有名な「高い山から谷底見れば 瓜やなすびの花盛り」である。これは盆踊歌にも用いられるが、もとは予祝歌である。つまり、昔話の中に全く場を異にする民謡が組み込まれることになったといえる。柳田氏は、唱え言を民俗行事と結び付けて論じている。ただ柳田氏は、唱え言を通して、儀礼における神話を想定している。

一般的に言えば、昔話「尻鳴篋」のみならず、昔話「瘤取爺」や「猿神退治」も同様なのであるが、同じ話柄であっても分布状況から見ると、唱え言を不可欠とする亜型sub-typeと、唱え言を伴わない亜型とが併存する。それは、伝播論的な視点からすれば、外来の話型と在来の話型との混在

ということになる（だろう）が、韓国昔話を比較すると、他の話型を考え合わせても、唱え言が昔話の中に入り込む現象そのものが、きわめて日本的なことと言えるのではないだろうか。

問題点4 国際比較及び口承・書承間の比較にわたる一昔話「猿神退治」を対象として一

私は、話型を基礎とする比較研究において、『風土記』と『宇治拾遺物語』とを重視している。

なぜなら私は、古代天皇制神学の書として、神話をもって構築された『古事記』や、天皇の事蹟と伝承を編んだ正統なる歴史書『日本書紀』などに比べて、中央政府に地誌として諸国から上表の形で献上した『風土記』の記事の中に、在地のより単純で古層の神話が保存されていると見るからである。そこで、『風土記』の記事の中に、誓約（ウケヒ）によって祟（たた）り神を護（まも）り神に転換させる（杵組みをもつ）神話を取り上げたい。この話型は、昔話・説話・物語など異なるジャンルを貫いて存在する。

一方、鎌倉初期に成立したとされる説話集『宇治拾遺物語』は、説話の内容からすると、編者は、仏教の唱導的、布教的な立場をとらず、また儒教を忌避し、かつ為政者の側にも立たない、古代平安京から中世京都へ至る都市世界の住人とみられる。それゆえ、昔話の杵組みを共有しつつ説話は都市化されていると予想されるから、昔話との比較には有効であるといえる。

昔話「猿神退治」と説話「猿神退治」とを事項でもって比較してみると、口承・書承を問わず、話型を共有することが確認できる。韓国・中国にも類似の話型を認めることができる。さらに、比較によって得られる事項の異同と、表現の異同とに、昔話と説話それぞれの独自性が見て取れる。

一方、日本昔話「猿神退治」は、武力で猿神を退治する亜型と、唱え言によって謎解きする亜型とが混在している。

そもそも一般的に、災いをもたらす靈格に対して人がどのように立ち向かうかを、昔話の話型で考えると、幾つかの知恵を教えている。

- | | |
|----------------|-----------|
| ①逃げる | 昔話「三枚の札」 |
| ②戦って倒す | 昔話「食わず女房」 |
| ③追い出す | 昔話「猿婿入」 |
| ④折り合いを付けて宥和する。 | 昔話「猿神退治」 |

というふうに例示できる。このうち、④のような、唱え言の解説によって解決の手がかりを得、祭祀によって災厄を制御するという解決法は、高度な知恵である。これこそ、日本昔話の特質をなすものであろう。

ところで、日本説話「猿神退治」は、神話以来の、神と人との交わす誓約（ウケヒ）が基層となっていることが見出せる。これは、『常陸国風土記』において、矢筈（やはず）のマタチが耕作を妨害する夜刀（やと）の神に対して、以後神を祭祀するから祟るなと約束させる事例や、『豊後国風土記』において、頸峯（くびのみね）の名の由来に関して、田主が耕作を妨害する鹿を追い詰め、許してくれたら以後は苗を食べないと誓約させたという事例がある。このような神と人との間で交わされる誓約の神話が、説話「猿神退治」の基層をなしている。

このように事項と話型という視点を導入すると、説話や物語が、昔話や神話を基層として重層的に構成されていることが明確になる。一方、昔話と説話との異同は、昔話が近世の村落共同体を基盤とすることと、『宇治拾遺物語』の説話が、古代平安京から中世京都へと変容を遂げようとする都市を基盤とすることによるといえる。

4 考察のねらいを簡単にまとめる

いうまでもなく文化人類学は、昔話を構造structureをもって論じる。私は若き日に構造主義の影響を受けた。そこで、儀礼と言語伝承との相同性homologyを学んだ。今もっていえば、ばらばらに見えるものを貫く法則性や原理を構造と呼んでよいだろう。民俗学でもフィンランド学派の研究者は、昔話の採録事例を集め、モチーフとタイプを調べ、採集地を地図上に落して、地域的な偏差を調べ、話柄の担い手や伝播の傾向を調べたり、伝承の基盤を調べたりする、というふうに展開させる。

ここで私は、国文学の側から比較をするためには、昔話や説話、物語といった考察の対象を、ま

ず、言葉によって織りなされた本文として捉え、比較を行なうことから始める必要がある、と提案するものである。

かくて、日本における昔話をめぐる比較研究の枠組みは、極端に単純化すれば、

構造の比較	文化人類学
モチーフの比較	民俗学
表現の比較	国文学

というふうに、方法的特質を区分して捉えることができるだろう。しかしながら、問題はあれかこれか、ではない。おそらく、

表現／モチーフ／構造

という切り口は、互いに排除し合うものではなく、層を異にするものであると捉え直すことができる。今後、これらの視点による分析を相互に関連付けて考察する必要がある。なぜなら、話型は、昔話のみならず、テキストとしての本文における幾重もの、どの層においても認められる性質をもつものと見做せる。

このように私が論じようとする意図は、比較研究の方法的特質を際立たせるためのものである。すなわち、私のいう、昔話をめぐる国文学からする方法を、ひとことで纏めれば、

言葉によって織りなされた昔話、本文textとしての昔話、表現としての昔話

こそ、考察の対象と方法であると明言しておきたい。

具体的に言えば、事項や話型、表現⁽⁵⁾といった、私の提案する新たな操作概念を手がかりに、国際比較や口承・書承間の比較を方法的に検討したい。同時に、昔話が文字言語による文芸の基盤をなすという観点から、昔話そのものについての文芸研究と、昔話を活用した説話や物語などの文芸研究の方法の可能性について考える必要がある。

5 まとめにかえて

今回のフォーラムの冒頭における趣旨説明で、石井正己氏は、昔話研究が時代のグローバル化と同時にナショナリズム化の中でどのような可能性を開くことができるか、ということを問われた。この問いは実に重い。私も、大学の文学部国文学科において「国文学」を講ずるにあたって、常にこの矛盾を抱えている。

そのことからすれば、昔話の語りを構造化することによる普遍化はグローバル化の試みであるが、すべてを同一化し普遍的な原理に還元してしまう懼れなしとしない。また、昔話の表現の個別性、個性性に固執することはナショナリズムに偏する懼れなしとしない。つまり、昔話を、正しい意味で構造において捉えるとともに、語り口の表現の一々にこだわり地域と歴史とに即して捉えることにおいて、構造と表現とを両睨みしつつ分析、考察を進める以外に危機克服の道はない、と思考するものである。

注

(1) もともと『源氏物語』や仏教説話集『今昔物語集』などは、文字という権力をもつ支配層、貴族社会に属する。文献研究にのみ閉じ籠ることを克服するには、文字を持たない口承文芸によってそれらを相対化することである。すなわち、物語や説話の「作者」が意識的に構築した世界だけでなく、「作品」の生成する基盤となる無意識の世界にも光を当てることになる。

なお、柳田氏は「説話」という概念を、口承のものとして用いるが、最近の説話文学研究において「説話」という時は、無前提に文献の説話をいう。ここでは、国文学の側の概念として用いている。

(2) 席上でも話題となったが、AT（もしくはATU）というタイプ・インデックスは、グリムから発するヨーロッパの昔話の伝統的な分類基準であるために、先見的なものとして絶対化されやすい。また、『韓国口碑文学大系』独特の分類基準は、西洋や日本など他の地域のタイプ・インデックスと対応させることがなかなか

か困難である。

そこで、私は昔話（のみならず、物語や説話、神話など）の国際比較を試みる上で、最も単純に登場人物の動作・行動を抽出することが客観的な指標となると考える。

例えば、プロップは「魔法民話」（ATの三〇〇～七四九番に相当する）を対象として、登場人物の行動、すなわち「機能」を考察の単位とする（大木伸一訳『民話の形態学』白馬書房、1972年）。ただ、この機能は31件に限定されている。また、ダンダスは「北米インディアンの民間伝承」を対象とする（池上嘉彦訳『民話の構造』大修館書店、1890年）。ただ、抽出されるモチーフ素は、欠乏と充足、欺瞞（ぎまん）と成功、闘争と勝利、追跡と脱出というふうに、二項対立的枠組みに還元されてしまう。

また、両者とも、取り出されるモチーフ（もしくはモチーフ素）が、行為だけでなく状況、事柄、事件などに及ぶ。つまり、モチーフ（もしくはモチーフ素）の認定に、分析者による揺れの介在する可能性がある。そのことからすれば、私にいう事項は、検算・検証可能であることにおいて、比較的客観的な単位だと考える。

(3) この事例は、長野県清内路村の語り手、桜井小菊さん（明治40（1907）年生～平成5（1993）年没）の採録記録（『桜井小菊昔話記録集』自刊、2013年）による。ここでは、「ビビビビビビ　こがねザラザラ　御用の御宝」というものである。

(4) 別の機会に論じたことであるが、昔話「尻鳴篋」や「鼠浄土」の唱え言も、讃詞・壽詞であり、唱え言は昔話の基層、古層を担うものであるといえる。

(5) ふつう、表現とは語彙の次元（私のいう表層に属する）をいうが、私は、基層から表層をなす言葉によって織りなされた本文全体を、表現と呼ぶことにしている。というのも、表現は表現者の意識的な層と無意識的な層との総体をもってなされる営為だ、と考えるからである。

〔付記〕

なお、シンポジウムでは少しばかり長い資料を用意したが、報告書に掲載する内容はその概略にとどめた。また、関連する『宇治拾遺物語』『今昔物語集』などの本文、早太郎伝説に関する光前寺関係資料、昔話採録の事例の本文などについても、紙幅上省略した。なお、討論の過程でいただいた質問に対する私の考えは、少しだけ注に書き入れることにした。御参加いただいた各位に謝意を表したい。

〔草稿〕

問題点 1

・「昔話の話型と語り―昔話「鳥吞爺」と唱え言をめぐって―」同志社大学人文学会編『人文学』第197号、2006年3月。

問題点 2

・「日韓比較文学研究の可能性」岡山善一郎・廣田収共編『日韓比較文学研究』第2号、2011年11月。

問題点 3

・「伝承的表現論―昔話と唱え言―」岡山善一郎・廣田収共編『日韓比較文学研究』第3号、2013年2月。

問題点 4

・「『宇治拾遺物語』『猿神退治』考」同志社大学文化学会編『文化学年報』第55輯、2006年3月。

・「日本の古典と昔話―共有される話型をめぐって―」花部英雄・松本孝三編『語りの講座　昔話を知る』三弥井書店、2011年。

・「『宇治拾遺物語』『猿神退治』の特質―日本昔話・韓国昔話の比較をもとに―」岡山善一郎・廣田収共編『日韓比較文学研究』第1号、2011年1月。

・講演「『宇治拾遺物語』の説話と伝承―文芸比較の方法のために―」説話・伝承学会大会、於静岡文化芸術大学、2013年4月。

なお、今回の資料のおよそ半分の内容は、近刊の小著『文芸比較の方法論』（勉誠出版）と内容の重複するところがある。その点はどうか御許しいただきたい。

『韓国口碑文学大系』の話型と昔話通観の話型の対応をめぐって —<3 騙す騙される>の例を中心に—

李市俊

1 はじめに

説話(文献説話及び口伝説話(昔話))は日本・韓国でどれほど翻訳されたのであろうか。まず、文献説話であるが、日本の文献説話は、『古事記』『日本霊異記』『三宝絵』(上巻のみ)『沙石集』『元亨釈書』『歎異抄』『発心集』『遺老説傳』などが翻訳されており(1)、口伝説話は、柳田国男の『遠野物語』や子供向けの絵本として幾つかの説話が翻訳されている。また、日本では『三國遺事』『青邱野談』の他に、近年『新羅殊異傳』『朝鮮民譚集』『於野譚』などの文献説話が編訳されたり(2)、口伝説話の方は、植民地時代を前後して日本語で書かれた韓国の口伝説話が復刊されたり(3)、翻訳の作業が進行中にある(4)。

2 韓国説話の分類(5)

韓国で本格的に説話の分類を試みた最初の研究者は張徳順である(6)。氏は説話を神話、伝説、民譚に分け、主に話題による分類であるが、対象・形態なども参考にして分類している(7)。

神話		1. 韻文神話	1) 堂神話 2) 一般神話
		2. 散文神話	1) 創世神話 2) 英雄神話 3) 始祖神話 4) 部落神話 5) 一般神話
伝説		1. 自然物 (自然伝説)	1) 陸地 2) 河海
		2. 人工物 (人文伝説)	1) 遺跡 2) 遺物 3) 寺刹縁起譚
		3. 補助分類	1) 人物 2) 人間行爲 3) 動物
民譚	A. 神話的内容	1. 神の由來	1) 風神 2) 漁業神 3) 山神 4) 部落神 5) 서낭seonang神 6) 巫神
		2. 神の話	1) 風神 2) 国神 3) 福神 4) 開国神
		3. 宇宙	1) 日月 2) 星
		4. 地形	1) 地形 2) 海 3) 気象 4) 大洪水
		5. 人間	1) 起源 2) 形状
		6. 植物	1) 恨みを抱いたまま死んで花になる 2) 墓から生えた木 3) 形状
		7. 動物	
	B. 動物譚	1. 由來	1) 外貌 2) 関係 3) 変身
		2. 対人間	1) 友好 2) 好・害の動物 3) 加害 4) 交婚
		3. 対動物	1) 走り競べ 2) 上座争い 3) ひどい目に会わせる 4) 結婚 5) 相剋 6) 音
		4. 想像動物	1) 龍 2) 鳳凰 3) 火竜
			*補助分類: b1. 家畜 b2. 野獣 b3. 魚 b4. 鳥 b5. 虫 b6. 蛇
	C. 一生譚	1. 胎夢	1) 日月星 2) 動物
		2. 異胎	1) 精気 2) 飲食 3) 異父(異物父親) 4) 異母(異物母親) 5) 子授石
		3. 出生	1) 賤生 2) 多胎兒 3) 異生 4) 日光生 5) 有書出生 6) 冤魂子息 7) 僧侶の子供 8) 棄兒 9) 捨てられた子供
		4. 修業、試練	1) 武術修業 2) 修道 3) 求福路程記 4) 求藥路程記 5) 求子旅行

		6)求婚路程記 7)結婚試練 8)大膽試験
	5. 科挙 出世	1)庶民出世 2)神助出世 3)詐欺で出世
	6. 結婚	1)好縁 2)悲縁 3)異交(動物交媾)
	7. 病老	1)名医 2)棄楼 3)おばすて
	8. 死祭	1)祭禮 3)死後意志 3)二人の父の祭祀 4)明堂
	9. 還生 蘇生	1)前生因縁 2)畜生還生 3)托身蘇生 4)借財蘇生 5)저승구경 6)爲佛還生 7)爲仏蘇生 8)謫仙
D. 人間譚	1. 兄弟、友愛	1)友愛 2)慾心 3)比較 4)離合 5)義兄弟
	2. 父と子、孝	1)虎と孝子 2)犠牲 3)規範的孝行 4)捨てられた娘の孝誠 5)不孝子の改心、中年孝子 6)異蹟 7)其他
	3. 夫婦、烈	1)望夫石 2)貞節を守る烈女 3)烈不烈 4)多夫烈女 5)妻は他人 6)娘はだいなし 7)女子は犬忌
	4. 継母、妾	1)継子いじめ 2)継子の死 3)目玉を抜く継母
	5. 情慾	1)相避 2)私姦 3)教訓
	6. 社会	1)偽両班 2)賤民は不可 3)白丁 4)歳時風俗
	7. 朋友、友情	1)友情試験 2)貴賤知己
	8. 競べ	1)兄妹の力競べ—ソウル型 2)兄妹の力競べ—城作り 3)男女力競べ 4)夫婦の技競べ
E. 信仰譚	1. 風水	1)明堂 2)斷脈 3)防鎮 4)〜穴、〜形 5)王都豫言 6)ソウル風水説 7)名風水
	2. 占ト	1)兩トの競術 2)名トの死 3)破字占 4)假ト 5)得子占
	3. 禁忌	1)見せるな 2)見るな 3)振り返るな 4)開けるな 5)食べるな 6)話すな 7)塗るな 8)飲むな 9)突き抜けるな 10)捨てるな 11)長く飼うな
	4. 夢	1)一場春夢 2)夢の来歴 3)解夢 4)胎夢 5)婚夢
	5. 運命	1)延壽 2)虎食運を免れる 3)運命不可避 4)反骨人 5)夫婦となる運命 6)99に失敗
	6. 幸福	1)自分の福でいきる 2)借福 3)求福路程
	7. 賞罰 恩讐	1)報恩 2)動物報恩 3)僧侶いじめに復讐する 4)風水いじめに復讐する 5)天罰 6)追従者に罰(先賞後罰)
	8. 仏教	1)逐龍建寺 2)寺址指定 3)偽僧 4)引水佛
	9. 人供 (人身供養)	1)水神 2)怪物 3)鐘作り 4)土手作り 5)埋兒
F. 英雄譚	1. 怪物退治	1)地下国怪物退治 2)惡龍退治 3)狐退治 4)虎退治 5)僧を殺した むかで退治 6)惡龍退治 7)鬼神退治 8)大蛇退治 9)三つの不思議な瓶 10)トケビ退治 11)雷退治
	2. 赤ん坊將帥の死	1)脇の翼 2)將帥の弱点
	3. 武將	1)無実な武將
G. 怪奇譚	1. 別世界旅行	1)別天地 2)繩に登り天の国へ 3)繩に登り地下の国へ 4)虹の橋
	2. トケビ	1)トケビの来歴 2)トケビの性質 3)トケビはおかしい 4)トケビ夫
	3. 鬼神	1)処女鬼神の復讐 2)赴任して死んだ受令 3)冤魂の祠堂 4)冤魂の子息 5)死後の意志 6)骨鬼神 7)鬼神の種類 8)魂の旅
	4. 遁甲 (変身)	1)動物となった人間 2)動物となった動物 3)動物となった植物 4)人間となった人間 5)人間となった動物 6)人間となった石 7)人間となった植物 8)物となった鬼神 9)物となった動物 10)物となった植物 11)物となった人間 12)植物となった人間
	5. 道術	1)縮地法 2)禁動物 3)動物の言葉がわかる人 4)高僧の道術 5)符籙の効果 6)前生人と同一人 7)英雄を救った魚の橋 8)英雄を救った水別け 9)護国佛 10)山の移動 11)石汗

	6. 異状体質	1) 巨人 2) 小人 3) 半人 4) 王様の耳はロバ耳 5) 陰長
H. 笑話	1. 笑話	1) 愚か者の話 2) 怠け 3) 忘れがち 4) ケチ 5) おなら 6) 誤解 7) 眞假の争い 8) 動物捕獲 9) 嘘 10) 欲張り
	2. 滑稽	1) 兒智 2) 犯人探し 3) 名裁判 4) 歳自慢
	3. 淫談	1) 行爲 2) 辱説 3) 姓氏の辱
J. 形式譚	1. 話	
	2. 詩画	
	3. 象徴	

上記の表には省略したが、例えば、「C. 一生譚>6. 結婚>1) 好縁」にはさらに、①買夢、②吉夢、③継子の婚姻、④柳の葉を浮かべた水、⑤信物、⑥定婚、⑦公主と賤民の結婚、⑧仙女との結婚、⑨夫婦になる運命、⑩神助結婚などの下位分類が施されており、各々の項目に一、二の例話を掲示している。対象とした資料は口伝説話および文献説話であって、「口伝」と「文献」とを分けずに統一的に捉えようとした試みは意義深いと判断されるが、取り扱った資料が限られている点⁽⁸⁾、説話を神話、伝説、民譚で分けて分類するしかなかった点、対象とした資料の一部が特に文献説話所収話の場合、上記の分類から漏れる例がある点など、依然分類の問題点は残っている。

次は、崔仁鶴の分類案であって、氏の『韓国昔話の研究』⁽⁹⁾における分類の項目と番号を整理すると以下の通りである。

I. 動物昔話 (1—146)	1. 動物の由来(1—24)	
	2. 動物の社会(25—54)	
	3. 植物の由来(55—58)	
	4. 人と動物(100—146)	a. 逃竄譚(100—108) b. 愚かな動物(109—116) c. 動物報恩(117—129) d. 化物譚(130—146)
II. 本格昔話 (200—483)	5. 異類嚮(200—204)	
	6. 異類女房(205—213)	
	7. 異常誕生(214—219)	
	8. 婚姻・致富(220—256)	
	9. 呪寶(257—283)	
	10. 怪物退治(284—292)	
	11. 人と信仰(300—384)	a. 異郷世界(300—307) b. 死と人生(308—325) c. 神(靈魂)と人間(326—346) d. 風水譚(347—355) e. 占卜譚(356—371) f. 呪術譚(372—384)
	12. 孝行譚(385—413)	a. 親孝行(385—408) b. 烈女(409—413)
	13. 運命の期待(414—438)	
	14. 葛藤(450—483)	a. 親子間(450—456) b. 兄弟間(457—474) c. 隣人(475—483)
III. 笑話 (500—697)	15. 愚か者譚(500—568)	a. 愚かな村(500—505) b. 愚か嚮(夫)(506—517) c. 愚か嫁(嫁)(518—526) d. 愚か者(527—568)
	16. 巧智譚(569—667)	a. 知恵者(569—594) b. 才致者(595—6030)

		c. 言葉の才能 (604—626)
		d. 名裁判 (627—637)
		e. 業較べ (638—646)
		f. 和尚と小僧 (647—667)
	17. 狡猾者譚 (668—697)	a. 奸邪者 (668—686)
		b. 誇張譚 (687—697)
IV. 形式譚 (700—711)	18. 形式譚 (700—711)	
V. 神話的昔話 (720—742)	19. 神話的昔話 (720—742)	
VI. 其他 (補流) (750—766)	20. 其他 (750—766)	

崔仁鶴氏が取り扱った資料高橋亨『朝鮮の物語集附俚諺』(1910)をはじめ、氏が自ら集めた『朝鮮昔話百選』(1974)にいたるまでの間に出版された35冊を対象にしており、その話数は3002話にいたる。外国の昔話の比較を念頭に置き、766項目の韓国の民話のタイプを設定した意義は大きく、日韓昔話の比較研究の礎石を築いたと評価できよう。但し、氏の取り扱った資料は20世紀初期以後採集された昔話、主に口伝説話が中心であって、文献説話の方は取入れていない。参考までに、氏は口伝で伝来される伝説を中心として1971年度まで採集された637話の伝説をテキストとして抽出した韓国伝説のMotif Indexも発表している(10)。

次は曹喜雄の分類案(11)であるが、氏は第1次的分類として五つの項目に分け、さらに26個の項目にわけて第2次的分類としている。

I. 動植物譚	1. 起源譚 2. 智略譚 3. 痴愚譚 4. 競争譚
II. 神異譚	5. 起源譚 6. 變身譚 7. 應報譚 8. 超人譚 9. 運命譚(豫言譚) 10. 呪宝譚
III. 一般譚	11. 起源譚 12. 教訓譚 13. 出身譚 14. 艶情譚
IV. 笑話	15. 起源譚 16. 風月譚(語戯譚) 17. 智略譚 18. 痴愚譚 19. 誇張譚 20. 偶幸譚 21. 捕獲譚 22. 淫褻譚
V. 形式譚	23. 語戯譚 24. 無限譚 25. 短型譚 26. 反復譚(連鎖譚)

曹喜雄氏の分類案の特徴は第一に、神話、伝説、民譚を区別しなかった点、第二に、口伝説話と文献説話をすべて考慮に入れた点であって、氏は今までの分類が民譚重視である点を問題点として指摘し、より積極的に伝説、逸話、野談を取り入れての分類案が必要であると主張した。但し、大まかな大きな分類案を出したものの、どの項目にどのような口伝説話と文献説話が属しているのかについては具体的に示していない(12)。

文献説話だけを対象とした分類案の中で注目すべき業績は徐大錫の『朝鮮朝文献説話輯要(Ⅰ)(Ⅱ)』である(13)。巻(Ⅰ)は『於于野談』『溪西野談』『青邱野談』『東野彙輯』の四種の文献説話を対象にして粗筋の整理と分類を行っており、巻(Ⅱ)は『記聞叢話』『梅翁閑錄』『天倪錄』『錦溪筆談』『東稗洛誦』『青野談藪』『此山筆談』の七種の文献説話を対象にして粗筋の整理と分類を行っている。徐大錫氏の分類案を細部の分類まで全て記すと以下の通りである。

【1 人物譚】

11行實	111君臣	1111賢君譚 1112暗君譚 1113忠臣譚 1114奸臣譚
	112父子	1121嚴父譚 1122賢母譚 1123孝子譚 1124孝婦譚 1125不孝譚
	113夫婦	1131賢婦譚 1132烈女譚 1133湯夫譚 1134淫婦譚 1135妬婦譚
	114主奴	1141忠僕譚 1142忠婢譚 1143叛奴譚
	115其他	1151友愛譚 1152信義譚 1153惡漢譚 1154偽善譚
12性情	121仁・不仁	1211寬容譚 1212厚人譚 1213悍人譚 1214吝嗇譚
	122義・不義	1221剛直譚 1222清貧譚 1223豪俠譚 1224小人譚 1225貪慾譚
	123礼・非礼	1231謙讓譚 1232勤慎譚 1233嚴威譚 1234驕慢譚 1235浮華譚 1236好色譚 1237勤實譚
	124智・無智	1241智略譚 1242愚人譚 1243誣罔譚
	125勇・怯	1251勇力譚 1252膽大譚 1253怯弱譚

	126其他	1261風流譚 1262大食譚 1263奇人譚 1264兇人譚 1265美人譚
13才藝	131文	1311名官譚 1312碩學譚 1313文人譚
	132武	1321名將譚 1322名弓譚 1323武藝譚
	133技	1331名醫譚 1332名妓譚 1333棋才譚
	134藝	1341名筆譚 1342名画工譚 1343名唱譚 1344名樂工譚 1345優人譚 1346名鑑識譚
	135其他	1351奇盜譚 1352奇乞人譚 1353假名人譚
14法術	141儒學	1411巨儒譚 1412處士譚
	142佛教	1421高僧譚 1422異僧譚 1423居士譚
	143仙教	1431真人譚 1432仙人譚 1433仙女譚 1434方士譚
	144民間信仰	1441名風譚 1442名卜譚 1443名巫譚
	145其他	1451知人譚 1452豫知譚 1453異人譚 1454神童譚
15異物	151鬼神	1511神靈譚 1512神人譚 1513疫神譚 1514魂靈譚 1515鬼物譚
	152怪物	1521巨人譚 1522怪物譚
	153動物	1531異虎譚 1532神龍譚 1533義狗譚 1534名馬譚 1535動物譚(其他)
	154事物	1541奇寶譚 1542名堂譚 1543事物譚(其他)

【2 事件譚】

21勝負	211國家	2111戰爭譚 2112外交譚 2113政爭譚 2114反正譚 2115反逆譚
	212社會	2121科舉譚 2122訟事譚 2123推奴譚 2124討伐譚
	213個人	2131爭鬭譚 2132競爭譚 2133報讎譚 2134模倣譚
	214其他	2141懲治譚 2142退治譚
22善惡	221善行	2211救人譚 2212援助譚 2213中媒譚 2214解冤譚 2215和解譚 2216修養譚 2217改過譚 2218報恩譚
	222惡行	2221害人譚 2222離間譚 2223薄待譚 2224背反譚
23禍福	231發福	2311致富譚 2312致仕譚 2313及第譚 2314免賤譚 2315得孫譚 2316長壽譚 2317避禍譚
	232殃禍	2321亡身譚 2322敗家譚 2323落榜譚 2324得罪譚 2325失意譚 2326苦行譚 2327罹災譚 2328逢辱譚
24離合	241結合	2411成婚譚 2412娶妾譚 2413改嫁譚 2414戀愛譚 2415私通譚 2416結緣譚 2417交遊譚 2418結義譚
	242離散	2421離別譚 2422絕緣譚 2423出家譚 2424流浪譚
	243離合	2431父子離合譚 2432男女離合譚 2433離合譚(其他)
25笑事	251戲弄	2511詐欺譚 2512譏弄譚 2513作戲譚 2514諷刺譚
	252愚行	2521痴愚譚 2522淫猥譚 2523誤解譚 2524失手譚
	253其他	2531誇張譚 2532語辯譚 2533語戲譚
26怪事	261異界	2611天界譚 2612仙界譚 2613冥府譚 2614水府譚 2615異鄉譚
	262生死	2621運命譚 2622招魂譚 2623夢遊譚 2624還生譚 2625冥婚譚 2626怪疾譚
	263其他	2631變身譚 2632異交譚 2633夢遊譚 2634夢兆譚
31史話・逸話	311詩話 312史屑 313人物片話 314雜事(其他)	
32雜識	321風俗 322制度 323由來 324雜識(其他)	
33論評	331時評 332史評 333人物評 334詩評 335雜評	

徐大錫氏の分類案の特徴は文献説話の題材に注目して、大きく人物と事件の二つに分け、各々下位分類を試み、説話としての結句を持たない論評などは雑話類に取り扱っている点である。説話集の収録話の全てを分類案に基づいて体系化している点において、文献説話の實状をよく反映した提案であるといえよう。

最後に注目すべき分類案は金鉉龍は『韓国文献説話』⁽¹⁴⁾で、『三國史記』『三國遺事』『高麗史』『帝王韻紀』『大覺國師文集』『海東高僧傳』『破閑集』などの計254説話集、約3千5百から4千余話の文献説話を対象にして分類を試みた。詩話の一部が対象から除外されているが、対象とした文

説話は最大であって、類話を調べるには最も便利である。7巻全体を17項目に、さらに、各項目には5～6個の小項目を設けている。

1. 品性	1) 廉潔	2) 寛大	3) 賢良
	4) 飲酒	5) 横暴	
2. 智慧	1) 知人	2) 鑑識	3) 總明
	4) 謀計	5) 技能	
3. 立身	1) 科擧	2) 君恩	3) 事君
	4) 勇氣	5) 交際	
4. 處世	1) 孝友	2) 處理	3) 盜賊
	4) 奴僕	5) 隱逸	
5. 婦人	1) 婦徳	2) 烈節	3) 變心
	4) 智明	5) 義氣	
6. 家庭	1) 夫婦	2) 情慾	3) 妬婦
	4) 妾室	5) 侍婢	
7. 愛情	1) 情感	2) 結縁	3) 私通
	4) 淫婦	5) 奪婦	
8. 妓女	1) 純情	2) 明敏	3) 守禮
	4) 相奪	5) 逸話	
9. 佛教	1) 信佛	2) 佛僧	3) 異僧
	4) 靈驗	5) 佛寺	
10. 鬼神	1) 鬼魂	2) 再生	3) 冤鬼
	4) 妖鬼	5) 神靈	
11. 巫覡	1) 占卜	2) 淫祠	3) 詛呪
	4) 巫事	5) 妖巫	
12. 道仙	1) 神仙	2) 道術	3) 幻術
	4) 道教	5) 花郎	
13. 神異	1) 靈異	2) 異人	3) 風水
	4) 運數	5) 怪異	
14. 夢事	1) 夢驗	2) 指示	3) 象徵
	4) 解夢	5) 夢詩	
15. 動物	1) 獸類	2) 水族	3) 鳥類
	4) 報應	5) 愛戀	
16. 諧諷	1) 譏諷	2) 淫談	3) 欺諱
	4) 奇行	5) 戲諧	
17. 其他	1) 破字	2) 譏謠	3) 習俗
	4) 歌樂	5) 來歴	

3 『韓国口碑文学大系』の分類と話型⁽¹⁵⁾

口伝説話15, 107編、民謡6, 187編、巫歌376編を収録した韓国最大の口伝説話集は『韓国口碑文学大系』（以下、『大系』と略す）82巻（1981-1988）であって、趙東一を中心に収録話の分類案が提出されている⁽¹⁶⁾。収録話の構造や主題を上位概念から下位概念まできちんと体系化しており、分類案としてはもっとも優れた成果といえようが、口伝説話とその構造及び内容が違ふ文献説話の場合、その分類案に漏れる場合が多い問題点は依然と解消されていない。『大系』は説話の分類方法として独自のシステムを提示している。分類の方は以下の通りである。

<Motif indx of Folk Literatrue(S. Thompson, 1958)>は説話の構成要素を無理にややこしく分けており使用に不便である。そして、<The Types of the Folktale(A. Aarne, 1961)>は物語のおおまかな筋をまとめたものなので一層、使いやすい。韓国の説話もその類型によって分けられたいという考え方は自然であり、同様の試みもあった。しかし、<The Types of

the Folktale>はいくつかの決定的な限界や欠陥が有り、受け入れがたい。国際的な比較の為にはそれに基づいた分類が必要であるかもしれないが、韓国の説話を分類するには色んな面から見ても適切な手段ではない。
『大系 別冊付録1』8p

『大系』では実在に採集した説話＝資料を「各篇」とし、各篇の間で同様の要素を抽象化したものを類型と呼んでいる。その類型を一層、抽象化したものを上位類型と読んでおり、類型をより具体化したものは下位類型と読んでいる。

<表1> 『大系』：類型レベル

具体的なもの		抽象的なもの	
各篇	下位類型	類型	上位類型
資料	<類型—番号>	<上位類型—番号>	3桁：<000>
採集した説話	まだ、番号を儲けていない	111-1	111
		111-2	
		111-3	

3-1 一番目の上位類型

その上、上位類型は再び三つのレベルに分けられる。一番目の上位類型の分け方について、『大系』は以下のように説明する。

最初は説話と説話でないものを分ける。説話は1から8までの番号を与え、説話でないものは9に分類する。
『大系 別冊付録1』12p

各篇を「説話」と「説話でないもの」として分類した上で、さらに前者の「説話」を「特殊な主体」と「特殊な状況」として大別する。主体が特殊ではないが、説話の条件を満たすものなら特殊な状況の説話の類型に属する。

特殊な主体の説話は主体の性質によって展開され、状況も同じく特殊であったとしても、それは主体の特殊性による当たり前の帰結である。よって、主体が特殊であれば、状況は考慮する必要がない。特殊な状況の説話は主体は特殊でなければこそ、表そうとするものがはっきりと浮かび上がる。
『大系 別冊付録1』12p

主体と状況の特殊性というふたつの要素はどちらかという、主体の特殊性に重きが置かれていると見受けられる。つまりA(主体)とB(状況)ではなく、「A」と「not A」という分類方法を適用していると言えるだろう。次は『大系』の一番目の上位類型の分け方である。

特殊な主体の説話は1から4に、特殊な状況の説話は5から8までに配置する。
『大系 別冊付録1』12p

主体の特殊性が認められる類型はその特殊性の強弱の程度によって再び二つに分けられる。主体が凡人よりはるかに優れたり、劣ったりすると<1 勝つ負ける>や<2 知る知らない>に属する。主体が凡人より少し優れたり、劣ったりすると<3 騙す騙される>や<4 正しい間違う>に属する。具体的に1から4までの一番目の上位概念の各々の主体を記すと以下の通りである。

- <1 勝つ負ける>……………神人、英雄、建国始祖、将帥
- <2 知る知らない>……………神霊、異人、愚者
- <3 騙す騙される>……………自分の素姓を隠し知略を発揮する人物、肅宗大王、朴文秀(パク・ムンスウ)、金炳淵、金先達タイプ、ずるけ者の下人など
- <4 正しい間違う>……………善人、悪人、奇人、性格的に特殊な人(けちんぼう、うそつき)や身体的に障害を持っている人など

一方、状況が特殊な説話は状況の性格によって二つに分けられる。人と人ではないものとの関係によって特殊な状況が生じると<5 動く止る>や<6 行き来>に属し、人と人との間で特殊な状況が生じると<7 うまくいくうまくいかない>や<8 繋ぐ絶つ>に属する。具体的に5から8までの関係を結ぶ対象を記すと以下のようである。

- <5 動く止る>……………自然物(自然物の神霊)、人工物、植物 →伝説
 <6 行き来>……………動物、鬼神(幽霊)、妖怪(トケビ) →異類婚姻、怪異、異郷訪問
 <7 うまくいくうまくいかない>……………凡人の人が他人と関わって幸運や不幸を招く話
 (1~6に属さない幸運・不運に関する説話のみ)
 <8 繋ぐ絶つ>……………語り手が聞き手の期待に反して不条理に話を繋げたり、とんでもなく絶ったりする。→形式話

特殊性のほどが強い主体はまた、その特殊性の性質によってふたつに分ける。主体の特殊性のほどについて理解するための材料として<1 勝つ負ける>の類型、<2 知る知らない>の類型と<3 騙す騙される>の類型を一緒に見てみよう。<1>と<2>の主体は神霊・英雄・異人・愚者になる。比べて、<3>の主体は肅宗大王・朴文秀(パク・ムンスウ)・金笠(キム・サッカ)・金先達(キム・ソンダル)タイプの人物などがあり、非凡の人であることは確だが、妖術や神通力を持っている人物ではない。また、愚者のように愚かすぎる＝特殊性の程の強い人物であるわけでもない。主体の特殊性のほどの強い説話は<1>と<2>として、そうでない説話は<3>と<4>に分けられる。

3-2 二番目の上位類型

1から8までの上位類型はいずれも二つに分けられて、また四つに分けられるのにその原理が一定である。ここでは書き始めと結末の関係を察する。書き始めが二つに分けられ、結末も二つに分けられているし、書き始めと結末が合ったり、食い違ったりする。書き始めが分けられている様相にしたがって一つが二つになって、結末まで考慮すれば二つが四つになる。そうして二番目の上位類型が判別される。

以下、一番目の上位類型と二番目の上位類型を記すと以下の通りである。

1 勝つ負ける	11 勝つべくして勝つ
	12 勝つべきなのに負ける
	13 負けるべきなのに勝つ
	14 負けるべくして負ける
2 知る知らない	21 知るべくして知る
	22 知るべきなのに知らない
	23 知らなそうなのに知る
	24 知らなそうで知らない
3 騙す騙される	31 騙すべくして騙す
	32 騙すべきなのに騙される
	33 騙されるべきなのに騙す
	34 騙されるべくして騙される
4 正しい間違う	41 正しそうで正しい
	42 正しそうだが間違う
	43 間違うべきなのに正しい
	44 間違うべくして間違う
5 動く止る	51 動くべくして動く
	52 動くべきなのに止る
	53 止るべきなのに動く
	54 止るべくして止る
6 行き来	61 行くべくして行く

7	うまくいくうまくいかない	62	行くべきなのに来る
		63	来るべきなのに行く
		64	来るべくして来る
		71	うまくいくべくしてうまくいく
8	繋ぐ絶つ	72	うまくいくべきなのによくいかない
		73	うまくいきそうにないがうまくいく
		74	うまくいきそうでなくてうまくいかない
		81	繋ぐべくして繋ぐ
		82	繋ぐべきなの絶つ
		83	絶つべきなの繋ぐ
		84	絶つべくして絶つ

たとえば、＜31 騙すべくして騙す＞の類型は、肅宗大王・朴文秀・金笠(金炳淵)の成功譚が含まれる。＜32 騙すべきなのに騙される＞は＜31＞に該当する人物の失敗譚となっている。＜33 騙されるべきなのに騙す＞の類型は金先達タイプ(下層階級の人物を含む)の成功譚であり、＜34 騙されるべくして騙す＞は金先達タイプの人物の失敗譚となっている。

3-3 三番目の上位類型と類型

三番目の上位類型を『大系』は中間的な性格を帯びているとしている。

二番目の上位類型は必然的に32の類型となっている。しかし、類型は何百に分けられている。その中間に位置する上位類型をいくつも設けると複雑になる。それを回避するために三番目の上位類型を単一のものにしようと思う。三番目の上位類型は二番目の上位類型と類型の中間的な性格を帯びて、かつ、その数も適切でなければならぬため、場合によっては多くなったり、また、少なくなったりすることを認める。『大系 別冊付録1』17p

たとえば、＜3 騙す騙される＞に属する四つの二番目の上位類型はそれぞれ以下のように三番目の上位類型に分けることができる。二番目の上位類型まで一貫されているAとnot Aの分類方法は三番目の上位類型では適用されていない

- | | | |
|------------------|-----|---------------------|
| ＜31 騙すべくして騙す＞ | 311 | 助けられる人知略で助ける |
| | 312 | 制圧すべき人知略で制圧する(愚弄する) |
| | 313 | 作文くらべ |
| ＜32 騙すべきなのに騙される＞ | 321 | 助けるべき人助け損なう |
| | 322 | 自分より優れた人と逢う |
| | 323 | 助けられる状況に陥る |
| ＜33 騙されるべきなのに騙す＞ | 331 | でたらめをしてただ食いする |
| | 332 | でたらめをして利益を得る |
| | 333 | でたらめをして女を騙し使う |
| | 334 | でたらめをして相手をいじめてやる |
| | 335 | 身分の高い人の鼻を折る |
| | 336 | てごわい相手を知略で抑える |
| ＜34 騙されるべくして騙す＞ | 341 | 自分の弱点をごまかす |
| | 342 | てごわい人に逢い痛い目に合う |

最後に類型であるが、これらの上位類型にはそれぞれの類型が設けられているが、類型にも三番目の上位類型と同様、一貫した法則は適用されていない。また、それぞれの上位類型に含まれる類型の数も各々異なっている。

1段階	2段階	3段階	IT番	類型	IT番号
3. 騙す 騙される	31 騙す べくして 騙す (肅 宗大王・ 朴文秀・ 金笠 (金 炳淵) の 成功譚)	311 助けられる 人知略で助ける		311-1 不遇な人に科擧の問題を教えた肅宗大王	
				311-2 喪歌僧舞老人嘆	
				311-3 自分と同じ四柱を持つ人を助ける肅宗	
				311-4 明堂を与えた肅宗	
				311-5 行いの立派な人を賞した肅宗大王 (朴文秀)	
				311-6 悔しい事情解決してあげた朴文秀	
				311-7 可哀相な人を婚姻させた朴文秀	
				311-8 可哀相な人の親戚になってあげた朴文秀	
				311-9 郡守ごっこする姉妹を花嫁に行かせる肅宗 (朴文秀)	
		312 制圧すべき 人知略で制圧す る (愚弄する)		312-1 罪人を見つけて処断した朴文秀	
				312-2 横暴ものを罰した朴文秀	
				312-3 けちな者を改心させた朴文秀	
				312-4 正体を隠して自分を無視する人を驚かせた宰相 (孟思誠の公堂問答)	
		313 作文くらべ		313-1 中国の士人と文くらべ	
				313-2 僧と文くらべ	
				313-3 人の文章を書き直す	
	32 騙す べきなのに 騙される★肅宗 大王・朴 文秀・金 笠 (金炳 淵) の失 敗譚	321 助けるべき 人助け損なう		321-1 肅宗が教えてくれた科擧問題の答案を忘れた人	
				321-2 金塊に当たって死んだ人	
		322 自分より優 れた人と逢う	IT655	322-1 異人のためにあわてる肅宗大王 (朴文秀)	
				322-2 自分よりもっと幸せな人に会った肅宗大王	
				322-3 白丁の目ろみで甥となった朴文秀	
				322-4 自分より賢い子供に出会った朴文秀	
				322-5 自分より優れた文章の人に逢った金笠 (文章家)	IT655
				322-6 自分より話し上手と逢った郡守	
		323 助けられる 状況に陥る		323-1 死ぬところで生き返った肅宗大王	
				323-2 人のおかげで科擧を受ける朴文秀	
				323-3 死ぬところで 生き返った朴文秀	
	33 騙さ れるべき なのに騙 す★金先 達タイプ (下層階 級の人物 を含む) の成功	331 でたらめを してただ食いす る★金先達タ イプの人が旅の 途中行こう	IT647 IT648 IT689 IT720 IT761	331-1 自分の能力で出来ないことを任せてもらってご馳走になる	IT647 IT648 (○) IT689 IT720 IT761
				331-2 押し切りの輪を盗んでただ食い	
				331-3 旗亭の主人に濡れ衣を着せてご馳走になる	
				331-4 自分が作った病気を治して旅費を稼ぐ	
				331-5 主人の物を預けてただ食いする	
				331-6 見知らぬ上さんの安否を尋ねてただ泊りする	
				331-7 両班の振りをして (身分を騙して) もてなしを受ける	
				331-8 ただ食いの後食中毒の振り	
				331-9 嘘で煙草をもらう	
				331-10 ただ食いの後、主人を怒らせて逃げ出す	
				331-11 無銭飲食してメス豚を捕えたようにする	IT715
		332 でたらめを	IT438	332-1 女子を困らせる	

して利益を得る ★金先達タイプ の人の行動	IT439	332-2 盗みにくい物を盗む賭けをする	
	IT440	332-3 あの世で返済した借金	
	IT441	332-4 葬儀といって弔慰金をもらう	IT439
	IT598		IT731
	IT599	332-5 不孝者の代りに捕まって金儲けする	
	IT600	332-6 自分の物ではない物を売り出す	
	IT601	332-7 変な物を騙し売る	
	IT601	332-8 酔かけ小豆かゆを売り出す	
	△	332-9 食べ物が痛んだといって自分が食べる	
	IT603	332-10 愚者と思わせて物を手に入れる	
	IT607	332-11 普通の言葉を他の意味に使って利益を得る	
	IT608	こと(松の実、冠など)	
	IT609	332-12 主人を騙して利益を得るずるけ者	IT438
	IT610	332-13 泥棒を働いて奥様が捕まる	
	IT611	332-14 泥棒を働いて善人ぶる	IT440
	IT612	332-15 牛を盗んで縄だけ拾ったという泥棒	
	IT614	332-16 お金だけ貢がせた大監をいじめ官職をもら	
	IT626	う	
	IT627	332-17 にせ御史で儲ける	
	IT629	332-18 神様も騙す和尚の策	
	IT630	332-19 訓長の食べ物を盗み食いする	IT603
	IT631	332-20 お金持ちを騙して財産を得る	
	IT633	332-21 公平に分けるといって自分が食べつくす	
	(cf. 3	332-22 お酒の飲めない方が餅をもらおうという賭け	
	34-1)	に勝った蛙	
	IT634	332-23 買った物を返還して利益を得る	
	IT637	332-24 盲が酒宴を張ってお金を儲ける	
	IT638	332-25 文句をつけて割れた物(硯など)を弁償させ	
	IT640	る	
	IT641	332-26 弱点をつかんで利益を得る	
	IT645	332-27 死んだ振りして利益を得る	
	IT646	332-28 妻の父を騙して財産を奪った婿	
	IT650	332-29 いんちきで科挙及第する	
	IT651	332-30 性器を取られたと妻を騙し飲み代をもらう	
	IT652		
	IT653		
	IT659		
	IT673		
	IT684		
	IT685		
	IT687		
	IT690		
	IT706		
	IT707		
	IT708		
	IT709		
	IT710		
	IT711		
	IT712		
	IT713		

	IT714		
	IT715		
	IT721		
	IT722		
	IT723		
	IT724		
	IT725		
	IT726		
	IT727		
	IT728		
	IT729		
	IT730		
	IT731		
333 でたらめをして女を騙し使う★金先達タイプの人の行動	IT660	333-1 妓生騙して付け込む策 (琴)	
	IT779	333-2 処女と婚姻する策	IT779
	IT779	333-3 やもめを手に入れる策	
		333-4 人の女を手に入れる策	IT660
334 でたらめをして相手をいじめてやる★金先達タイプの人の行動	IT613	334-1 鳳だと間違って買った鶏	Cf. IT633
	IT619	334-2 糞を鳥だと欺いて預ける	IT639
	IT620	334-3 借りた便所を売り返す	
	IT621	334-4 かゆを買って人に恥じをかかせる	
	IT622	334-5 恥をかいたことをやりかえす	
	IT623	334-6 自分の過ちを人にかぶせる	
	IT624	334-7 豚は払ったか	
	IT639	334-8 煙草売りに恥をかかせる	
	IT644	334-9 川を渡る人に深さ教えない	
	IT693	334-10 糞を捨てる(チダ)というと棒で打つ(チダ)	IT693△
	△	334-11 麦で詐欺して無縁の人をいじめてやる	
	IT731	334-12 鰲城と漢陰の悪戯	
	IT769	334-13 鰲城犬婦の悪戯	
	IT796	334-14 訓長をいじめてやる学童	IT613
	IT797	334-15 和尚をいじめてやる上佐	
	IT716	334-16 人をいじめてやる雑坊の行い	
	IT769		
335 身分の高い人の鼻を折る★金先達タイプの人ではない人たちの行動★動物譚なら→336	IT528	335-1 家柄自慢の両班に恥をかかせる	
	B		
	IT604	335-2 腹の中に両班の墓を移したと意地を張る	
	IT605	335-3 嘘をついてみてと言う両班を騙していじめてやる	IT796
	IT606		IT797
	IT698		IT798
	IT699	335-4 両班は人ではない	
	IT756	335-5 郡守を騙した衙前	
	IT796	335-6 犬の皮を被った両班のせいで、犬を見ても拝する	
	IT797		
	IT798	335-7 文字使う人をやり込める	
	IT896	335-8 名前を淫乱に解釈して恥じをかかせる	
		335-9 無視された髻、文で復讐する	
		335-10 無視された髻(または他の人物)、策を練って復讐する(策で舅から官職をもらって、奪いにきた義の兄弟たちを色仕掛け、神仙遊	IT528B

			びの仮装、偽りの訃告などで退ける物語を含めて)	
			335-11 間男を米櫃の中に入れて愚弄する(褻裨將伝型)	
			335-12 厳夫厳妻の威勢をねじ伏せて妾をもうける	
			335-13 お爺さんをからかう孫	
			335-14 上の人に恥をかかせた下の者(その他の話もすべて含める)	
	336 てごわい相手を知略で抑える★金先達タイプの人ではない人たちの行動★動物譚の多数を含める	IT531	336-1 性格が荒っぽい新婦が大便秘したといって気をくじく	
		IT532	336-2 目が見える人を騙した盲人	
		IT533	336-3 性行為しているところを見られて復讐する	
		IT534	336-4 淫乱な行動で猛獣をびっくりさせて追い払う	IT785
		IT535		IT786
		A	336-5 いじわるな虎を退けたお婆さん	
		IT535	336-6 自分が一番怖い獣であると虎を騙した狐	
		B	336-7 肝を狙う竜王を退けた兎	
		IT536	336-8 虎を退けた兎	
		IT537	336-9 落とし穴に落ちた虎をまた落とし穴に落とし	
		IT538	た兎	
		IT539	336-10 知恵をくらべて狐を退けた蝦蟇	
		IT547	336-11 一番年寄りだと言い張る 蝦蟇 (蝦蟇伝類型)	IT793
		IT550		IT794A
		IT554		IT794B
		IT556		IT794C
		IT557		IT794D
		IT560	336-12 子供を釜に入れて逃げた兎	
		IT563	336-13 狐と競走して勝った蟹	
		IT577	336-14 地悪い(辛い嫁入り暮らしを強いる)相男を知恵で抑える	
		IT579		
		IT581		
		IT582		
		IT583		
		IT656		
		IT785		
		IT786		
		IT793		
		IT794		
		A		
		IT794		
		B		
		IT794		
		C		
		IT794		
		D		
34 騙されるべくして騙される ★金先達タ	341 自分の弱をごまかす		341-1 金先達型人物が生まれた来歴	
			341-2 祭祀を行う際、でたらめなことを言う	
			341-3 市場に行き、巻物を盗まれる	
			341-4 船があったら、渡っていくのに(雨が漏れると小言をいう家内にいう言葉である)	

イブの人の失敗	342 手ごわい人に逢い痛い目に合う	341-5 冬にも麻の衣を着る	
		341-6 死に際にしやれをいう	
		342-1 口達者の女に逢う	
		342-2 よくできると言い張って失敗する	
		342-3 巡邏に出会って洗濯という	
		342-4 誕生日のご馳走を二回もらおうとした相舅がやり込められる	
		342-5 雑坊と雑坊の対決	

注

- (1) 『今昔物語集（本朝部）』の韓国語訳は今年上半年に李市峻によって出版される予定である。
- (2) 野崎充彦編訳注『青邱野談』（東洋文庫、2000）、小峯和明、増尾伸一郎編訳『新羅殊異傳 散逸した朝鮮説話集』（平凡社、2011）、梅山秀幸訳『於于野譚』（作品社、2006）。また、小峯和明は現在『海東高僧傳』の翻訳・注釈の作業を行なっている。
- (3) 増尾伸一郎（解題）『朝鮮民譚集』（勉誠出版、2009）。参考までに韓国では李市峻・張庚男・金廣植篇で植民地時代の口伝説話集『暗黒なる朝鮮』『朝鮮の物語集附俚諺』『朝鮮野談集』『伝説童話調査事項』『朝鮮の迷信と俗伝』『伝説の朝鮮』『朝鮮の奇談と伝説』『五百年奇譚』朝鮮総督府『朝鮮童話集』中村亮平『朝鮮童話集』『朝鮮民譚集』などの影印本が出ている。植民地日本語朝鮮口伝説話の全般に関しては金廣植「帝国日本における日本語朝鮮説話集の刊行とその推移に関する研究」（東京学芸大学大学院博士論文）参照。
- (4) 石井正己による『大正十二年伝説集』の資料発掘と翻刻（『植民地の昔話の採集と教育に関する基礎的研究』（平成 18 年度広域科学教科教育研究経費報告書、2007・3）、岡山善一郎他『韓国口碑文学大系』の翻訳（『日韓比較文学研究』第 1 号～第 3 号、2011～2013）。
- (5) 以下の内容は説話文学会篇「韓国における日本古典文学の翻訳の問題をめぐって」『説話から世界をどう解き明かすのか』（笠間書院、2013）の内容と重複。他に李市峻「韓国における説話文学の研究の現況」『説話文学研究』45 号、2010 参照。
- (6) 張徳順の分類の以前に孫晉泰（『朝鮮民譚集』郷土研究社、1930）、韓国文化人類学会（韓国民族資料分類表、1967）、柳増善、成炳禧（『慶北地方の民話研究』安東教育大學、1969）の分類案があったが、収集した資料の不足によって試案に止まっている。
- (7) 張徳順『韓国説話文学研究』ソウル大学校出版部、1970。
- (8) 対象とした資料は以下の通り。a.説話集類（『伝説の朝鮮』『朝鮮童話大集』『朝鮮民譚集』『韓国民間傳説集』『話は話（이야기는 이야기）』『말이 令監』『濟州道説話集』『韓国の傳來笑話』）b.古文獻類（『三國史記』『三國遺事』『高麗史』『東國輿地勝覽』『世宗實錄地理志』奎章閣 所蔵邑誌所載）c.未發表類。
- (9) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、1976。
- (10) 崔仁鶴『韓国説話論』（1982）。Motif Index では大きく 20 項目を設定し、さらに各項目を具体的に分類。
- (11) 曹喜雄『韓国説話の類型的研究』韓国研究院、1983。
- (12) 『韓国説話の類型的研究』では動物譚、笑譚、形式譚の分類を試み、『韓国説話の類型的研究』の増補改訂版『韓国説話の類型』（一潮閣、1996）では前の動物譚を補足し、新しく神異譚の分類を試みている。
- (13) 徐大錫『朝鮮朝文獻説話輯要（Ⅰ）（Ⅱ）』集文堂、1991。
- (14) 金鉉龍『韓国文獻説話 1-7』建国大学出版部、1998-2000。
- (15) この主題に関しては、すでに、岡山善一郎「韓国口碑文学大系」の説話類の基本原則とその事例について『昔話—研究と資料』33 号、2005・7 や、川森博司の『日本昔話の構造と語り手』（大阪大学出版部、2000）などの指摘がある。
- (16) 趙東一『韓国説話類型分類集 韓国口碑文学大系別冊付録（Ⅰ）』韓国精神文化研究院、1989。

シンデレラ型昔話の比較 —中国を中心に—

立石 展大

はじめに

ある昔話が世界中で広く語られることは、決して珍しくない。言葉の壁を越えて、文化の違いを越えて、多くの民族で楽しめる話の一つにシンデレラがある。西洋諸国で語られる話は有名であるが、この話は日本や中国を始めとしたアジア諸国でも語られている。日本では「糠福米福」や「粟福米福」などの昔話で知られ、中国の話は、早く唐の時代から確認できる。そこで、ここでは中国の民間に伝わるシンデレラを取り上げ、日本の昔話との比較をする方法をATUや中国の話型研究などを紹介しつつ提示していく。

1 ATUで紹介されるシンデレラ

ATUは、昔話を話型ごとに分類をして番号をつけたカタログである。昔話の国際比較をする上で、欠かすことが出来ないタイプインデックスである。2003年以前はATと呼ばれていた分類であり、昔話研究では、こちらを目にすることも多い。ATUは研究者の頭文字を取ってつけている。まず、フィンランドの民俗学者アンティ・アールネが1910年に『昔話の型目録』を作成し、その後アメリカのステイス・トンプソンが1928年と1961年に英語で増補改訂して、AT分類が完成した。Aはアールネ、Tはトンプソンの頭文字である。ちなみに、AT分類の日本語抄訳は小沢俊夫編『世界の民話25 解説編』（1978年 ぎょうせい）で確認することが出来る。このATをドイツのハンス・イェルグ・ウターが増補改訂し、『国際昔話の型』全3巻⁽¹⁾が2004年に出版された。ATUのUはウターの頭文字である。

ATU分類を概観すると、下記のとおりである（数字は各昔話につけられている番号）。

Animal tales 動物昔話 1-299
Tales of Magic 魔法昔話 300-749
Religious Tales 宗教的な話 750-849
Realistic Tales (Novelle) 現実的な話（ちょっとした物語） 850-999
Tales of the Stupid Ogre (Giant, Devil) おろかな鬼（巨人、悪魔）の話 1000-1199
Anecdotes and Jokes 逸話と笑話 1200-1999
Formula tales 形式譚 2000-2399

今回取り上げるシンデレラは、ATU510Aに分類されている。分類に関しては、基本的にATを踏襲しており、ATにおいても同番号である。ゆえに、シンデレラは魔法昔話に分類されていることが分かる。それぞれの番号ごとに、話型解説と資料名が挙げられているので、ここで、シンデレラがどのように解説されているかを日本語訳して紹介する。

510A（第1巻293～294頁）

ある若い女性が、彼女の継母と継姉妹に虐げられ[S31、L55]、使用人として暖炉の灰の中で寝起きさせられている。姉妹と継母が舞踏会（教会）に行くとき、彼らはシンデレラにやりとげるのが不可能な仕事（例えば灰からエンドウ豆を選び分ける）を課す。彼女はそれを鳥の助けを借りて果

たす[B450]。彼女は、超自然的存在から [D1050.1、N815]。または彼女の亡き母の墓から育った木から [D815.1、D842.1、E323.2]、美しい服を貰い、舞踏会と知らずに出掛ける。王子は彼女と恋に落ちるが [N711.6、N711.4]、彼女は舞踏会から早めに帰らなければならない [C761.3]。同じことがその翌晩に起こる。三日目の晩に、彼女は片方の靴をなくす [R221、F823.2]。

王子は、靴が合う女性だけと結婚しようとする [H36.1]。継姉妹は靴に合わせるために足を切る [K1911.3.3.1]。しかし、鳥はこの偽りに注意をうながす。王子から初めは隠れていたシンデレラが、靴を試すと彼女にぴったり合う。王子は、彼女と結婚する。

(注[]内のアルファベットと数字は、トンプソンによるモチーフ分類)

「娘が継母にいじめられ、難題を課された際に、援助者が現れる。靴のテストを経て、身分の高い男性と幸せな結婚をする」という基本構造は、後述する中国の昔話でも、全く変わらない。ちなみに上記に出てくる「超自然的存在」とは、例えば魔法使いであり、シンデレラが魔法昔話に分類される所以である。

2 中国昔話の状況について

中国で昔話は「民間故事」「民間文学」と言われる（ただし、これには口承の神話・伝説・昔話が含まれる）。

近年、中国全土において国家の関係機関が主導し、日本の「市」レベルでの採集作業が行われた。1984年に開始され1990年までに中国全土で184万余話が収集されている。これにしたがい、省・自治区・直轄市ごとの『中国民間故事集成』が刊行された。また「市」レベルでまとめられた『中国民間故事全書』シリーズが刊行され始めた。これらのシリーズは、昔話を研究する際の信頼できる資料となっており、各話の最後には、語り手、採話者、採話地と採話年の情報が挙げられている。

さて、昔話について、中国では幾つかの分類がある。近年の例を挙げると姜彬主編『中国民間文学大辞典』（1992年 上海文芸出版社）では民間故事に民間童話・動物故事・生活故事・新故事・機智人物故事・民間笑話・民間寓言と細かい項目立てを行っている。また教科書の体裁を取っている段宝林主編『中国民間文学』(2006年 文化藝術出版社)では、幻想故事・生活故事・民間寓言(人物寓言・動物寓言)・民間笑話を挙げている。そして中国昔話の話型研究を行っている劉守華主編『中国民間故事類型研究』(2002年 華中師範大学出版社)では、動物故事・寓言・幻想故事・生活故事・笑話の分類を行っている。研究者によって様々な分類が行われているが、大きな傾向として、中国の昔話の特徴から寓言を一つの項目として挙げ、日本の本格昔話に相当する話を生活故事と幻想故事(民間童話)に分類している。また、動物昔話に相当する話を動物故事として項目立てするかどうかに違いが見られるが、笑話を一つの項目とするところは日本と同様である。

AT分類によるタイプインデックスやこれに基づいた中国独自のタイプインデックスも作成されている。まず、中国独自のタイプインデックスとして、エーバーハルトの仕事が挙げられる。ドイツ生まれのヴォルフラム・エーバーハルトが1937年にドイツ語で著した『中国昔話のタイプ』が中国語訳され、艾伯華 [Eberhard]『中国民間故事類型』王燕生 周祖生訳(1999年 商務印書館)として出版されている。215の昔話分類と31の笑話分類が行われ、この昔話部分を紹介した日本語訳の資料が、馬場英子 瀬田充子 千野明日香『中国昔話集』全2巻(2007年 平凡社)である。

AT番号に即した分類も行われており、丁乃通『中国民間故事類型索引』(2008年 華中師範大学出版社)は、中国昔話にATの番号をつけている。これは、1978年にフィンランド国家科学院から出版された英語版の中国語訳で1986年に中国民間文学出版社からも出版されている。AT番号を手がかりに中国昔話にあたりたい場合には、欠かすことが出来ない書籍である。AT番号さえ分かれば、それを元に中国でも伝承されているかどうかの目安をつけることが出来る。ただし、引用されている資料が多少古いために、資料原典の入手が難しい場合がある。

他にAT番号に即した中国昔話の分類としては、台湾の金榮華が編集した『民間故事類型索引』上・中・下巻(2007年 中國口傳文學學會)がある。こちらは、『中国民間故事集成』を資料として取り上げているなど、近年の資料を分類しているため、原典にあたるのが比較的容易である。『中国民間故事集成』は、索引がないために、AT番号に対応した話に関しては、これであたる事が出来て便利である。ただし、『民間故事類型索引』が出版された2007年時点では、『中国民間故事集成』シリーズが完結していない。中国は23省、5自治区、4直轄市に分かれていて、『中国民間故事集成』

シリーズも省・自治区・直轄市ごとに出版されている。このうち『民間故事類型索引』がカバーしているのは、17省、3自治区、1直轄市分である。他に、中国全省や全民族の昔話を出版しているシリーズとしては、陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集』全40巻（1989年 遠流出版社）や中華民族故事大系編委會編『中華民族故事大系』全16巻（1995年 上海文芸出版社）がある。この二つのシリーズに関しては、全てをカバーして分類がなされるため、『民間故事類型索引』の利用は非常に便利である。そこで、次の章ではこの『民間故事類型索引』を利用して、実際に中国昔話伝承におけるシンデレラを整理、分析していく。

3 中国のシンデレラ

シンデレラの世界分布について調べる場合、日本語書籍では、まず山室静『世界のシンデレラ物語』（1979年 新潮社）やアラン・ダンダズ編『シンデレラ 9世紀の中国から現代のディズニーまで』池上嘉彦 山崎和恕 三宮郁子訳（1991年 紀伊國屋書店）が挙げられる。中国のシンデレラに関しては、いずれも唐時代の『酉陽雜俎』に載せられた「葉限」の話を手がかりに、中国における伝承の分析・考察を行っている。そして、両書とも中国のシンデレラの先行研究としてあげているのが、丁乃通の「中国とインドシナにおけるシンデレラ・サイクル」⁽²⁾である。この論文で、丁乃通は中国の21話とインドシナの9話を分析して、「葉限」が北ベトナムの話に似ていることを指摘している。

そこで、ここまで何度か紹介してきた唐の段成式（?-863）が著した『酉陽雜俎』中の「葉限」という物語について説明する。これがシンデレラ型の話であることは、南方熊楠が『東京人類学会雑誌』（1911年）に「西暦九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」という論文を寄せ、明らかにした。その「葉限」の梗概は、下記のとおりである。

秦から漢にかけての話で、呉洞主と呼ばれる男に妻が二人いたが、一人は葉限という娘を残して死んでしまう。父は娘を可愛がったが、継母は難しい家事を言い渡してこき使った。ある日、葉限は赤いひれに金の目の魚を見つけ、大切に飼い始める。どんどん大きくなり、池に魚を放すが、葉限にだけ姿を見せて餌をもらう。これを妬んだ継母は、葉限をだまして遠くにやり、彼女の服を着て魚を呼ぶ。そして魚を捕まえ、料理してしまう。泣く娘に、天から降りてきた男が、魚の骨のありかを教え、その骨に願い事をすれば叶うことを教えた。祭りが行われることになり、継母は庭の木の見張りを言い渡して、葉限を家に残して、実子の娘と出かける。葉限は、晴れ着を身につけ、金の靴を履いて出かける。継母と姉が葉限によく似ていると思ってみていると、葉限はすぐに家に帰ったが、靴を片方落としてしまった。その靴は拾われ、王の手に渡り、誰が履こうとしてもはけなかった。靴について調べさせた王は、葉限のものと分かる。晴れ着を着て靴を履いた葉限を見て、王は結婚する。王は魚の骨に宝石類を欲張って求めたため、願いは叶えられなくなる。継母たちは、どこからともなく飛んできた石に当たって死んだ。

以上の話は、現在確認できている文献資料において、最も古い記録である。ヨーロッパでの古い文献資料は、例えば『ペンタメローネ』（1634年～1636年ごろ成立）に載せられた「猫のシンデレラ」なので、800年代に書かれた『酉陽雜俎』は突出して古い資料である。この話が、いかに長い時代、広い範囲で語られてきたかが、良く窺える。そして「継母のいじめ」「援助者の存在」「靴のテスト」「幸せな結婚」などの基本的モチーフは、1000年以上に亘って不変であることが分かる。

さて、現代の民間で伝承される中国のシンデレラを概観するために、まずは事典類でどのように解説されているかを確認する。ちなみに「シンデレラ」は、日本語では「灰かぶり」、中国語では「灰姑娘」と訳される。もともと「シンデレラ」とは、継母にこき使われて「灰まみれ」になるところからつけられたあだ名であるが、中国昔話で「灰まみれ」になり「灰姑娘」と名前をつけられる話は現在のところ確認できない。なので「灰姑娘」という言葉は、あくまで事典類や研究書において用いられ、もしくは西洋の「シンデレラ」を中国語訳する際に使われる単語である。中国の伝承を見ていくと、継子と実子の対立で描かれる特徴があり、題名にもそれが反映されることが目立つ。例えば「疤妹（パーメイ）と靚妹（チンメイ）」は、「あばたとべっぴん」という意味だが、「あばた」は継母の実子であり、「べっぴん」がシンデレラに相当する。このあたりは、日本の「糠福

米福」や「粟福米福」などの、継子と実子の名前を並べる題名の付け方と同様である。中国では、こき使われる継子が、援助者のおかげで仕事をこなすが、それを真似した実子が失敗をするという流れで語られるため、このような題名の付け方となっている。

では、姜彬主編『中国民間文学大辞典』（1992年 上海文芸出版社）の解説を日本語訳していく。

「灰かぶり故事」（543頁）

または、葉限故事ともいう。民間童話の一つ。中国では南方で比較的広く伝えられている。美しく善良な娘が、継母の嫉妬や虐待を受けて、いつもこき使われ、とても可哀想だった。人々は、彼女を灰かぶりといった。後に、死んだ母親やほかの神の不思議な力の助けを得て、高貴な人物と幸せな結婚をする。これは人々の善悪の観念を表している。最も古くは、晩唐の段成式の『酉陽雜俎』に記載が見られる。この故事は多くの国で伝えられ、「シンデレラ型」と通称されている。故事には、靴が良縁を結ぶことや異母姉妹が虐待に協力する内容が多く残されている。伝承には異なる変遷や発展があり、蛇婿入りの故事との結合もしばしば見られる。灰かぶりが結婚後に殺害され復活する内容も付け加えられる。代表的なのは「葉限」「疤妹と靚妹」とチワン族の「達架と達倫」、イ族の「阿茨娘」、キン族の「碎け米姉と糠妹」、朝鮮族の「孔姫と葩姫」など。

「疤妹（パーメイ）と靚妹（チンメイ）」（疤：瘡のあと。靚：美しい）（544頁）

灰かぶり故事。広東で伝えられている。靚妹が継母の虐待を受ける。靚妹は死んだ実母が姿を変えた牛に守られる。継母は、自分が生んだ疤妹を連れて芝居を観に行き、靚妹には乱れた麻を直し、緑豆をゴマから選り分けさせた。牛の助けで、靚妹は時間どおりに終わらせた。継母は不思議に思い、事情を知ると牛を殺して食べてしまった。靚妹が牛の骨を壺に隠すと、壺の中で白馬や服や靴に変わって出てきた。靚妹は服と靴を身につけ、馬に乗って芝居を観に行った。帰る途中、靴を溝に落とし、靚妹は道行く人に拾うことを頼む。靚妹は、秀才を選び、結婚する。疤妹は、ひどく嫉妬し、靚妹を密かに殺して彼女に成りすまして、秀才と同居した。靚妹は死後、雀や竹になって、ずっと疤妹と争った後、隣人の助けで復活し、秀才と一緒にあった。しかし疤妹はあきらめず、本物かどうかを試すため、靚妹とともに卵を踏んだり、刃物のはしごを登ったり、油の鍋を跳ぶ試練を受けた。結果、疤妹は油の鍋で死に、継母は彼女の黒こげの骨を見て、驚いて死んだ。

この解説にある「疤妹（パーメイ）と靚妹（チンメイ）」は、中国南方で語られる話の典型であり、継子話の特徴が良く出ている。「灰かぶり故事」の解説にある「蛇婿入りの故事との結合」というのは、中国の伝承の特徴である。すなわち、「幸せな結婚をした娘が、結婚後実子の娘に殺され、死後に転生を重ねて元の人間に戻り、再び幸せになる」という転生のモチーフである。そこで、今少し詳しく見るために、先に紹介した『民間故事類型索引』（上巻）の話型解説を確認する。

「灰かぶり」（184頁）

娘が継母とその娘の妹から虐められ、粗末な服に食事を与えられ、嫌がらせを受け苦しめられる。ただし、様々な難題に遭うたび意外な助けを得て解決する。これらの助けは、亡き母であったり、神仙であったり、鳥であったり、牛などの動物である。思いもよらない助けにより、彼女はついに着飾って、例えば縁日や舞踏会など、その土地の大きな集まりに参加する。その場で、彼女は身分の高い若者と会う。この若者は、娘に惚れ込むが、その集まりでは娘を引き留めることができず、あるいは誰だかもわからない。しかし、最後に娘が慌てて去ったときに残した片方の靴によって、彼女を見つけ、夫婦となる。時に、この話には続きがある。娘が結婚した後、嫉妬をした妹が彼女を井戸に落とし、彼女に成り代わって夫の家に行く。娘が鳥となって妹をあざけると、また妹に殺される。そこで娘は花やその他の植物に姿を変え、夫に尽くす。このような姿を変えた争いの後に、娘は人の姿に戻り、夫に向かって経緯を説明する。妹は相応の罰を受け、夫婦は再び幸せに暮らす。

継母が娘に出す難題は、例えば多く次のようである。

- ①水の漏れる桶で水をくませて、瓶に水をいっぱいにさせる（小魚やカエルが塞いでくれる）
- ②大量の穀物を搗かせる（鳥がついばんで脱穀してくれる）

③大量の布を織る（仙女が助けてくれる）

『民間故事類型索引』では、このような解説の後に、原典資料が列挙される。「灰かぶり」の場合は、30話が挙げられていたので、整理した表を作成して後掲した。まずは、その表の前に、話が実際どのようなものであるかを見るために、長くはなるが『中国民間故事集成』より日本語訳をして確認する。ここに紹介するのは、後掲の表の28番の話である。

「状元拾綉鞋」（状元が刺繡靴を拾う） 漢族 広西チワン族自治区

昔、ある異母姉妹がいて、父親を早くに亡くした。姉妹は後妻と過ごしていた。姉は美しく聡明だったが、妹は醜く、顔中にあばたがあった。後妻は辛辣な人柄で、前妻が生んだ天女のように美しい長女と、自分が生んだあばただけの次女が一緒にいるところを見ると、激しく嫉妬して悪意を胸の内に潜ませた。後妻はあの手この手で難癖をつけて、長女に大変な家事を全て押しつけた。毎日、天秤で水を十回汲ませ、五回薪取りをさせて、牛の面倒をみさせた。できなかったら、ご飯を食べさせなかった。長女は我慢するしかなく、空がまだ暗い内から十回の水汲みを終え、空が明るくなると牛を追って山へ行き薪取りをした。十回の水汲みはできるが、どうして五束もの薪を取ってくることができるだろうか。彼女ひとりでは、一束しか担げない。彼女は思うほどに悲しくなり、思わず声を上げて泣き始めた。すると牛が言った。「泣きなさんな。あなたは五束の薪を取り、二束を私の背中に乗せ、二束をそれぞれ両方の角に掛けて、あなたが一束を担げば大丈夫だ」。その牛は、独りぼっちの子どもを見て、人の言葉を話すと、目には悲しみをたたえていた。姉はそれを聞くと、涙を拭き、五束の薪を伐りに行き、四束を牛の角と背中に載せ、自分は一束を担いで、家に帰った。

後妻は、この大変な家事でさえも長女を困らせることができないのを見て、更に「毎晩、三束の麻を裂く」という仕事を増やした。今回は姉も困りきった。三束はもちろん、一束でさえ裂き終えることはできない。姉がまた泣き始めると、牛が言った。「助けましょう。私の口の中に麻を入れて、シャツで受け取りなさい。吐き出した後、尻尾を一振りすれば、裂きあがります」。姉はそれを聞き、麻を一掴みして牛の口に入れると、牛は何回か噛んで吐き出した。そして尻尾を振って麻を撫でると、果たして裂けた麻は、白く柔らかくなった。このようにして三束の麻は、ほどなく裂き終えた。後妻は牛が麻を裂けるのを知ると、長女の真似をした。麻を大掴みして牛の口に押し込め、シャツを出してきて牛の尻で受けようすると、なんと牛が尻尾を上げて、たくさんの糞をシャツにまき散らした。後妻は、これ以上ないほど怒り、屠殺業者に牛を殺させた。

牛が殺された後、姉が牛の頭をこっそりとテーブルの下に置くと、牛の目が彼女を見ていた。この夜、母と娘達三人が晩ご飯を食べる時に、姉がテーブルに載せられた美味しそうな牛肉を見て、箸を伸ばして、一切れ取ろうとした。しかし、テーブルの下の牛の目がしきりに瞬きするのを見て、急いで箸を引っ込めた。彼女は、殺される前の牛が彼女に言いつけたことに思い至った。それは、「くれぐれも牛の肉を食べるな、食べると彼女の手助けをすることができなくなる。そして頭を菜園に埋めろ」というものだった。姉は、牛の言いつけに従って、頭をこっそりと菜園に埋めた。

ある夜、村に芝居が来た。後妻はわざと長女に芝居を見せないように、箕一つ分のゴマの混ざった緑豆を持ってきて、長女に選り分けさせた。そして、自分は次女を連れて芝居に行った。こんなにたくさんの緑豆をいつになったら選り分けられるか、今晚の芝居は見られないだろうと姉は涙を流しながら選り分けていた。すると一羽のスズメが外で大声で鳴いた。「どうしてこんなに馬鹿なんだ。ふるいを使いなさい」。姉は、その通りと思って、ふるいを持って来ると、すぐにゴマと緑豆を選り分けた。スズメはまた飛んできて彼女に告げた。「菜園の牛の頭を埋めた場所に、甕がある。綺麗な服とズボンと靴と靴下がある」。姉はすぐに菜園に走っていき、牛の頭を埋めたところの泥を掻き出すと、頭の下に大きな甕があった。フタを開くと、中には新しい服とズボン、靴と靴下があった。姉はとても喜んで、最も綺麗な服を選び、ぴったりの刺繡靴を履いた。すでに芝居の銅鑼が聞こえてきたので、きちんとフタをして、芝居の舞台へ走っていった。

芝居へ行くには、小川を渡らなくてはならず、そこには丸木橋が架かっていた。姉は急ぐあ

まり、片方の刺繍靴を橋の下にうっかり落としてしまったが、拾うことをせず、芝居に駆けつけた。翌日、科挙に合格したばかりの一人の状元が馬を引いて丸木橋を渡った。橋の真ん中まで渡ると、その白馬が止まり、首を伸ばして橋の下を見た。そして、状元がどのようにしても馬は歩かなかった。不思議なので、状元も首を伸ばして下を見ると、なんと刺繍靴が片方、小川に浮かんでいた。綺麗な刺繍靴で、もしやこの刺繍靴と自分は縁があるのではないかと思った。状元は直ちに人に命じて、靴を拾ってこさせた。それを手にとって眺めると、彼は、この靴の持ち主はきっと美しく聡明で器用な娘で、そうでなければ、こんなに美しい靴を作れないと思った。そこで、状元は人をやってこの刺繍靴の持ち主を探して、見つけたら妻にすることを決めた。

さて、後妻がこのことを知って、その刺繍靴は彼女の次女のものであると言った。使用人が靴を持ってきて履かせたが、次女の足が大きすぎて、どうしても履けなかった。姉が部屋で聞いていて、もう片方の刺繍靴を持ってきて合わせると、まさに左右一对で、そして使用人が姉に履かせるとぴったりだった。状元は姉を見つけたことにとても満足して、吉日を選んで、姉を娶った。

姉が状元の妻となり、後妻と妹は嫉妬で狂いそうだった。二人はいつも姉を陥れる機会を探していた。姉が嫁に出て一ヶ月たった。村のしきたりによると、娘は嫁に出て一ヶ月後経つと、一度実家に帰る。これを「満月（マンユエ）」という。姉は贈り物を用意して、実家に帰って後妻を訪ねた。

妹は姉に対して言った。「私たちはこれから一緒に遊びに出ることも難しくなるから、今日は私につきあって遊びに行きましょうよ」。姉は承知して、妹と出かけた。二人が井戸端来到ると、妹が言った。「お姉さん、どっちが美しいか、井戸に映してみましょう」。そして、二人が映しに行くと、妹は姉を井戸に突き落として、フタをしてしまった。

妹は姉を殺すと、姉の服を着て彼女に成りすまし、状元の家に戻っていった。状元はおらず、彼の母親が家にいたので挨拶をした。おばあさんは、怪しく思い尋ねた。「あなたは村に行つて数日で、どうしてこんなに変わってしまったの」。すると妹はごまかして言った。「母が豚肉の脂身を鍋で炒めて油を取るのを手伝っていたら、油で頭中、顔中あばたになってしまった」。ただ、状元の母親は、半信半疑だった。さらに妹は部屋の扉を見て、どれが姉の部屋か分からず、「しばらく村に行っていたら、どの扉か分からなくなった」と言ったので、おばあさんは教えた。

姉が井戸に落とされた翌日、ある人が水を汲みに行つて、井戸のフタを開けると、一羽のスズメが飛び出した。そして、まっすぐ状元の家に戻り、状元の部屋に入った。この時、妹がちょうどベッドの前で髪をすいていて、状元はその傍らで別人を見るような感じで彼女を見ていた。するとスズメが妹に対して鳴いた。「恥知らず、恥知らず、姉夫婦の部屋で髪をすいている」。妹が櫛でスズメを追いかけて、髪をすくのを続けると、スズメは戻ってきてまた鳴いた。「一すき掘って、二すき掘って、三すきで頭の骨まですっちゃった」。横で聞いていた状元は、面白く思ってスズメに言った。「おまえは、歌うのが上手いな。もう一度歌ってくれ」。そこでスズメは再び歌った。「一すきで長くなり、二すきで長くなり、三すきでおさがが屋根の梁までとどく」。それを聞いた状元は、満足して笑った。一方、妹は忌々しく思い、落花生を撒いてスズメをおびき寄せて捕まえるや、握り殺して、道ばたに埋めてしまった。

ほどなく、スズメを埋めた場所から竹が生えてきた。妹は毎日水を汲むのにその竹の脇を通らなくてはならなかった。妹が通るたびに、竹が曲がって、彼女の櫛ですいて整えた髪の毛をくしゃくしゃにした。それはまるで、彼女をからかっているようだった。妹は竹を一刀のもとに切ると、道ばたに投げ捨てた。その後、姑がその竹を持ち帰り、麻を入れる籠を編むと、麻布が早く織れて、さらに良い布になった。ある晩、姑が台所でご飯を作っていると、部屋からカチャカチャと布を織る音が聞こえた。不思議に思い、手を止めて、こっそりと扉の隙間から部屋をのぞくと、なんと中では天女のように美しい娘が布を織っている。姑は見るほどに見覚えのある顔だと思った。娘は状元の以前の妻に似ている。そこで、姑はこの一大事を状元に伝え、状元は非常に喜んだ。次の夜、状元はこっそりと母親の部屋の脇で腹ばいになっていた。さて、母親がご飯を作りに行くと、一人の娘が麻の籠の中から起き上がった。状元が目をこらしてみると、はたして自分の以前の美しい妻であった。「妻よ！」と状元は部屋に飛び込

んで、娘をぎゅっと抱きしめた。

妹に井戸に落とされたことを娘は状元に話して、彼に言った。「もし、あなたが私をまだ妻としたかったら、火かき棒で手足の骨を、木べらで頭の骨を作ってください」。状元がそのようにすると、彼女は元通りの妻となった。そして、姉と妹のどちらが本当の状元の妻であるかを決めるために、姉は状元に火を焚かせて、飛び越えられたら本当の妻で、飛び越えられなければ偽物であるとした。状元は、その通りにして、ひと山の柴を取ってきて、盛んに火を焚き、姉と妹に飛び越えさせた。姉はスズメに姿を変えて、飛び越したが、妹は飛び越えられずに焼け死んでしまった。スズメは状元の妻の姿に変わり、状元は元の美しい妻の姿を見て、二人は再び一緒になった。これ以後、夫婦は仲良く、幸せな日々を過ごした。

口述：李麗梅（女）漢族 二十四歳 藤県城関郷新華村 農民 中学卒

採録：徐鳳英（女）漢族 三十七歳 藤県城関郷文化センタースタッフ 高等小学校卒

1876年、藤県城関郷新華村にて採録

次に作成した表を挙げるが、「試練①」は、娘が普段からこき使われている内容で、「試練②」は、芝居や祭りに行くために課される試練である。「援助者」は「試練②」に対して援助をする存在で、「靴」と「転生」の欄は、それぞれ「靴テスト」と「転生モチーフ」が語られる場合に○をつけている。

	伝承地	試練①	試練②	援助者	靴	転生
1	吉林省龍井市 朝鮮族	蒔いた種が煎られていたり、空腹で働かされた時に、黄牛が助けてくれる。	一斗のヒエを搗く 穴のある甕に水を満たす 牛小屋を建てる 芝居に行く服がない	スズメ カエル 若者 お婆さん	○	○
2	吉林省	空腹の時に、牛が食べ物をひりだしてくれる。	芝居に行く服がない	殺された牛	○	○
3	吉林省	荒れ地を耕す時、黒い雌牛が助け、金の鋤をくれ、栗の木を生やしてくれた。	穴のある甕に水を満たす 大量の布を織る 大量の脱穀 中秋の祭りの芝居に行く服がない	金のカエル 仙女 仙女の呼んだスズメ 仙女	○	○
4	遼寧省瀋陽市 朝鮮族	荒れ地を耕す時、黒い雌牛が助けてくれる。	穴のある甕に水を満たす 大量の麻を煮る 大量のヒエを搗く 結婚式に行く服がない	カエル 黒い雌牛 スズメ 仙女	○	
5	内蒙古自治区 莫力達瓦 ダフル族		そばと麦を分ける 結婚式に行く服がない	お婆さん お婆さん	○	井戸に落とされるが、後に夫に助けられる。
6	モンゴル族	こき使われていると、お婆さんが家に招いてくれ、帰りの泉で顔や髪や手を洗うと美しくなる。			○	継母と継姉妹に目を取られるが、目の見えない父子と助け合って目を取り戻し、王子と結ばれる。
7	新疆ウイグル 自治区カシュガル	娘が大量の糸紡ぎを命じられると、山の洞穴のお婆さんが助け、金銀財宝を与え、さら	庭の掃除、水くみ、犬や鶏のエサやり トウモロコシともち栗を	自力で行う お婆さん	○	○

	ウイグル族	に金髪にする。	分ける 結婚式に行く服がない	お婆さん		
8	新疆ウイグル 自治区 カザフ族	飼っている青牛が杏子や葡萄 を吐き出してくれる。	(逃げた牛を追いかけて、 靴が脱げる)	殺された牛 の墓から着 物や靴が出 る。	○	○
9	新疆ウイグル 自治区 シボ族	ろくなご飯も服も与えられ ず、放牧でこき使われている と、牛が料理を出してくれる。	(祝いの場で継母に見つ かり、急いで家へ走る途 中で、靴が脱げる)	殺された牛 の骨や皮が、 服や装飾品 になる。	○	○
10	甘肅省合水県	ろくな食べ物も与えられず、 使われている娘に黄牛が食べ 物をひりだす。牛は死んだ母 親だった。	三斗の麦から石を選び分 け、白でひいて粉にして、 挽きがらをだす 芝居に行く服がない	死んだ母親 死んだ母親	○	
11	四川省寧南県 イ族		竹の蒸し器で水を汲む	カラス	○	崖から落とさ れるが、カラスに助けられ る。
12	四川省凉山 イ族	大量の麻を繅らなければなら ないが、牛が麻を食べてひり 出すと、よれている。	アブラナの種を灰から選 り分けて、籠で水くみをする 宴会に着ていく服がない	カササギ 死んだ牛の 骨	腕 輪	○
13	チベット自治 区錯那県 チベット族	亡き母の魂が牛に乗り移り、 娘のために放牧をしたり毛糸 を繅ったり、料理を用意する。	アブラナの種と砂利を選 り分ける 祭りに行く服がない	ハト ハト	○	○
14	貴州省 プイ族	放牧をしながら綿紡ぎをさせ られるが、牛が綿を食べてひ り出すと、糸になっている。			糸	
15	雲南省 タイ族	(死んだ母親が魚になった後、殺されて、食べられ、その骨を埋めたところから檀香樹が生える) 檀香樹を欲した王子が檀香樹を抜いた者を妻とする。				○
16	雲南省 ハニ族	死んだ母が牛になって、薪運 び、豚の餌やり、脱穀、糸紡 ぎを手伝う。牛は自分が殺さ れた後、骨を叔父の家の鶏の 巣に隠すように言う。(後に、 その場所から服が見つかる)	底に穴のある竹筒で水く み 灰の撒かれた野で、豚の 餌集め 街に行く服がない	カラス カラス カラス	○	○ 靴に加えて、磁 器の碗の上と刀 の上を歩ける者 を妻とした。
17	雲南省 ペー族	母が泉の脇の草を食べて、黄牛に なってしまう。後妻に、日に300本 のわら縄をなわされるが、鳥が牛 に食べさせると良いと教える。殺 された牛の骨を家の裏庭に埋め ると、草が生えた。(後に、その場所 から服が見つかる)	穴のある甕に水を満たす 黒と白の豆を選び分ける 祭りに行く服がない	スズメ スズメ スズメ	○	○
18	雲南省 ワ族	後妻が、実の娘と競わせる。水くみは、竹筒に穴が開いて いて負ける。放牧しながらの糸紡ぎでは、荒い牛を任され るが、気をつけて放牧したため娘は勝つが、牛は殺される。 その骨を埋める。豆の選り分けでは、米と混ざっていて負 け、隣のお婆さんが手伝ってくれる。踊りに行く服がない			○	○

		が、牛の骨を埋めたところから出てくる。			
19	雲南省 チンポー族	両親に先立たれ、叔父の家に 住み込み、こき使われる。	踊りに行く服がない	白水牛	○ ○
20	雲南省 ブミ族	二人の妻を娶った男が死に、二人 の妻とその娘達が残される。一番 目の妻はよく働くが、二番目の妻 は怠ける。一番目の妻は、二番目 の妻に牛にされてしまう。一番目 の妻の娘はこき使われる。放牧の 時に糸紡ぎをさせられるが、牛が 手伝う。砂の混じった裸麦を選び 分け、炒め、粉に碾くのも、牛の 助言で成し遂げるが、牛は殺され る。牛の肉とスープを食べずに、 缶に入れて埋めると鳥が教える。 牛の骨は何日も燃え尽きず、火を もらいに来た隣の若者にやってし まう。その骨からは、美しい少女 が出て、若者のいない間に家事を する。若者に見つかり、娘になる が、二番目の妻が殺そうと忍び込 むと、少女は炭になり、はさみに なり、金の鳥になり、飛んでいく。	石の混ざった大豆を選び 分け、碾いて、食べ物(豆 花)をつくる 芝居を見に行く服がない	金の鳥 金の鳥	○ ○
21	雲南省 トーン族	母親がおばに川に突き落とされ、魚になる。娘はこき使われ、魚は食べら れてしまう。その骨を埋めると大木が生えた。その木は、良い香りに加え、 音楽も奏でるので、人々が集まって踊った。国王がその木を欲するが、抜 けず、これを抜いた娘が国王の目にとまる。			○
22	湖南省花垣県 ミャオ族	父母が留守をする間、姉妹は糸紡ぎをして待ち、親を思って流す涙を 竹筒にためる約束をする。妹は、言いつけどおりにするが、姉は遊び 回る。しかし、親が戻った時に、姉が糸紡ぎと竹筒を横取りしてしま ったため、妹は山に棄てられる。鳥の案内で家につくが、入れてもら えないので、祖母の家に住む。			○ ○
23	広西チワン族 自治区桂西 チワン族	後妻に、食べるものもろくに 与えられない。	ゴマと大豆を選び分ける 穴の開いた桶で、三つの 甕に水を滴たす 結婚式に行く服がない	カラス カラス カラス	○ ○ 靴に加えて、橋を 渡る時に裾が木の 枝に引っ掛かる者 を妻とした。
24	広西チワン族 自治区西林県 イ族	母親が死んで、魂が牛になる。 牛はもつれた糸をほどいてく れたが、殺される。	トウモロコシと粟を選び 分ける 祭り(火把節)に行く服 を隠される	ガビチョウ ガビチョウ	祭 り で 求 婚 ○
25	広西チワン族 自治区防城港 市	母親が死んで、魂が鳥になる。 娘は、後妻にこき使われる。	かまどの灰から豆を選び 分ける 毎日、靴と服をつくる もつれた糸をほどく	鳥 鳥 鳥	○ ○
26	広西チワン族 自治区北流市	使用人である娘がこき使われ ていると、雌牛が服をひりだ してくれる。雌牛は殺される が、焼かれた時の煙が、鷹に	先のとがった桶で水くみ (途中で休めない) ゴマと豆の選り分け	鷹 鷹	○ (○)井戸に落 とされた娘 は、牛にもら っていた毛で

		なる。			鳥になる
27	広西チワン族 自治区富川県 ヤオ族	井戸の脇の草を食べた母親が牛になる。後妻は娘に、牛飼、薪とり、もつれた麻糸をほぐす仕事をさせるが、牛が助ける。牛は殺されるが、頭と皮を牛小屋へ、骨と蹄を鶏小屋へ娘に置かせる。(後に、服と装飾品になる)	ゴマと豆を選び分ける 竹籠で水くみ 芝居に行く服がない	小鳥 小鳥 小鳥	○ ○ 靴を拾った秀才が、求婚。(スリッパテストはない)
28	広西チワン族 自治区藤県 漢族	後妻にこき使われ、水くみ、薪とりをさせられるが、牛が助けてくれる。さらに麻糸作りも、牛が麻を食べて麻糸をひりだしてくれる。牛は殺されるが、頭を菜園へ娘に埋めさせる。	ゴマと豆を選び分ける 芝居に行く服がない	スズメ スズメ	○ ○
29	広東省 漢族	母親が死後、黄牛になる。	もつれた麻糸をほぐす ゴマと豆を選び分ける 牛が殺され、その骨を入れた缶から、芝居に行く服が出る	黄牛 黄牛	○ ○ 道の溝に靴を落とす。拾うのを頼んだ魚売りや米売りの求婚を拒否し、秀才の求婚を受ける
30	海南省保定期 黎族	後妻にこき使われる。嫁に行きたくても、嫁入り道具も服もない。	祭り(山歌節)に行くのに服がない	雌牛	○ ○

こうして表を見ていくと、この話が中国南方において多く伝承されていることが感じ取れる。また、中国での特徴と言われる「転生モチーフ」が、ほとんどの話で語られることも確認できる。

その他の特徴を見ていくと、表で整理したとおり、継子には二段階で試練が与えられている。それは、試練①で挙げたような日常生活においてこき使われる「ケの日における試練」と、試練②で挙げたような祭りに向かうために受ける「ハレの日における試練」である。大きな傾向としては試練①の援助は牛が行い、そして殺されてもなお継子を助ける流れが挙げられる。中国では現在においても、日常の農作業における牛の役割は大きく、それゆえ、こき使われる継子の援助をする存在としても、自然に受け入れられてきたことが窺える。ちなみに鳥が登場する場合は、ほとんど試練②に対する援助である。

以上、『民間故事類型索引』を用い、30話を表にまとめたが、さらに詳細な比較を行うためには、他の昔話資料集を精査して、資料を収集する必要がある。その際は、風潰しに見ていく作業が必要となり、おそらくは、この倍以上の話を整理することが出来る。

いずれにしても、中国の昔話の国際比較を試みる場合、質においても量においても十分な話の収集が進んでおり、ここで見てきたとおり事典や索引についても整ってきたといえるのが現状である。

表の引用文献

- 1 中国民間文学集成吉林卷編輯委員会『中国民間故事集成 吉林卷』1992年 中国文聯出版公司 (542～545頁)
- 2 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集33 吉林民間故事集 (1)』1989年 遠流出版 (308～312頁)
- 3 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集34 吉林民間故事集 (2)』1989年 遠流出版 (236～246頁)
- 4 中国民間文学集成遼寧卷編輯委員会『中国民間故事集成 遼寧卷』1994年 中国ISBN中心 (485～488頁)
- 5 本書編委会『中華民族故事大系 11』1995年 上海文芸出版社 (121～125頁)
- 6 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集36 蒙古民間故事集』1989年 遠流出版 (313～417頁)
- 7 本書編委会『中華民族故事大系 2』1995年 上海文芸出版社 (587～603頁)

- 8 本書編委会『中華民族故事大系 6』1995年 上海文芸出版社 (443～452頁)
- 9 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集37 新疆民間故事集 (2)』1989年 遠流出版 (532～547頁)
- 10 中国民間文学集成甘肅卷編輯委员会『中国民間故事集成 甘肅卷』2001年 中国ISBN中心 (569～570頁)
- 11 中国民間文学集成四川卷編輯委员会『中国民間故事集成 四川卷』(下) 1998年 中国ISBN中心 (856～858頁)
- 12 本書編委会『中華民族故事大系 3』1995年 上海文芸出版社 (167～186頁)
- 13 中国民間故事集成西藏卷編輯委员会『中国民間故事集成 西藏卷』2001年 中国ISBN中心 (636～639頁)
- 14 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集13 貴州民間故事集』1989年 遠流出版 (391～395頁)
- 15 本書編委会『中華民族故事大系 6』1995年 上海文芸出版社 (705～713頁)
- 16 本書編委会『中華民族故事大系 6』1995年 上海文芸出版社 (152～157頁)
- 17 本書編委会『中華民族故事大系 5』1995年 上海文芸出版社 (422～428頁)
- 18 本書編委会『中華民族故事大系 7』1995年 上海文芸出版社 (767～779頁)
- 19 本書編委会『中華民族故事大系 10』1995年 上海文芸出版社 (313～319頁)
- 20 中国民間故事集成雲南卷編輯委员会『中国民間故事集成 雲南卷』(下) 2003年 中国ISBN中心 (1152～1156頁)
- 21 本書編委会『中華民族故事大系 15』1995年 上海文芸出版社 (80～93頁)
- 22 中国民間故事集成湖南卷編輯委员会『中国民間故事集成 湖南卷』2002年 中国ISBN中心 (639～644頁)
- 23 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (591～596頁)
- 24 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (596～601頁)
- 25 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (601～603頁)
- 26 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (604～606頁)
- 27 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (606～610頁)
- 28 中国民間故事集成広西卷編輯委员会『中国民間故事集成 広西卷』2001年 中国ISBN中心 (610～613頁)
- 29 本書編委会『中華民族故事大系 1』1995年 上海文芸出版社 (251～256頁)
- 30 中国民間故事集成海南卷編輯委员会『中国民間故事集成 海南卷』2002年 中国ISBN中心 (479～481頁)

注

- (1) Hans-Jörg Uther *"The Types of International Folktales."* (2004年 Folklore Fellows' Communications 284～286)
- (2) Ting, Nai-Tung. *"The Cinderella Cycle in China and Indo-China."* (1974年 Folklore Fellows' Communications 213)

編集後記

この報告書は、平成25年度広域科学教科教育学研究経費に採択されたプロジェクトの記録を中心に掲載するものです。研究代表者は石井正己、研究分担者は関谷一郎、黒石陽子のお二人にお願いしました。計画通り実施した2回のフォーラムのプログラムを載せて、目次と対応できるようにしておきたいと思います。

東京学芸大学フォーラム 植民地日本語(国語)教科書の歴史的研究

日程 2013年11月23日(土・祝) 10:00~12:00 開場9:30

会場 東京学芸大学 S410教室

内容 趣旨 なぜ植民地教科書を問うのか 東京学芸大学教授 石井正己

シンポジウム 植民地日本語(国語)教科書研究の現在

植民地下台湾の三種類の国語(日本語)教科書が描いた世界観

早稲田大学大学院博士課程/日本学術振興会特別研究員 日下部龍太

植民地期「朝鮮読本」研究に関する現状と課題 横浜国立大学非常勤講師 金廣植

満洲国の国定「国語」教科書にみえる回鑾訓民詔書からの影響

東京学芸大学大学院博士課程 船越亮佑

司会 東京学芸大学大学院博士課程 楊静芳

東京学芸大学フォーラム 東アジアの昔話研究の歴史と未来

日時 2014年2月1日(土) 13:00~17:00 開場は12:00

会場 東京学芸大学 S410教室

内容 趣旨 昔話研究の未来をどう考えるか 東京学芸大学教授 石井正己

講演 父関敬吾のこと 関信夫

シンポジウム 東アジアの昔話研究の再検討

昔話と比較研究の問題点—文芸比較の方法論に向けて— 同志社大学教授 廣田收

『韓国口碑文学大系』の話型と昔話通観の話型の対応をめぐる

—<3 騙す騙される>の例を中心に— 韓国・崇実大学校教授 李市垞

シンデレラ型の昔話の比較—中国を中心に— 立教女学院短期大学専任講師 立石展大

また、ハワイ移民の教科書に関する研究については、本書に掲載した石井正己「帝国日本と日本語教科書—ハワイ移民の『日本語読本』—」(2013年3月講演)のほか、大学院の授業をまとめた『時の扉』第30号(2014年3月)の「小特集・ハワイ移民の日本語教科書」を発行しました。その内容は次のとおりです。

石井正己「ハワイ移民の「今浦島」たち」

岩森円花「ハワイ日本語教科書における「天の岩屋」教材」

船越亮佑「戦前ハワイの日本語教科書における桃太郎教材」

楊静芳花「ハワイ日本語学校の『日本語読本』に見られる「浦島太郎」

——国定国語教科書との比較を中心に——

高橋俊紀「ハワイ日本語学校の『日本語読本』におけるハワイの偉人」

佐々木雅章「ハワイ『日本語読本』における「兵士」教材」

中田恵理子「布哇教育會『日本語読本』と国定国語教科書の比較

——「母の日」教材の場合——

湯浅恵「ハワイ日本語教科書における「問合わせの手紙」教材」

ハワイ移民の活動については、震災との関係で、石井正己編著『震災と民話』(三弥井書店、2013年12月)に、石井正己「ハワイ島ヒロのパンフィク・ツナミ・ミュージアム」を載せました。従って、これも本書には掲載しませんでした。なお、移民に関わる日本語教科書の研究は、ブラジルの教科書などについて、次年度以降も地道に進めてゆく予定です。(2月21日 石井)

国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究
平成25年度広域科学教科教育学研究経費報告書

平成26年（2014）3月14日印刷

平成26年（2014）3月14日発行
（200部）

研究代表者 石 井 正 己
発 行 所 東京学芸大学

連絡先
〒184-8501
東京都小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学 石井正己研究室